

荻原雲來著

實習梵語學

文法·悉曇書法·文抄·字書

序

『梵語入門』を公にしてより以來已に七星霜を經。其の間印度研究の聲は日に高く、佛教の鑽仰又た源泉を窮めずんば息まざらんとす。此の時に際して幸にも我國は偉人河口慧海君を出せり、氏は原本比較研究の雄圖を懷き、挺身決死聖典蒐集の大望を發し、單獨に瘴癘の地に入り、其の將來する所は、梵夾のみにても實に四百部に垂んとす。今や我邦有する所の佛教梵本は其の數に於て一躍して歐米各國の上に位するに至りしは偏に河口氏の資なり、世の印度研究を以て天職とする者、佛教鑽仰を以て本務とする人は、既に是の如き嘉肴珍饌の前に羅列せるあり、奚ぞ其の一端をも賞味せざらんや、著者が梵語の初學者に便せんが爲に再び版

を改め本篇を出すは實に是に由なり。『梵語入門』を刊行して後に自ら此を講説する際感じたる必要に基づきて該本原文の位置を換へ、更に若干の文句を増加し又は訂正したり。又た文抄の部に於ては殆んど原本に倍加すべき量を経律論譬喩本生等各種の佛典中より摘録し以て佛教の文字章句を習ひ其文學の特色をも味はしめむとせり、随つて字書に採收せる語數は原本の數倍に上れり。加ふるに卷末に至りて悉曇十八章と提婆那伽梨とを對照し稍や書法を詳述せるは、本邦佛教家の如き悉曇字を書き又は此を讀む必要ある人の爲にせむと欲せるなり。以上列記せるが如く、源は彼の本より出たりと雖も内容の修補甚はだ多きを以て表題を改むるの至當なるを認めたり、是れ別本として本篇を提出する所以なり。

書中の梵字は悉とく神尾高道氏の手書に

かゝる、其の他同氏が本書の編成と校正とに大に助力せられたるは著者の深く同氏に謝する所なり。

大正五年三月

東台山麓にて

荻原雲來

目 次

	頁
壹、聲法	1
I. 合成語と文章との中にある聲の 轉變	4
(イ) 語尾と語首との韻	4
(ロ) 語尾と語首との發聲	6
II. 一語中の聲の轉變	11
貳、轉聲法	16
一、格例法	16
(I) 韻にて終る語の格例	18
演習第一	19
演習第二	24
演習第三	26
(II) 發聲にて終る語の格例	27
一語幹の名詞、形容詞	27
多語幹の名詞、形容詞	28
演習第四	31

演習第五	33
(III) 比較法.....	34
(IV) 數詞	35
(V) 代名詞.....	37
二、活用法	41
甲、現在の時の組織.....	43
第一種變化.....	43
第一類	44
第六類	44
第四類	44
第十類	44
演習第六	46
演習第七	48
第二種變化.....	49
第二類	49
演習第八	53
第三類	54
第五類	57
第七類	58
第八類	59
第九類	60
演習第九	61
乙、現在の餘の時の組織	62
(I) 不定過去	62

草不定過去.....	62
硬吹氣音不定過去	64
希求法	66
(II) 已過去	66
(III) 未來	71
(IV) 施設過去	72
(V) 受動言	73
(VI) 使役法	74
(VII) 求欲法	76
(VIII) 増上法	77
(IX) 名稱詞の動詞.....	77
(X) 動詞の名稱詞.....	78
イ、分詞	78
ロ、不定法及絶待法.....	83
三、造語法	85
四、合成言語法	88
甲、動詞合成法	88
乙、名稱詞合成法	89
(一) 併列合成語即ち相違釋の語	89
(二) 限量合成語即ち依主釋の語	90
(三) 所有合成語即ち多財釋の語	92
(四) 副詞合成語即ち不變詞	93
参、書法	94
第一、悉曇の意義.....	94

第二、悉曇字の本源及切り接ぎ	95
第三、悉曇の字義	96
第四、梵語字母の書體	98
第五、悉曇の建立	100
第一迦迦引章	101
第二枳也枳耶引章	101
第三迦略迦略引章	102
第四迦羅迦羅引章	102
第五迦轉迦轉引章	102
第六迦慶迦慶引章	103
第七迦那迦那引章	103
第八阿勒迦章	103
第九阿勒枳耶章	103
第十阿勒迦略章	103
第十一阿勒迦羅章	103
第十二阿勒迦轉章	104
第十三阿勒迦慶章	104
第十四阿勒迦那章	104
第十五叁迦章	104
第十六訖里章	104
第十七阿索迦章	104
第十八孤合章又は阿波多章	105
第六、梵字表	108
第七、數字	116

第八、梵字沿革表	
肆、造頌法	117
伍、文抄	119
陸、字書	

用語の解

語を排列する次第は五十音順に依る。八轉聲の名は吳音を用ゐる。

已過去 perfect. 過去の中の或時に已に其作用の終了せしを詮す。されど實際は正過去と已過去と大概其區別なく用ゐらる。

韻 vowel. 又は母音とも云ふ我國のアイウエオの如き是なり。

格例法 declension. 名詞、形容詞、代名詞、數詞の語尾變化の法則を云ふ。古來所謂八轉聲なるものなり。

合成語 compound. 名詞、形容詞、動詞等の應に随つて合集せられ單一の語と看做さるゝもの。例へば「アカゴ」(嬰兒)、「ヒバチ」(火鉢)、「ヒキハル」(緊張)の如し。

求欲法 desiderative. 語根の詮はす作用又は狀態を欲することを示す言ひ方。

希求法 precative. 通常は願望法と同義に用ゐらる。

過去受動分詞 past passive participle. 動詞の受動的過去の形にして形容詞の性質を帶ぶ。例せば「觀ラレタル花」の「觀ラレタル」の如し。されど若し自動詞(intransitive)より造られたる時は受動の義なく唯だ不定過

去の義あり。例せば「落タル花」の「落タル」の如し。

過去能動分詞 past active participle. 動詞の過去の形にして能動的形容詞の性質を帯ぶ。已過去爲他言の分詞と同義なり。例せば「觀タル人」の「觀タル」の如し。

活用法 conjugation. 動詞の語尾を變化する法則なり。

願望法 optative. 願望を詮はす言ひ方。

原級 positive degree. 他物と比較せざる時の形容詞。

現在分詞 present participle. 動詞の現在の形にして形容詞の性質を帯ぶるもの。例せば「觀ル人」の「觀ル」の如し。

如し。

硬音 surd. 氣息が肺より出でて喉腔を通過する時聲帶顫動せずして生ずる音を稱す。或は響なき音 (not sounding) とも云ふ。

硬吹氣音不定過去 sigmatic aorist. 不定過去の語幹と語尾との間に硬吹氣音を挿みて造る不定過去なり。

後接字 suffix. 名詞、形容詞、動詞等の語形を造るために語尾に加ふる字。

語幹 stem. 語根の轉増したるものにして、名詞、動詞の如き隨應の語尾を附加せらるべき形なり。

語根 root. 語の成分を分解して析つ可らざる最後の形となりたるもの即ち動詞の根本の形を稱す。

語勢 accent. 言語の中にある聲の抑揚なり。例せばハシ(箸)の語勢はハの音にあり。ハシ(橋)の語勢はシの

音にあるが如し。

呼召格 vocative case. 所談の物が呼びかけらるゝを詮はす。「ヨ」の辭を以て譯すべきもの。

語尾 ending. 格例法又は活用法の時語の尾に加ふる字。

最上級 superative degree. 三個以上の物を比較して云ふ形容詞。例せば「甲ハ甲乙丙ノ中最モ大ナリ」の「最モ大ナリ」の如し。

作具格 instrumental case. 所談の物が或ものゝために作具となることを詮はす。「ニテ」「ニ由テ」「ヲ以テ」等の辭を以て譯すべきもの。

作業格 accusative case. 所談の物に或ものゝ作業が及ぶことを詮はす。所謂目的格なり。「ヲ」「ニ」等の辭を以て譯すべきもの。

作者名詞 agent noun. 名詞が作用を成すことを詮はす。例せば「ミテ」(見者)、「キ、テ」(聽者)の如し。

字 syllable. 最小に分解せられたる音聲を云ふ。即ち一の韻、或は一の韻と一若くは多の發聲より成るもの。「アメ」は二字、「ツクエ」は三字なるが如し。

使役法 causative. 或ことを作さしむることを詮はす。動詞の用法。例せば「起ス」「落ス」は「起ク」「落ツ」の使役法なり。

施設過去 conditional. 實際過去にあらざりし事を假

りにありとして詮はす動詞の用法なり。

受動言 passive voice. 主格 (subject) が作用を受けることを
詮はす動詞の用法なり。

須要分詞 participia necessitatis. 主格が語根の詮はす所
の作用を被ることを示す分詞。例せば「水ハ飲マルベ
シ」の「飲マルベシ」、「其ノ書ハ應ニ讀マルベシ」の「讀マ
ルベシ」の如し。

所依格 locative case. 所談の物が或ものゝ所依となる
ことを詮はす。「ニ」、「ヘ」、「ニ於テ」等の辭を以て譯すべ
きもの。

所從格 ablative case. 所談の物が或ものより離るゝこ
とを詮はす。「ヨリ」の辭を以て譯すべきもの。

所屬格 genitive case. 所談の物に或ものが屬すること
を詮はす。「ノ」の辭を以て譯すべきもの。

所爲格 dative case. 所談の物が或ものゝ爲にすること
を詮はす。所謂與格なり。「ニ」、「ヘ」、「ノタメニ」等の辭
を以て譯すべきもの。

正過去 imperfect. 汎く過ぎ去りし時を示す。

接續法 subjunctive. 要求を詮はす言ひ方。(接續法は命
令法よりも緩なり。願望法は接續法よりも更に緩な
り)。

絶待法 absolutive. 動詞にして形容詞の性質を有すれ
ども語尾變化を缺く。例せば「往テ見ル」、「來リテ語ル」

の「往テ」、「來リテ」の如し。

前接字 prefix } 原語の意義を變ずる爲に其首に加
前置詞 preposition }
ふる字。

増上法 intensive. 語根の詮はす作用を反復し又は増
強することを示す動詞の言ひ方。

體格 nominative case. 直に體を指す所謂主格なり。「ハ」
又は「ガ」の辭を以て譯すべきもの。

單不定過去 simple aorist. 不定過去の語幹に直に不定
過去の語尾を加ふ。硬吹氣音不定過去に簡ぶ。

單未來 simple future. 未來の語幹に直に未來の語尾を
加ふ。複説未來に簡ぶ。

長字 }
長字法 } reduplication. 語根の字或は語根の始の部分
を語首に重ねるを云ふ。

轉聲法 inflection. 格例法及び活用法共に語尾又は語
中に變化あれば此の二つを總稱して轉聲法と云ふ。

動詞の名稱詞 verbal adjective and noun. 動詞にして形
容詞又は名詞の性質を有する語即ち分詞、不定法及
び絶待法なり。

軟音 sonant. 氣息が肺より出で喉腔を通過する時聲
帶顫動して生ずる音を稱す。或は響く音 (sounding) と
も云ふ。

發聲 consonant. 又は子音とも云ふ。我邦の五十音は初のア行を除て餘は何れもク+ア=カ、ク+イ=キ等の如く或聲と韻と合して成れり。今はカ、キ等の中のア、イ等の韻を除き去りて(カ-ア、キ-イ等)残りたる聲を發聲と稱す。

比較級 comparative degree. 二個の物の同性質等と比較して云ふ形容詞。例せば「鐵ハ木ヨリ堅シ」の「ヨリ堅シ」の如し。

複説已過去 periphrastic perfect. 已過去の語幹に直に已過去の語尾を加へずして迂回の語法を以て已過去を詮はす。

複説未來 periphrastic future. 未來の語幹に直に未來の語尾を加へずして迂回の語法を以て未來を詮はす。

附帶詞 enclitic form. 獨立の語に非ずして次前の語に附帶せるものと看做さるゝもの即ち自體に語勢を有せず。

不定過去 aorist. 單に過去を詮はすものにして實際は正過去並に已過去と區別なく用ゐらる。殊に此の用例は古文に多し。

不定法 infinitive. 人稱時數等を表すべき語尾變化なき動詞の形。例せば「往ベク」、「來ルベク」又は「往コト」、「來ルコト」の如し。

分詞 participle. 動詞にして形容詞の性質を帯ぶるもの。

未來分詞 future participle. 動詞の未來の形にして形容詞の性質を帯ぶるもの。

名稱詞 nomen. 名詞と形容詞とを併稱す。

名稱詞の動詞 denominative. 名稱詞を動詞として使用するもの。例せば「風説ヲ耳ニス」の「耳ニス」は「耳」の字を「聞」の意とし「聞ク」と云ふ意に用ゐたれば即ち名稱詞の動詞なり。

兩數 dual. 名詞、動詞等が二個の物又は二個の物の作用等を詮はす時に用ゐらるゝ特殊の形なり。

連聲法 sandhi. 音便の好き様に聲を發する規則。

爲自言 atmanepada. 主格(subject)の作用が自體に止まりて他の物に及ばぬこと又は主格の状態を詮はす言ひ方。所謂還歸的(reflexive)なり。

爲他言 parasmaipada. 主格の作用が他物に及ぶことを詮はす言ひ方。所謂他動的(transitive)なり。

略語の解

略を排列する次第は五十音順に依る。八轉聲の
名は吳音を用ゐる。

已過.=已過去.
 一.=第一人称.
 依.=所依格.
 役.=使役法.
 具.=作具格.
 過受分.=過去受動分詞.
 願.=願望法.
 現.=現在.
 現分.=現在分詞.
 呼.=呼召格.
 業.=作業格.
 三.=第三人稱.
 受.=受動言.
 從.=所從格.
 施過.=施設過去.
 正過.=正過去.
 屬.=所屬格.

體.=體格.
 男.=男性.
 單.=單數.
 中.=中性.
 女.=女性.
 直.=直說法.
 不.=不定法.
 複.=複數.
 不過.=不定過去.
 未.=未來.
 未分.=未來分詞.
 命.=命令法.
 兩.=兩數.
 爲.=所爲格.
 爲自.=爲自言.
 爲他.=爲他言.

壹. 聲 法.

1. 梵語とは所謂サンスクリット(正しくは Samskṛta) にして字母に四十九音あり、羅馬字を以て其音を顯せば下の如し。

甲. 韻.

イ. 單. 喉. a ア ā アー, 齶. i イ ī イー,
 唇. u ウ ū ウー, 斷. r リ ṛ リー,
 齒. ṛi ṛi [ī ṛi -].
 ロ. 重. 齶. e エ ai アーイ, 唇. o オ au アーウ

乙. 發聲と半韻(便宜のため a の韻を配して呼ぶ).

	無氣	含氣	無氣	含氣	鼻
イ. 喉.	ka,	kha,	ga,	gha,	ṅa.
ロ. 齶.	ca,	cha,	ja,	jha,	ṅa.
ハ. 斷.	ṭa,	ṭha,	ḍa,	ḍha,	ṅa.
ニ. 齒.	ṭa,	ṭha,	ḍa,	ḍha,	ṅa.
ホ. 唇.	pa,	pha,	ba,	bha,	ma.
ヘ. 半韻.	齶. ya,	斷. ra,	齒. la,	唇. va,	
ト. 硬吹氣音.	齶. śa,	斷. ṣa,	齒. ṣa,		
チ. 軟吹氣音.	喉. ha,				
リ. 隨韻 (anusvāra).	m,	隨鼻韻 (anunāsika).	ñ.	止聲.	h.

此の中 **!** は梵の言語中に用ゐらるゝことなし。但だ **!** に對して其の長韻 **!** あるに例して **!** に對して其長韻 **!** を字母中に加へたるのみ。以上四十九音の外に斷音 **!** があるも唯だ吠陀 (Veda) 寫本にのみ見へ韻と韻との間に **da** の音が來る時にのみ之を詮はすために用ゐらる。

2. 總て韻は發聲機關を接觸せずして發す。其韻の形づくらるゝ處に従つて喉音、齶音等の名あり。中に就て **!** は舌端と上齶との間を氣息が通過する際に生ず。**!** は舌の左右兩側と上齒根との間を氣息が通過する時に生ず。

3. 發聲の **!**, **!**, **!**, **!**, **!** 五列の中の第一行と第二行と硬吹氣音とは硬音(響なき音)にして餘は發聲も韻も威な軟音(響く音)なり。

4. 發聲の中 **!**, **!**, **!**, **!**, **!** 五類の音は發聲機關が全く接觸して發す。中に就て **kha** は **ku** の音の中 **!** (u) の韻を除きて其に **!** (ha) の聲の加はりたるものなり。餘の含氣音も此に例して知るべし。**!** は「我ガモノ」の「ガ」の如し。**!** は **!** の音の中 **!** の韻を除きて **!** の韻を加へたるもの即ち **!** なり。**!** は「ハシニヤ」の「ニヤ」の如し。斷音は舌端と上齶齒根の部と接觸して發す。——半韻は發聲機關を少しく閉塞して生ず。——硬と軟との吹氣音は發聲機關少しく開通して生ず。中に就て **!** は舌の本

と上齶と、**!** は舌の中と上齶と、**!** は舌端と上齒との間を何れも氣息が擦過して生ず。

5. 隨韻と隨鼻韻とは俱に韻の鼻音化したるものにして撥るが如き音なり。猶ほ **!** の如し。此の中隨韻は發聲の次前に鼻音の來る時は其の發聲が何類たるに拘はらず其鼻音に代用することを得。此の外に此の二韻の用法は 27, 29, 30 條に出づ。

6. 止聲は **!** 又は **!** の轉じたるものにして此の兩聲が語の終に來る時に用ゐらる。又た硬喉音の前に來る時の舌根聲 (*jihvāmūliya*) **!** と硬唇音の前に來る時の吹氣聲 (*upadhmaniya*) **!** とに代用せらる (31 條)。

7. 韻は二重に強めらるゝことを得。初に強められたる韻を重韻 (*guna*) と云ひ、更に強められたる韻を複重韻 (*vṛddhi*) と云ふ。

平 韻	a	ā	<u>i</u>	<u>ī</u>	<u>u</u>	<u>ū</u>	<u>r</u>	<u>r̄</u>	!
重 韻			e		o		ar		al
複重韻	<u>ā</u>		ai		au		ār		

! の重韻は **ra** となり、其複重韻は **rā** となることあり (97, 161, 186 條)。a と ā とは重韻とならず。

- | | |
|------------------|-----------------|
| vid 動詞 (知る) | veda 名詞 (知れること) |
| vaidya 形容詞 (知ある) | lul 動詞 (動轉す) |
| lola 形容詞 (貪ぼる) | laulya 名詞 (貪ぼり) |
| bhṛ 動詞 (擔ふ) | bhara 形容詞 (擔ふ) |

bhāra 名詞 (擔) klp 動詞 (適ふ)
kalpa 形容詞 (適ふ) (! の複重韻関く)
pat 動詞 (落つ) pātaya 動詞 (落す)

I. 合成語と文章との中にある聲の轉變.

梵語にては一句或は一章は一語と看做して論ぜらる. 但だ語が韻, 隨韻或は止聲にて終り次の語が発聲又は半韻にて始まる時にのみ語を分替す(13-15條を除く). 其餘の際には連聲法(9-34條)に順ふて語を連書す. 例せば kim idam asaṃgatam asmin ādau anyad tathā anyad ante ca は kimidamasāṃgatamasminnādāvanyattathānyadante ca(28, 14, 21, 9條)(云何ぞ是れ此の中に於て不相應なるや. 初に異あり終に亦異あり)となる.

語勢符 (accent) は古文には之を付したるものあれども中古の雅文には之を付せず. 故に今焉を略す. 但し書中詞形を説明するに要用なるものは其條下に至て説くべし.

8. 一合成語或は一文章の中の語の始聲と終聲は連聲法(samdhī)の規定に従ふ.

イ. 語尾と語首との韻.

9. 等しき平韻は其の長韻となる. 即ち a, ā+a, ā は ā となり, i, i+i, ī は ī となり; u, ū+u, ū は ū となる.

例. na asti iha (彼は此處に在らぬ)=nāstīha. dayā (悲)+ārdra (潤へる)=dayārdra (悲にて潤へる). devī iva (天女の如し)=devīva. ripu (敵)+uras (胸)=ripūras (敵の胸).

10. a と ā は等しからざる平韻と俱に重韻となり, e, o, ai 及び au と俱に複重韻となる. 即ち a, ā+i, ī は o となり; +u, ū は o となり; +r, ṛ は ar となり; +e は ai となり; +o は au となり; +ai は ai となり, +au は au となる. kā iyam=keyam (此人は誰そ). loka (世)+īśvara (主)=lokeśvara (世の主). sahasā utthāya=sahasotthāya (突然に起き上りて). yathā (如く)+ṛtu (季節)=yathartu (季節に順つて). tathā eva =tathaiva (正に是の如く). mahā (大なる)+ośadhi (藥草)=mahauśadhi (效驗ある藥草). dhana (錢)+niśvarya (司管)=dhanaiśvarya (司錢). tasya autsukyam=tasyautsukyam (彼の切望は).

備考 oṣṭha (唇)の次前の a は合成語のときには省き去るも可なり. adhara (下の)+oṣṭha=adharaṃṣṭha 或は adharoṣṭha (下唇).

11. i, ī, u, ū, r, ṛ は等しからざる韻の次前に在るときは各自相當の半韻 y, v, r となる. bahūni ahāni=bahūnyahāni (數日は). astu etat=astvetaṭ (夫れ然らん). pitṛ (父)+anuvartanāt (從順なるより)=pitrānūvartanāt (父に從順なるより).

12. e 又は o の次後の a は省き去らる. 然るときは省字符 ' を用ゐる.

13. a の餘の韻の次前に來る e は轉じて a となる, o も亦通常は是の如し. これ半韻 y 又は v (11條)が發音さるゝも輕微なるがため書せられざるに因る. vane āste=vana āste (vanayāste とせず) (彼は林中に坐す). paṭo

īha=paṭa īha (paṭaviha とせず) (汝此處なる贖慧者は).

14. ai は韻の次前に來るときは ay に非ずして a となる. au は通常は av となる. tasmai ṛṣabham dadāti=tasmaṁ ṛṣabham dadāti (彼は彼に牡牛を與ふ). tau ubhau api=tāvubhāvapi (其兩個とも).

15. 格例法及び活用法の兩數を表はす語尾の韻 i, ū, e 及び複數の ami (其. 110 條) の i は次後に韻の來るときも變化することなし (pragrhya). 又斯かる e の次後に來る a は省略せられず. pādātale ubhe (兩足蹠は). cakṣuṣi ime (此の兩眼は). bāhū udyamya (兩臂を擧げて). kuṇḍale avamuoya (兩耳璫を取去りて).

ロ. 語尾と語首との發聲.

16. 二又は二以上の發聲が語の終に來るときは其第一の聲のみを存す. prāṅks=prāṅ (東方の). abants=ahan (彼は打ちき).

17. 乙の i, u, e, o 四列の音の中にては鼻音と硬無氣音のみ聲の終に在ることを得. 其餘の音は各自列の硬無氣音に轉ぜしむるを要す. jalād=jalāt (水よる). virudh (草)の體.單. virudhs=virut (16 條).

18. 齶音は聲の終に在るときは k となる. j と ṣ とは或は ṣ となる. ṣ と h とは多は ṣ となり時としては k となる. vāc (聲)の體.單. vācs=vāk (16 條). 是と等しく sraj (鬘)の

體.單. sraj. divasprś (天に觸る) =divasprk. devarāj (天の王) =devarāj. viś (民) =viṣ. tṛṣ (渴) =tṛṣ. madhulih (蜂) =madhuliṣ. kāmāduh (欲牛) =kāmadhuk (19 條).

備考 此條に擧げたる聲の變化の一定せざるは齶音及び軟吹氣音(48 條)の來源一様ならざると又 i, u 兩音の轉換あるとに歸す.

19. 語根が軟含氣音又は h にて終り軟發聲にて始まり. 其最後の發聲を 17, 18 條に准じて變化したるときは其吹氣音は再び始聲の中に現はる. arthabudh (義に通曉せる) =arthabhut. goduh (牛乳を搾る人) =godhuk. parpaguh (葉にて覆ひて) =parpaghut.

20. 語の末に在る r 又は s は止聲となる. punar=punah (再び). tamas=tamah (闇).

21. 硬發聲は軟音の次前には軟となり. 軟發聲は硬音の次前には硬となり. 此兩聲ともに鼻音の次前には鼻聲となる. apatāt bhuvi=apatādbhuvi (彼は地に落ちたり). āpad (不幸) +kāle (時に) =āpatkāle (不幸の時に). vāc (言) +mātreṇa (單に) =vācāmātreṇa (18 條) (言のみにて). ṣaṭ māsān=ṣaṣmāsān (六月を). yāvāt na=yāvanna (爾らざる間は). etad mithunam=etanmithunam (此の配偶は).

22. 語の始の h は次前の發聲の軟含氣音となる. samyak huta=samyagghuta (正しく供へられたる). tad+hetu=tadddhetu (其の因).

23. 語の始の ch は短韻又は前置詞(前接字) ā (.....)

り此の方に,.....に至るまで)又は否定詞 mā (勿)の次後に
 來るときは cch となる. taru+chāyā=tarucchāyā (樹の蔭).
 ā+chādita=ācchādita (覆はれたる). mā chaitsit=mā cchaitsit
 (彼は離るゝ勿れ).

24. 齒音は次下の齶音, 斷音又は l と同化す. mahat
 cāpam=mahaccāpam (大弓は). abhavat jaḍaḥ=abhavajjaḍaḥ (彼
 は失神せり). tad jalam=tajjalam (其の水は). ḍamat+ḍamara
 =ḍamaḍḍamara (響く鼓). vidyut+latā=vidyullatā (電羅). tad
 lāṅgūlam=tallāṅgūlam (其の尾は).

25. 語の始の ś は齒音の次後にありては (24條) ch と
 なる. aharat śiraḥ=aharacchiraḥ (彼は首を切斷せり). tad
 śrutvā=tacchrutvā (其を聞きて).

26. n は軟の齶音, 斷音及び ś の前に在るときは此
 と同類の鼻音となる又 ś は變じて ch となることを得
 yān jantūn=yāñjantūn (其の人々を). anekān ḍombān=anekān
 ḍombān (諸のドームバ人を). tān śasāpa=tāñśasāpa 或は
 tāñchaśāpa (彼は彼等を詛へり).

27. l の次前の n は ^ml 或は ^ml̄ となる. 即ち l と同化し
 其鼻音となる. amuṣmin loke=amuṣmilloke 或は amuṣmilloke
 (彼の世にて).

28. m の餘の鼻音が語の終にありて短韻にて先だ
 たれ次下に韻の來るときは其鼻音は重複せらる. pra-
 tyāñ śasīnaḥ=pratyāñśasīnaḥ (西面して坐せる). tasmin adrau

=tasminnadrau (其山の上に).

29. 齶尾の n と次下の硬の齶音, 斷音及び齒音との
 間には此等の音に相當する硬吹氣音を挿入し且つ其
 n は隨韻となる. mṛgān vidhyan varāhān ca tarakṣūn mahiṣān
 tathā=mṛgānvidhyanvarāhāṃśca tarakṣūnmahiṣāṃstathā (鹿を
 射て又猪を, タラクシュ (肉食獸の名) と又水牛とを). tān
 ṣaṅkāraṅ=taṃṣaṅkāraṅ (其等の叫を). agaman tataḥ=agamam-
 stataḥ (其後彼等は去れり).

30. 語の終の m は半韻又は發聲の次前に在るときは
 隨韻となる. grāmam yāti=grāmaṃ yāti (彼は村へ往く). kim
 karomi=kim karomi (我は何を爲すべきや). svargam jagāma=
 svargaṃ jagāma (彼は天に往けり). bhadram te=bhadraṃ te
 (汝に幸あれ). śrūyatām vacanam mama=śrūyatāṃ vacanaṃ
 mama (我が言は聽かるべし). sam (俱に)+patanti (彼等は
 飛び去る)=sampaṭanti (彼等は俱に飛び去る).

31. 語の終の r 又は s は硬の齶音と斷音の次前に
 在るときは轉じて其音に相當する硬吹氣音となり, 硬
 の喉音, 唇音或は吹氣音の次前に在るときは轉じて止聲
 となる (6條参照). 硬齒音の前に在るときは r は s となり,
 s は變化せず. ājāhrur chatram=ājāhruśchatram (彼等は繖蓋
 を持ち來れり). kuṭhārais ṭaṅkaiś ca=kuṭhāraiṣṭaṅkaiśca=(斧
 と楔とを以て). bhartur parityāgas=bhartuḥ parityāgaḥ (20條)
 (夫を捨つること). haṃsās plavās kurarās ca=haṃsāḥ plavāḥ

kurarāśca (鵝鷺及び海鷺は). arthas sidhyati=arthas sidhyati (目的達す). pitur te=pituste (汝の父の). tapas tīvram は其形を變ぜずして tapastīvram (劇しき苦行)なり.

32. 軟音の次前に在りて a と ā との餘の韻の次後に來る語末の s は r に變ず、若し其の軟音が r なる時は次前の r 消滅して其前の韻を延長す. mṛgais bahubhis ākirṇa=mṛgairbahubhirākirṇa (多くの鹿にて滿たる). cerur ramyam vanam=cerū ramyam vanam (30條)(彼等は美しき林を逍遙したり). saha gopībhis rarāma=saha gopībhi rarāma (彼は牧牛女と共に戯れたり).

例外. 感歎詞 bhos (よ. 呼召の時の語)は軟音の次前に在るときは其 s を去る. bho āruṇe (Āruṇi よ). bho mitra (友よ). bho bhoḥ sabhāsadaḥ (よ、よ 判事方よ).

33. 語の終の字 as は軟發聲又は a の次前に在るときは o となる. 其餘の韻の次前に來るときは其 s 消滅す. madiyas namaskāras vācyas bhagavatas=madiyo namaskāro vācyo bhagavataḥ (我が歸敬は聖者に申べし). gatas aranye=gato 'ranye (12條) (林中に去れり). candraś iva=candra iva (月の如く). atas ūrdhvam=ata ūrdhvam (爾來).

備考 代名詞の語幹 tad (彼. 其)及び etad (此)の體格なる as 及び aśas (108條)は唯だ a の前にのみ so 及び eṣo (38條)として現はれ、文章の結尾には saḥ 及び eṣaḥ (20條)となり、a の餘の一切の聲の次前には sa 及び eṣa となりて現はる. so 'bravit (彼曰へり). eṣa kālāḥ (此の時は). sa bālāḥ (其小兒は). eṣa dharmāḥ (此の法は).

34. 語の終の字 ās の s は一切軟聲の次前に在るときは消滅す. devās ūcur=devā ūcuḥ (20條) (天曰へり). javanās dūtās gacchantu=javanā dūtā gacchantu (諸の急使は發せらるべし).

II. 一語中の聲の轉變.

35. 造語法、格例法及び活用法に於て後接字を加ふるがため音聲に轉變を起すことあり. 此規則としては主として 9—34 條を適用すべきも此中尙若干の添削すべきものあり. 已下の諸條に之を説明す.

36. 一字の名詞、又は時としては動詞の語根及び其の語幹の i, ī, u, ū は韻にて始まる語尾の次前には iy, uv と變ず、此等が發聲の次後に在るときは殊に然りとす. bhī+i=bhiyi (怖れて). bhū+i=bhūvi (地の上に). sū+e=suve (我生む). śaknu+anti=śaknuvanti (彼等は能くす). tuṣṭu+uḥ=tuṣṭuvuḥ (彼等は讚めたり). bodha+i+am=bodheyam (我覺り得ん).

37. 語根に屬せる r 又は v の次前に在る i 又は u は其語根の次後に y 又は發聲來るときは大概延長せらる. gir+bl'ḥ=girbhiḥ (語を以て). div+yati=dīvyati (彼は賭博す). dhur+s=dhūḥ (16條) (軛は). 32條に依り語根に屬せる s が r となりしときも是に准ず. āsis+bhiḥ=āśīrbhiḥ (希求に由て). されど又 divya (神聖なる), dhurya (牽く獸).

の如き例外もあり。

38. 語根の尾に在る **r** は後接字の次前には概ね **ir** となり、唇音の次後には **ur** となる。 **kr** (散亂す) = **kirati** (三. 單. 現. 爲他). **str** (散す) = **stīrna** (37 條) (過受分). **pr** (充たす) = **pūryate** (37 條) (三. 單. 現. 受).

39. **e**, **ai**, **o**, **au** は韻又は **y** にて始まる後接字の次前に在るときは次の如く **ay**, **āy**, **av**, **āv** となる。 **ne+ana** = **nayana** (眼). **je+ya** = **jayya** (征服せらるべき). **gai+aka** = **gāyaka** (唱吟者). **go+ā** = **gavā** (牝牛にて). **go+ya** = **gavya** (牝牛の). **nau+i** = **nāvi** (船の中).

40. 語根又は語幹の末尾に在る發聲は韻半韻又は鼻音にて始まる後接字の次前に在るときは大概變化せず、其餘の後接字の次前に在るときは 16 以下の諸條に准じて論ぜらる。 **marut+e** = **marute** (風に). **vāc+ya** = **vācya** (言はるべき). **vac** (言ふ) = **vaemi** (我言ふ). されど **marut+bhyaḥ** = **marudbhyaḥ** (21 條) (諸の風に).

41. 或語根の **j** は **t** の次前に在るときは **k** となる。其他の語根の **j** は **t** の次前に在るときは **ṣ** となる (18 條の備考と 21 條). **yuj+ta** = **yukta** (軛せられたる). **srj+ta** = **srṣṭa** (43 條) (造られたる).

42. **t** 又は **th** は後接字の聲の始にして軟含氣音の次後に在るときは軟音となりて且其吹氣音 **h** を己に移す。 **labh+ta** = **labdha** (得られたる). **rundh+thah** = **runddhaḥ** (汝

等兩人は拒む).

43. 齒音は斷音の次後に來るときは通常は斷音となる。 **is+ta** = **iṣṭa** (欲したる). **dvis+dhi** = **dviddhi** (憎め. 18, 21 條). **id+te** = **itte** (彼は讀む). 併ながら **satsu** (六に於て).

44. **n** は **e** 又は **j** の次後には **ñ** となる。 **yāc+nā** = **yācñā** (乞求). **yaj+na** = **yajña** (犠牲). 語の終に在る **n** 又は **m** は發聲にて始まる後接字が語勢を有すれば此等の字の前に消滅す。 **han** (撃つ) の過受分. **hatá**. **gam** (行く) の過受分. **gatá**. 若し語根に語勢を有するときは語根の **n** は依然として存す。 **m** は發聲又は **v** の次前には **n** となる。 **han** の不定法 **hántum**. **gam** の不定法 **gántum**. 已過能分. **jaganvāms**. 硬吹氣音の次前には兩ながら隨韻となる。 **man** (惟ふ) の三. 單. 未. 爲. 自. **maṃsyate**. **kṣam** (忍ぶ) の三. 單. 未. 爲. 自. **kṣaṃsyate**.

備考 前條の根本的規定は必しも嚴守せられず。

45. **n** は韻又は **n**, **m**, **y**, **v** にて從はれ **r**, **ṛ**, **ṛ**, **ṣ** にて先だたれたるときに韻、喉音、唇音、**m**, **y**, **v**, **h** の餘の聲が中間に雜はるに非れば斷音に變ず。 **kar+ana** = **kāraṇa** (因). **brahman+ya** = **brahmaṇya** (信仰ある). **pūsan** の屬. 單. **pūṣṇaḥ**. **grah+nāti** = **grhṇāti** (彼は取る).

備考 前接字 **nis**, **parā**, **pari** 又は **pra** にて先だたれたる前接字 **ni** 並に大概の語根の **n** は斷音となる。 **pra+ni+patati** = **prapipatati** (彼は落つ). **nis+nita** = **nirṇīta** (決定せられたる). **pra+namati** = **praṇamati** (彼は屈む).

46. **ś** は **t** の次前に在るときは **ṣ** となる。 **drś+ta** = **drṣṭa**

(見られたる)。此餘の發聲の次前に在る *ś* と *ṣ* は 18 條に准じて論ぜらる。*ks* は *ṣ* の如く論ぜらる。*caṣṣ* (視る) の三單現爲自。*caṣṣe*。三單正過爲自。*acaṣṣa*。

47. *ś* は *k, r, l* 又は *a, ā* を除いて餘の韻にて直に先だたるゝ時又は唯だ隨韻或は止聲のみ其中間に在るときは、*ś* が語尾に在るに非ずんば又は *r* が直に従ふに非ずんば變じて *ṣ* となる。*dhanus* (弓) の屬單。*dhanuṣaḥ*。體複。*dhanūṃṣi*。依複。*dhanuṣu*。 *vac* (語る) + *syati* は *vak* (18 條) + *syati* を經て *vakṣyati* (彼は語るならん) となる。*gir* (語) + *su* = *gīṣu* (37 條) (語中に)。然れど *iyotis* (光) の體單は *iyotiḥ* (20 條)。爲複は *iyotirbhyaḥ* (32 條)。

備考一 聲の始の *ś* は *i* 又は *u* にて終る前接字の次後に在るときも亦大抵斷音に變ず。*abhi+śeka* = *abhiṣeka* (灌頂)。 *anu+śhita* = *anuṣṭhita* (完成せられたる)。 *ni+śidati* = *niśīdati* (彼は座る)。されど *anu+śmarati* = *anusmarati* (彼は憶念す)。 *vi+śmita* = *vismīta* (驚きたる) などの例外あり。

備考二 語根 *sthā* (住まる) 及び *stabh* (*stambh*) (支ふ) の聲の始の *ś* は前接字 *ud* (233 條) の次後に在るときは省き去らる。*ud+sthatum* = *utthātum* (立つべく)。 *ud+stambhita* = *uttambhita* (擧げられたる)。161 條参照

備考三 語根に屬せる *ś* の次後に在りて語の終をなせる *ś* は *ś* にて始まる後接字の次前には變化せざれども軟發聲にて始まる後接字の次前には *ṣ* に變じたる後除き去らる。*ās* (坐る) + *se* = *āse* (汝は坐る)。 *ās+dhve* = *ādhive* (汝等は坐る)。 *śās* (命ず) + *dhi* = *śādhi* (命ぜよ)。

48. *h* は恒に古の軟含氣音に還源せらる。*dah* (燃ゆ) の古語は *dagh* なり。*nidāgha* (熱) を參考せよ。*grah* (攝す) の古語は *grabh* なり。*gh* より來りし *h* は硬發聲又は *dh* にて始まる後接字の次前に在るときは *gh* の如く論ぜらる。若し齶の軟吹氣音 (*śh*) より來れる *h* は *t, th, dh* にて始まる後接字の次前に在るときは斷音 (*śh*。46 條) となり次前の韻を延長して自身消滅す。此餘の後接字の次前に在るときは此 *h* は *gh* より來りしものゝ如く論ぜらる。*dah* (乳を搾る) は古の *dugh* より來る。*sudugha* (善く乳を生ずる) 又は *dugh+ta* より成れる過受分。*dugdha* (42 條) を參考せよ。*lih* (舐る) は古の *liḥ* より來る 故に其過受分は *liḥ+ta* より變化せる *liḍha* なり。されど兩語ともに一單現爲他は *dohmi, lehmi*。二單は *dhokṣi* (19 條)。 *lekṣi* なり。

備考一 斯かる区分は必しも常に劃然たらず往々にして混濁せらるゝことあり。*mih* (尿す) の古の形に *nimeghamāna* (尿を放下する) といふあり。又 *mogha* (發) の形あり。然るに其過受分は *migdha* に非ずして *mīḍha* なり。又 *muh* (迷ふ) の過受分に *mugdha* (穢氣なる、可憐なる) と *mūḍha* (愚鈍なる) との兩形あり。

備考二 *nah* (結ぶ) の古の形は *nadh* なり。故に其不定法は *nadh+tum* = *naddhum*。過受分は *naddha* なり。*vah* (運ぶ) の不定法は *voḍhum*。 *śah* (堪ふ) の不定法は *soḍhum*。 *ruh* (生長す) の不定法は *roḍhum*。其過受分は *rūḍha* なり。

貳. 轉聲法. 一. 格例法.

49. サンスクリット語に三つの姓(gender)あり謂く
男姓・女姓・中姓・三つの數(number)あり謂く單數・兩數・複數・
八つの格(case)あり謂く體格・作業格・作具格・所爲格・所
從格・所屬格・所依格・呼召格.

50. 名詞及び形容詞は聲の終に韻と發聲との二類
あるに准じて韻の格例法と發聲の格例法との二種あ
り. 韻にて終る若干の名詞・形容詞と發聲にて終る多くの
名詞・形容詞は轉聲をなす語幹に階級を分つ. 即ち此類
の名詞・形容詞は或は二の語幹を有す謂く強語幹・弱語
幹・或は三つの語幹を有す謂く強語幹・中語幹・弱語幹・男
姓若しくは女姓にして二語幹の名詞・形容詞の時は體
業呼の單・兩及び體呼の複には強語幹を用ゐる(強格)前
の餘の格には總べて弱語幹を用ゐる(弱格)三語幹の時
は前の弱語幹を更に中語幹と弱語幹との二つに分ち體
業の單・兩・呼・兩及び體呼・複には大抵強語幹を用ゐる. 若
干の呼・單と發聲にて始まる後接字の次前には中語幹
を用ゐる(中格)韻にて始まる後接字の次前には弱語幹
を用ゐる(弱格)或類の名詞・形容詞及び二三の特別なる
名詞・形容詞には體の單にのみ強語幹を用ゐるものあり

(70,81,90 條)中姓には體・業・呼の單に弱語幹を用ゐる. 三語
幹の時は中語幹を用ゐる. 兩には恒に弱語幹を用ゐる.
複には強語幹を用ゐる. 此の餘は男姓及び女姓に同じ.

備考 斯く語幹に階級あるは語勢の位置より起る. 猶ほ動詞のとき
のごとし. 強と中との格のときの語勢は語幹にあり. 弱格の
時の語勢は語尾にあり. されど斯かる根本の關係は古文に於
て已に濫用せられ中古の雅文に於て益々多きを加へたり. 呼
召格は文章若しくは詩句の初に在る時は常に第一字に語勢を
有すれども此の餘には此を有せず.

51. 格の語尾

	單.	兩.	複.
體.	s	au 中. i	as 中. i
業.	m (am)		
具.	ā	bhyām	bhis
爲.	e		bhyas
從.	s (as)		ām
屬.	s (as)	os	su
依.	i		

呼の單は大抵語幹を用ゐれども或は體を用ゐるこ
とあり呼の兩と複とは必ず體に同じ. 中の體業の單に
於ては a にて終る語幹に m を加ふる外更に語尾を有
せず.

52. 韻にて終る語幹は種々違例の語尾を有す. a に
て終る語幹は殊に然りとす. 即ち或格のときは語幹の

韻は *o* 又は *ai* となる。男、又は中の從、單は *d* を、屬、單は *sya* を、具、複は *s* を以て語尾の終の聲とす。*a* にて終る女と *i* 又は *ü* にて終る多字の女は常に其單の爲に *ai*、從屬に *as*、依に *am*、の語尾を有す。*i* 又は *ü* 及び *i* 又は *u* にて終る一字の女の語尾も亦是の如く造ることを得。業複に於ける一切の韻にて終る語幹は男の語尾に *n*、女の語尾に *s* を有す。此餘の違例は表中に明なり。

備考 後接字 *tas* は一切の語幹より從、單を造る。 *caura* (賊) の從、 *caurataḥ*、 *vidyā* (明) の從、 *vidyataḥ*、 *vāri* (水) の從、 *vāritaḥ*、 *rājan* (王) の從、 *rājataḥ*、後接字 *tra* は代名詞に加へられて依、を造る。 *tatra sthāne* (彼處に)。

(I) 韻にて終る語の格例。

53. *a* にて終る語幹の男性。 *aśva* (馬)。

	單.	複.
體.	<i>aśvaḥ</i>	<i>aśvāḥ</i>
業.	<i>aśvam</i>	<i>aśvān</i>
具.	<i>aśvena</i>	<i>aśvaiḥ</i>
爲.	<i>aśvāya</i>	<i>aśvebhyaḥ</i>
從.	<i>aśvāt</i>	<i>aśvebhyaḥ</i>
屬.	<i>aśvasya</i>	<i>aśvānām</i>
依.	<i>aśve</i>	<i>aśvesu</i>
呼.	<i>aśva</i>	<i>aśvāḥ</i>

兩.

體.業.呼.

aśvan

具.爲.從.

aśvābhyām

屬.依.

aśvayoḥ

中姓語の例 *dāna* (施) も亦是の如し。但だ體、の單、は *dānam*、體.業.呼.の兩、は *dāne*、體.業.呼.の複、は *dānāni* なるを異とす。

54. *a* にて終る語幹の女性。 *kanyā* (處女)。

	單.	複.
體.	<i>kanyā</i>	<i>kanyāḥ</i>
業.	<i>kanyām</i>	<i>kanyāḥ</i>
具.	<i>kanyayā</i>	<i>kanyābhiḥ</i>
爲.	<i>kanyāyai</i>	<i>kanyābhyaḥ</i>
從.	<i>kanyāyāḥ</i>	<i>kanyābhyaḥ</i>
屬.	<i>kanyāyāḥ</i>	<i>kanyānām</i>
依.	<i>kanyāyām</i>	<i>kanyāsu</i>
呼.	<i>kanye</i>	<i>kanyāḥ</i>

兩.

體.業.呼.

kanye

具.爲.從.

kanyābhyām

屬.依.

kanyayoḥ

演習 第一。

助動詞「有り」(as 128 條) は屢々省略せらる。若し所爲格と俱に用ゐられたる時は或ることを「助く」、或ることに「便ず」の義となる。——所屬格を以て所爲格に代ふること數しばあり。

形容詞の比較級又は此に類似せる意義の詞の前に来る「より」と云ふ辭は大概所從格にて詮はさる。——二種の絶待格あり。一を絶待所依格と云ひ、「……のときに (when)」の義を詮はす。一を絶待所屬格と云ひ「……に拘はらず、……なるのに (though, while)」の義を詮はす。

1. yathā vṛkṣastathā phalam || 2. krodho mūlamanarthānām ||
 3. saṃtoṣa eva puruṣasya param nidhānam || 4. calaṃ hi yauvanam nityam mānuṣeṣu viśeṣataḥ || 5. ardham bhāryā manusyasya || 6. na śauryeṇa vinā jayaḥ || 7. mūle hate¹⁾ hatam sarvam || 8. dārāḥ sutāśca sulabhā dhanamekaṃ durlabham loke || 9. sarvāṇi bhūtāni sukhe ratāni || 10. na lobhādadhiko doṣo na dānādadhiko guṇaḥ || 11. vyādhitasyauśadham pathyam nirujastu kimaśadhaiḥ || 12. aśvaḥ kṛśo 'pi śobhāyai puṣṭo 'pi na punaḥ kharah || 13. sarveṣu peyeṣu jalam pradhānam || 14. lubdhebhyaḥ sarvato²⁾ bhayaṃ dr̥ṣṭam ||

1) 絶待所依格 2) bhayaṃに屬する所從格 (52條の備考)。

55. ambā (母)の呼.單.には amba を用ゐる。
 56. a にて終る形容詞は代名詞の變化法に従ふものあり (113條)。
 57. i 又は u にて終る語幹の男姓. ahi (蛇). paśu (獸)。

	單.	複.	單.	複.
體.	ahih	ahayah	paśuh	paśavaḥ
業.	ahim	ahin	paśum	paśūn

具.	ahinā	ahibhiḥ	paśunā	paśubhiḥ
爲.	ahaye	ahibhyaḥ	paśave	paśubhyaḥ
從.	aheḥ	ahibhyaḥ	paśoḥ	paśubhyaḥ
屬.	aheḥ	ahinām	paśoḥ	paśūnām
依.	ahau	ahiṣu	paśau	paśuṣu
呼.	ahe	ahayaḥ	paśo	paśavaḥ

兩.

體.業.呼.	ahi	paśū
具.爲.從.	ahibhyām	paśubhyām
屬.依.	ahyoḥ	paśvoḥ

58. 女姓語の例 stuti (讚) 又は dhenu (牝牛) ともに 57 條に准ず。唯だ具.單.は stutya, dhenvā. 業.複.は stutih, dhenūḥ なり。又單.にては爲.を stutyai, dhenvai, 從.屬.を stutyaḥ, dhenvaḥ, 依.を stutyām, dhenvām に作ることを得 (52條)。

59. i 又は u にて終る語幹の中姓. vāri (水). madhu (蜜)。

	單.	複.	單.	複.
體.業.呼.	vāri	vāriṇi	madhu	madhūni
具.	vāriṇā	vāribhiḥ	madhunā	madhubhiḥ
爲.	vāriṇe	vāribhyaḥ	madhune	madhubhyaḥ
從.	vāriṇaḥ	vāribhyaḥ	madhunaḥ	madhubhyaḥ
屬.	vāriṇaḥ	vāriṇām	madhunaḥ	madhūnām
依.	vāriṇi	vāriṣu	madhuni	madhuṣu

兩.

體業呼.	vāriṇī	madhuni
具爲從.	vāribhyām	madhubhyām
屬依.	vāriṇoḥ	madhunoḥ

60. i 又は u にて終る形容詞は爲從屬依の單及び屬依の兩に於ては此中姓の語尾の外此に相當せる男姓の格の語尾を用ゐることを得。

61. sakhi (友)の強語幹は sakhai にして其變化下の如し。單の體は sakhá, 業は sakháyam, 具は sakhyā, 爲は sakhye, 從屬は sakhyuḥ, 依は sakhyau, 呼は sakhe. 兩の體業呼は sakháyan. 複の體は sakháyah.

62. pati は「主」の義に用ゐらるゝ時と、合成語の終にある時とは 57 條の ahi の如に變化せらる。「夫」の義に用ゐらるゝ時は其單の具は patyā, 爲は patye, 從屬は patyuḥ, 依は patyau なり。

63. 中姓語の aksi (眼). asthi (骨). dadhi (酸乳). sakthī (腿) は體業呼の兩の外は韻にて始まる語尾の弱格を形づくるには aksan 等の如く an にて終る語幹を用ゐる。單の具 aksnā, 爲 aksne, 從屬 aksnaḥ, 依 aksani 或は aksni. 兩の屬依 aksnoḥ. 複の屬 aksnām (82 條). されど體業呼の兩は aksini なり。

64. i 又は ū にて終る一字の女姓 dhī (思慮). bhū (地).

單.	複.	單.	複.
體呼. dhīḥ	dhiyaḥ	bhūḥ	bhuvāḥ
業. dhiyam	dhiyaḥ	bhuvam	bhuvah
具. dhiyā	dhibhiḥ	bhuvā	bhūbhiḥ
爲. dhiye, dhiyai	dhibhyaḥ	bhuve, bhuvai	bhūbhyaḥ
從. dhiyaḥ, dhiyāḥ	dhibhyaḥ	bhuvāḥ, bhuvāḥ	bhūbhyaḥ
屬. dhiyaḥ, dhiyāḥ	dhiyām, dhinām	bhuvāḥ, bhuvāḥ	bhuvām, bhūnām
依. dhiyi, dhiyām	dhiṣu	bhuvi, bhuvām	bhūṣu

兩.

體業呼.	dhiyau	bhuvau
具爲從.	dhibhyām	bhūbhyām
屬依.	dhiyoḥ	bhuvoh

65. 一字の女姓語が男姓又は女姓合成語の最後分なる時も復た上の例に准ず。例せば sudhī (聰き)の男女體呼單は sudhiḥ なり。

66. stri (女)の變化は單の體 stri, 業 striyam 或は strim, 具 striyā, 爲 striyai, 從屬 striyāḥ, 依 striyām, 呼 stri. 複の業 striyah 或は striḥ, 屬 striṇām なり。

67. i 又は ū にて終る多字の女姓. nadi (河). vadhū (婦).

單.	複.	單.	複.
體. nadi	nadyah	vadhūḥ	vadhvah
業. nadim	nadiḥ	vadhūm	vadhūḥ

ꣳにて終る語幹.

69. ꣳにて終る作者名詞 (nomina agentis) には三の語幹あり. 謂く強語幹は tar. 中語幹は tar. 弱語幹は ꣳなり.

— dātr (施者).

	單.		複.	
	男.	中.	男.	中.
體.	dātā	dātr	dātārah	dātrni
業.	dātāram	dātr	dātrn	dātrni
具.	dātrā	dātrnā	dātrbhih	
爲.	dātre	dātrne	dātrbhyah	
從.	dātuḥ	dātrnah	dātrbhyah	
屬.	dātuḥ	dātrnah	dātrnām	
依.	dātari	dātrni	dātrṣu	
呼.	dātāḥ	dātr (dātāḥ)	dātārah	dātrni

兩.

	男.	中.
體.業.呼.	dātārau	dātrni
具.爲.從.	dātrbhyām	dātrbhyām
屬.依.	dātroḥ	dātrnoḥ

70. 親縁を詮はず語の強語幹は體の單のみ. 中語幹は業.依.呼の單.と體.業.呼の兩.と體.呼の複.とのみなり. 此餘は總て弱語幹を用ゐる. pitr (父)の體. pitā, pitarau, pitarah. 業. pitaram, pitarau, pitn. 具. pitrā, pitrbhyām, pitrbhih. 依.

具.	nadyā	nadibhih	vadhvā	vadhūbhih
爲.	nadyai	nadibhyah	vadhvai	vadhūbhyah
從.	nadyāḥ	nadibhyah	vadhvāḥ	vadhūbhyah
屬.	nadyāḥ	nadinām	vadhvāḥ	vadhūnām
依.	nadyām	nadiṣu	vadhvām	vadhūṣu
呼.	nadi	nadyah	vadhu	vadhvah

兩.

體.業.呼.	nadyau	vadhvau
具.爲.從.	nadibhyām	vadhūbhyām
屬.依.	nadyoḥ	vadhvoḥ

68. lakṣmī (福)の體.單.は lakṣmih なり.

演習 第二.

1. agnerapatyam prathamam hiranyam ||
2. śatrau sāntvam pratikārah ||
3. vahnireva vahnerbhesajam ||
4. prāyena sādhu-ṛttināmasthāyinyo vipattayah ||
5. adhāryā setunā gaṅgā ||
6. śrutiḥ smṛtiśca viprāṇām nayane dve prakirtite ||
7. upadeśo hi mūrkhāṇām prakopāya na śāntaye ||
8. śatorapi guṇā grāhyā doṣā vācyā gurorapi ||
9. sampatteśca vipatteśca daivameva hi kāraṇam ||
10. akāle durlabho mṛtyuḥ striyā vā puruṣeṇa vā ||
11. dharmeṇa hināḥ paśubhih samānāḥ ||
12. asaṃtoṣah śriyo mūlam ||
13. nityamāsyam śuci striṇām ||
14. vṛddhasya taruṇi viṣam ||
15. jaye dharitryāḥ purameva sāram ||
16. na hi nāryo vinersyayā ||

pitari, pitroh, pitṛsu. 呼. pitāḥ, pitāraḥ, pitarāḥ. 女姓は業の複に於て s の語尾を有す. mātr (母) の業の複. mātr̥h.

71. naptṛ (孫) 及び svasṛ (姉妹) は 69 條に依て變化せらる業の單は naptāram, svasāram. 體業呼の兩は naptārau, svasārau. 體の複は naptārah, svasārah. 業の複は naptṛn, svasṛh.

72. nṛ (人) は 70 條に依る. 但だ屬の複は nṛṇām 或は nṛṇām に作ることを得.

演習 第三.

1. bhartā nāma param nāryā bhūṣaṇam || 2. duhitā kṛpaṇam param || 3. dardurā yatra vaktārastatra maunam hi śobhanam || 4. vidhirucchr̥khalo nṛṇām || 5. jāmāturduhitā balam || 6. vṛthā vaktuḥ śramah sarvo nirvicāre nareśvare¹⁾ || 7. jyestho bhrātā pitṛsamo²⁾ mṛte pitari¹⁾ ||

8. amṛtaṁ durlabham nṛṇām devānāmudakam tathā |
pitṛṇām durlabhah putrastakram śakrasya durlabham ||

1) 絶待所依格. 2) 合成語 (239 條).

si, o, 及び au にて終る語幹.

73. rai 男. (財産). go 男女. (牛). nau 女. (船).

單. 複.

體呼. rāḥ gauḥ nauḥ 體呼. rāyah gāvah nāvah
業. rāyam gām nāvam 業. rāyah gāḥ nāvah

具. rāyā gavā nāvā 具. rābhiḥ gobhiḥ naubhiḥ
爲. rāye gave nāve 爲從. rābhyah gobhyah naubhyah
從屬. rāyah goḥ nāvah 屬. rāyam gavām nāvām
依. rāyi gavi nāvi 依. rāsu goṣu nauṣu
兩.

體業呼. rāyan gāvau nāvau
具爲從. rābhyām gobhyām naubhyām
屬依. rāyoḥ gavoh nāvoh

(II) 發聲にて終る語の格例.

一語幹の名詞, 形容詞.

74. marut 男. (風). diś 女. (方).

單. 複.

體呼. marut dik 體業呼. marutaḥ diśah
業. marutam diśam 具. marudbhiḥ digbhiḥ
具. marutā diśā 爲從. marudbhyah digbhyah
爲. marute diśe 屬. marutām diśām
從屬. marutaḥ diśah 依. marutsu diśu
依. maruti diśi

兩.

體業呼. marutan diśau
具爲從. marudbhyām digbhyām
屬依. marutoḥ diśoh

75. 中姓語の體業呼の複は最後の音の次前に其音

に相當する鼻聲を挿む硬吹氣音若くは h の次前には
 隨韻を挿む。hr̥d(心)は hr̥ndi. asr̥j(血)は asr̥ñji. saras(池)は
 sarāmsi. jagat(世)の體業呼の單は jagat, 兩は jagati, 複は
 jaganti なり。

備考 上の如く鼻聲を挿むは格例法の語幹の變化のうち強語幹
 を造るに鼻聲を挿む(77. 78. 80. 81. 92. 93 各條)より類例せられた
 るなり。

76. r にて終る語幹の gir 女(聲)と pur 女(市)の體の
 單は gir̥, pur̥ (37 條) 具の兩は gir̥bhyām, pur̥bhyām, 依の複
 は gir̥su, pur̥su (47 條) なり。

多語幹の名詞、形容詞。

77. ac にて終る形容詞は二語幹を有するあり。其例
 を舉れば、強語幹は prañc. 弱語幹は prāc (東方の)。男體。
 prañ, prañcau, prañcaḥ. 業。prañcam, prañcau, prañcaḥ. 具。prañcā,
 prañgbhyām, prañgbhiḥ. 中體。prak, prāci, prāñci. 又三語幹を
 有するあり。其例を舉ぐれば、強語幹は pratyāñc. 中語幹
 は pratyac. 弱語幹は prāñc (西方の)。visvañc, viṣvac, viṣūc (普
 き)。udañc, udac, udic (北方の)。男の體。單。pratyañ, viṣvañ, udañ.
 具。複。pratyagbhiḥ, viṣvagbhiḥ, udagbhiḥ. 具。單。praticā, viṣūcā,
 udicā, tiryāñc (横の)の男の體。單。は tiryañ, 業。單。は tiryāñcam,
 具。爲從の兩は tiryagbhyām, 具。單。は tiraścā なり。

78. 爲他言 (115 條)の現在分詞の強語幹の例 tudant.
 弱語幹の例 tudat (撃つ)。

	單.	兩.	複.
男體呼.	tudan	tudantau	tudantaḥ
業.	tudantam	tudantau	tudantaḥ
具.	tudatā	tudadbhyām	tudadbhiḥ
中體業呼.	tudat	tudati	tudanti

備考 體業呼の兩の中には強語幹を用ゐることあり。女に於ても
 亦是の如し(230 條)。

79. 長字*語根は弱語幹より總の格を造る。dadat (施
 す)の男體。は dadat, dadatau, dadataḥ. 中の體。複。は dadati 或
 は dadanti.

80. mahat (大なる)の強語幹は mahānt. 男の體。は mahān,
 mahāntau, mahāntaḥ. 業。mahāntam, mahāntau, mahataḥ. 呼。の
 單。は mahan.

81. mat 又は vat にて終る形容詞及び二人稱の代名
 詞 bhavat の體。單。は次の如く mān と vān なり。此餘は 78
 條の如し。

82. n にて終る語の男の例。rājan (王)。強語幹 rājan.
 中語幹 rājan, 發聲の次前には rāja. 弱語幹 rājñ.

	單.	兩.	複.
體.	rājā	體業呼. rājānau	體. rājānaḥ
業.	rājanam	具爲從. rājabhyām	業. rājñāḥ
具.	rājñā	屬依. rājñoh	具. rājabhiḥ

* 139 條参照。

爲.	rājñe	爲從.	rājabhyaḥ
從屬.	rājñah	屬.	rājñam
依.	rājñi (rājani)	依.	rājasu
呼.	rājan	呼.	rājānah

中姓語亦是の如し。例せば nāman (名) の如し。但だ異なる所は體・業・呼の單・nāma, 兩・nāmnī, 或は nāmanī, 複・nāmāni なり。呼の單は亦 nāman にも作る事あり。

83. man 又は van にて終る語にして次前に發聲あるものは弱語幹を有せず。故に ātman (我) の具・單は ātmanā なり。

84. maghavan (因陀羅), yuvan (幼なき), śvan (狗) の弱語幹は maghon, yūn, śun なり。故に具の單は maghonā, yūnā, śunā なり。

85. ahan 中。(日)は中格を造るに ahas と云語幹を用ゐる。體・業・呼の單を造るには ahar を用ゐる。合成語に aharahaḥ (日々)の形あり。體・業・呼の兩は ahni 或は ahani, 複は ahāni. 具の複は ahobhiḥ.

86. han (殺す)と云ふ語幹の古き形は ghan なり。而して合成語の尾にあるときは其強語幹は單だ體の單・男と體・業・呼の複・中となり。而して弱語幹は ghn なり。brahma-han (殺婆羅門者)の單の體は brahmahā, 業は brahmahanam,* 具は brahmagnā. 具の複は brahmahabhiḥ.

* 一語中の聲の轉變の例に依る。

87. in にて終る語の強語幹は單だ體・單・男と體・業・呼・複・中なり。韻の次前の弱語幹は in にして、發聲の次前の弱語幹は i なり。balin (強き)の體・單の男は bali. 中は bali. 體・複の男は balīmah, 中は balīni. 具・複は balibhiḥ.

演習 第四

1. sarvaḥ padasthasya suhṛdbandhurāpadi durlabhaḥ ||
2. na sūrāya pradātavyā kanyā khalu vipaścitā ||
3. yathā cittaṃ tathā vāco yathā vācastathā kriyāḥ ||
4. sarvatra sampadastasya santuṣṭaṃ yasya mānasam ||
5. sarvavidāṃ samāje vibhūṣaṇam maunamaṇḍitānām ||
6. āpatsu kim viśādena sampattaṃ vismayena kim ||
7. yathā rājā tathā prajāḥ ||
8. jātasya hi dhruvo mṛtyurdhruvaṃ janma mṛtasya ca ||
9. dūrgrāhyaḥ pāṇinā vāyur-
dūḥsparsāḥ pāṇinā śikhī ||
10. na rājñā saha mitratvaṃ na sarpo nirviṣaḥ kva cit ||
11. kṣamā rūpaṃ tapasvinaḥ ||
12. niyato dehinām mṛtyuranityam khalu jīvitam ||
13. na rājānam vinā rājyaṃ balavatsvapi mantriṣu¹⁾ ||
14. tyāgo guṇo vittavatām vittam tyāgavatām guṇaḥ ||
15. mahānto hi durdharsāḥ sāgarā iva ||
16. niḥsārasya padārthasya prāyeṇādambaro mahān ||
17. bhāryāyāḥ sundarāḥ snigdho veśyāyāḥ sundaro dhani |
śrīdevyāḥ sundarāḥ śūro bhāratyāḥ sundarāḥ sūdbhiḥ ||

1) 總待新依格。

88. path (路)及び math (攪動するために用ゐる棒)の體・單は panthāḥ, manthāḥ なり。此餘の強語幹は panthān.

manthān. 中語幹は pathi. mathi. 弱語幹は path. math なり.
體の兩は panthānau, 複は panthānah. 業の單は panthānam, 複
は pathah. 具の單は pathā, 複は pathibhih.

89. ap 女(水)は單だ複數の形のみなり. 體. āpah. 業.
apah. 具. adbhih. 爲從. adbhyah. 屬. apām. 依. apsu.

90. div 女(天)の單は dyauh, divam, divā, dive, divah,
divi. 兩は divau, dyubhyām, divoh. 複は divah, dyubhih, dyubh-
yah, divām, dyusu.

91. as, is, us にて終る中姓語. 此中第一の例は manas
(意). 體. 業. 呼. manah, manasī, manāmsi (75 條). 具は manasā,
manobhyām, manobhih (33 條). 第二の例は jyotis (光). 體. 業.
呼. jyotih, jyotisi, jyotiṃsi (47, 75 條). 具. jyotisā, jyotirbhyām,
jyotirbhih (32 條). 第三の例は cakṣus (眼). 體. 業. 呼. cakṣuh,
cakṣusi, cakṣūmsi. 具. cakṣusā, cakṣurbhyām, cakṣurbhih. as に
て終る男姓及び女姓語は體. 業. を除ては成な中姓語に
同じ. vedhas 男(造物者)の體. vedhāh, vedhasau, vedhasah. 業.
vedhasam, vedhasau, vedhasah. apsaras 女(天女)の體. apsarāh,
apsarasau, apsarasaḥ. 業. apsarasaḥ, apsarasaḥ. 形容
合成語も亦是の如し. 例せば sumanas (善き意の)の體. 男.
及び女. sumanāh, 業. 男. 及び女. sumanasam. is と us は此に
反して合成語の尾に在るも體. に於て韻を長ふせず.
brhajjyotis (盛に耀ける)の體. brhajjyotih. 業. brhajjyotiṣam.
dirghāyus (長生せる)の體. dirghāyuh. 業. dirghāyusam.

備考 āsis 女(請)の s は語根に屬するを以て其體. は āsih. 業. āsiṣam.
具. 複. は āsirbhih (37 條).

92. iyas にて終る比較級の強語幹は iyāms, 弱語幹は
iyas. gariyas (尙重き)の體. gariyān, gariyāmsau, gariyāmsah.
呼. 單. gariyan. 具. gariyasā, gariyobhyām, gariyobhih. 中. の
體. 業. 呼. gariyah, gariyasi, gariyāmsi.

93. 己過去爲他. の分詞. (212 條) の強語幹は vāms, 中
語幹は vat, 弱語幹は us. rurudvāms, rurudvat, rurudus (泣き
たる). 男. の體. は rurudvān, rurudvāmsau, rurudvāmsah. 具. は
rurudusā, rurudvadbhyām, rurudvadbhih. 中. の體. は rurudvat,
rurudusi, rurudvāmsi.

演習 第五

1. na khalu vayastejaso hetuh || 2. na vaidyah prabhurāyusah ||
3. manasi parituṣṭe¹⁾ ko 'rthavānko daridrah || 4. ākimcanyam
dhanam vidusām || 5. rājā bandhurabandhūnām rājā cakṣuracak-
suṣām || 6. avidvāmscaiva vidvāmsca brāhmaṇo daivatam mahat ||
7. mahiyāmsah prakṛtyā mitabhāṣinah || 8. nopeksitavyo vidvad-
bhih śatruralpo 'pyavajñayā || 9. baliyah sarvato²⁾ diṣṭam puru-
sasya viśesatah || 10. ausadham na gatāyusām ||
11. guṇavānvā parajanah svajano nirguṇo 'pi vā |
nirguṇah svajanaḥ śreyānyah paraḥ para eva saḥ ||
12. kim tasya dānaiḥ kim tirthaiḥ kim tapobhih

kimadhvarāṇiḥ ।

hrdistho yasya bhagavānmaṅgalāyatanam hariḥ ॥

1) 維持所従格 2) 比較級に従へる所従格 (52 條の備考)

94. pums 男(男)の強語幹 pumāms, 中語幹 pum, 弱語幹 pums. 單は pumān, pumāmsam, pumsā. 呼は puman. 複は pumāmsah, pumsah, pumbhiḥ, pumsu.

95. anaḍuh (猪牛)の強語幹 anaḍvāh, 中語幹 anaḍut, 弱語幹 anaḍuh なり. されど體の單は anaḍvān, 呼の單は anaḍvan なり. 業は anaḍvāham, anaḍvāhan, anaḍvahaḥ. 具は anaḍuhā, anaḍudbhyām, anaḍudbhiḥ.

(III) 比較法

96. 比較級の後接字 tara 及び最上級の後接字 tama は語幹に直に附加へらる. 若二語幹あるものには其弱語幹に, 若三語幹あるものには其の中語幹に, 附加へらる. punya (淨き)は panyatara, panyatama. prāñc (東方の)は prāktara, prāktama (77 條). vidvāms (知識ある)は vidvattara, vidvattama (93 條).

97. 比較級の後接字 iyas 及び最上級の後接字 īstha は語根に直に附加へらる. 而して語根の韻は大抵重韻となる. 此の原級の語は多くは m 又は ra にて終る. lagha (輕き)は laghiyas, laghiṣṭha. mṛdu (軟かき)は mṛadiyas, mṛadiṣṭha. prthū (廣き)は prathiyas, prathīṣṭha. kṣipra (速なる)は kṣepiyas, kṣepīṣṭha. dūra (遠き)は davīyas, davīṣṭha. priya (愛

すべき)は preyas, preṣṭha. guru (重き)は gariyas, gariṣṭha. bhūri (多き)は bhūyas, bhūyiṣṭha. śreyas, śreṣṭha (尚好き. 最も好き. 好に屬せる語)の原級は praśasya (勝れたる)に, kaniyas, kaniṣṭha (尚稚き. 最も稚き)の原級は alpa (小なる)にありとす.

98. tara と tama なる後接字は iyas なる比較級又は īstha なる最上級に附加へらるゝことあり. gariyastara, śreṣṭhatara, śreṣṭhatama.

(IV) 數 詞*

99. 算數. 1 eka. 2 dvi. 3 tri. 4 catur. 5 pañcan. 6 ṣaṣ. 7 saptan. 8 aṣṭan. 9 nayan. 10 daśan. 11 ekādaśan. 12 dvādaśan. 13 trayodaśan. 14 caturdaśan. 15 pañcadaśan. 16 ṣoḍaśan. 17 saptadaśan. 18 aṣṭādaśan. 19 navadaśan 或は ūnaviṃśati. 20 viṃśati. 30 triṃśat. 40 catvāriṃśat. 50 pañcāśat. 60 ṣaṣṭi. 70 saptati. 80 aṣṭi. 90 navati. 100 śata. 200 dve śate 或は dviśata. 300 triṇi śatāni 或は triśata. 1000 sahasra. 10,000 ayuta. 100,000 lakṣa.

100. 2, 3 及び 8 の數は 10, 20 及び 30 に連續するときは dvā, trayas, aṣṭā となり, 80, 100 及び 1,000 に連續するときは dvi, tri, aṣṭā となる. 40 より 70 までと 90 とに連續するときは前兩様の中何れを用ゐるも可なり.

* 數詞ハ算數. 數數ともに名詞として (substantively) 又は形容詞として (adjectively) 用ゐらる.

22 dvāvimsati. 33 trayastrimsat. 28 aṣṭāvimsati. 82 dvyaśīti. 103 trīsata. 1008 aṣṭasahasra. 19, 29, 39 等は ūna (少) 或は ekona (少一) の字を次前に附加へて言ひ證はすことあり. 19 ūnavimsati 或は ekonavimsati.

101. eka (1) は 112 條に准じて變化せらる. dvi (2) は dva の兩數 (53, 54 條) として變化せらる. 即ち體・業・呼の男は dvau, 女中は dve なり. tri (3) と catur (4) とは次の如し.

	男.	中.	女.	男.	中.	女.
體・呼.	trayah	trīni	tisrah	catvārah	catvāri	catasrah
業.	trin	trīni	tisrah	caturah	catvāri	catasrah
具.	tribhiḥ	tribhiḥ	tisṛbhiḥ	caturbhiḥ	caturbhiḥ	catasṛbhiḥ
爲・從.	tribhyaḥ	tribhyaḥ	tisṛbhyaḥ	caturbhyaḥ	caturbhyaḥ	catasṛbhyaḥ
屬.	trayānām	trīṇām	tisṛṇām	caturṇām	caturṇām	catasṛṇām
依.	triṣu	trīṣu	tisṛṣu	caturṣu	caturṣu	catasṛṣu

102. pañcan (5) の轉聲は體・業・呼. pañca, 具. pañcabhiḥ, 爲・從. pañcabhyaḥ, 屬. pañcānām, 依. pañcasu. saptan (7), aṣṭan (8), navan (9), daśan (10) 及び此等の語にて終る數詞は皆 pañcan の例に准ず. aṣṭan は又體・業・呼. aṣṭau, 具. aṣṭābhiḥ, 爲・從. aṣṭābhyaḥ, 依. aṣṭāsu と變ずることあり. ṣaṣ (6) の轉聲は體・業・呼. ṣaṣ, 具. ṣaṣbhiḥ, 爲・從. ṣaṣbhyaḥ, 屬. ṣaṣṇām, 依. ṣaṣsu.

103. 20 より 99 に至る數は單數女姓. 100, 1,000, 10,000 及び 100,000 は單數中姓なり. 算へられたる事物は或は

複數にして數詞と同格に造り, 或は所屬格複數にして數詞に並べ唱へ, 或は數詞と俱に一の合成語に造ることあり. ṣaṣṭyām varṣeṣu (六十年間), catvāri sahasrāni varṣānām (四千年), varṣāsatam (百年).

104. 號數. 1. prathama. 2. dvitiya. 3. tṛtiya. 4. caturtha 或は turiya. 5. pañcama. 6. ṣaṣṭha. 7. saptama. 8. aṣṭama. 9. navama. 10. daśama. 11. ekādaśa. 12. dvādaśa. 20. vimśatitama 或は vimśa. 30. trīṃśattama 或は trīṃśa. 40. catvāriṃśattama 或は catvāriṃśa. 50. pañcāśattama 或は pañcāśa. 60. ṣaṣṭitama. 61. ekaṣaṣṭitama 或は ekaṣaṣṭa. 70. saptatitama. 72. dvisaptatitama 或は dvisaptata. 80. aśītitama. 83. tryaśītitama 或は tryaśīta. 90. navatitama. 94. caturnavatitama 或は caturnavata. 100. śatatama. 1,000. sahasratama.

105. 數の副詞. sakṛt 一回. dvīḥ 二回. triḥ 三回. catuḥ 四回. pañcakṛtvah 五回. ṣaṭkṛtvah 六回(の類). ekadhā 一分. dvidhā 或は dvedhā 二分. tridhā 或は tredhā 三分. catūrdhā 四分. pañcadhā 五分. ṣoḍhā 六分(の類). ekaśah 每一. dviśah 每二. triśah 每三. sarvaśah 遍く.

(V) 代名詞.

106. 第一人稱代名詞の語幹の單. mad, 複. asmad. 第二人稱代名詞の語幹の單. tvad, 複. yusmad.

	單.		複.
體・呼.	aham	tvam	vayam yūyam

業	mām	tvām	asmān	yusmān
具	mayā	tvayā	asmābhiḥ	yusmābhiḥ
爲	māhyam	tubhyam	asmabhyam	yusmabhyam
從	mat	tvat	asmāt	yusmat
屬	mama	tava	asmākam	yusmākam
依	mayi	tvayi	asmāsu	yusmāsu

兩.

體業呼	āvām	yuvām
具爲從	āvābhyām	yuvābhyām
屬依	āvayoh	yuvayoh

附帶詞の單の業は mā. tvā. 單の爲屬は me. te. 兩の業爲屬は nau. vām. 複の(業)爲屬は nah. yah.

備考 此の條及び後の條中に擧たる語幹は合成語の前分に見ゆる形を用ゐたり、即ち人稱代名詞の時は其所從格の形を用ゐたり、其餘の代名詞の時は體單中の形を用ゐたり、mat-pitā (我が父)、yusmad-bhrātā (汝等の兄弟)、taḍ-bhāryā (彼の婦)、ado-mūla (其に基きて)、kīp-sakhī (惡友)。

107. 上の餘の代名詞は代名詞の格例に固有なる若干の語尾を遁有す。單男中の爲. smai, 從. smāt, 依. smin, 女の爲. syai, 從屬. syāh, 依. syām. 中の體業. d, 複の體男. e, 屬男女中. sām.

108. 第三人稱代名詞及び指示代名詞の語幹 tad (彼. 其).

	單.		兩.		複.			
	男.	女.	男.	女.	男.	女.		
體呼.	sah	sā	體業呼.	tau	te	體呼.	te	tāh
業.	tam	tām	具爲從.	tābhyām	業.	tān	tāh	
具.	tena	tayā	屬依.	tayoh	具.	tailḥ	tābhiḥ	
爲.	tasmai	tasyai	爲從.	tēbhyah	tābhyah			
從.	tasmāt	tasyāh	屬.	tesām	tāsām			
屬.	tasya	tasyāh	依.	tesu	tāsu			
依.	tasmin	tasyām						

中姓の體業呼の單. tat, 兩. te, 複. tāni. 餘は男姓に同じ。語幹 etad (此れ) 亦是の如し。單の體. esah, eṣā, etat. 體の sah 及び esah の形に關しては 33 條の備考を見よ。

109. 語幹 idam (此).

	單.		兩.		複.			
	男.	女.	男.	女.	男.	女.		
體呼.	ayam	iyam	體業呼.	imau	ime	體.	ime	imāh
業.	imam	imām	具爲從.	ābhyām	業.	imān	imāh	
具.	anena	anayā	屬依.	anayoh	具.	ebhiḥ	ābhiḥ	
爲.	asmāi	asyai	爲從.	ebhyah	ābhyah			
從.	asmāt	asyāh	屬.	eṣām	āsām			
屬.	asya	asyāh	依.	eṣu	āsu			
依.	asmin	asyām						

中姓の體業呼の單. idam, 兩. ime, 複. imāni. 餘は男姓

に同じ。

110. 語幹 adas* (其).

單.		兩.		複.	
男.	女.	男女中.	男.	女.	
體呼. asau	asau	體業呼. amū	體. amī	amūh	
業. amum	amūm	從. 爲. 具. amūbhyām	業. amūn	amūh	
具. amunā	amuyā	屬. 依. amuyoh	具. amībhiḥ	amūbhiḥ	
爲. amuṣmai	amuṣyai		爲. 從. amībhyaḥ	amūbhyaḥ	
從. amuṣmāt	amuṣyāh		屬. amīṣām	amūṣām	
屬. amuṣya	amuṣyāh		依. amīṣu	amūṣu	
依. amuṣmin	amuṣyām				

中姓の體業呼の單. adah, 複. amūni.

111. 此餘の一切の代名詞及び代名詞的形容詞は108條に准じて轉聲せらる. 關係代名詞の語幹 yad の體. 單. yah, yā, yat. 疑問代名詞の語幹 kim の體. 單. kah, kā, kim. anya (他の) の體. 單. anyah, anyā, anyat 等. enad (彼) といふ語幹は唯だ業の單. 兩. 複. と具の單. と屬. 依. の兩. にのみ用ゐらる.

112. eka (一). ekatara (二の隨一). itara (餘). ubhaya (兩). viśva, sarva (一切各) は108條に准ず. 但し體業呼. 單. の中. は t に非して m にて終る.

* etad は tad より近き物を指し, idam は 汎く物を指し, adas は 其より更に遠き物を指す.

113. 一般には112條の如しと雖も又例外としては從. 依. の單. 男. 中. 及び體. の複. 男. に於ては名詞の格例を用ゐることもあり. 例せば adhara (下の). antara (中の). अपरा (他の). avara (後の, 西方の). utara (上の, 北の). daksina (右の, 南の). para (晩き). pūrva (前の, 東の). sva (自の) の如し.

114. cana. cid. 又は api が疑問詞に附加へられたるときは其意義をして不定ならしむ. kaḥ (誰ぞ) は kaśca-na, kaścit, ko'pi (何人にてても). katham (云何ぞ) は katham cana, katham cit, kathamapi (何とかして). kva (何處に) は kva cana, kva cit, kvāpi (何處にか) となる.

二. 活用法

115. 動詞の言類 (voice) には爲他言, 爲自言及び受動言の別あり. 受動言は爲自言の語尾を用ゐる (189條).

備考 大抵の動詞は爲他, 爲自の兩言に活用せられ. 少數の動詞は唯一言に活用せらる. 而して形が唯だ爲他若くは爲自なるのみにして其の意義は必しも言法と一致せず. 例せば as (あり) は形のみは爲他にのみ活用すれども其の意義は爲自なり.

116. 動詞の時 (tense) は現在. 正過去. 不定過去 (單. 不定過去. 硬吹氣音. 不定過去). 已過去 (單. 已過去. 複. 說已過去). 未來 (單. 未來. 複. 說未來) 及び施設過去是なり.

117. 言の方法 (mode) は三類あり. 謂く直說法. 願望法 (可能法) 及び命令法是なり. 古代の言語に最も多く發達

したる接続法は唯だ命令法として一人稱の單兩、複にのみ用ゐらる。命令法は唯現在、願望法は現在と不定過去とあり。是れ亦希求法と稱せらる。直説法は現在、正過去、不定過去、已過去、未來を完具す。

118. 此の外使役法、求欲法、増上法 (198-207 條)、不定法 (217 條)、絶待法 (218-222 條) 及び諸の分詞 (209-216 條) 皆な動詞に攝在す。

備考 獨立文中の定語詞は句の初に在るときのみ語勢あり。附屬文にありては此限に非ず。

119. 語尾は二類に分る。謂く本 (直現單未來) 及び末 (正過、不過、施過、願) 是なり。命令法は大部分に於て特別の語尾を有し。已過は全く特別の語尾を有す (168 條)。

	本.		末.		命令法.	
	爲他.	爲自.	爲他.	爲自.	爲他.	爲自.
單.	1. mi	e	m (am)	i	āni	ai
	2. si	se	s	thās	dhi (bi)	sva
	3. ti	te	t	ta	tu	tām
兩.	1. vas	vabe	va	vahi	āva	āvahai
	2. thas	āthe	tam	āthām	tam	āthām
	3. tas	āte	tām	ātām	tām	ātām
複.	1. mas	mahe	ma	mahi	āma	āmahai
	2. tha	dhve	ta	dhvam	ta	dhvam
	3. nti	^(anti) _(nti) nte (ate)	n	^(an) _(us) nta ^(ata) _(ran)	ntu	^(anto) _(atu) ntām (ātām)

願望法は一單爲自のときは語尾 a, 三複の爲他のときは m, 爲自のときは ran を有す。餘の違例は 122 條を参照すべし。

120. 正過、不過、施過は言首に a を附加す。此 a は聲の始にある語根の韻に合して複重韻となり語勢を有す。i (行く) の三單正過爲他 ait. ukṣ (灌) は anksat. 又此 a は遮止辭 mā (勿) の後には史詩其他の文書に於て大概省略せらる。已過去、求欲法、増上法と及び不定過去の一分は長字 (139 條) を有す。

甲. 現在の時の組織.

121. 現在と正過去とに就て語根を論ずるに二種の變化法あり。此を分つて十類とす。一、四、六及び十類は第一種に屬し。餘は第二種に屬す。

第一種變化.

122. 第一種變化に屬する各類に普通なることは (一) 語幹は a にて終る。此 a は ma 又は va にて始まる語尾の前には延長せらる。 (二) 二單命爲他には單に語幹を用ゐる。 (三) 爲自言の語尾 āthe, āte, āthām, ātām は願望法を除て餘は ethe, ete, ethām, etām となる。而して此語尾、又餘の語尾 e の前には語幹の a は省き去らる。 (四) 願望法の標幟は恒に i なり。此 i は語幹の a と合して e となる (36 條参照)。

第一類は語根に a を附加へて語幹を造る。語勢は語根に在り。其韻は重韻(7條)にて強めらる。但し韻が聲中にありて本來長きと又位置に由て長きとを除く。ruh (長ず)の語幹 roha. nī (導く)の語幹 naya. bhū (有り)の語幹 bhava. sr (流る)の語幹 sara. vṛdh (増す)の語幹 vardha. されど kṛī (戯る)の語幹 kṛīda. nind (嘲る)の語幹 ninda. pat (落つ)の語幹 pata. gai (諷ふ)の語幹 gāya (39條)。

(本來長き韻とは i, u の如きを稱し。位置に由て長き韻とは次下に二或は二以上の發聲續くときを稱す)。

第六類は語根に a を附加へて語幹を造る。其 a は語勢を有す。語根の韻は變化せず。tud (打つ)の語幹 tuda. diś (示す)の語幹 diśa.

第四類は語根に ya を附加へて語幹を造る。語勢は語根にあり。nah (縛る)の語幹 nahya. div (賭博す)の語幹 divya (37條)。

第十類は語根に aya を附加へて語幹を造る。語勢は前の a にあり。聲の終に在る i, u, r 又は單發聲の中間に在る a は複重韻にて強められ。聲の中にある i, u, r は單發聲の前には重韻にて強められ。彼等の多發聲の前にあると又長韻とは變化せず。cur (盗む)の語幹 coraya. cint (考ふ)の語幹 cintaya.

備考 此第十類は其の實一方には ya にて終る名稱詞の動詞(208條)を稱し、又一方には使役法(198條)より分つべからず第十類の餘類と異なる所は現在語幹が餘の時(不定過去の158條及び受

動詞の190條を除く)又動詞の名稱詞(過受分の214條を除く)にも依然として變ぜざるにあり。

第一類

123. ruh (長ず) 語幹 roha.

爲他. 現在. 爲自.

單. 兩. 複. 單. 兩. 複.

直 說 法.

rohāmi	rohāvah	rohāmah	rohe	rohāvahē	rohāmāhe
rohasi	rohathah	rohatha	rohase	rohethē	rohadhve
rohāti	rohatah	rohanti	rohate	rohete	rohante

願 望 法.

roheyam	roheva	rohema	roheya	rohevahi	rohemahi
roheḥ	rohetam	roheta	rohetāh	roheyāthām	rohedhvam
rohet	rohetām	roheyuh	roheta	roheyātām	roheran

命 令 法.

rohāṇi	rohāva	rohāma	rohāi	rohāvāhai	rohāmāhai
roha	rohatam	rohata	rohasva	rohetām	rohadvam
rohatu	rohatām	rohantu	rohatām	rohetām	rohantām

正 過 去.

aroham	arohāva	arohāma	arohe	arohāvahi	arohāmahi
arohaḥ	arohatam	arohata	arohathāh	arohethām	arohadvam
arohat	arohatām	arohan	arohata	arohetām	arohanta

第四第六第十類の語幹の轉聲亦是に例して知るべし。

演習 第六

1. na hi jalaukasāmaṅge jalaukā lagati || 2. yo yadvapati
 bijam hi labhate so 'pi tatphalam || 3. yadeva rocate yasmai
 bhavettattasya sundaram || 4. matsyo matsyena jivati || 5. dai-
 vameva param manye pauruṣam tu nirarthakam || 6. na hi
 nimbātsravetksaudram || 7. mātaram pitaram bhaktyā teṣayenna
 prakopayet¹⁾ || 8. antakāle hi bhūtāni muhyantīti purāśrutih ||
 9. hanūmānabdhimataradduskaram kim mahātmanām || 10. tada-
 bhāgyam dhanasyaiva yannāśrayati sajjanam || 11. nāryaḥ
 piśācikā iva haranti hrdayāni mugdhānām || 12. sa khalvayas-
 kāntamaṇeranubhāvo yadayo dravati || 13. na gardabho gāyati
 śikṣito 'pi ||

14. yatra tvam tatra hi vayam tatsukham yatra vai bhavān |
 nagaram tadbhavānyatra sa svargo yatra no nṛpaḥ ||

15. bhūyāmsam labhate kleśam yā gaurbhavati durduhā |
 atha yā suduhā rājannaiva tām vitudantyapi²⁾ ||

16. dvāvīmau na virājete³⁾ viparītena karmanā |
 gṛhasthaśca nirārambhah kāryavāmscaiva bhikṣukah ||

1) pra (233 條)+kup の使役法。(198 條)。 2) vi (233 條)+tud. 3) vi (233 條)+
 raj.

124. 第一第四第六類の中若干の語根は語幹を造る
 方法の同異に由て此を又各別類として分つことを得
 (11—19 類)

11. iṣ 6. (欲す)の語幹 iccha
 r 1. (達す) ” ” ” rcha
 gam 1. (行く) ” ” ” gaccha
 yam 1. (拘束す) ” ” ” yaccha
 12. kram 1. (歩む) ” ” ” ...krāma, 爲自は krama
 cam 1. ā と俱に(吸ふ) ” ” ” cāma
 guh 1. (覆ふ) ” ” ” gūha
 13. tam 4. (氣絶す) ” ” ” tāmya
 bhram 4. (又は1.) (彷徨す) ” ” ” bhrāmya
 śam 4. (靜まる) ” ” ” śāmya
 śram 4. (疲る) ” ” ” śrāmya
 mad 4. (悦ぶ) ” ” ” mādyā
 14. jan 4. 爲自(生る) ” ” ” jāya
 15. prach 6. (問ふ) ” ” ” pṛcha
 vyadh 4. (貫く) ” ” ” vidhya
 sad 1. (坐はる) ” ” ” sīda
 śo 4. (研ぐ) ” ” ” śya
 so 4. 前接字と俱に(決す) ” ” ” ...sya
 16. kṛt 6. (斷つ) ” ” ” kṛnta
 muc 6. (解く) ” ” ” muñca
 lip 6. (塗る) ” ” ” lipa
 lup 6. (掠む) ” ” ” lumpa
 vid 6. (得) ” ” ” vinda

- sic 6. (灌ぐ) „ „ „siñca
- 17. damś 1. (咬む) „ „ „daśa
- bhramś 4. (落つ) „ „ „bhraśya
- rañj 4. (赤くなる) „ „ „rajya
- sañj 1. (懸る) „ „ „saja
- 18. dr 6. ā と俱に爲自.(注意す) „ „ „driya
- pr 6. vyā と俱に爲自.(管む) „ „ „priya
- mr 6. 爲自.(死ぬ) „ „ „mriya
- kr 6. (搖り出す) „ „ „kira
- 19. ghrā 1. (嗅ぐ) „ „ „jighra
- pā 1. (飲む) „ „ „piba
- sthā 1. (住まる) „ „ „tiṣṭha

備考 drś (見る)は現在及び正過の爲他と爲自とに用ゐられず. paś (見る)を此に代用す. 語幹は paśya なり. 此語は唯だ現在及び正過の爲他と爲自とにのみ用ゐらる. śo 及び so (第15類)の代りに śi 及び si の形を用ゐることあり.

演習 第七.

- 1. vidyayā sārđham mriyeta na vidyāmūṣara vapet || 2. aṭṭe patito vahnih svayamevopaśāmyati¹⁾ || 3. hīmsrāṇāṃ purato vāso na saḥāyopajāyate²⁾ || 4. na khalu vyāpāramantareṇa kalitāpi śuktirmodhati mauktikāni || 5. naiṣa sthānoraparādho yadenam-andho na paśyati || 6. calatyekena pālena tiṣṭhatyekena bud-dhimaṇ || 7. ā mṛtyoḥ śriyamanvicchennaināṃ³⁾ manyeta durlabhām ||

8. dināddinaṃ gacchati kṛāta yauvaṇam || 9. cirakālam poṣito 'pi daśatyeva bhujangamaḥ ||

10. he dāridrya namastubhyaṃ siddho 'ham tvatprasādāt⁴⁾ | paśyāmyaham jagatsarvaṃ na mām paśyati kaścana ||

11. anāratam pratidiśam pratideśam jāle sthale | jāyante ca mriyante ca budbudā iva vāriṇi ||

1) upa (233 條)+śam. 2) upa (233 條)+jan. 3) ana (233 條)+is. 4) 合成語 (239 條. 106 條の備考参照).

第二種變化.

125. 第二種變化に屬する各類に普通なることは(一)語根に強き(重韻に化したる)と弱きとあること即ち強語幹と弱語幹とあること.(二)二單.命令.爲他.は韻にて終る語根又は語幹のときは語尾 hi を有し.發聲にて終る語根又は語幹のときは第九類を除ては dhi を有す. hu (供養す.第三類)の juhudhi は例外とす.(三)爲自言の語尾 ante, antām, anta の代に ate, atām, ata を用ゐる.(四)願望法は爲他言法の標として yā, 爲自言法の標として ī を有す. 此 ī は韻の次前にありては iy となる.

126. 強語形を用ゐるは次の三類とす.(一)單.直.現.及.び.正.過.の.爲.他.(二)一.單.兩.複.命.爲.他.爲.自.(三)三.單.命.爲.他.餘.は.總.て.弱.語.形.を.用.ゐ.る.

第二類.

127. 語尾は直に語根に附加へらる.語勢は強語形に

ありては語根にあり、弱語形にありては語尾にあり、語尾若し二字なれば語勢は恒に初の字にあり、50條の備考及び120條を参照せよ。

dviṣ (憎む)の強語幹 dveṣ, 弱語幹 dviṣ.

爲他. 現在. 爲自.

單. 兩. 複. 單. 兩. 複.

直 說 法.

dveṣmi dviṣvaḥ dviṣmaḥ dviṣe dviṣvahe dviṣmahe
dveksi dviṣthah dviṣtha dviṣe dviṣathe dviddḥve
dveṣti dviṣtaḥ dviṣanti dviṣte dviṣāte dviṣate

願 望 法.

dviṣyām dviṣyāva dviṣyāma dviṣiṣya dviṣivahi dviṣimahi
dviṣyāḥ dviṣyātām dviṣyāta dviṣiṣthāḥ dviṣiṣyāthām dviṣidhvam
dviṣyāt dviṣyātām dviṣyuh dviṣita dviṣiyātām dviṣiran

命 令 法.

dveṣāni dveṣāva dveṣāma dveṣai dveṣāvahai dveṣāmahai
dviddhi dviṣtam dviṣta dviṣva dviṣāthām dviddhvam
dveṣtu dviṣtām dviṣantu dviṣtām dviṣātām dviṣātām

正 過 去.

adveṣam adviṣva adviṣma adviṣi adviṣvahi adviṣmahi
adveṣ adviṣtam adviṣta adviṣthāḥ adviṣāthām adviddhvam
adveṣ adviṣtām adviṣan adviṣta adviṣātām adviṣata

18, 43 條に注意すべし. duh (乳を搾る)の爲他. dohmi,

dhokṣi (19, 48 條), dogdhi (42 條), duhmaḥ, dugdha, duhanti.
爲自. duhe, dhakṣe, dugdhe, duhmahe, dhugdḥve, duhate. lih (舐る).
の爲他. lehmi, lekṣi, leḍhi (43 條), lihmaḥ, liḍha, lihanti. 爲自.
lihe, likṣe, liḍhe. lihmahe, liḍvve, lihate.

128. as (有り)の爲他. 現. 及び正過. の轉聲は次の如し.

直 說 法.

願 望 法.

asmi svaḥ smaḥ syām syāva syāma
asi sthaḥ stha syāḥ syātām syāta
asti staḥ santi syāt syātām synḥ

命 令 法.

正 過 去.

asāni asāvā asāma āsam āsva āsma
edhi stam sta āsiḥ āstām āsta
astu stām santu āsit āstām āsan

129. i (行く)の爲他. 一. 單. は emi, 一. 複. は imaḥ, 三. 複. は yanti, 命. は ayāni, ihi, etu. 三. 複. は yantu. 正過. は āyam, aih, ait. 複. は aima, aita, āyan. adhi と俱に用ゐられたるときは、爲自. の一. 單. adhiye, 三. 單. adhīte, 三. 複. adhiyate.

130. 語根 an (呼吸す), jaḥ (食ふ), rud (泣く), śvas (呼吸す), svap (眠る)に加へらるべき語尾が發聲又は y を除て餘の半韻にて初まるときは語幹の尾を i とし二及び三の單. 正過. 爲他. のときは語幹の尾を a 又は i とす. rodimi, rodisi, roditi. rudimāḥ, ruditha, rudanti. 願. は rudyam. 命. は rodāni, rudihi, roditu. 正過. は arodam, arodah 或は urodiḥ,

arodat 或は arodit.

131. brū (言ふ) は強語形の時發聲にて始まる語尾の前には語幹を bravi とす直現爲他は bravīmi, bravīsi, bravīti. brūmah, brūtha, bruvanti. 命は bravāni, brūhi, bravītu. 正過は abravam 或は abruvam, abravīh, abravīt. 爲自は brave, brūse, brūte 三複は bruvate.

132. u にて終る語根は強語形の時發聲にて始まる語尾の前には複重韻となる. stu (讀む) の直現爲他は stauimi, stausi, stauti. 命は stavāni, stūhi, stautu. 正過は astavam, astauh, astaut. 三複は astuvan. stu は強語幹を stavi に作る事あり然すれば三單直現爲他は stavīti.

133. śi 爲自 (横たはる) は現と正過とに於ては悉とく重韻となり直の現と命及び正過との三複は rate, ratām, rata の語尾を有す直現は śaye, śese, śete. śemahe, śedive, śerata. 命は śayāni, śesva, śetām. 三複 śeratām. 正過は aśayi, aśetāh, aśete. 三複 aśerata.

134. sū 爲自 (生む) は現及び正過に於て悉とく弱語根 sū に作る直現は suve (36條), 正過は asuvi, asūta.

135. vās 爲他 (歎す) の弱語形は總て us なり直現は vaśmi, vaksi, vaśi. 三複 usanti.

136. śis 爲他 (命すは二單命を除て餘の發聲にて始まる語尾, 或は y の前に在る弱語形は śis となる. 而して直の現と命及び正過との三複は 138 條に准じて造

らる. 直現は śāmi, śāsi (47 條備考 3), śasti. śismah, śiṣṭha, śāsati. 願は śisyām. 命は śāsāni, śādhi (47 條備考 3), śastu. śā-sāma, śiṣṭa, śāsatu. 正過は aśāsam, aśāh, aśāt (47 條備考 3), aśisma, aśiṣṭa, aśāsuh.

137. han (殺す) の古の形は ghan (86 條) なり. 其の弱語形は t 或は th にて始まる語尾の前には ha (44 條), 韻にて始まる語尾の前には ghn となる. 二單命爲他は jahi なり. 直現は hanmi, hansi, (44 條), hanti. hanvah, hathah, hatah. hanmah, hatha, ghnanti. 命は hanāni, jahi, hantu. hanāma, hata, ghnantu. 正過は ahanam, ahan, ahan. ahanma, ahata, aghnan.

演習 第八

1. śyenaḥ kapotānattīti sthitiśeśā sanātāni || 2. tyajata māna-malam bata vighairna punareti gatam caturam vayah || 3. nāsan dharmo yatra no satyamasti || 4. sadbhireva sahasita || 5. dhanyāste pṛthivipālāḥ sukham ye niśi śerāte || 6. guṇi guṇam vetti na vetti nirguṇaḥ || 7. araksitāram rājānam ghnanti dosāḥ || 8. pidākaramamitrāṇām yatsyātkartavyameva tat || 9. yaṁ dam-ṣṭrayā sprīati taṁ kila hanti sarpaḥ || 10. gaccha gacchasi cetkānta panthānaḥ santu te śivāḥ ||

11. kamale kamalā śete haraḥ śete himālaye |

ksirādbhau ca hariḥ śete manye matkumāśankayā¹⁾ ||

12. patatu nabha sphutatu mahi calantu girayo milantu
vāridhayah |

adharottaramastu jagatkā hānirvitarāgasya ||

1) 合成語 (239 條).

第 三 類

138. 第三類の語根は長字法に由て現在語幹を造る三複の現及び命爲他に於ては第三類並に jakṣ (食ふ. ghas より來る) cakās (輝く)等の如き第二類の動詞は共に ati と atu の語尾を有す. 三複. 正過. 爲他. は語尾 an に代るに ur を以てし且つ語幹末の韻を重韻に變ず. vid (第二類. 知る)も亦語尾を ur に造る. 又 ā にて終る第二類の語根及び dvis (第二類. 憎む)も語尾 ur を用ゐることあり.

139. 汎く長字法の規定を明さば

I. 含氣音は其に相當する無氣音にて字を長ず. cha は ca にて, tha は ta にて, pha は pa にて, dha は da にて, bha は ba にて長ず. chid (絶つ)の已過. cicheda. phal (擧ぐ)の已過. paphāla. dhā (置く)の現. dadhāmi. bhī (怖る)の現. bibhemi.

II. 喉音は上來の規則に順ひ其に相當する齶音にて字を長ず. ka, kha は ca にて. ga, gha 及び ha (48 條)は ja にて長ず. khan (掘る)の已過. cakhāna. gam (行く)の已過. jagāma. hā (捨つ)の現. jahāmi.

III. IV 條に擧たるものを除て餘の連續せる發聲は第一の. 或は其に代るべき發聲にて字を長ず. dru (走る)の已過. dūdrāva. kruś (喚ぶ)の已過. cukrośa.

IV. 連續せる發聲の初が硬吹氣音にして後が硬音なるときは後の音. 或は其に代るべき音. にて字を長ず. sprś (觸る)の已過. pasparśa. sthā (住まる)の現. tiṣṭhāmi. skand (跳ぶ)の已過. caskanda.

140. 第三類動詞の字を長ずるに現. 及び正過. にありては語根の韻を短くして此を用ゐる. r に代るに i を以てす. hu (供ふ)は juhu. bhī (怖る)は bibhī. dhā (置く)は dadhā. bhṛ (擔ふ)は bibhṛ. 語勢は強語形にありては大概の語根の長字にあり. されど hu (供ふ), bhī (怖る)の如き少數の語には語根にあり. 弱語形にありては語尾が韻にて始まるときは長字にあり. 此餘は語尾にあり.

141. hu (供ふ)の強語幹 juho, 弱語幹 juhu.

爲他.		現在.		爲自.	
單.	兩.	複.	單.	兩.	複.
			直	說	法.
juhomi	juhuvah	juhumah	juhve	juhuvāhe	juhumāhe
juhosi	juhuthah	juhutha	juhuse	juhuvāthe	juhudhve
juhوتي	juhutah	juhvati	juhute	juhuvāte	juhvate
			願	望	法.
juhuyām	juhuyāva	juhuyāma	juhviya	juhviyāhi	juhvimāhi

命 令 法

juhavāni juhavāva juhavāma juhavai juhavāvahai juhavāmahai
 juhulhi juhutam juhuta juhusva juhvāthām juhudhvam
 juhota juhutām juhvata juhutām juhvatām juhvatām

正 過 去

ajuhavam ajukva ajuhuma ajuhvi ajuhvahi ajuhumahi
 ajuhoh ajuhutam ajuhuta ajubuthāh ajuhvāthām ajuhudhvam
 ajuhot ajuhutām ajuhavuh ajuhuta ajuhvatām ajuhvata

142. dā (施す) 及び dhā (置く) の弱語幹は次の如く dad 及び dadh なり. dadh は 19 條 (42 條に非ず) に准じて論ぜらる. 二單命爲他は dehi, dhehi, dhā の直. 現. 爲他は dadhāmi, dadhāsi, dadhāti. dadhmaḥ, dhattha, dadhati. 爲自は dadhe, dhatse, dhatte. dadhmahe, dhaddhve, dadhate.

143. mā 爲自. (量る) は字を長ずるに i 韻を用ゐる. 弱語幹は發聲の語尾の前には mimi となり. 韻の語尾の前には mim となる. 直. 現. は mime, mimise, mimate. 三. 複. は mimate. 正過の一は amimi, 三は amimita. 三複は amimata.

144. hā 爲他. (去る) の弱語幹は發聲の語尾の前には jahi 若しくは jahi なり. 韻の語尾の前若しくは願望法ときは jah となる. 直. 現. は jahāmi, jahāsi, jahāti. jahimāḥ 或は jahimāḥ, jahitha 或は jahitha, jahati. 願. は jahyām. 命. の單. は jahāni, jahihi 或は jahihi 或は jahāhi, jahātu. 複. は jahāma, jahita, jahatu. 正過の單. は ajahām. 三複. は ajahuh.

第 五 類

145. 第五類は語根に no を附加へて強語幹を造り, nu を附加へて弱語幹を造る. su (捧る) の強語幹 suno, 弱語幹 sunu. 韻にて終る語根は v 又は m にて始まる語尾の前には其 u を省くことを得. 爾して二單命爲他は語尾を有せず. sunuvah. 或は sunvah. sunumabe 或は sunumabe. 命. sunu. されど發聲にて終る語根は其 u を省くことを得ず (83 條と同理なり). 又三複のときは語尾 anti の前に其 u を uv に變ぜざる可らず. 斯かる語根の二單命の語尾は hi なり. 故に āp (得) は唯だ āpnuvah, āpnumah. 三複直現は āpnuvanti (36 條). 命. は āpnubi. 語勢は強語形にありては語幹にあり. 弱語形にありては語尾にあり.

146. śru (聞く) の強語幹 śrno, 弱語幹 śrnu.

爲他		現在		爲自	
單	兩	複	單	兩	複
śrnomi	śrnuvah	śrnumah	śrno	śrnuvaha	śrnumaha
śrnoḥi	śrnuvāh	śrnutaha	śrnoḥe	śrnuvāthe	śrnutahve
śrnoti	śrnutah	śrnavanti	śrnote	śrnuvāte	śrnavate
願 望 法					
śrnuvām	śrnuvāva	śrnuvāma	śrnuvīva	śrnuvīvahi	śrnuvīmahi

命 令 法

śṛnavāni śṛnavāva śṛnavāma śṛnavai śṛnavāvahai śṛnavāmahai
 śṛnu śṛnutam śṛnuta śṛnuṣva śṛnvāthām śṛnudhvam
 śṛnotu śṛnutām śṛnvantu śṛnutām śṛnvātām śṛnvatām

正 過 去

aśṛnavam aśṛnuva aśṛnūma aśṛnvi aśṛnuvahi aśṛnumahi
 aśṛnoḥ aśṛnutam aśṛnuta aśṛnuthāḥ aśṛnvāthām aśṛnudhvam
 aśṛnot aśṛnutāni aśṛnavan aśṛnuta aśṛnvātām aśṛnvata

第 七 類

147. 第七類は語根に na を挿んで強語幹を造り、語根に n を挿んで弱語幹を造る。bhid (破る) の強語幹 bhinad; 弱語幹 bhind. 語勢は 145 條に同じ。

爲他 現在 爲自

單 兩 複 單 兩 複

直 說 法

bhinadmi bhindvaḥ bhindmaḥ bhinde bhindvahe bhindmahe
 bhinatsi bhintthah bhinttha bhintse bhindāthe bhinddhve
 bhinatti bhinttah bhindanti bhintte bhindāte bhindate

願 望 法

bhindyām bhindyāva bhindyāma bhindiya bhindivahi bhindimahi

命 令 法

bhinadāni bhinadāva bhinadāma bhinadai bhinadāvahai bhinadāmahai
 bhinddhi bhinttam bhintta bhintsva bhindāthām bhinddhvam
 bhinattu bhinttām bhindantu bhinttām bhindātām bhindatām

正 過 去

abhinadam abhindva abhindma abhindi abhindvahi abhindmahi
 abhinat abhinttam abhintta abhintthāḥ abhindāthām abhinddhvam
 abhinat abhinttām abhingan abhintta abhindātām abhindata

是の如く yuj (合はす) は yunajmi, yunaksi, yunakti, yuñj-
 maḥ, yuñktha, yuñjanti. piṣ (碎く) は pinaṣmi, pinaksi, pinaṣti.
 piṁṣmaḥ, piṁṣtha, piṁṣanti.

第 八 類

148. 第八類は語根に o を附加へて強語幹を造り、u を附加へて弱語幹を造る。其 u は v 若くは m にて始まる語尾の前には省くことを得。

tan (擗く) の強語幹 tano, 弱語幹 tanu. 二. 單. の命. 爲他. は弱語幹を用ゐる。語勢は 145 條に同じ。

149. kr (作る) の強語幹 karo, 弱語幹 kuru. 弱語形中 m, y, v にて始まる語尾の前には kur となる。

爲他 現在 爲自

單 兩 複 單 兩 複

直 說 法

karomi kurvaḥ kurmaḥ kurve kurvahe kurmahe
 karoṣi kuruthaḥ kurutha kuruṣe kurvāthe kurudhve
 karoti kurutah kurvanti kurute kurvāte kurvate

願 望 法

kuryām kuryāva kuryāma kurviya kurvivahi kurvimahi

命令法

karavāni karavāva karavāma karavai karavāvahai karavāmahai

kuru kurutam kuruta krusva kurvāthām kurudhvam

karoti kurutām kurvanta kurutām kurvātām kurvātām

正過去

akaravam akurva akurma akurvi akurvahi akurmahi

akaroh akurutam akuruta akuruthāh akurvāthām akurudhvam

akarot akurutām akurvan akuruta akurvātām akurvata

第九類

150. 第九類は語根に na を附加へて強語幹を作り、發聲にて始まる語尾の前には ni, 韻にて始まる語尾の前には n を附加へて弱語幹を造る。發聲にて終る語根は二單の命爲他の語尾を āna とす。as (食ふ) の強語幹 aśnā, 弱語幹 aśni, 韻の前には aśn. 二單命爲他は aśāna なり。されど kri (買ふ) の命は kriṇihī. 語勢は 145 條に同じ。

151. as (食ふ)

爲他 現在 爲自

單 兩 複 單 兩 複

直説法

aśnāmi aśnivah aśnimah aśne aśnivabe aśnimabe

aśnāsi aśnithah aśnitha aśniṣe aśnāthe aśnidhve

aśnāti aśnitah aśnanti aśnite aśnāte aśnate

願望法

aśniyām aśniyāva aśniyāma aśniya aśnivahi aśnimahi

命令法

aśnāni aśnāva aśnāma aśnai aśnāvahai aśnāmahai

aśāna aśnitam aśnita aśniṣva aśnāthām aśnidhvam

aśnātu aśnitām aśnantu aśnitām aśnātām aśnatām

正過去

aśnām aśniiva aśniima aśni aśnivahi aśnimahi

aśnāh aśnitam aśnita aśnithāh aśnāthām aśnidhvam

aśnāt aśnitām aśnan aśnita aśnātām aśnata

152. 語根の中間に鼻聲あるときは其鼻聲を去て語尾を附加ふ。bandh (縛る) は badhuāmi に, manth (攪動す) は mathuāmi に作る。jñā (知る) も亦是の如く jānāmi に作る。grah (攫む) は grānāmi に作る。

演習第九

1. andāni bibhrati svāni na bhindanti pipilikāh || 2. strivrad-amiva¹⁾ mandasya duroti kavita manah || 3. nice vadati na kurute na vadati sujanaḥ karotyeva || 4. puṣṇāti kamalamambho lakṣmyā tu ravirniyojayati²⁾ || 5. te dhanyā ye na śṛṇvanti dīnāḥ prānāyinaṃ girah || 6. yatsvādhinaṃ yadapi sulabham tena tuṣṭim vidhehi³⁾ || 7. kaḥ śaktimānapi mṛgāṅkamūrtim⁴⁾ śilāpaṭṭake pinasti || 8. ahireva hyabeh pādānvijāniyāma⁵⁾ saṃśayah ||

9. svakiyānbhuñjate matsyāḥ svāpatyāni³⁾ phaṇādharāḥ ||

10. ā kalyādā niśithācca kuksyartham vyāpriyāmahe⁴⁾ |

na ca nirvṛnumo⁷⁾ jātu śāntāstu sukhamāsate ||

11. tejohine¹⁾ mahipāle sve pare ca vikurvate⁸⁾ |

niḥśaṅko hi jano dhatte padam bhasmanyānūṣmaṇi ||

12. jānāte yanna candrārka⁹⁾ jānate yanna yogināḥ |

jānīte yanna bhargo 'pi tajjānāti kavīḥ svayam ||

1) 合成語 (239 條). 2) ni (233 條)+yuj の役. (198 條). 3) vi (233 條)+dha.
4) vi (233 條)+jñā. 5) 合成語 (242 條). 6) vi+a (124 條の 18)+pr. 7) nis (233 條)+vr. 8) vi (233 條)+kr. 9) 合成語 (237 條).

乙. 現在の餘の時の組織.

153. 現在の餘の時の組織に於て、又は動詞の名稱詞 (七十八頁の X) に於ては、發聲或は y を除て餘の半韻にて始まる語尾を直に語根に附加ふることあるも多くは語幹を i (稀には ī) にて終らしめ此に語尾を附加ふ。bhid (破る) の三單未爲他は bhetsyati. 不は bhettum. されど pat (落つ) は i を加へて語幹を pati とす未は patisyati. 不は patitum. grah (把る) の未は grahīsyati. 不は grahitum.

(I) 不定過去.

154. 不定過去を分つて二類とす。(一) 單不定過去.(二) 硬吹氣音不定過去. 119, 120 條参照.

單不定過去.

155. 單不定過去に又三類を分つ. 謂く (一) 語根不定

過去.(二) 阿不定過去.(三) 長字不定過去.

156. 語根不定過去は語根に直に語尾を附加ふ. 此不定過去は爲他言の ā にて終る語根又は bhū の語根にのみ用ゐらる餘の言類に用ゐらるゝこと極めて稀なり.

dā (施す) 及び bhū (有り).

adām	adāva	adāma	abhūvam	abhūva	abhūma
adāḥ	adātām	adāta	abhūḥ	abhūtām	abhūta
adāt	adātām	aduḥ	abhūt	abhūtām	abhūvan

爲自言にして散見せるものは謂く. dhā (置く) の二單. adhithāḥ. sthā (住まる) の asthithāḥ. kr (作る) の akrthāḥ. mr (死ぬ) の amrthāḥ. 三單. adhita, asthita, akrta, amṛta.

157. 阿不定過去は語根に a を加へ此に語尾を附加ふ. lip (塗る) の爲他. は alipam. 爲自. は alipe. されど正過. は alimpam, 爲自. alimpe (124 條の 16). bhraś (落つ) の不過. は abhraśam, abhraśe. されど正過. は abhraśyam, abhraśye (124 條の 17). śās (命令す) の不過. は aśīsam. されど正過. は aśāsam (136 條). 轉聲法は正過に同じ.

158. 長字不定過去の形を最も多く用ゐるは第十類の動詞, 使役法及び名稱詞の動詞とす. 此等の動詞にありては語幹の aya の字を去る (122 條の備考). 長字と語根との韻は其量必しも一樣ならず. 若し語根が中間に a を有するとき又は ā, ī, ū にて終るときは多くは i 又

は i を以て長字の韻とす。語幹及び語尾は猶ほ 157 條の如し。cur (盜む) acūcuram. gaṇaya—(算ふ) aṅgaṇam. pī 役。(救ふ) apīparam. nī 役。(導き去らしむ) anīnāyam. yuj 役。(軛す) ayūyujam. sthā 役。(置く) asthāpam.

159. naś (失ふ) は aneśam (176 條参照) に作る。pat (落つ) は apatam. vac (言ふ) は avocam.

硬吹氣音不定過去。

160. 硬吹氣音不定過去は一分は強語幹(複重韻を有せる)を、一分は中語幹(重韻を有せる)を、又一分は弱語幹を有す。此過去に四類あり。(一)語根に直に s を加ふ(悉不定過去 s-aorist)。(二) i を或は稀には ī を附加へたる語根に s を加ふ(伊瑟不定過去 is-aorist)。(三)語根に sis を加ふ(師瑟不定過去 sis-aorist)。(四)語根に sa を加ふ(索不定過去 sa-aorist)。

161. 悉不定過去の韻は爲他には複重韻となり。爲自には i, ī, u, ū にて終る語根は重韻となり。r 又は發聲にて終る語根は平韻なり。śru (聞く) は aśrausam, aśroṣi. kr (作す) は akārsam, akṛṣi. drś (見る) の三。單。爲他。は adrāksit (7 條)。bhaj (分つ) の一。單。は abhāksam, abhaksi. t 又は th にて始まる語尾の次前にある s は鼻聲を除て餘の發聲の次後にあるときは省き去らる。tud (撃つ) の二。複。爲他。は atautsta に非ずして atautta なり。是の如く ksip (投ぐ) は aksipta となる。されど man (惟ふ) の三。單。爲自。は amamsta.

(44 條)。kr (作す) の二。複。爲他。は akārsta. dhvam の前にある s は軟音の z (21 條) となりて消滅す。ā の餘の韻の次後の s は斷聲 z に變じ(47 條)此がために其次後に來る dh は dh に變じて(48 條)其 z 消滅す。kr (作す) は akrḍhvam. nī (導く) は aneḍhvam となる。

162. nī (導く) の轉聲法を擧れば

anaśam	anaśva	anaśma	aneṣi	aneśvahi	aneśmahi
anaśiḥ	anaśtam	anaśta	aneṣṭhāh	aneśāthām	aneḍhvam
anaśit	anaśtām	anaśuḥ	aneṣṭa	aneśātām	aneśata

備考 二三の單及び三複の爲他の形に注意せよ。

163. 伊瑟不定過去は韻にて終る語根のときは爲他に複重韻となり。爲自に重韻となる。lū (切斷す) は alāviśam, alaviṣi. a を有して單發聲にて終る語根は爲他には隨意に複重韻となすことを得。vad (言ふ) は恒に複重韻に造らる。grah (把る) の語幹は grahi なり。a を除て餘の韻を有せる語根は爲他。爲自。ともに重韻となる。paṭh (學ぶ) の三。單。爲他。は apaṭhit 或は apaṭhit. vad は唯だ avādit. grah は唯だ agrāhit, 爲自。は agrahiṣta. budh (覺る) は abodhit, abodhiṣta. 轉聲法は 162 條に同じ。

備考 二複の爲自には時として dhvam の dh を斷音に變ぜざる事とあり(161 條)。

164. 師瑟不定過去は唯だ爲他。の形のみ用ゐらる。語根の多くは ā にて終り。若くは語根は ai にて終るも ā にて終る語根の如くに論ぜらるる語根に用ゐらる。

yā (行く) は ayāsiṣam, ayāsiḥ, ayāsīt. ayāsiṣma, ayāsiṣta, ayāsiṣuh. glai (倦む) は aglāsiṣam.

165. 索不定過去は唯だ a, ā を除て餘の韻を有して ś, ṣ 又は h にて終る語根にのみ用ゐらる。韻は恒に弱し。轉聲法は第一種變化の正過去の法を用ゐる。但し一單の爲自は i を有し、二三の兩の爲自は āthām, ātām を用ゐる。diś (示す) は adikṣam, adikṣat. adikṣāma, adikṣan. 爲自は adikṣi, adikṣata. adikṣāvahi, adikṣāthām, adikṣātām. adikṣanta. guh (隠る) は aghukṣam, aghukṣi (19 條).

希 求 法

166. 不定過去に屬せる願望法あり希求法と名けらる。使用せらるゝ語類は次の如し。bhū (有り), bhūyāḥ (汝をして有らしめむ), bhūyāt (彼をして有らしめむ), dā (施す), deyāt (彼をして施さしめむ), pā (守る), pāyāt (彼をして守らしめむ), sthā (住まる), stheyāḥ (汝をして住まらしめむ), kri (作る), kriyāt (彼をして作らしめむ), diś (示す), diśyāt (彼をして示さしめむ)。又次の如き特殊の形あり。bhūyāstam (汝等兩人をして有らしめむ), brū (言ふ), brūyāsta (汝等をして言はしめむ), pāyāsuḥ (彼等をして守らしめむ), bhūyāsuḥ (彼等をして有らしめむ), vidhāsiṣta (彼をして爲さしめむ, vi と云前接字と俱に用ゐられたる dhā の三單爲自)。

(II) 已 過 去

167. 語根の初の發聲は 139 條に准じ語根の韻の短

かきものを用ゐて字を長ず。語中にある重韻又は複重韻の代には其短音を用ゐ (7 條), 語末にある重韻, 複重韻又は r, ṛ, ḷ の代には a を用ゐる。sev (事ふ), siṣeva. gai (諷ふ), jagau. kṛ (作す), cakāra. tṛ (越ゆ), tatāra. vṛdh (増す), vavardha.

168. 韻にて始まる語根は此韻にて字を長ず。i 又は u は強語形 (171 條) のときは iy 又は uv (9, 36 條参照) にて字を長ず。ad (食ふ), āda. āp (得), āpa. iṣ (望む), iyesa, iṣima. uṣ (燃す), uvosa, ūsima. 語の初に a ありて二の發聲が次後に續くとき、又は語の初にある r は ān を用ゐて字を長ず。arc (尊ぶ), ānarca. ṛdh (榮ゆ), ānardha. r (行く) は āra. ya 又は va は i 又は u にて字を長ず。yaj (供ふ), iyāja, ijima. vac (語る), uvāca, ūcima.

169. 人稱の語尾は次の如し。

爲 他			爲 自		
a	va	ma	e	vahe	mahe
tha	athur	a	se	āthe	dhve
a	atur	ur	e	āte	re

170. 發聲にて始まる語尾は大抵語幹との間に i を挿入す。語幹と re との間には必ず i を挿入す。tha との間には i を挿入せざること多し。bhid (破る) の一兩爲他は bibhidiva. nī (導く) の二單爲他は ninetha. 或は ninayitha. 語根 dru (走る), śru (聞く), stu (讀む), sru (流る), kṛ (作

る), bhṛ (擔ふ), vr (遷ぶ), sr (疾く走る) は re の次前に来る外は語幹を i にて終らしめず, śuśrotha, śuśrūma, śuśruvire, cakārtha, cakṛma, cakṛire.

171. 已過去は三の語幹を有す. 強(複重韻), 中(重韻)及び弱是なり. 單爲他の一は強或は中語幹より, 二は中語幹より, 三は強語幹(以上何れも強語形)より, 此餘は弱語幹(弱語形)より造らる. 語勢は強語形の場合は語根にあり, 弱語形の場合は語尾にあり (127 條).

172. 初と終とに發聲を有する語根にして中間の韻が本來長さか又は位置に由て長さ*ときは如何なる語形にても其語根の形を變ぜず. mīl (瞬く) は mimīla, mimīlima. bandh (縛る) は babandha, babandhima. nind (嗤る) は nininda, ninindima. 又 prach (問ふ) は papraccha, papracchima (prach は語根の韻は短かけれども語幹のときは其韻恒に位置に由て長し).

173. 中間に i, u, r を有せる語根の強語形は重韻なり. bhid (破る) は bibheda, bibhidima. pus (養ふ) は puposa, pupuṣima. drś (見る) は dadarśa, dadṛśima.

174. tud (撃つ) の轉聲法.

tutoda tutudiva tutudima tutude tutudivahe tutudimahe
tutoditha tutudathuh tutuda tutudise tutudāthe tutudidhve
tutoda tutudatuh tutuduh tutude tutudāte tutudire

* 122 條を見よ.

175. 語根の中間に a を有し次の發聲は單一なるときは一單の爲他は複重韻に造ることを得三單の爲他は複重韻に造るを要す二單の爲他は 176 條に擧たるものの外は變化せず. 弱語形の場合は語根の形を最も短ふす. 語根の初に y 又は v あるときは i 又は u を以て字を長ず. (168 條) gam (行く) の語幹は jagām, jagam, jagm. grah (攫む) の語幹は jagrah, jagrah, jagrh. vac (言ふ) の語幹は uvāc, uvac, ūc(u+uc より成る).

jagāma, jagama jagmiva jagmima jagme jagmivahe jagmimahe
jagantha, jagamitha jagmathuh jagma jamise jagmāthe jagmidhve
jagāma jagmatuh jagmuh jagme jagmāte jagmire

khan (掘る) の cakhāna, cakhnuh. jan (生る) の jajāna, jajānuh. han (撃つ) の jaghāna, jaghtuh (86 條). grah (攫む) の jagrahitha, jagrāha, jagrhuh. yaj (供ふ) の iyāja, ijuh. vac (言ふ) の uvāca, ūcuh も皆前表に准ず. vad (言ふ), vap (播く), vas (欲す), vas (住む), vah (運ぶ), も亦上に准ず. ghas (食ふ) は jaghāsa, jakṣuh. vyadh (貫く) は vivyādha, vividhuh. svap (眠る) は susvāpa, susūpuh.

176. 初と終とは單一の發聲にして中間に a を有し而して初の發聲は字を長ずるに代字を要せざる語根(代字とは 139 條 I. II. を見よ)は弱語形の場合は a を o に變じ字を長ぜず. pat (落つ) は petima. nad (吼ゆ) は neduh. yam (拘束す) は yemire. 二單爲他の語尾が i にて終る語

幹に附加へらるゝときも亦然り. pac (煮ゆ)は pecitha. さ
 れど語幹が i にて終らざるときは然らず即ち papaktha.
 papāca, papaca peciva pecima pece pecivahe pecimahe
 papaktha, pecitha pecathuh peca pece pecāthe peidhve
 papāca pecatuh pecuh pece pecāte pecire

177. bhaj (分つ)は恒に 176 條の如く bhejima, bheje. tras
 (怖る), bhram (彷徨す), rāj (輝く)等は亦た 176 條の如く
 作ることを得. jan (生まる. 175 條)は決して 176 條の如
 くせず.

178. ā 又は ai, au にて終る語根は一.及び三の單.爲
 他.には au と云語尾を用ゐる.弱語形にありては此等の
 語根の韻は韻にて始まる語尾の前には消滅し,發聲に
 て始まる語尾の前には其韻を弱めて i とす.二.單の爲
 他.は ā 或は i 韻を有す. dā (施こす)は dadau, dadātha 或は
 daditha, dadau. dadima, dada, daduh. gai (諷ふ)は jagau,
 jagātha 或は jagitha, jagau. jagima, jaga, jaguh.

179. i, ī, u, ū, r, ṛ にて終る語根は一.單の爲他.には
 重韻或は複重韻に作ることを得.二.には重韻,三.には複
 重韻,に作るを要す. nī (導く)の一.は ninaya 或は nināya.
 二.は ninetha 或は ninayitha. 三.は nināya. 弱語形にありて
 は, r にて終り單一ならざる發聲にて始まる語根,又大
 概の ṛ にて終る語根は重韻となり.其餘は平韻を有す.
 ninyima (9 條に異なり), kri (買ふ)は cikriyima (36 條). dhū

(撒ふ)は dudhuvima, dndhuvuh (36 條). dhr (持つ)は dadhrima
 (17 條). smr (記憶す)は sasmarima. tr (渡す)は tatare.

180. ji (勝つ)は jigāya, jigetha, jigyima. jigye. hi (衝く)は
 jighāya. ei (積む)は cicāya 或は cikāya となる.

181. bhū (有り)は babhūva. babhūvima, babhūvuh となる.

182. vid (知る)は字を長ずることなし. veda, vettha,
 veda. vidma, vīda, viduh.

183. ah (言ふ)は唯だ二の單.と兩.と三.の單.兩.複.との
 爲他.にのみ用ゐらる. ātha, āha. āhathuh, āhatuh. āhuh.

184. 複説已過去. 語根又は語幹に語尾 am を加へ
 此に直に,或は餘の語を挿める後に, kr (作す), bhū (爲る),
 as (有り)の已過去を加ふ. kr は動詞が若し爲自.に變化
 すれば亦爲自.に變化す.

185. 複説已過去は第十類の動詞の語根,及び第十
 類と同様に造らるゝ使役法及び名稱詞の動詞,又 a, ā
 の餘の韻にて始まり其韻が本來或は位置に由て長き
 語根,又 ās (坐はる)と俱に用ゐらる.又 vid (知る), hu (供
 ふ)の如き五六の動詞と俱に用ゐることを得. cur (盗む)
 は corayāmāsa. tuṣ 役. (満足せしむ)は tosayāmāsa. kathaya-
 (話す)は kathayām babhūva. iks 爲自. (視る)は iksām cakre. ās
 爲自. (坐はる)は āsām cakre. hu (供ふ)は juhavām cakāra.

(III) 未 來

186. 未來の特徴は語勢を有せる sya なり.此音は重

韻化せる語根又は i にて終る重韻化せる語幹に附加へらる。語尾は第一種變化の現在の語尾を用ゐる。dā (施す) は dāsyāmi, dāsyē. gai (諷ふ) は gāsyāmi (164 條). nī (導く) は nesyāmi, nesyē. bhū (爲る) は bhavisyāmi. bhid (破る) は bheṭsyāmi. budh (覺る) は bhotsyē (19 條). vac (言ふ) は vaksyāmi (47 條). grah (攫む) は grahīsyāmi (153, 163 條). drś (見る) は draksyāmi (7, 161 條). cur (盜む) は corayisyāmi (122 條の備考).

187. 複説未來. ṭr (69 條) にて終る作者名詞の體單男に語根 as (有る, 128 條) の現在を附加ふ。此附加へられたる語は第三人稱のときは通例は省き去られ其餘のときも省き去らるゝこと少なからず。此附加字は重韻化したる語根或は i にて終る重韻化したる語幹に附加へらる。kr (作す) は karṭr. bhū (爲る) は bhavitr. grah (攫む) は grahitr (189 條参照). drś (見る) は draṣṭr (189 條参照.) 今 kr (作す) に就て明せば

kartāsmi	kartāsvah	kartāsmah
kartāsi	kartāsthah	kartāstha
kartā	kartārau	kartārah

(IV) 施設過去

188. 施設過去は單未來より造らる。猶ほ正過去の現在より造らるゝが如し。dāsyāmi, dāsyē (186 條) より adāsyam, adāsyē となる。anesyam, anesyē. abhavisyam, abhavisyē. 語尾は正過去のを用ゐる。

(V) 受動言

189. 受動言の語幹は弱語根に語勢のある後接字 ya を加へて造る。現在及び正過去のときは此語幹に爲自の語尾を附す。tud (撃つ) は tudyate. dviṣ (憎む) は dviṣyate. grah (攫む) は gr̥hyate. vac (言ふ) は ucyate. bandh (結ぶ) は badhyate. されど han (殺す) は hanyate にして hayate に非ず (44 條参照)。

190. 第十類の動詞及び使役法の語根は受動言を造るに語幹の aya (122 條) を去る。cur (盜む) は coryate. kr (爲す) の役。kāraya- (爲さしむ) は kāryate.

191. ā にて終る語根は或は ā を存するあり或は其を弱めて i に變ずるあり。jñā (識る) は jñāyate. pā (護る) は pāyate. dā (施す) は diyate. pā (飲む) は piyate. gai (諷ふ) は gīyate. i 或は u にて終る語根は其韻を延長す。ji (勝つ) は jiyate. śru (聞く) は śrūyate. ṛ にて終る語根は此を ri に變じ、單一ならざる發聲の次後には重韻に變ず。kr (作す) は kriyate. smṛ (記憶す) は smaryate. ṛ にて終る語根は此を ir に變じ、唇音の次後には ūr に變ず。śr (破る) は śiryate. pṛ (満たす) は pūryate.

192. 受動言の不定過去, 已過去, 未來, 及び施設過去は此等に相當する爲自に同じ, 其異なる所は下の如し。

193. 三單不過受は i にて終る。韻にて終る語根及び單發聲の中間に a を有する語根は複重韻となる。中間

に i, u, r を有する語根は重韻となる. ā にて終る語根は y を挿入す. ni (導く) は anāyi. lū (斷つ) は alāvi. kr (作る) は akāri. pac (煮る) は apāci. han (殺す) は aghāni (86 條). dīś (示す) は adeśi. budh (覺る) は abodhi. drś (見る) は adarśi. dā (施す) は adāyi.

194. jan (生まる) は ajani. dam (調ふ) は adami. vadh (殺す) は avadhi. labh (得) は alābhi 或は alambhi, 前接字を加へたるときは必ず alambhi に作る.

195. 一切の韻にて終る語根並に grah (攫む), drś (見る) 及び han (殺す) は (總て三. 單. を除て) 爲自の伊瑟不定過去 (163 條) を造りて此を受動の意に用ゐることを得. 韻にて終る語根並に grah 及び han は複重韻を有し, drś は重韻を有す. ā にて終る語根は y を挿入す. anāyisi. alāvīsi. akārīsi. agrāhīsi. aghānīsi (86 條). adarśīsi. adāyīsi.

196. 複説已過去 (184, 185 條) の受動言 kr (as) 及び bhū は恒に爲自の形を有す.

197. 未來及び施設過去のときは, 195 條に擧たる語根は受動の意に用ゐる伊瑟不過を造ると同様に特別なる受動言の形を造ることを得. nāyīsyē, anāyīsyē. grāhīsyē. darśīsyē.

(VI) 使 役 法.

198. 使役法は第十類の動詞 (122 條) の如くに語幹を造る. 轉聲法は第一種の活用法を用ゐる. 使役法は大抵

或人をして語根の詮はす所のものを爲さしむるの意義を有す. 又其意義は語根の意義と異ならざること少なからず (斯かる際には此動詞は 208 條に明すべき名稱詞の動詞と見るべし). ni (導く) の語幹は nāyaya (導びかしむ). bhū (爲る) の語幹は bhāvaya (現はす). kr (作す) の語幹は kāraya (作さしむ). pat (落つ) の語幹は pātaya (落す). chid (斷つ) の語幹は chedaya (斷たしむ). budh (覺る) の語幹は bodhaya (覺らしむ).

199. 語根の中間にある a は數しば短かきまゝのことあり. gam (行く) の gamaya (行かしむ), jan (生る) の janaya (生む), tvar (急ぐ) の tvaraya (急がす), prath (擴がる) の prathaya (擴げる), に於るが如し.

200. ā にて終る語根は大抵 paya を有し其使役法たることと表す. dā (施す) は dāpaya (施さしむ). sthā (住まゐる) は sthāpaya (置く). されど pā (飲む) は pāyaya (飲ます). jñā (知る) は jñāpaya 或は jñapaya (知らす). snā (浴す) は snāpaya 或は snapaya (浴せしむ).

201. ṛ (擧がる) は arpayā (投ぐ), kṣi (盡す) は kṣayaya 或は kṣapaya, ji (勝つ) は jāpaya (勝たしむ), pi (満たす) は pūrāya, ruh (生長す) は rohaya 或は ropaya (生長せしむ), labh (受く) は lambhaya, i (行く) は前接字 adhi と俱に adhyāpaya (誨ゆ), に造る.

202. 不定過去は長字法を用ゐる (158 條). 已過去は複

説法を用ゐる(184, 185條). 未來は語幹に i を加へて造る(127條の備考). 受動言は190條に准ず.

(VII) 求 欲 法

203. 求欲法は字を長じたる語根に或は字を長じて i にて終る語幹に sa を附加へて其語幹を造る. 長字は語勢を有し其韻は i なり, 若し語幹が u を有すれば長字の韻又 u を用ゐる. 轉聲法は第一種の活用法に同じ. pac (煮る)の語幹 pipaksa (煮んと欲す). ksip (投ぐ)の語幹 cikšipsa (投んと欲す). tud (撃つ)の語幹 tututsa (撃んと欲す). vid (知る)の語幹 vivitsa 及び vividisa (知んと欲す). duh (牛乳を搾る)の語幹 dudhuksa (牛乳を搾らんと欲す).

204. 聲の末にある i と u は延長せらる. r と ṛ は ir となり, 唇音の次後には ūr となる. ji (勝つ)の語幹 jigīsa. śru (聞く)の語幹 śuśrūsa. kr (作す)の語幹 cikīrsa. mr (死ぬ)の語幹 mumūrsa.

205. āp (得)の語幹 ipsa. gam (行く)の語幹 jigāmsa 或は jigamisa. grah (攫む)の語幹 jighrksa. dā (施す)の語幹 ditsa. dhā (置く)の語幹 dhitsa. pat (落つ)の語幹 pitsa 或は pipatīsa. bhaj (受く)の語幹 bhiksa (乞ふ). labh (得)の語幹 lipsa. śak (能くす)の語幹 śiksa (學ぶ). han (殺す)の語幹 jighāmsa.

206. 求欲法の不定過去は伊瑟不定過去(163條)を、已過去は複設已過去(184, 185條)を用ゐる. 未來は i に

て終る語幹より造らる. 其受動言は189條に准じ. 使役法は198條に准ず.

(VIII) 増 上 法

207. 増上法は種々の方法に由て強めたる長字を語首に加へ以て語幹を作る. 轉聲法は第三類動詞の(138條)を用ゐる. nij (洗除す)は nenekti, 三複. nenijati. kram (歩む)は camkramīti. dhū (撒ふ)は dodhavīti. nṛt (踊る)は narīnartti. 典文(classical)の梵語にては増上法の幹語は強められたる長字を語首に加へ語勢を有せる ya を語末に加へて造り爲自に於て變化せらる. kram (歩む)は camkramyate. dip (輝く)は dedīpyate. jval (燃ゆ)は jājvalyate. ru (叫ぶ)は rorūyate. nṛt (踊る)は narīnṛtyate. car (行く)は camcūryate. nam (屈む)は namnamyate.

備考 jāgarti (彼は覺む)も古き増上語なり. 此語は gr てる語根より成れるもの, 或は jāgr と云一種特別なる形を有せるもの, と看做され第二類の活用法(138條に注意せよ)に従て轉聲せらる. jāgarmi, jāgarāsi, jāgarti. jāgrmah, jāgrtha, jāgrati. 願. は jāgryam. 命. は jāgarāni. 正過. は ajāgaram, ajāgah. ajāgrma, ajāgaruh. 已過. は jajāgāra 及び jāgarām cakāra. 現分. は jāgrat.

(IX) 名 稱 詞 の 動 詞

208. 名詞或は形容詞なる名稱詞の語幹は此に人稱の語尾を加へて動詞の語幹として用ゐらるゝことを得. ankura (芽)は ankurati (其は芽を發す). darpaṇa (鏡)は darpaṇati (彼は鏡なり). paṅkeruha (蓮)は paṅkeruhati (彼は蓮

の如し). ripu (敵) は ripavati (彼は敵となる). されど大概は名詞、形容詞の語幹に ya 或は aya 或は稀には sya と云ふ後接字を加へ或は爲他・或は爲自・に於て第一種活用法に准じて轉聲せらる. 其意義は「其名詞、形容詞の詮はす所のもの、を作す、が有る、と爲る、を欲す」或は其「名詞、形容詞の、舉動を爲す、如く看ゆ」の類なり. cira (長き) は ciraya, cirāya (躊躇す、猶豫す). mīra (混りたる) は mīraya (混ぜる). padma (蓮華) は padmāya (蓮華に比ぶ). tapas (苦行) は tapasya (苦行を修す). putra (子) は putriya (子を欲す). go (牝牛) は gavya (牝牛を貪求す). rājan (王) は rājāya (王の如き舉動を爲す). lokatraya (三世) は lokatrayāya (三世となる).

(X) 動詞の名稱詞(動詞狀の形容詞と名詞).

1. 分詞(動詞狀形容詞).

209. 後接字 ant, 其弱形の at, は現在(122條以下)及び未來(180條)の語幹に附加へられたるときは此等の時の分詞の爲他を造る. 第二種活用法の動詞(125條)にありては現在のときに弱語幹を用ゐる. 字を長じたる語幹(124條の19を除く)は唯だ弱語形 at (78, 79條)を有す. rohant, tudant, nahyant, corayant, dviṣant, sant (as「有り」より來る), ghnant (han「殺す」より來る, 86條), śāsat (136條), juhvat, śṛṅvant, bhindant, kurvant, āśnant, nesyant, bhaviṣyant.

210. 後接字 māna は第一種活用法に屬する動詞の

語幹より現分・爲自・を造り、又一切の動詞の未分・爲自・又一切の動詞の現分・受・及び未分・受・を造る. rohamāna, tudamāna, nahyamāna, corayamāna, nesyamāna, bhaviṣyamāna, tudyamāna, ucyamāna (vacより來る), badhyamāna (bandhより來る, 189條), kriyamāna (kṛより來る, 191條), nāyisyamāna (197條).

211. 後接字 āna は第二字に語勢を有し(第三類動詞[140條]を除く)第二種活用法に屬する動詞の弱語幹より現分・爲自・を造り、又一切の動詞の己過去爲自・と受動言との分詞を造る. dviṣāna, juhvāna, śṛṅvāna, bhindāna, kurvāna, āśnāna, ninyāna, cakrāna (kṛより來る), pecāna (176條). 語根 ās (坐はる)は爲自にして其現分は āsina なり.

212. 語勢を有する後接字 vāms 其中語幹 vat 其弱語幹 va は己過去の弱語幹(171條, 170, 178條に注意すべし)より己過去爲他の分詞を造る. rud は rurudvāms, jan は jajñivāms, yaj は ijivāms, vac は ūcivāms, pat は petivāms, sthā は tasthivāms, vid (知る)は vidvāms. 其格例法は93條を見よ.

213. gam は jaganvāms 或は jagmivāms にして, 具は jagmusā, han は jaghanvāms 或は jaghnivāms, drś は dadrśvāms 或は dadrśivāms, vid (得)は vividvāms 或は vividivāms, viś (入る)は viviśvāms 或は viviśivāms.

214. 語勢を有せる後接字 ta と na は過受分を造る

中に就て、他動詞に加へられたる時は過去受動の義となるも、自動詞に加へられたる時は單に不定の過去の義となる。(I)taは弱語根或はiにて終る弱語幹に附加へらる。第十類の動詞並に使役法にありては語幹のayaを去りてiにて終る其等の語根に附加へらる。語根の韻は通常は重韻化し稀には複重韻化し[pad(落つ)のpāditaの如し]。又は時として強められず[cint(思惟す)のcintitaの如し]。ji(勝つ)はjita. ni(導く)はnita. hu(供ふ)はhuta. kr(作す)はkr̥ta. labh(得)はlabdha(42條). pat(降る)はpatita. cur(盗む)はcorita. budh(覺る)の役はbodhitaなり。grah(攫む)はgr̥hitaとなる。過受分を造るに次の如き數例あり。

- | | |
|----------------------|-------------------|
| 1) yaj(供ふ) iṣṭa(41條) | 3) damś(咬む) daṣṭa |
| vac(話す) ukta(175條) | bandh(縛る) baddha |
| vad(説く) udita | sañj(著す) sakta |
| vap(播く) upa | srams(壊る) srasta |
| vas(住ふ) uṣita | 4) kṣan(傷ふ) kṣata |
| svap(眠る) sūpta | gam(行く) gata |
| hve(hvā)(呼ぶ) hūta | tan(擴く) tata |
| 2) prach(問ふ) pr̥ṣṭa | nam(屈む) nata |
| bhraj(焙る) bhr̥ṣṭa | man(惟ふ) mata |
| vyadh(貫く) vid̥dha | yam(制す) yata |
| śās(命ず) śiṣṭa | ram(悦ぶ) rata |

- | | |
|-------------------|---------------------|
| han(殺す) hata | nah(結ぶ) naddha |
| 5) gai(諷ふ) gīta | 此外又違例なるものあり。 |
| dhā(置く) hita | 7) khan(堀る) khāta |
| pā(飲む) pīta | jan(生る) jāta |
| mā(量る) mita | 8) kam(愛す) kānta |
| śo(研ぐ) śita | dam(制御す) dānta |
| so(決心す) sita | bhram(彷徨す) bhr̥ānta |
| sthā(住まゐる) sthita | śam(寂まる) śānta |
| 6) dah(燃ゆ) dagdha | śram(疲る) śr̥ānta |
| snih(愛す) snigdha | 9) dā(施こす) datta |
| ruh(生長す) rūdha | 前接字 ā(233條)と俱に用 |
| lih(舐る) līdha | ゐられたるときは'tta=ātta |
| vah(運ぶ) ūdha | となる。 |
| sah(堪ふ) sodha | |

muhの過受分に mugdha と mūdha との二種あることは48條の備考1を参照すべし。

(II) naは恒に直に弱語根に附加へらる。其使用せらるゝ場合は次下の如し。

- 1) 若干の語根の韻にて特にrにて終るとき。語末のāはiとなり、rはir. 唇音の次後にはūr. となる。kṣi(壊る)はkṣīna. li(著く)はlīna. lū(絶つ)はlūna. hā(去る)はhīna. kṛ(散らす)はkṛīna. jṛ(老ゆ)はjṛīna. tṛ(越ゆ)はtṛīna. pṛ(充たす)はpṛīna. ś(毀る)はśīna. stṛ(敷く)はstṛīna.

2) 若干の語根の g にて又は j にて終るとき、lag (着く) は lagna. bhañj (破る) は bhagna. bhuj (曲る) は bhugna. majj (沈む) は magna. vij (激動す) は vigna.

3) 大抵の語根の d にて終るとき、chid (断つ) は chinna. nud (推す) は nunna. pad (落つ) は panna. bhid (破る) は bhinna. vid (得) は vinna. sad (坐る) は sanna.

215. vant 其弱語幹 vat と云ふ後接字を ta 若しくは na にて終る過受分に加ふるときは其意義は變じて過去能動分詞となる kṛtavant (作して). dr̥ṣṭavant (見て). chinnavant (断ちて) の如し. 其格例法は 81 條に見ゆ.

216. 後接字 tavya, aniya 及び ya は須要分詞(又は未來受動分詞とも名づけらる)を造る. tavya (tavyā 或は tāvya)* は重韻化したる語根又は重韻化したる i にて終る語幹に附加へらる. ji (勝つ) は jetavya. bhuj (受用す) は bhoktavya. kṛ (作す) は kartavya. bhū (成る) は bhavitavya. cur (盗む) は corayitavya. grah (攫む) は grahitavya となる. 後接字 aniya (aniya) は大抵重韻化したる語根に附加へらる. ci (積む) は cayaniya. śru (聞く) は śravaniya. kṛ (作す) は karaniya. cint (思惟す) は cintaniya. 後接字 ya は或は重韻化したる、或は複重韻化したる、語勢を有する語根に附加へらる. ā にて終る語根は其 ā を e に變ず. dā (施こす) は deya. pā

* 字の上にある記號ゝは揚られたる聲の抑へらるゝ (circumflex accent) を示し便宜の爲平聲號 (grave accent) を用ゐる. / は揚られたる聲を示す (acute accent).

(飲む) は peya. ji (勝つ) は jeya. bhū (成る) は bhavya 或は bhāvya. kṛ (作す) は kārya. muc (解く) は mocya. vac (話す) は vācyā. されど labh (得) は labhya なり.

□. 不定法及び絶待法 (動詞・名詞) — 不定法は業格、絶待法は具格

217. 不定法の後接字は tum にして重韻化したる語根又は i にて終る重韻化したる語幹に附加へらる. 語勢は語根にあり. dā (施こす) は dātum. ji (勝つ) は jetum. bhū (成る) は bhavitum. kṛ (作す) は kartum. yuj (軛す) は yoktum. dr̥ś (見る) は draṣṭum. gam (行く) は gantum (44 條). cur (盗む) は corayitum. grah (攫む) は grahitum. tṛ (越す) は taritum 或は taritum.

218. 語勢を有する後接字 tvā は單純†の弱語根、或は i のみを加へたる弱語幹より絶待法を造る. 後接字 ta (214 條) の前に在るときと同じ形を爲す. yaj は iṣṭvā. vac は ukṭvā. vas は uṣṭvā. svap は suptvā. prach は pr̥ṣṭvā. bandh は baddhvā. gam は gatvā. man は matvā. dhā は hitvā. pā (飲む) は p̄itvā. sthā は sthitvā. dah は dagdhvā. lih は liḍhvā. khan は khātvā 或は khanitvā. bhram. は bhrāntvā. dā は datvā. bhū は bhūtvā. grah は gṛhitvā. 第十類動詞、使役法及び aya にて終る名稱詞の動詞は語幹の尾を ayi に作り此に tvā を加ふ. cur は corayitvā. vac の役は vācayitvā となる.

219. 後接字 ya は前接字、副詞、或は名詞、を合加し

† 單純とは前接字副詞等何たる字をも合加せざるを謂ふ.

たる弱語根より絶待法を造る。ā にて終る語根は其形を變化せず。r にて終る語根は此 r を ir, 唇音の次後には ūr, に變ず。短韻にて終る語根には t を加ふ。語勢は語根にあり。vac に pra (告白す) は procya. bhū に sam (會ふ) は sambhūya. tṛ に ava (入る) は avatīrya. pṛ に ā (滿つ) は āpūrya. dā に ā (取る) は ādāya. kṛ に alam (飾る) は alam-kṛtya. i に pra (死ぬ) は pretya. kṛ に vaśe (服従せさす) は vaśekṛtya. kṛ に phūt (息吹く) は phūtkṛtya.

備考 否定辭 a, au を語首に加ふるも其がために tvā を ya とすることなし。abhūtva (有らずして) の如し。

220. gam (行く), nam (屈む), yam (拘束す), ram (悦ぶ), 又は man (惟ふ) の如き m 又は n にて終る語根は m 又は n を省き去りて tya を加へ以て絶待法を造ることを得。tan (擴ぐ) と han (殺す) は斯く作ることを要す。gam に ā (來る) は āgamyā 或は āgatya. man に ava (侮る) は avamānya 或は avamatya. tan に vi (擴ぐ) は唯だ vitatya のみ。han に ni (撲殺す) も唯だ nihatya のみ。語根 khan (掘る) 及び jan (生る) は *khānya, *jānya 或は *khānya, *jānya となる。

221. 第十類及び此と同形に作られたる動詞の語根は其語根の韻が音律上 (prosodically) 短かきときは語幹に ya を加ふ。gam に sam の役の語幹 saṅgamaya (集む) は saṅgamayya. されど budh に pra の役の語幹 prabodhaya (覺ます) は prabodhya. karṇaya に ā (聞く) は ākarṇya.

222. 後接字 am も亦一種の絶待法を造る。此後接字の次前なる語根の韻は三單。不過。受。(193條) の如くに論ぜらる。ci (積む) は cāyam. kṛ (作す) は kāram. vid (知る) は vedam. dā (施こす) は dāyam.

三. 造 語 法.

223. 語を造るには後接字を用ゐる。後接字に二類あり。曰く根本、曰く枝末是なり。此二類の加へかた及び意義ともに大に異あり。

224. 根本後接字は語根及び動詞の語幹より語を造る。此類の後接字を訖栗怛 (kṛt) 後接字と稱し、其中適用の範圍狭く且つ不規則なる後接字を陽拏地 (unādi) 後接字と稱す。97, 209—222 條に擧たる後接字及び a, aka (女姓は ikā), ana, as, ā, i, is, u, us, ti, tu, tṛ, tra, tva, tha, ni, nu, man, ra, la, van は皆な根本後接字に屬す。

225. 枝末後接字は名詞、形容詞、代名詞の語幹より更に他の名詞、形容詞の語幹を造る。此類の後接字を怛提多 (taddhita) 後接字と稱す。此中最も普通に用ゐらるゝものは 96 條に擧たる後接字の外 a, ika, in, ina, iya, tā, tva, mant, maya, vant, vin なり。例せば div (耀く) は訖栗怛後接字 a を加へて deva (天) と云語となり、更に怛提多後接字 a を加へて daiva* (神聖なる) となる。又 man (惟ふ)

* 怛提多後接字 a を加ふる時は訖栗怛後接字の a を省く。

に訖栗怛後接字 *as* を如へて *manas* (意) を造り、更に怛提多後接字 *vin* を加へて *manasvin* (聴き) を造る。

226. 又若干の語根は別に後接字を加へずして直に名詞として用ゐらる。*diś* (方), *bhī* (怖畏), *mud* (喜), *trṣ* (渴) の如し。

備考 枝末後接字は代名詞の語根、合成語、不變詞格の形又は章句に附加せらるゝことあり。

女姓語幹を造る法。

227. 女姓語幹を造るには後接字 *ā* 又は *i* を用ゐる。

228. *ā* は *a* にて終る語幹に加へらる。*aśva* (牡馬) の女は *aśvā* (牝馬), *bāla* (男兒) の女は *bālā* (女兒), *gata* (行けり) の女は *gatā*, *aka* にて終る語幹は多く其女を造るに *ikā* を用ゐる。*pācaka* (煮者) の女は *pācikā*。

229. *i* を用ゐる場合は下の如し。

1) 稀には *a* にて終る語幹に加ふることあり。*deva* (天) の女 *devī* (女天)。

2) 通常は *u* にて終る形容詞に加へらる。*tanu* (薄き) の女 (*tanu* 或は) *tanvī*。

3) 常に *tr* にて終る作者名詞に加へらる。*dātṛ* (施者) の女 *dātrī*。

4) 常に發聲にて終る語幹に加へらる。若し名詞、形容詞が多く語幹を有すれば *i* は中語幹或は弱語幹に加へらる。*balin* (強き) の女 *balinī*, *prāñc* (東の 77 條) の女

prāñcī, *pratyañc* (西の 77 條) の女 *prāñcī*, *mahant* (大なる 80 條) の女 *mahatī*, *śvan* (狗 84 條) の女 *śunī*, *rurudvāms* (泣きたる 98 條) の女 *rurudusī*。

5) 常に複重韻化したる形容詞に加へらる。*bhārata* (*bharata* の複重韻) (ブハラタに屬する男) の女 *bhāratī*, *bhaima* (ブ、マ族の男) の女 *bhaimī*, *naimittika* (因より生ぜる) の女 *naimittikī*。

230. *ant* にて終る分詞 (209 條) は第一種活用法の動詞のとき強語形 *antī* を、第二種活用法の動詞のときは弱語形 *ati* を、有す、第六類動詞と *ā* にて終る第二類動詞との現分、及び一切動詞の未分、とには *antī* 或は *ati* を用ゐることを得。*rohantī*, *corayantī*, *dviṣatī*, *satī*, *juhvatī*, *kurvatī*, *tudantī* 或は *tudatī*, *yāntī* 或は *yatī*, *bhaviṣyantī* 或は *bhaviṣyatī*。

231. *i* にて終る名詞、形容詞は女のとき大抵變化せず、但し *sakhi* (男友 61 條) の女の形 *sakhī* なり。

232. *van* にて終る若干の名詞、形容詞は其女を *vari* に作る。*pīvan* (肥たる) の女 *pīvarī*。若干の神の名及び其の餘の特殊の名詞は女を造るに *ānī* を用ゐる。*bhava* (シバ神) の女 *bhavānī*, *indra* (因陀羅) の女は *indrānī*, *mātula* (伯父) の女 *mātulanī* (伯母), *yuvan* (壯き 84 條) の女は *yuvati*, *pat* (主 62 條) の女は *patnī*。

四. 合成言語法.

甲. 動詞合成法.

233. 動詞は前接字又は副詞と俱に合成することを得、是に由て其動詞の意義は種々に變化す。

前接字は

ati 越て, 過て, 増して.	ava 下に, 彼方に.	parā 彼方に.
adhi 上に.	ā まで, 方へ.	pari 回りて.
anu 随ふて, 沿ふて.	ud 上に, 外に.	pra 前に, 前方に.
antar 間に.	upa 近く.	prati 反對して, 後方に.
apa 外に, 彼方に.	ni 下に, 中に.	vi 別に, 離れて.
abhi 對して, まで.	nis 無く, 外に.	sam 共に, 同じく.

副詞は例せば alam (充分に) と kr (作す) とにて alamkr (飾る). astam (下に) と gam (行く) とにて astangam (沈む). āvis (明に) と bhū (爲る) とにて āvirbhū (顯はる) の如し。

234. 語根 as (有る), kr (作す) 及び bhū (爲る) の次前には名詞, 形容詞を加ふることを得、斯く合成したる詞の意義は「或ものがあり」「或ことを爲す」「或ものになる」と云ふことなり。a にて終る語幹は其 a を i に變じ, i 又は n にて終る語幹は其韻を延長し, r にて終る語幹は其 r を ri に變ず。śukla (白き) は śuklikr (白くす). śuci (淨き) は śucibhū (淨くなる). mṛda (軟らかき) と syāt (as の三. 單. 願) は mṛdūsyāt (彼は軟かくあるべし). mātṛ (母) は māt-

rikṛ (母と爲す) 又は bhasman (灰) は bhasmikṛ (灰と化す) となる。

乙. 名稱詞合成法*

235. 合成語の前部分†は語幹の形なり、若し名稱詞が多の語幹を有するときは中、或は弱の語幹 (50 條) を用ゐる。rājan (王) の如き n にて終る語幹の時は其語末を a とす即ち rāja. 又 106 條の備考を參照せよ。

236. 持業 (karmadhāraya 242 條) 及び多財 (bahuvrīhi 245 條) の始には mahat (大なる. 80 條) の代に mahā を用ゐる。合成語の尾にある時は異なる格例法に依る語が數しば轉じて a の格例を用ゐる。aksi (眼. 63 條) は akṣa. rātri (夜) は rātra. sakhi (友. 61 條) は sakha. ahan (日. 85 條) は aha 或は ahna. rājan (王) は rāja. path (路. 88 條) は patha. manas (意. 91 條) は manasa. varcas (輝) は varcasa. 時としては反對に轉ずることあり。gandha (香) の代に gandhi. go (牝牛. 73 條) は合成語の始にありて且つ韻の次前にあるときは gava となり、語末にあるときは gava 或は gu となる。

(一) 併列合成語即ち相違釋の語 (dvandva).

237. 相違とは語中の各分互に等しき位にある合成語を云ふ、或は各語を連接し (copulative), 或は其の何

* 名詞又は形容詞を合成して一語となすことを指す。

† 合成語の最後の語を除て餘の語に在る語を總稱す。

れかを選び取る (alternative) 意義を有す。此の合成語は
 1) 語中の各分の数の二と多とに順つて兩數或は複數
 となす。或は 2) 中姓單數の形となす。1) hariharau (ハリ
 とハラ). sukhaduḥkhe (樂と苦). devamanusyāḥ (諸の天と人).
 narāśvarathadantīnaḥ (諸の、人と馬と車と象と). somāgnyar-
 kāmbuvāyūnām (蘇摩と火と日と水と及び風との). 2) śiṭo-
 ṇam (寒と熱). ahinakulam (蛇とナクラ[鼯屬の獸]). daṃśa-
 maśakam (蝸と蚊). yūkāmakṣikamatkuṇam (蝨と、蠅と、床蟲).
 jayaparājaya (勝か敗). trimśadvimśa (二十か三十).

238. tr にて終る語 (69, 70 條) は次下の語が tr 或は
 putra (子) にて終るときは合成語の前分として體單を用
 ゐる。而して各分は皆な親縁又は同僚の人を詮はす。
 mātāpitarau (母と父=兩親). pitāputrau (父と子). hotāpōtārsu
 (供養者と洗淨者). 神の名は合成語が二分よりなると
 き其の初分にありて兩數の形を爲すこと屢しばあり。
 agniṣomau. (阿耆尼と蘇摩). mitrāvaruṇau (密多羅と縛留拏).
 (mitrā は古の mitra の兩數なり).

(二) 限量合成語即ち依主釋の語 (tatpuruṣa).

239. 依主とは後分が前分に由て制限せらるゝ合
 成語を云ふ。尙狹き意義の依主は前分が後分に對して
 格の關係を有するを云ふ (固有の依主). 例せば. grāma-
 gata (村へ往けり) の前分は業格. devadatta (天より授けら
 れたる) の前分は具格. svargapatita (天より墮たる) の前分

は從格. rājaputra (王の子) の前分は屬格なり。

240. 依主の前分には格の形を有せることあり。
 vācamyama (聲を制して=黙して). divaspati (天の主). pad-
 meśaya (蓮の上に憩ふ).

241. 何れの語根も合成語の最後分として用ゐらるゝ
 ことを得而して現分爲他の意義となる。vedavid (吠
 陀に通ぜる). annabhuḥ (食する). 短韻の語根には t を加
 ふ. ji (勝つ) の viśvajit (一切に勝てる). kr (造る) の lokakṛt (造
 世界者) に於けるが如し。若し男或は中を形容する合成
 語の終の語根が ā にて終るときは其 ā を短縮す。sthā
 (住まる) の abhyāśastha (近く住まれる) となるが如し。

242. 依主の前分が形容詞、副詞或は其類にして後
 分を制限するときは此を持業釋 (karmadhāraya) と稱す。
 grāmyagaja (馴れたる象). paramānanda (最勝の喜). atidirgha
 (極めて長さ). sudāruṇa (甚はだ劇しき). akṛta (爲されざる).
 antardeśa (中方). aparūpa (不正形).

243. 此の合成語の前分は數しば名詞なることあ
 り、特に比較を詮はすときに然りとす。kusumasukumāra
 (花輦なる=花の如く輦なる). vajrakarkaśa (金剛堅なる=
 金剛の如く堅き). kailāśagaura (カイルーサ*白なる=カ
 イラーサ山の如く白き). 斯の如くして後分も亦名詞な
 るときは前分は能比にして後分は所比なり。puruṣasiṃha

* 拘鞞羅及び大自在天の住する山の名。

(人師子=人の師子=師子の如き人). *rājarsabha* (牡牛の如き王). *nṛpaśu* (獣の如き人). *kanyaratna* (處女寶=寶の如き處女). *anaṅgabhujaṅga* (アナンガ+蛇=蛇の如きアナンガ). *kālahariṇa* (時羚羊=羚羊の如き時[†])も亦此合成語中に攝せらる.

244. 依主の前分が數詞にして其語形は中姓又はiにて終る女姓の名詞となるときは此を帶數釋の語(*dvigu*)と稱す. *trirātra* (三夜) (236條). *triloka* 或は *triloki* (三世界). *pañcagava* 或は *pañcagavi* (五牛) (236條).

(三) 所有合成語即ち多財釋の語 (*bahuvrihi*).

245. 多財とは最後分が名詞又は名詞の義に用ゐられたる形容詞にして全體が一の形容詞として用ゐられたる限量合成語を云ふ. 此合成語は「持する」或は「有する」の義を詮はす. *dirghabābu* (長き臂の). *prasānamukha* (悦ばしき顔容せる). *maunavrata* (沈黙の戒を受たる). *mandamati* (劣慧なる). *viphala* (果なき). *ananta* (終りなき). *durmanas* (憂ふる). *sapakṣa* (翼ある). *cintāpara* (思惟を最上の目的とせる=思惟に專一なる).

246. 多財は形容詞と同じ作用あるがゆへに俱に用ゐられたる名詞の姓に隨ふて其姓を定む. 故にāにて終る女姓の多財合成語が男姓又は中姓の名詞に關係するときは其韻を促めてaとす. *alpavidya* (少しく知

れる)は *vidyā* (知)より. *dvijihva* (二舌ある)は *jihvā* (舌)より. *bahumāya* (多の幻術を有せる)は *māyā* (幻術)より. *sa-bhārya* (妻と俱なる)は *bhāryā* (妻)より來る. 此の合成語の全部に後接字 *ka* を加ふることあり. *bahubharṭṛka* (多の夫を有する). *viśāloraska* (博き胸を有する). *nirarthaka* (益なき). *sāgnika* (阿耆尼と俱なる).

247. 「手」と云意義の語は合成語の尾にありて「手に持てる」と云ふ義となる. *pātrahasta* (器を手に持てる). *daṇḍapāni* (杖を手に持てる).

(四) 副詞合成語即ち不變詞 (*avyayibhāva*).

248. 不變詞とは前分が不變詞 (*indeclinable*)にして後分が名稱詞なる副詞的合成語を云ふ. 此合成語は業. 單. 中の語尾を取る. *anukṣaṇam* (瞬間毎に). *asamśayam* (疑なく). *yathākāmaṃ* (欲に隨つて). *yathāvidhi* (規定に准じて). *pratyaham* (毎日. 226條). *savinayam* (謙遜に). *satvaram* (急に. *tvarā* 女. 「急速」より來る). *pradānapūrvam* (施物を先として).

dvigurapī sadvaṃdvo 'haṃ gr̥he ca me satatamavyayibhāvah |
tatpuruṣa karma dhārāya yenāhaṃ syāṃ bahuvrihiḥ ||

† 戀愛の神. ‡ 羚羊の疾驅するに時の疾く過るを喻ふ.

参 書 法

梵語を書く記號所謂る梵字なるものは時代の變遷に應じ其體一樣ならず。昔し我邦に流傳せる悉曇字の如きは中古の書體に屬し、現今普通に用ゐらるゝ提婆那伽利(Devanāgarī)字の如きは其以後の書體なり。而して悉曇文字は古來多くは此を十八章として字母結合の方法を示す。唐の智廣が般若菩提に承る所も我邦入唐僧の彼の地より傳ふる所も皆な十八章なり。今は智廣の悉曇字記に依り十八章を示し兼て提婆那伽利字の書體を出さんとす。便宜のため先に聊さか悉曇に關して略説し而して後本文に入るべし。

第一 悉曇の意義

悉曇(siddham)とは「完成せるもの」と云ふ義にして梵語字母の名なり。字母の數四十九ある中、且らく韻の十四は他の聲を配するを藉らず其自身ア、アー等の音なれば「完成せるもの」と稱せらる。更に又た發聲(k, g等)三十五は韻を配して方めてカ(ka)ガ(ga)等と發音し得るものなれば其自身完成せるものに非ざれども、梵字母を呼ぶには必らずカ、ガ等と韻を配して呼べばカ、ガ等の三十五も亦韻を含有する邊より「完成せるもの」即ち悉曇と稱せらる。故に畢竟四十九字母は總て悉曇なり。

¹梵字の沿革略表は卷末に附す。

第二 悉曇字の本源及切り接ぎ

悉曇を書く記號を悉駄摩¹恒哩²合迦³ (Siddhamatṛkā) と名づく。悉曇字母(茲に所謂る字は眼所見の字なり、先のは耳所聞の字)の義なり。此の中韻を表はす字を摩多(māta)即ち母字と名づけ、發聲を表はす字を體文(Ṭvyañjanam)と名づく。摩多と體文とは時と處とに隨つて一樣ならず。本邦に所謂る悉曇なるものは前の悉駄摩¹恒哩²合迦³の略呼にして西紀約四五世紀以降南印度及び北印度に流行せし書體なり。是を或は梵字とも言ふ。其の本源を尋ねるに、現今研究の結果に依れば北方セミチツク族の間より字形を借り次第に改變せしものなり。然るに密教家の所傳に依れば、梵字の本源は法蘭として是の如くなり造作して成るに非ず。摩も字も實相なり。然れども若し其の顯現せる時と處とに約せば差別なきに非ず。所謂隨緣相承の遙騰に四あり、謂く、梵天、龍宮、釋迦、大日なり。第一梵天は又た魔醯首羅(大自在)とも稱し世界建立の時彼の天の製する所なりと。是の如きは獨り佛教徒のみならず婆羅門教の徒も千數百年前より等しく唱ふる所なり。第二龍宮説は過去諸佛の經典悉とく龍宮に保存せられ龍猛(龍樹に同じ)は彼處より諸大乘經典を取り來り其中に發見せるもの是なりとす。此の説は、悉曇字記に中天(悉曇)は龍宮の文を兼ぬ云々の語あると龍樹傳に彼が龍宮取經の事を記せるとより暗推して兩記事を聯絡せしめしに過ぎざるべし。史眼より見れば龍宮已に實有に非ず。何の處に彼處より得たる經卷あらんや。字記に所謂る龍宮之文とは、案ずるに、恐くはナーガリー(Nāgarī)を指すか。ナーガリーは普通ナガラ(nagara 城市)の形容詞女姓なれども、此ナーガリーをナガラより來ると見ずしてナーガ(nāga 龍)とラ(ra 有る、居る)の合成語ナーガラ(龍の居る、龍宮)より來りナーガラ字即ち龍宮の文と解することを得べし。近世印度本土に用ゐる書體を神のナーガリー又は尊きナーガリー(Devanāgarī)と呼ぶは此書の系統なるべし。然らば其の龍宮とは何ぞや。是れ單にナーガラの語が偶ま龍宮と解せらるゝために斯

く呼びしのみにして龍宮てふ處の實在を語るものに非ず。ナーガラは此の書體の原形を有したる種族の名稱に非るか。記して疑を存す。悉曇字記の文意は唯だ當時中天にはナーガラ字をも兼用せりと云ふに過ぎず。第三釋迦説は般若の四十二字門、文殊問經の五十字門等なりと云ふも此の説は殆んど成立せず。諸經中釋尊所説とせる四十二字門五十字門等は四十二等の書 (lipi) に非して四十二等の聲 (akṣara) なればなり。論者は字の意義を誤解せるなり。第四大日説は大日經等に出で、其説を金剛薩埵が結集し、龍猛が鐵塔中より得たりと云ふ。此れ教理上の解釋にして史眼よりせば架空の説に過ぎず。是に由て隨緣相承の中第一と第四とは史實に非る教理的傳説として捨置すべし。第二第三は耳を假すの價値なきものなり。但だ字記の説によりて西曆第六世紀の頃印度の梵字に三系統ありて、南方は今の所謂悉曇字、中方は悉曇に兼ねてナーガラ字を用ひ、北方は尤も異なる字體 (魯意多迦文) を用ひたりしことは史實として信ずることを得。魯意多迦文は如何なる書體なるや審かにせずと雖も、悉曇より出でて大に悉曇に異なれりと云へば、恐らくは現今中央亞細亞にて發見せる古梵本、例せばエヌ・エフ・ペトロフスキー (N. F. Petrovskij) 氏の所藏なる法華經梵本斷片の書體の類ならんか。——悉曇字は、印度にては猶ほ我が國の幼童がいろはを習ふが如く、六歳の兒童が六ヶ月にして習了するものなれば平易を旨として、諸の言語を表示するために要する字母結合の表を造り簡より繁に及ぼして修習せしむ。其字母表を悉曇章と名づく。最も完備せる表には十八段あれば是を「悉曇十八章」と名づけ、各章の字母結合即ち綴字を「悉曇十八章建立」と名づく。結合せる字母を分離するを「切る」と稱し、二字以上を連合するを「接ぐ」と稱し、是の如き分離と連合とを「悉曇切り接ぎ」と稱す。

第三 悉曇の字義

悉曇字母に一々意義を附し、かくて各字母は相當の義を詮はすものとす。此を悉曇の字義と云ふ。字母は單獨にて義を有するもの甚はだ少

なし。多くは二字以上合成して或る義を詮はす然るに今ま一々の字母に悉とく義を附するは別に方法あり。謂く或る一字母と他の字母と合して成れる語の義を以て其の或る一字母の義となす。而して多くは要する所の或る一字母が語首に来れる語を取る。或は決して語首に来らざる字母もあり。然るときは語の中間に其字母のある語を取る。梵語の数は萬を以て算ふるを以て同一字母の含まるゝ語甚はだ多し。故に字義は一定せるものに非ず。例せば ca の字の義に難變遷、四聖諦、普輪斷差別、修 眼 及び諸行皆清淨、終不可得等の差別あるが如し。悉曇字記には最後に lam と kṣa との二を加ふれども lam には字義を附せず。又た四十九字母中原語の審らかならざるもの六あり。此れ他日の研究に須つ。今ま普通に依用する金剛頂經釋字母品の文に依つて字義を抄出すれば下の如し。

1. a. ādyanutpāda 本不生(語中の a の韻を取る)。
2. ā. ākāśa 寂靜如虛空。
3. i. indriya 根。
4. i. iti 災禍。
5. u. upamā 譬喩。
6. ū. ūna 損滅。
7. r. rddhi 神通。
8. r. ? 類例。
9. l. ? 染。
10. l. ? 沈沒。
11. e. eṣanā 求。
12. ai. aiśvarya 自在。
13. o. ogha 瀑流。
14. au. aupapāduka 變化。
15. am. anta (=anta) 邊際。
16. aḥ. astāṅgama 遠離(as てふ音が單獨にある時は aḥ となる)。
17. ka. kārya 作業。
18. kha. 等空。
19. ga. gati 行。
20. gha. ghana 一合。
21. na. aṅga 支分。
22. ca. oyuti 遷變。
23. cha. chāyā 影像。
24. ja. jāti 生。
25. jha. ? 戰敵。
26. jā. jāna 智。
27. ta. tānka 慢。
28. tha. viṭhapana 長養。
29. ḍa. ḍamara 怨對。
30. dha. ? 執持。
31. ṇa. ṇana 諍。
32. ta. tathatā 如如。
33. tha. sthāna 住處。
34. da. dāna 施。
35. dha. dharmā-

dhātu 法界. 36. na. nāman 名. 37. pa. paramārtha 第一義
 諦. 38. pha. phena 不堅如聚沫. 39. ba. bandhana 縛.
 40. bha. bhava 有. 41. ma. mama 吾我. 42. ya. yāna 乘.
 43. ra. rajas 塵染. 44. la. lakṣaṇa 相. 45. va. vāc 語言.
 46. śa. śānti 本性寂. 47. śa. ? 性鈍. 48. sa. satya 諦.
 49. ha. hetu 因. 50. kṣa. kṣaya 盡.

第四 梵語字母の書體

悉曇文字は法隆寺貝葉及び尼波羅にて發見せられたる寫本中より從來相傳せる字形に最も親しきものを取る。されど往々にして字形が從來の所傳と多少異なる所あるは其の正しきことを示すものなれば學ばん人は古來の書き類したる形を棄て、此處に出せる新なる形を真正なるものと認めて依用せざる可らず。

a	अ	आ	ā	अु	आ	i	इ	ई	i	इ	ई		
u	उ	ऊ	ū	उु	ऊ	r	रु	रु	r	रु	रु		
l	ल	(ल)	ल	ल	e	ए	ai	ऐ					
o	उ	ओ	au	उ	ओ	am	अं	अः	अः	अः	अः		
ka	क	क्	kha	ख	ख	ga	ग	ग	gha	घ	घ	ṅa	ङ
ca	च	च्	cha	छ	छ	ja	ज	ज	jha ¹	झ	झ	ña	ञ
ṭa	ट	ṭ	ṭha	ठ	ठ	ḍa	ड	ड	dha	ढ	ढ	ṇa	ण

¹ jha には亦た ञ, ञ の形あり。

ta	त	त्	tha	थ	थ	da	द	द	dha	ध	ध	na	न
pa	प	प्	pha	फ	फ	ba	ब	ब	bha	भ	भ	ma	म
ya	य	य	ra	र	र	la	ल	ल	va	व	व		
śa	श	श	ṣa	ष	ष	sa	स	स	ha	ह	ह		
llam	ल्लं	ल्लं	kṣa ¹	क्ष	क्ष	la	ळ	ळ					

llam と kṣa は梵語の字母に非ず、後の悉曇建立の中に攝すべきものなりと雖も、古來悉曇章の劈頭に在る梵語字母表中に此の二を加ふるを例とす。所以は llam は同體の重を示す。而も通常重なり得る字の字母表中最後の字を擧げて初めを攝する義なり。kṣa は異體の重を示す。而して異體の重多種ある中特に ka と sa との重を擧げたるは初後の字を擧げて中を攝する義なり。加之 lla に m を加へて llam とせるは m は凡て音の尾に來り音の初と中とに非ず。されば此を界畔字と云ふ。韻字の終に界畔字 am を置に擬して發聲字の終にも lla に m を加へて llam とせり。la 字は悉曇家此を傳へず。吠陀古本に見るのみ。

若干の韻は單獨にある時と發聲に合して音を生ずる時とあり。前の場合には上に表せる書體を用ゐれども後の場合には別の書體を用ゐる。此を半體と名づく。唯だ a の韻は所有る發聲に含めて呼ぶを以て別に記

¹ kṣa には亦た ञ の形あり。

號を用ゐず。但し後世密教家は a の音は一點を以て顯はすを以て如何なる字にても苟も筆を下すときは a の韻を書するものなれば、此の外別に眼に見ゆる記號を用ゐずと謂ふ。I 字は畢竟言語として用ゐらるゝこと無きを以て勿論單獨に在ることも聲に合することなければ此の中に缺く。am, ah の兩字は何時も發聲に合して在りて單獨に在ることなければ二様の書體を用ゐるの要なし。故に別に其の半體なし。此の餘の韻字の半體は下の如し。

ā ㄣ (字の右側) i ㄣ (字の左側) i ㄣ (字の右側)
 u ㄣ (字の下端) ü ㄣ (字の下端) r ㄣ (字の下端)
 f ㄣ (字の下端と右側) ε (字の下端) l ㄣ (字の下端)
 e ㄣ (字の左肩) ㄣ (字の上端) ai ㄣ (字の左肩と上端)
 o ㄣ (字の上端) o ㄣ (字の左肩と右側) ㄣ (字の右側)
 au ㄣ (字の左肩と上端と右側) ㄣ (字の右側)

第五 悉曇の建立

悉曇を建立するとは單一の發聲字に韻字を配し若くは數個の發聲字に韻字を配して書するの謂なるも韻字中 r, f, l, i の四は別摩多として扱ひ、唯だ第十六章に少しく其の標本を出すのみ。故に普通生字に用ゐる韻字十二あり。此を十二點と名づく。此の餘の増減は具に

1) の半體は悉曇字にて記せるを見ず。

當章に示すが如し。每章標準の形若干を擧げ餘の推して知るべきものは之を省く。但し悉曇字は此を接合するに常に縦に重ね、提婆那伽利字は或は縦に重ね或は横に列ぬ。されば悉曇の書法より見れば其の接合法明瞭なりと雖も、提婆那伽利の書法にて或は縦重か或は横列の疑はしきことあり。故に單に悉曇字書法の疑はしき場合のみならず、提婆那伽利字書法の疑はしき場合にも亦た其の形を出す。習はん人は其の心して每章所生の字を造れ。

第一 迦迦引章

發聲字三十四を a, ā 等の十二韻に對して呼べば ka, kā 等となるべし。每發聲に十二韻あれば初章の生字總計四百有八あり。初めの二字を取り本章を迦迦引章と名づく。書法は先きに ka 字を十二平書し、次に kha 字、次に ga 字等の三十三發聲字を十二づゝ平書し、後に ā, i, ī 等の十一點を加ふ。但し ku と kū の兩字の k は半體を用ゐる。最初の a 點は發聲字を書すると同時に其の中に在るを以て別に書せず。

第二 枳也枳耶引章

k 等に ya を加へ kya 等とす。發聲字三十四の中 ñya と rya と當體の重とを除き餘の三十一發聲字に各々十二韻字を配して生字三百七十二あり。ña は第十五益迦章に、rya は第八阿勒迦章に、當體重は第十八孤合章

に攝するを以て今此を除く。書法は k の列には其の半體に ya の半體を加へ。其餘は發聲字の全體に ya の半體を加ふ。

第三迦略迦略引章。

k 等に ra を加へ kra 等とす。發聲字三十四の中 nra と當體の重とを除き餘の三十二發聲字に各々十二韻字を配して生字三百八十四あり。nra は第十五盎迦章に攝し、又當體の重は梵語に用ゐざるを以て、此の二を除く。書法は k の列には k の半體に ra の半體を加へ。其餘は發聲字の全體に ra の半體を加ふ。

第四迦擺迦擺引章。

k 等に la を加へ kla 等とす。發聲字三十四の中 nla と rla と當體の重とを除き餘の三十一發聲字に十二韻字を配して生字三百七十二あり。nla は第十五盎迦章に、rla は第八阿勒迦章に、當體の重は第十八孤合章に攝するを以て此等を除く。書法は k の列には k の半體に la の半體を加へ。其餘は發聲字の全體に la の半體を加ふ。

第五迦嚩迦嚩引章。

k 等に va を加へ kva 等とす。發聲字三十四の中 nva と rva と當體の重とを除き餘の三十一發聲字に十二韻字を配して生字三百七十二あり。餘は上に倣ふて知るべし。書法は k の列には k の半體に va の半體を加へ。其餘は發聲字の全體に va の半體を加ふ。

第六迦麼迦麼引章。

k 等に ma を加へ kma 等とす。發聲字三十四の中 rma と當體の重とを除き餘の三十二發聲字に十二韻字を配して生字三百八十四あり。餘は上に例す。

第七迦那迦那引章。

k 等に na を加へ kna 等とす。發聲字三十四の中 rna と當體の重とを除き餘の三十二發聲字に十二韻字を配して生字三百八十四あり。餘は上に例す。當章の中文字としては機械的に結合して作ることを得れども音便法則上斯かる結合を許さざるものあり。換言せば實際に用ゐざる結合あり。第十四阿勒迦那章にも此の例多し。

第八阿勒迦章。

初章の字に r を冠し rka 等とす。書法は r の半體を k 等の全體の上に冠する外總て第一迦迦引章に同じ。

第九阿勒枳耶章。

第二枳也枳耶引章の字に r を冠し rkya 等とす。當章より第十三章までは次の如く前の第二第三第四第五第六章の字に r を冠するに過ぎざれば別に書體を示さず。

第十阿勒迦略章。

第三迦略迦略引章の字に r を冠し rkra 等とす。

第十一阿勒迦擺章。

第四迦擺迦擺引章の字に r を冠し rkla 等とす。

第十二 阿勒迦麟章.

第五迦麟迦麟引章の字に r を冠し rkya 等とす.

第十三 阿勒迦慶章.

第六迦慶迦慶引章の字に r を冠し rkma 等とす.

第十四 阿勒迦那章.

第七迦那迦那引章の字に r を冠し rkna 等とす.

第十五 盎迦章

發聲の中 ka, ca, ta, pa 五句の末の鼻音 ŋ, ñ, ṇ, ṅ, m を次の如く各句の前四字に冠して呼び ŋka, ŋkā 等とす. 又初句の鼻音 ŋ を ya, ra, la, va, śa, śa, sa, ha, ksa の九字に冠して ŋya, ŋyā 等とす. 發聲字三十四の中當體の重五を除きて餘の二十九發聲字に十二韻字を配して生字三百四十八あり.

第十六 訖里章.

k 等に r と ṛ を配し kr, kṛ 等とし, 更に隨韻と止聲とを加へて kṛm, kṛh 等とす. 是くの如く發聲字三十四に各四韻字あれば生字百三十六なり. 書法は k の列には其の半體に r, ṛ の半體を加へ. 其の餘は發聲字の全體に r, ṛ の半體を加ふ. 但し rr, rṛ, rṛm, rṛh のみは r の半體に r, ṛ の全體を加ふ.

第十七 阿索迦章.

ka 等の字を用ゐて參へて互に之を加へ三十三字とす. 謂く s に ka を加ふれば ska となり d に ga を加ふれば

ば dga となる等なり. 此の各々に十二韻字を配して呼ぶを以て生字三百九十六あり. 書法は表中に明なり.

第十八 孤合章又は阿跋多章.

前の十七章の能合字或は所合字は字の排列の順に字を生ずれば正章と名づく. 爾餘の生字は一定の順なきを以て之を總集して孤合と名づく. 又は本章生字の標本として教ゆる五種の字の第一の名を取りて阿跋多章とも稱す. 孤合の所以は凡て十五種あり.

第一 當體の字を重ねて但だ字に依つて大呼す. kka, gga 等の如し.

第二 異體の字を重ねて聲を連ねて合呼す. stra, pta 等の如し.

第三 十二摩多に通ぜず. 唯だ若干摩多にのみ通ず. stra の如し.

第四 十二摩多に通ずと雖も字源の順一定せず. stra の如し. 若し字源の順一定せば s の次前は ś なければ stra の字あるべく, 否らざれば s の次後は h なければ ltra の字あるべし. 或は t の次前は ṇ なければ ntra の字あるべく, 否らざれば t の次後は th なければ sthra の字あるべし. 然るに ntra や ktra はあれども上述の如き字は凡てなし. 斯く stra は孤立せるを以て字源の順一定せずと云ふなり.

第五 或は異體の重と雖も必ずしも其の重に依つて之

を呼ばず第十五章の nka 等の如し。謂く此の字は na と ka とを合したるものなれどもこの兩字獨立せる時の音と合成せる時の音と同じからず。

第六. 兩字聲を聯ねて文は其の後に形づくられ。聲は其の前に彰はる。mañka と云ふが如し。これ ma と nka との兩字合成なり nka の字の彰はるゝ前に mañ と云ふ聲あり。

第七. 字一にして名の分るゝあり。sa の如き類似せる二音あり。(字記の説是の如し)。

第八. 摩多を重ね用ゐて別々の音を呼ぶ。bhrūm の如し。r と m と二の摩多の音を別々に呼ぶ。

第九. 摩多の形に非して字を嚴るための文あり。ゝの劃の如し。梵字にて或は・とし。或はことするも等しくゝの音を顯はす摩多なり。故にこのゝは唯だ嚴字の爲めのみ別に所要あるに非ず。

第十. 數字重なりて一字を成すとき最下の字は必ず正しく呼び中と上とは連合して短かく呼ぶ。必しも音を正さず。上に sa 字ありて下に ka 字ある時は發音の便の爲め。saka と呼ばずして ska (aska) と呼ぶが如し。

第十一. 聲ありて其の字なし。ska 等の如し。字は ska なれども發音する時は aska なり。即ちアの韻は聲のみにして字なし。

第十二. 或は字より生ぜざる本來半體の文ありへ、又は S の如し。へとゝは virāma 點と名けられ字の終の a の韻を除くことを示す記號なり。故に若し此の記號ある時は純發聲を示すものと思ふべし。例せば क्, क् 何れも ka と讀むべきも若し क्, क् とあれば單に k なるが如し。S は avagraha と名けられ語首の a を省けるを示す。例せば अ॒पि, अ॒पि api の代に S॒पि, S॒पि 'pi とするが如し。

第十三. 發聲字の韻を缺く時は其字の下部にへ、ゝの劃を加ふ。क्, क् は k. क्, क् は kh なるが如し。

第十四. 源は字より生じたるも大に莊飾を加へたるあり。印文に用ゐる字。例せば śri の字に莊飾を加ふるが如し。

第十五. 源は字より生じたるも其の形は大に本字形に異なるあり。क (kr), क (kra), क (kru) の如き何れも क の半體 क を用ゐる。又 क (ku), क (ru) 等の如きは大に摩多の形を異にす。

以上孤合と名くる理由十五を擧ぐと雖も其の中第二、第五、第七、第十、第十一、第十五の六項は前章にも通ずれば、本章獨特の理由とすべきは其の餘の九項なりとす。

第六 梵 字 表

第一 迦 迦引 章

क	क	कि	की	कु	कू	के	कै	को	कौ	कं	कः
क	का	कि	की	कु	कू	के	कै	को	कौ	कं	कः
ka	kā	ki	kī	ku	kū	ke	kai	ko	kau	kam	kaḥ

ख	ख	खि	खी	खु	खू	खे	खै	खो	खौ	खं	खः
ख	खा	खि	खी	खु	खू	खे	खै	खो	खौ	खं	खः
kha	khā	khi	kī	khu	kū	khe	khai	kho	khou	kham	khah

र	र	रि	री	रु	रू	रे	रै	रो	रौ	रं	रः
र	रा	रि	री	रु	रू	रे	रै	रो	रौ	रं	रः
ra	rā	ri	rī	ru	rū	re	rhai	ro	rau	ram	rah

ज	ज	जि	जी	जु	जू	जे	जै	जो	जौ	जं	जः
ज	जा	जि	जी	जु	जू	जे	जै	जो	जौ	जं	जः
ja	jā	ji	jī	ju	jū	je	jhai	jo	jau	jham	jah

第二 枳 也 枳 耶引 章

क्य	क्य	क्यि	क्यी	क्यु	क्यू	क्ये	क्यै	क्यो	क्यौ	क्यं	क्यः
क्य	क्या	क्यि	क्यी	क्यु	क्यू	क्ये	क्यै	क्यो	क्यौ	क्यं	क्यः
kya	kyā	kyi	kyī	kyu	kyū	kye	kyai	kyo	kyau	kyam	kyah

ख्य	ख्य	ख्यि	ख्यी	ख्यु	ख्यू	ख्ये	ख्यै	ख्यो	ख्यौ	ख्यं	ख्यः
ख्य	ख्या	ख्यि	ख्यी	ख्यु	ख्यू	ख्ये	ख्यै	ख्यो	ख्यौ	ख्यं	ख्यः
khya	gya	ghya	cya	chya	jya	tya	tbya	dya	dhya	nya	tya

थ्य	थ्य	थ्यि	थ्यी	थ्यु	थ्यू	थ्ये	थ्यै	थ्यो	थ्यौ	थ्यं	थ्यः
थ्य	थ्या	थ्यि	थ्यी	थ्यु	थ्यू	थ्ये	थ्यै	थ्यो	थ्यौ	थ्यं	थ्यः
thya	dya	dhya	nya	pya	bya	bhya	mya	lya	vya	śya	śya

स्य	स्य	स्य
स्य	स्या	स्य
sya	hya	ksya

第三 迦 略 迦 略引 章

क्र	क्र	क्रि	क्री	कू	कू	क्रे	क्रे	क्रो	क्रौ	क्रं	क्रः
क्र	क्रा	क्रि	क्री	कू	कू	क्रे	क्रे	क्रो	क्रौ	क्रं	क्रः
kra	krā	kri	kī	kru	krū	kre	krai	kro	krau	kram	krah

ग्र	ग्र	ग्रि	ग्री	गू	गू	ग्रे	ग्रे	ग्रो	ग्रौ	ग्रं	ग्रः
ग्र	ग्रा	ग्रि	ग्री	गू	गू	ग्रे	ग्रे	ग्रो	ग्रौ	ग्रं	ग्रः
ghra	gra	ghra	jra	tra	dra	dhra	nra	pra	bra	bhra	nra

व्र	व्र	व्र
व्र	व्रा	व्र
vra	śra	hra

第四迦擺迦擺引章

𑖀 𑖁 𑖂 𑖃 𑖄 𑖅 𑖆 𑖇 𑖈 𑖉 𑖊 𑖋
 𑖌 𑖍 𑖎 𑖏 𑖐 𑖑 𑖒 𑖓 𑖔 𑖕 𑖖 𑖗
 kla klā kli kli klu klū klo klai klo klau klam klah

𑖘 𑖙 𑖚 𑖛 𑖜 𑖝
 𑖞 𑖟 𑖠 𑖡 𑖢 𑖣
 gla ghla pla ma śla bla.

第五迦嚩迦嚩引章

𑖀 𑖁 𑖂 𑖃 𑖄 𑖅 𑖆 𑖇 𑖈 𑖉 𑖊 𑖋
 𑖌 𑖍 𑖎 𑖏 𑖐 𑖑 𑖒 𑖓 𑖔 𑖕 𑖖 𑖗
 kva kvā kvi kvi kvu kvū kve kvai kvo kvau kvam kvaḥ

𑖘 𑖙 𑖚 𑖛 𑖜 𑖝 𑖞 𑖟 𑖠 𑖡 𑖢 𑖣
 𑖤 𑖥 𑖦 𑖧 𑖨 𑖩 𑖪 𑖫 𑖬 𑖭 𑖮
 gva jva tva nva tva dhva nva bhva yva lva śva sva

𑖯 𑖰 𑖱
 𑖲 𑖳 𑖴
 sva hva kṣva.

第六迦慶迦慶引章

𑖀 𑖁 𑖂 𑖃 𑖄 𑖅 𑖆 𑖇 𑖈 𑖉 𑖊 𑖋
 𑖌 𑖍 𑖎 𑖏 𑖐 𑖑 𑖒 𑖓 𑖔 𑖕 𑖖 𑖗
 kma kmā kmi kmī kmu kmū kme kmai kmo kmau kmaṃ kmaḥ

𑖘 𑖙 𑖚 𑖛 𑖜 𑖝 𑖞 𑖟 𑖠 𑖡 𑖢 𑖣
 𑖤 𑖥 𑖦 𑖧 𑖨 𑖩 𑖪 𑖫 𑖬 𑖭 𑖮
 gma ghma ūma jma tma dma dhma nma lma śma sma sma

𑖯 𑖰
 𑖱 𑖲
 hma ksma.

第七迦娜迦娜引章

𑖀 𑖁 𑖂 𑖃 𑖄 𑖅 𑖆 𑖇 𑖈 𑖉 𑖊 𑖋
 𑖌 𑖍 𑖎 𑖏 𑖐 𑖑 𑖒 𑖓 𑖔 𑖕 𑖖 𑖗
 kna knā kni knī knu knū kne knai kno knau knam knaḥ

𑖘 𑖙 𑖚 𑖛 𑖜 𑖝 𑖞 𑖟 𑖠 𑖡 𑖢 𑖣
 𑖤 𑖥 𑖦 𑖧 𑖨 𑖩 𑖪 𑖫 𑖬 𑖭 𑖮
 gna ghna tna dna dhna pna bhna mna śna sna hna

第八阿勒迦章

𑖀 𑖁 𑖂 𑖃 𑖄 𑖅 𑖆 𑖇 𑖈 𑖉 𑖊
 𑖋 𑖌 𑖍 𑖎 𑖏 𑖐 𑖑 𑖒 𑖓 𑖔 𑖕 𑖖
 rka rkā rki rki rku rkū rke rkai rko rkau rkam rkaḥ

𑖗 𑖘 𑖙 𑖚 𑖛
 𑖜 𑖝 𑖞 𑖟 𑖠 𑖡
 rgo rtham rde rbhi rmau.

第十四阿勒迦那章

𑖃 𑖄 𑖅 𑖆 𑖇 𑖈 𑖉 𑖊 𑖋 𑖌 𑖍
 𑖎 𑖏 𑖐 𑖑 𑖒 𑖓 𑖔 𑖕 𑖖 𑖗 𑖘 𑖙 𑖚
 rkna rkṇā rkṇi rkṇi rkṇu rkṇū rkṇe rkṇai rkṇo rkṇau rkṇam rkṇaḥ

第十五盎迦章

𑖛 𑖜 𑖝 𑖞 𑖟 𑖠 𑖡 𑖢 𑖣 𑖤 𑖥
 𑖦 𑖧 𑖨 𑖩 𑖪 𑖫 𑖬 𑖭 𑖮 𑖯 𑖰 𑖱
 nka nkha nga ngha ũca ũcha ũja ũjha nta nthā nṭa nṭha nṭa nṭha

𑖲 𑖳 𑖴 𑖵 𑖶 𑖷 𑖸 𑖹 𑖺 𑖻 𑖼
 𑖽 𑖾 𑖿 𑗀 𑗁 𑗂 𑗃 𑗄 𑗅 𑗆 𑗇 𑗈
 nta nthā nda ndha nṇa nṇa nṇa nṇa nṇa nṇa nṇa nṇa nṇa nṇa

𑗉 𑗊 𑗋 𑗌 𑗍
 𑗎 𑗏 𑗐 𑗑 𑗒
 ṇsa ṇsa ṇsa ṇha ṇksa

第十六訖里章

𑗓 𑗔 𑗕 𑗖 𑗗 𑗘 𑗙 𑗚 𑗛 𑗜 𑗝 𑗞
 𑗟 𑗠 𑗡 𑗢 𑗣 𑗤 𑗥 𑗦 𑗧 𑗨 𑗩 𑗪
 kr kṛ kṛm kṛh kṛh kṛh kṛm kṛh rṛ rṛ rṛm rṛh

第十七阿索迦章

𑗫 𑗬 𑗭 𑗮 𑗯 𑗰 𑗱 𑗲 𑗳 𑗴 𑗵
 𑗶 𑗷 𑗸 𑗹 𑗺 𑗻 𑗼 𑗽 𑗾 𑗿 𑘀 𑘁
 ska skha dga dgha niktra vca voha vja vjha jāa stā stha

𑘂 𑘃 𑘄 𑘅 𑘆 𑘇 𑘈 𑘉 𑘊 𑘋 𑘌 𑘍
 𑘎 𑘏 𑘐 𑘑 𑘒 𑘓 𑘔 𑘕 𑘖 𑘗 𑘘 𑘙
 dda ddha sna sta stha vda vdha rṣna sṇa spha dba dbha

𑘚 𑘛 𑘜 𑘝 𑘞 𑘟 𑘠 𑘡 𑘢
 𑘣 𑘤 𑘥 𑘦 𑘧 𑘨 𑘩 𑘪 𑘫
 rkṣma rkṣvya rkṣvya ita tkva tṣa tṣa sha vkṣa

第十八孤合章

क ग ष क ष क ष
क ग स क ष क ष

kka gga pta tka dsva tschra bhrum

क क क क क क क क क क
क क क क क क क क क क

kta ktha ktya ktra ktva krya ksna ksmya gda gdha

ग ग ग ग ग ग ग ग ग ग
ग ग ग ग ग ग ग ग ग ग

gbha gdhva gnya gbhya grya ngra nghra nksva

ज क क क क क क क क क
ज क क क क क क क क क

oca ocha echra ochva jja jjha jja jja fisa

द द द द
द द द द

tta dga dda nna

त क त त त त त त त त त
त क त त त त त त त त त

tta tka ttha tpa tpha tsa ttra tva tnya tmya

त्र त्र त्र त्र त्र त्र त्र त्र त्र त्र
त्र त्र त्र त्र त्र त्र त्र त्र त्र त्र

trya tsna tsya tsva dda ddha dgra ddya ddra ddva

दृ दृ दृ दृ दृ दृ दृ दृ दृ दृ
दृ दृ दृ दृ दृ दृ दृ दृ दृ दृ

ddhya ddhva dbhya drya dvyā nna nsa ntya ntra ntsa

दृ दृ दृ दृ दृ
दृ दृ दृ दृ दृ

nddha ndra ndhya ndhra nnya

प प प प प प प प प प
प प प प प प प प प प

pma psa ptya bja bda bdha bdhva

य ल ल ल ल ल ल ल ल ल ल
य ल ल ल ल ल ल ल ल ल ल

yya lla lka lpa lha

श श श श श श श श श श
श श श श श श श श श श

śca ścya śrya śka śna śpa śkra śtra śtva śthyā

ॐ सु सु सु

प्र स्त स्त स्त

spra stya stra stva

ह

ह

hna

第七. 數. 字.

१ २ ३ ४ ५ ६ ७ ८ ९ ०

1 2 3 4 5 6 7 8 9 0

१०=10; १२५=125; १८९२=1892.

Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or manuscript, with some characters appearing to be in a different script or dialect.

西紀約三百五十年代より八百年代に至る彫刻文に見ゆる書體

Printed text in a regular script, organized into columns and rows, possibly a transcription or a list of characters from the adjacent manuscript.

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45

西紀前約三百五十年代より同世紀の初に至るまで彫刻に見ゆる書體

肆 造 頌 法

頌は句より成る。句を造るに種々の法あり。今本篇中に出たる最も普通なるものに就て其句法を明す。「—」は韻の長きを表し、「∪」は韻の短きを表す。韻の長短に就ては122條を見るべし。

1) śloka (輸盧迦) 輸盧迦は十六字二行より成る。各行毎八字に句限(cesura)ありて四句二部に分る。最も普通なる様式は

×××× ∪ --- × | ×××× ∪ --- ∪
×××× ∪ --- × | ×××× ∪ --- ∪

演習第三の8等は是の調なり。

2) 叙事詩の tristubh (怛利室都婆) 怛利室都婆は二行より成り各行各二部に分る。各部十一字或は往々にして十二字あり。各行の終は通常—∪—∪なるも十二字のときは—∪—なることあり。様式は

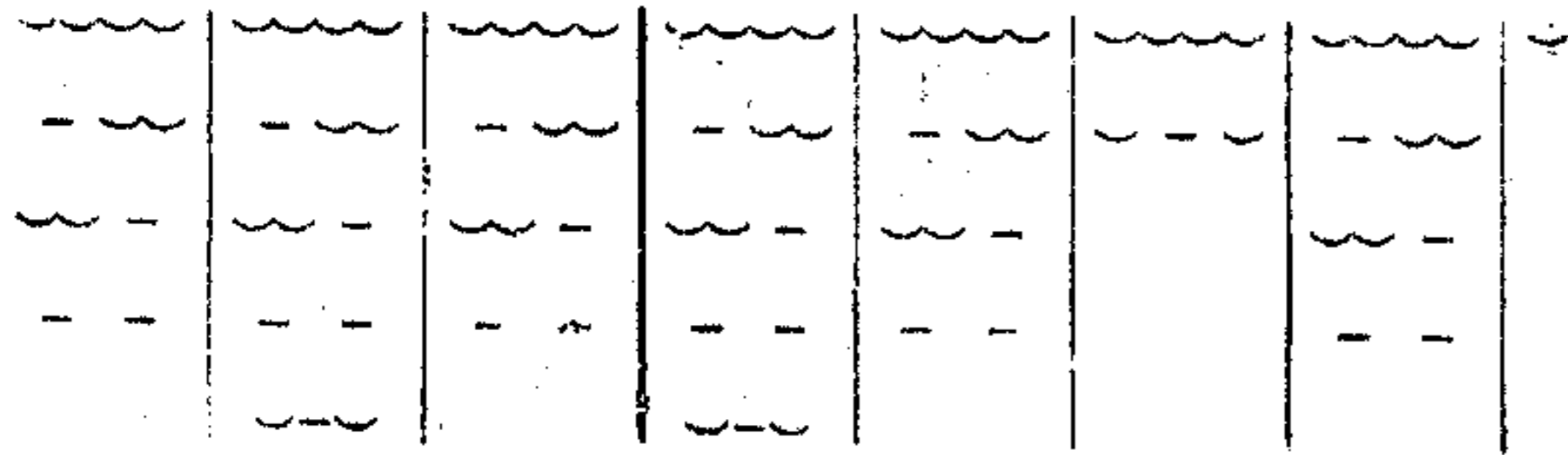
×∪×—∪∪∪—∪—×

十二字の時 ×—×—∪∪∪∪∪×∪

文抄 VI. 等に此の調の頌あり。

3) āryā (阿梨耶) 字數に制限を設けず唯韻の量に由て造頌の法を定むるものあり其一種を阿梨耶と云ふ。阿梨耶は二行より成り、各行八句あり、毎句四短音(mora)

を有す。されど兩行ともに第八句は一字 (catalectic) なり。第二行に於ては其第六句も亦單に一短音「~」を有す。第一行にては其第六句は「~」或は「~」なり。兩行ともに第二第四の兩句は亦「~」の形を用ゐることを得。第三句の次後に句限 (cesura) あり。様式は



第二行も亦是に同じ、唯だ第六句の「~」なるを異とす。演習第八の12等は是の調なり。

伍 文 抄

I. Hitopadeśa 3, 8.

अस्त्ययोध्यायां पुरि चूडामणिर्नाम क्षत्रियः । तेन धनार्थिना महता
 कायक्लेशेन भगवांश्चन्द्रार्धचूडामणिसिरमाराधितः । ततः प्रक्षीपपापो 'सौ
 स्वप्ने दर्शने दत्त्वा भगवतः प्रसादाद्यक्षेत्रेणादिष्टः । यत्नमद्य प्रातः क्षीर
 कृत्वा लगुडहस्तः सन्सगृहहारि निभृतं स्थास्यसि ततो यमेवागतं भिक्षुकम-
 द्भूषी पश्यसि तं निर्दये लगुडेन हनिष्यसि । ततो 'सौ भिक्षुः सुवर्णपूर्णाकलाशो
 भविष्यति । तेन त्वया स्वेच्छया यावज्जीवं सुखिना भवितव्यम् । अजन्तं
 तद्यानुष्ठितं तद्वृत्तम् । तच्च क्षीरकरणाद्यानीतिन नापितेनालीक्यालीकितम् ।
 अये निधिमात्रैरयमुपायः । तद्दृष्ट्वापि किं न करोमि । ततः प्रभृति
 स नापितः प्रतिदिनं तद्याविधो लगुडहस्तः प्रातः सुनिभृतं भिक्षोराम-
 मनमपेक्षते । एकदा तेन तथा प्राप्नो भिक्षुर्लगुडेन हत्वा व्यापादितः ।
 तस्मादपराधात्सो 'पि नापितो राजपुरुषैस्ताडितः पञ्चसुपगतः । यतो
 'हं त्रवीमि ।

पुण्यान्नं यदेतेन तन्नमापि भविष्यति ।
 हत्वा भिक्षुमतो मोहाग्निध्वर्षी नापितो मृतः ॥

I. Hitopadeśa 3, 8.

astyaodhyāyāṃ puri cūḍāmaṇirnāma kṣatriyaḥ | tena dhanār-
 thinā mahatā kāyakleśena bhagavāṃścandrārdhacūḍāmaṇisīramā-
 rādhitaḥ | tataḥ prakṣipapāpo 'sau svapne darśanaṃ dattvā
 bhagavataḥ prasādādyakṣēsvareṇādiṣṭaḥ | yattvamadya prātaḥ
 kṣauram kṛtvā laguḍahastaḥ sansvagrhadvāri nibhṛtaṃ sthāsyasi
 tato yamevāgataṃ bhikṣukamaṅgaṇe paśyasi taṃ nirdayaṃ
 laguḍena haniṣyasi | tato 'sau bhikṣuḥ suvarṇapūrṇakalaśo bhaviṣ-
 yati | tena tvayā sveccayā yāvajjīvaṃ sukhinā bhavitavyam |

anantaram tathānuṣṭhite tadvṛttam | tacca ksaurakaraṇḍyānītena
nāpitenālokyālocitam | aye nidhiprāpterayamupāyaḥ | tadahamapy-
evam kim na karomi | tataḥ prabhṛti sa nāpitaḥ pratidinam
tathāvidho laguḍahastaḥ prātaḥ sunibhṛtaḥ bhikṣorāgamanam-
apeksate | ekadā tena tathā prāpto bhikṣurlaguḍena hatvā
vyāpāditaḥ | tasmādaparādhātso 'pi nāpito rājapurusaistāditaḥ
pañcatvamupagataḥ | ato 'ham bravīmi |

punyaḷlabdham yadekena tanmamāpi bhaviṣyati |
hatvā bhikṣumato mohānidhyarthi nāpito mṛtaḥ ||

II. Pañcatantra 5, 9.

kasmimścinnagare kaścitsvabhāvakṛpaṇo nāma brāhmaṇaḥ
prativasati sma | tasya bhikṣārjitaḥ saktubhirbhuktorvaritair-
ghataḥ paripūrtaḥ | tam ca ghaṭam nāgadante 'valambya
tasyādhastātkaṭvām nidhāya satatamekadṛṣṭyā tamavalokayati |
atha kadā cidrātrau suptaścintayāmāsa | yatparipūrṇo 'yam
ghaṭastāvatsaktubhirvartate | tadyadi durbhikṣam bhavati tada-
nena rūpakāṇām śatamutpadyate | tatastena mayājādvayam
grahitavyam | tataḥ śaṇmāsikaprasavavaśāttābhyām yūtham
bhaviṣyati | tato 'jābhiḥ prabhūtā gā grahīṣyāmi gobhirmahiṣīr-
mahīṣibhirvaḍavāḥ | vaḍavāprasavataḥ prabhūtā aśvā bhaviṣyanti |
teṣāṃ vikrayātprabhūtaḥ suvarṇam bhaviṣyati | suvarṇena

catuḥśūlam gṛham sampadyate | tataḥ kaścidbrāhmaṇo mama
gṛhamāgatyā prāptavarām rūpādhyām kanyām dāsyati | tatsakā-
śātpuro me bhaviṣyati | tasyāham somaśarmeti nāma kariṣyāmi |
tattasmijānucalanayogye samjāte 'ham pustakam gṛhitvāśvaśālā-
yāḥ pṛṣṭhadeśa upaviṣṭastadavadhārayiṣyāmi | atrāntare soma-
śarmā mām dṛṣṭvā jananyutsaṅgājjanupracalanaparo 'śvakhurāsan-
navartī matsamīpamāgamīṣyati | tato 'ham brāhmaṇīm kopāviṣṭo
'bhīdhāsyāmi | gṛhāṇa tāvadbālakam | sāpi gṛhakarmavyagrata-
yāsmadvacanam na śroṣyati | tato 'ham samutthāya tām
pādaprahāreṇa tādayiṣyāmi | evam tena dhyānasthitena tathaiva
pādaprahāro datto yathā sa ghaṭo bhagnaḥ | saktubhiḥ paṇḍuratām
gataḥ || ato 'ham bravīmi |

anāgatavatīm cintāmasambhāvyām karoti yaḥ |
sa eva paṇḍuraḥ śete somaśarmapitā yathā ||

III. Pañcatantra 1, 10.

asti kasmimścidvanoddeśe caṇḍaravo nāma śyālah | sa kadā
citkṣudhāviṣṭo jihvālaulyānnagaramadhye praviṣṭaḥ | atha tam
sārameyā vilokya sarvataḥ śabdāyamānāḥ paridhāvya tivrada-
tairbhakṣayitumārabdhaḥ | so 'pi tairbhakṣyamāṇaḥ prāṇabhayāt-
pratyāsannarajakagrham praviṣṭaḥ | tatra nilirasaparipūrṇa-
mahābhāṇḍamāsīt | tatra sārameyairākrānto bhāṇḍamadhye

patitaḥ | atha yāvanniṣkrāntastāvannilivarṇaḥ samjātaḥ |
tatrāpare sārāmeyaṣṭam śṛgālamajānanto yathābhīṣṭadiśam
jāgmuh | caṇḍaravo 'pi dūratarāṃ pradēśamāsādyā kānanābhimu-
khaṃ pratāste | na ca nilavarṇena kadā einnijaraṅgastyajyate |
uktaṃ ca |

vajralepasya mūrkhasya nārīṇāṃ karkaṣasya ca |

eko grahastu minānāṃ nilimadyapayoryathā ||

atha taṃ haragalagaralataṃ mālasamaprabhamapūrvam sattvama-
valokya sarve siṃhavyāghradvīpivṛkaprabhṛtayo 'raṇyauivāsino
bhayavyākulitacittāḥ samantātpalāyanakriyāṃ kurvanti kathayanti
ca | na jñāyate 'sya kīdrṅviceṣṭitaṃ pauruṣam ca | taddūratarāṃ
gacchāmaḥ | uktaṃ ca |

na yasya ceṣṭitaṃ vidyāna kulam na parākramam |

na tasya viśvasetprājño yadicchechriyamātmanaḥ ||

caṇḍaravo 'pi bhayavyākulitānvijñāyeda māha | bho bhoḥ
śvāpadāḥ kiṃ yūyam māṃ drṣṭvaiva samtrastā vrajatha | tanna
bhetavyam | ahaṃ brahmaṇādyā svayameva sṛṣṭvābhīhitaḥ |
yacchvāpadānāṃ kaścīdrājā nāsti tattvam mayādyā sarvaś-
vāpadaprabhutve 'bhiṣiktastato gatvā tānsarvānparipālayeti |
tato 'hamatrāgataḥ | tanmama cchātracchāyāyāṃ sarvairāpi
śvāpadairvartitavyam | ahaṃ kakuddrumo nāma rājā trailokye 'pi
samjātaḥ | tacchrutvā siṃhavyāghrapuraḥsarāḥ śvāpadāḥ svāmin-
prabho samādiṣeti vadantastam parivavruḥ | atha tena siṃhasyā-

mātyapadāvi pradattā vyāghrasya śayyāpālakatvam dvīpinastān-
būlādihikāro vṛkasya dvārapālakatvam | ye cātmiyāḥ śṛgālāstaiḥ
sahālapamātramāpi na karoti | śṛgālāḥ sarve 'pi niḥsāritāḥ |
evaṃ tasya rājyākriyayā vartamānasya siṃhādayo mṛgāuvyāpādyā
tatpurataḥ prakṣipanti | so 'pi prabudharmeṇa sarveṣāṃ tān-
pravibhajya prayacchati | evaṃ gacchati kāle kadā ciddūradeśe
śabdāyamānāḥ śṛgālā ākarṣitāḥ | teṣāṃ śabdāṃ śrutvā pulakita-
tanurānandāśrupūrṇānayanastārasvareṇa virotumārabdhaḥ | atha te
siṃhādayastam tārasvaramākarṇya śṛgālo 'yamiti matvā lajjayā-
dhumukhāḥ kṣaṇam sthitvā procuḥ | bho vāhitā anena vayam |
ksudraśṛgālo 'yam | tadvadhyatāmiti | so 'pi tadākarṇya palāyitum-
icchamstatra sthāna eva siṃhādibhiḥ khaṇḍāśaḥ kṛto mṛtaśca |
ato 'haṃ bravimi |

tyaktāścābhyantarā yena bāhyāścābhyantarikṛtāḥ |

sa eva mṛtyumāpnoti yathā rājā kakuddrumaḥ ||

IV. Viṣṇupurāṇa 4, 10.

yatīyayātisamyātyayātīvyatikṛtīsamjñā nahuṣasya ṣaṭputrā
mahābalaparākramā babhūvuḥ | yatīstu rājyaṃ naicchat | yayātīstu
bhūbhṛdabhavaduśanasaśca duhitaram devayānīm śarmiṣṭhām ca

druhyuṃ cānuṃ ca pūruṃ ca śarmiṣṭhā vārsaparvaṇi ||
kāvyasāpācākālenaiva yayātirjarāmavāpa¹⁾ | prasannaśukra-
vacanācca jarāṃ samkrāmayitum jyēṣṭham putraṃ yadumuvāca |
tvanmātāmahaśāpādiyamakālenaiva jarā māmupasthitā | tāmahaṃ
tasyaivānugrahāadbhavataḥ samcārayāmyekaṃ varṣasahasraṃ | na
tṛpto 'smi viṣayēsu | tvadvayasā viṣayānaḥ bhoktumicchāmi |
nātra bhavatā pratyākhyānaṃ kartavyam | ityuktaḥ sa naicchat-
tāṃ jarāmādātum | taṃ cāpi pitā śāśāpa | tvatprasūtirna rājyārthā
bhaviṣyatīti | anantaram ca druhyuṃ turvasumanuṃ ca pṛthivī-
patirjarāgrahaṇārthaṃ svayauvanapradānāya ca codayāmāsa |
tairapyekaikaśyena pratyākhyātastāñchaśāpa | atha śarmiṣṭhā-
tanayamaśeṣakaniyāmsaṃ pūruṃ tathaivāha | sa cātipravaṇamatih
praṇamya pitaraṃ sabahumānaṃ mahānprasādo 'yamaśmākam-
ityudāramabhidhāya jarāṃ pratijagrāha svakiyaṃ ca yauvanaṃ
pitre dadau | so 'pi ca navayauvanamāsādya dharmāvirodhena
yathākāmaṃ yathākālopapannaṃ yathotsāhaṃ viṣayaṃ cacāra
samyakca prajāpālanamakaroṭ | viśvācyā sahopabhogam bhuktvā
kāmanāmantaṃ mavāpsyāmityanudinam tanmanasko babhūva |
anudinam copabhogataśca kāmanātivābhiraṃyāneme | tataścai-
vamagāyata |

na jātu kāmaḥ kāmanāmupabhogena śāmyati |

¹⁾ kāvyasāpādīti | śarmiṣṭhāyaṃ dāsyam yayātinā putrotpādanam devayānyā
kathitāṃ śrutvā kruddhasya śukrasya śāpādakāle jarāṃ yayātiravāpa |

(註釋者; Mahābhārata. 1, 83, 24 以下を見よ.)

haviśā kṛṣṇavartmeva bhūya evābhivardhate ||
yatpṛthivyāṃ vrihiyavaṃ hiranyaṃ paśavaḥ striyaḥ ||
ekasyāpi na paryāptam tadityatitṛsam tyajet ||
yadā na kurute bhāvaṃ sarvabhūteṣu pāpakam |
samadrṣṭestadā puṃsaḥ sarvā eva sukhā diśaḥ ||
yā dustyajā durmatibhīryā na jīryati jīryataḥ |
tāṃ tṛṣṇāṃ samtyajanprāññāḥ sukheṇaivābhipūryate ||
jīryanti jīryātaḥ keśā dantā jīryanti jīryataḥ |
dhanāśā jīvitāśā ca jīryato 'pi na jīryati ||
pūrṇam varṣasahasraṃ me viṣayāsaktacetasaḥ |
tathāpyanudinam tṛṣṇā mamaiteṣveva jīyate ||
tasmādetāmahaṃ tyaktvā brahmanyādhāya mānasam |
nirdvaṃdvo nirmamo bhūtvā carisyāmi mṛgairiḥ saha ||

|| parāśara uvāca ||

pūroḥ sakāśādādāya jarāṃ dattvā ca yauvanaṃ |
rāje 'bhiśicya pūruṃ ca prayayau tapase vanam ||
diśi dakṣiṇapūrvasyāṃ turvasuṃ pratyathādiśat |
pratīcyāṃ ca tathā druhyuṃ dakṣiṇāpathato yadum ||
udīcyāṃ ca tathaivānuṃ kṛtvā maṇḍalino nṛpān |
sarvapṛthvipatiṃ pūruṃ so 'bhiśicya vanam yayau ||

|| iti śrīviṣṇupurāṇe caturthe 'mśe daśamo dhyāyaḥ ||

V. Mahābhārata 3, 122, 1—125, 11.²⁾

|| lomaśa uvāca ||

1. bhṛgomaharṣeṅ putro bhūcyavāno nāma bhārata |
samīpe sarasastvasya tapastepe mahādyutiḥ ||
2. sthāpubhūto mahātejā virasthānena pāṇḍava |
atiśhata ciraṃ kālamekadeśe viśāṃ pate ||
3. sa valmiko bhavadr̥ṣiratābhiriva samvṛtaḥ |
kālena mahatā rājansamākīrṇaḥ pīplīkaiḥ ||
4. tathā sa samvṛto dhimānṛṣipīṇḍa iva sarvaśaḥ |
tapyate sma tapo ghoram valmikeṇa samāvṛtaḥ ||
5. atha dīrghasya kālasya śaryātirnāma pārthivaḥ |
ājagāma sarō ramyaṃ vihartumidamuttamam ||
6. tasya strīṇāṃ sahasrāṇi catvāryāsanparigrahaḥ |
ekaiva ca sutā subhṛūḥ sukanyā nāma bhārata ||
7. sā sakhibhiḥ parivṛtā divyābharanabhūṣitā |
camkramyamāṇā valmikaṃ bhārgavasya samāsadat ||
8. sā vai vasumatīṃ tatra paśyanti sumanoramām |
vanaspatinvicinvantī²⁾ vijahāra sakhivṛtā ||
9. rūpeṇa vayasā caiva madanena madena ca |
babhañja vanavṛkṣāṇāṃ śākhāḥ paramapuspitāḥ ||

¹⁾ lomaśa 偈が yudhiṣṭhira 王に語る一段。

²⁾ 普通は vicinvati けれど往々 vicinvantī を用ゐることあり。

10. tāṃ sakhīratāmekāmekavastrāmalaṅkṛtām |
dadarśa bhārgavo dhimāmācarantīmiya vidyutam ||
11. tāṃ paśyamāno vijane sa reme paramadyutiḥ |
ksāmakaṅṭhaśca vipraṛṣistapobalasanvitaḥ ||
12. tamābhāṣe kalyāṇiṃ sā cāśya na śṛṇoti vai |
tataḥ sukanyā valmike dr̥ṣṭvā bhārgavacakṣuṣī ||
13. kautūhalātkaṅṭakena buddhimohabalātkṛtā |
kiṃ nu khālvidamityuktā nirbibhedāśya locane ||
14. akrudhyatsa tayā viddhe netre paramamanyumān |
tataḥ śaryātisainyasya śakṛnmūtre samāvṛṇot ||
15. tato ruddhe śakṛnmūtre sainyamāsitsuduḥkhitam |
tathāgatamabhipreksya paryapṛochatsa pārthivaḥ ||
16. taponityasya vṛddhasya roṣaṇasya viśeṣataḥ |
kenāpakṛtamadyeha bhārgavasya mahātmanaḥ ||
17. jñātam vā yadi vājñātam taddrutam brūta māciraṃ |
tamūcuḥ sainikāḥ sarve na vidmo pakṛtam vayam ||
18. sarvopāyairyathākāmaṃ bhavāṃstadadhigacchata |
tataḥ sa pṛthivipālāḥ sāmṇā cogreṇa ca svayam ||
19. paryapṛochatsuhṛdvargam paryajānanna caiva te |
ānāhārtam tato dr̥ṣṭvā tatsainyamasukhārditam ||
20. pitarāṃ duḥkhitam dr̥ṣṭvā sukanyedamathābravit |
mayāṭantyeḥa valmike dr̥ṣṭam sattvamabhijvalat ||
21. khadyotavadabhijñātam tanmayā viddhamantikāt |

- etacchrutvā tu valmikam śaryātistūrnamabhyayāt ||
22. tatrāpaśyattapovṛddham vayovṛddham ca bhārgavam |
ayācāḍaṭha sainyārtham prañjalih pṛthivipatih ||
23. ajñānādbālayā yatte kṛtam tatksantumarhasi |
tato 'bravinmahipālam cyavano bhārgavastadā ||
24. apamānādaham viddho hyanayā darpapūrṇayā |
rūpaudāryasamāyuktām lobhamohabalātkṛtām ||
25. tāmeva pratigr̥hyāham rājanduhitaram tava |
kṣampsyāmīti mahipāla satyametadbrāvimi te ||
|| lomaśa uvāca ||
26. iṣṣevacanamājñāya śaryātiravicārayan |
daḍau duhitaram tasmai cyavanāya mahātmane ||
27. pratigr̥hya ca tām kanyām bhagavānprasasāda ha |
prāptaprasādo rājā vai sasainyaḥ puramāvrajaḥ ||
28. sukanyāpi patim labdhvā tapasvinamaninditā |
nityam paryacaratprityā tapasā niyamena ca ||
29. agnīnāmatithinām ca śuśrūsuranasūyikā |
samārādhayata kṣipram cyavanam sā śubhānanā ||
|| ityāranyake parvaṇi saukanye dvāvīṃśatyadhikaśato
'dhyāyaḥ ||
|| lomaśa uvāca ||
1. kasya cittvatha kālasya tridaśāvaśvinau nrpa |
kṛtābhīṣekām vivṛtām sukanyām tāmapaśyatām ||

2. tām dr̥ṣṭvā darśaniyāṅgim devarājasutāmiva |
ūcātuh sambhidrutya nāsatyāvaśvināvidam ||
3. kasya tvamasi vāmoru vane 'sminkim karosi ca |
icchāva bhadre jñātum tvām tattvamākhyāhi śobhane ||
4. tataḥ sukanyā savriḍā tāvuvāca surottamau |
śaryātitanayām vittam bhāryām mām cyavanasya ca ||
5. athāśvinau prahasyaitāmabrūtām punareva tu |
katham tvamasi kalyāṇi pitrā dattā gatādhvane ||
6. bhrājase 'sminvane bhīru vidyutsaudāminī yathā |
na deveṣvapi tulyām hi tvayāpaśyāva bhāvini ||
7. anābharānasampannā paramāambaravarjitā |
śobhayasyadhikam bhadre vanamapyanalakṛtā ||
8. sarvābharānasampannā paramāambaradbārīṇī |
śobhase tvanavadyāṅgi na tvevam malapaṅkinī ||
9. kasmādevamvidhā bhūtvā jarājarjaritam patim |
tvamupāsse ha kalyāṇi kāmabhogabahīkṛtam ||
10. asamartham paritrāṇe poṣaṇe ca śucismite |
sā tvam cyavanamutsrjya varayasvaikamāvayoḥ ||
11. patyartham devagarbhābhe mā vṛthā yauvanam kṛthāḥ |
evamuktā sukanyāpi surau tāvidamabravit ||
12. ratāham cyavane patyau maivam mām paryaśaṅkatam |
tāvabrūtām punastvenāmāvām devabhisagvarau ||
13. yuvānam rūpasampannam kariṣyāvaḥ patim tava |

- tatastasvayavayōścaivā vṛṇiṣvānyatamaṃ patim ॥
14. etena samayenainamāmantraya patim śubhe ।
sā tayorvacanādrājannupasaṃgamiya bhārgavam ॥
15. uvāca vākyaṃ yattābhyāmuktaṃ bhṛguṣutaṃ prati ।
tacchrutvā cyavano bhāryāmuvāca kriyatāmiti ॥
16. bhātrā sā samanujjātā kriyatāmitiyathābravit ।
śrutvā tadāśvinau vākyaṃ tattasyāḥ kriyatāmiti ॥
17. ūcatū rājaputrim tām patistava viśatvapah ।
tato 'mbhaścyavanaḥ śighraṃ rūpārthi praviveśa ha ॥
18. aśvināvapi tadrājansarah prāviśatām tadā ।
tato muhūrtāduttirṇāḥ sarve te sarasastadā ॥
19. divyarūpadharāḥ sarve yuvāno mṛṣṭakunḍalāḥ ।
tulyavesadharāścaiva manasaḥ prativardhanāḥ ॥
20. te 'brūvansahitāḥ sarve vṛṇiṣvānyatamaṃ śubhe ।
asmākamipsitam bhadre patitve varavarṇini ॥
21. yatra cāpyabhikāmāsi tam vṛṇiṣva suśobhanē ।
sā saniksya tu tānsarvāṃstulyarūpadharānsthitan ॥
22. niścityā manasā buddhyā devī vavre svakam patim ।
labdhivā tu cyavano bhāryāṃ vayo rūpaṃ ca vāñchitam ॥
23. hr̥ṣṭo 'bravinmahātejāstau nāsatyāvidam vacah ।
yathāham rūpasampanno vayasā ca samanvitaḥ ॥
24. kṛto bhavadbhyāṃ vidhah saubhāryāṃ ca prāptavānimām ।
tasmādyuvāṃ karisyāmi prityāham somapīthinau ॥

25. misato devarājasya¹⁾ satyametaḍbravimi vām ।
tacchrutvā hr̥ṣṭamānasau divaṃ tau pratiṅgmataḥ ॥
cyavanaśca sukanyā ca surāviva vijahratuḥ ॥
॥ ityāranyake parvāṇi saukanye trayoviṃśatyadhikaśato
'dhyāyah ॥

॥ komaśa uvāca ॥

1. tataḥ śuśrāva śaryātirvayaḥstham cyavanam kṛtam ।
samhr̥ṣṭaḥ senayā sārḍhamapāyādbhārgavāśramam ॥
2. cyavanam ca sukanyāṃ ca dr̥ṣṭvā devasutāviva ।
reme sabhāryaḥ śaryātiḥ kṛṣṇāṃ prāpya mahimiva ॥
3. ṛṣiṇā satkṛtastena sabhāryaḥ pṛthivipatiḥ ।
upopaviṣṭaḥ kalyāṇiḥ kathūścakra mauoramāḥ ॥
4. athainam bhārgavo rājannuvāca parisāntvayan ।
yājyisyāmi rājapstvāṃ sambhārānavakalpaya ॥
5. tataḥ paramasamhr̥ṣṭaḥ śaryātiravanipatiḥ ।
cyavanasya mahārāja tadvākyaṃ pratyapūjayat ॥
6. praśaste 'hani yajñāye sarvakāmasamṛddhimat ।
kārayāmāsa śaryātiryajñāyatanaṃuttamam ॥
7. tatrainaṃ cyavano rājanyūjayāmāsa bhārgavaḥ ।
adbhutaṇi ca tatrāsanyāni tāni nibodha me ॥
8. agr̥hṇācyavanaḥ somamaśvinordevayostadā ।
tamindro vārayāmāsa gr̥hṇānam sa tayorgraham ॥

¹⁾ 絶待所屬格。

|| indra uvāca ||

9. ubhāvetau na somārhan nāsatyāviti me matih |
bhīṣajau divi devānāṃ karmaṇā tena nārhatāḥ ||

|| cyavana uvāca ||

10. mahotsāhan mahātmānau rūpadravīṇavattarau |
yau cakraturmām maghavanvṛndārakamivājaram ||
11. rte tvām vibudhāṃścānyānkatham vai nārhatāḥ savam |
aśvināvapi devendra devau viddhi purāṇdara ||

|| indra uvāca ||

12. cikitsakau karmakarau kāmarūpasamanvitau |
loke carantau martyānāṃ katham somamihārhatāḥ ||

|| lomaśa uvāca ||

13. etadeva yadā vākyamāmreḍayati devarāt |
anādrītya tataḥ śakraṃ grahaṃ jagrāha bhārgavaḥ ||
14. grahīṣyantam tu tam somamaśvinoruttamam tadā |
samikṣya valabhiddeva idaṃ vacanamabravīt ||
15. ābhyāmarthāya somam tvam grahīṣyasi yadi svayam |
vajram te praharīṣyāmi ghorarūpamanuttamam ||
16. evamuktaḥ smayannindramabhivikṣya sa bhārgavaḥ |
jagrāha vidhivat somamaśvibhyāmuttamam graham ||
17. tato 'smai prāharadvajram ghorarūpaṃ śacīpatih |
tasya praharato bāhum stambhayāmāsa bhārgavaḥ ||
18. tam stambhayitvā cyavano juḥve mantrato 'nalam |

krītyārthi sumahātejā devam hiṃsitumudyataḥ ||

19. tataḥ krītyātha samjajñe mūnestasya tapobalāt |
mado nāma mahāvīryo bhīhatkāyo mahāsuraḥ ||
20. śarīraṃ yasya nirdeṣtumaśakyam tu surāsuraih |
tasyāsyamabhadghoram tikṣṇāgradaśanam mahat ||
21. hanurekā sthitā tvasya bhūmāvekā divam gatā |
catasraścāyatā dāṃṣṭrā yojanānāṃ śatam śatam ||
22. itare tvasya daśanā babhūvurdaśayojanāḥ |
prāsādaśikharākārāḥ sūlāgrasomadārśanāḥ ||
23. bāhū parvatasamkāsāvāyatāvayutam samau |
netre raviśaśiprakhye vaktram kālāgnisamnibham ||
24. lelihañjihvayā vaktram vidyuocapalalolayā |
vyāttānāno ghoradrṣṭirgrasanniva jagadbalāt ||
25. sa bhakṣayīṣyansamkrudhaḥ śatakratumupādravat |
mahatā ghorarūpeṇa lokāñśabdena nādāyan ||

|| ityāraṇyake parvaṇi saukanye caturviṃśatyadhikaśato

'dhyāyaḥ ||

|| lomaśa uvāca ||

1. tam drṣṭvā ghoravadanam madam devaḥ śatakratuḥ |
śyāntam bhakṣayīṣyantam vyāttānanamivāntakam ||
2. bhayātsamstambhitabhujāḥ sṛkṣiṇi lelihanmuhuh |
tato 'braviddevarājaścyavanam bhayapīḍitaḥ ||
3. somārhaśvināvetāvadya prabhṛti bhārgava |

- bhaviṣyataḥ satyametaadvaco vipra prasīda me ॥
4. na te mithyāsamārambho bhavatveṣa paro vidhiḥ |
jñāmi cāhaṃ vipraṣe na mithyā tvam karisyasi ॥
5. somārḥāvaśvināvetau yathaiṣādyā kṛtau tvayā |
bhūya eva tu te vīryam prakāśediti bhārgava ॥
6. sukanyāyāḥ pituścāsya loke kīrtiḥ prathediti |
ato mayaitadvihitam tava vīryaprakāśanam ॥
7. tasmātprasādam kuru me bhavatvevam yathechasi |
evamuktasya śakreṇa bhārgavasya mahātmanah ॥
8. sa manyurvyagamacchighraṃ mumoca ca puramdaram |
madam ca vyabhajadrājanpāne striṣu ca vīryavān ॥
9. akṣesu mṛgayāyām ca pūrvasṛṣṭam punaḥ punaḥ |
tadā madam viniṣṭipya śakraṃ samtarpya cendumā ॥
10. aśvibhyām sahitāndevānyājayitvā ca tam nṛpam |
vikhyāpya vīryam lokeṣu sarveṣu vadatām varaḥ ॥
11. sukanyayā saharānye vijahārānkūlayā ॥

VI. Mahābhārata 8, 192.¹⁾

ayodhyāyāmikṣvākukulodvahaḥ pārthivaḥ parikṣinnāma mṛga-
yāmagamat | tamedāśvena mṛgamanusarantaṃ mṛgo dūramapā-
harat | adhvani jātaśramaḥ kṣutṛṣṇābhībhūtaścaikasmindeśe nilam

gahanam vanakhaṇḍamapaśyat | taoca viveśa | tāstasya vanik-
haṇḍasya madhye 'tivaramanīyam saro drṣṭvā sāśva sva vyagā-
hata | athāśvastah sa bisamṇālamaśvāyāgrato niksipyā puṣkarinītre
samviveśa | tataḥ śayāno madhuram gitamaśṇot | sa śrutvācinta-
yat | neha manusyagatim paśyāmi kasya khalvayam gitaśabda iti |
athāpaśyatkanyām paramarūpadarśanīyām puṣpānyavacinvatim
gāyantim ca | atha sā rājñah samīpe paryakramat | tāmabravīdrājā |
kasyāsi bhadre kā vā tvamiti | sā pratyuvāca | kanyāsmīti | tām
rājovācārthi tvayāhamīti | athovāca kanyā | samayenāham śakyā
tvayā labdhum nānyatheti | rājā tam samayamaṣṇohat | kanyo-
vāca | nodakam me darśayitavyamīti | sa rājā tam bādhamityuktvā
tāmupayame kṛtodvāhaśca rājā parikṣitkriḍamāno mudā para-
mayā yuktastūṣṇim saṅgamya tayā sahāste | tatastātraivāsine
rājani senānvagacchat | sā senopaviṣṭam rājnam parivāryātiṣṭhat |
paryāśvastaśca rājā tayāiva sahā śibikayā prāyādāvaghoṭitayā |
sa svam nagaramanuprāpya rahasi tayā sahāste | tatrābhyāśastho
'pi kaścinnāpaśyat | atha pradhānāmātyo 'bhyāśacarāstasya striyo
'pṛcchatkimatra prayojanam vartata iti | athābruvanstāḥ striyaḥ |
apūrvamiva paśyāma udakam nātra niyata iti | athāmātyo 'nuda-
kam vanam kārayitvodāravrksam bahupuspaphalamūlam tasya
madhye muktājālamayim pārśve vāpim gūḍham sudhopalīptam
sa rahasyupagamya rājanamabrovīt | vanamidamudārakam | sādha-
vatra ramyatāmīti | sa tasya vacanātṭayaiva sahā devyā tadvanam

¹⁾ Mārkaṇḍeya ॥ Yudhisṭhira 王に語る一説

prāviśat | sa kadā cittasminkānane ranye tayaiva saha vyavāharat |
 atha kṣuṭṭṛṣṇārditaḥ śrānto 'timuktakāgāramapaśyat | tatpraviśya
 rājā saha priyayā sudhākṛtām vimalām salilapūrṇām vāpimapaś-
 yat | dr̥ṣṭvaiva ca tām tasyāstīre sahaiva tayā devyāvātiṣṭhat |
 atha tām devīm sa rājābravit | sādhvavatara vāpīsalilamiti | sā
 tadvacaḥ śrutvāvātīrya vāpīm nyamajjenna punarudamajjat | tām
 ṣa mṛgayamāno rājā nāpaśyat | vāpīmatha niḥsrāvya maṇḍūkam
 śvabhramukhe dr̥ṣṭvā kruddha ājñāpayāmāsa sa rājā | sarvatra
 maṇḍūkavadhaḥ kriyatāmīti | yo mayārthī sa mām mṛtamaṇḍū-
 kopāyanamādāyopatīṣṭhediti | atha maṇḍūkavadhe ghore kriya-
 māne dikṣu sarvāsu maṇḍūkānbhayamāviveśa | te bhītā maṇḍū-
 karājñe yathāvṛttam nyavedayan | tato maṇḍūkarāttāpasavesadhārī
 rājānamabhyagacchadupetya cainamuvāca | mā rājankrodhavaśam
 gamaḥ | prasādam kuru | nārhasi maṇḍūkānāmanaparādhinām
 vadham kartumīti | ślokaucātra bhavataḥ |

mā maṇḍūkāñjighāmsa tvam kopam samdhārayācyuta |
 prakṣiyate dhanodreko janānāmavijānatām ||
 pratijānihi naitānstvam prāpya krodham vimokṣyasi |
 alam kṛtvā tavādharman maṇḍūkaiḥ kim hatairhi te ||
 tamevamvādinamiṣṭajanaśokaparitātmā rājāthovāca | na hi
 kṣamyate taumayā | haniṣyāmyetān | etairdurātmabhiḥ priyā me
 bhakṣitā | sarvathaiva me vadhyā maṇḍūkā nārhasi vidvan
 māmuparoddhumīti | sa tadvākyamupalabhya vyathitendriyamanāḥ

provāca | prasīda rājannahamāyurnāma maṇḍūkarājo mama sā
 duhitā suśobhanā nāma | tasyā hi dauḥśilyametadbahavastayā
 rājāno vipralabdhāḥ pūrvā iti | tamabravidrājā | tayāsmyahamarthi
 sā me dīyatāmīti | athainām rājñe pitādadaḍabraviccaināmenam
 rājānam śuśrūṣasveti | sa evamuktvā dubitaram kruddhaḥ
 śasāpa | yasmāttvayā rājāno vipralabdhā bahavastasmādabrahma-
 nyāni tavāpatyāni bhaviṣyantyanṛtikatvāttaveti | sa ca rājā tāmu-
 palabhya tasyām śūratagūṇanibaddhahṛdayo lokatrayaiśvaryamivo-
 palabhya haṣabāṣpakalayā vācā praṇipatyābhipūjya maṇḍūka-
 rājanabravidanugṛhīto 'smīti | sa ca maṇḍūkarājo jāmataramanu-
 jñāpya yathāgatamagacchat | atha kasya citkālasya tasyām
 kumārāstrayastasya rājñāḥ sambabhūvuh śalo dalo balaśceti |
 tatastesām jyestham śalam samaye pitā rājye 'bhiṣicya tapasi
 dhṛtātmā vanam jagāma | atha kadā cicchalo mṛgayāmanucaran-
 mṛgamāsādya rathenānvadhāvat | sūtam covāca śīghram mām
 vahasveti | sa tathoktaḥ sūto rājānamabravit | na kriyatāmanu-
 bandho naiṣa śakyastvayā mṛgo grahitum yadyapi te rathe
 yuktau vāmyau syātāmīti | tato 'bravidrājā sūtamācakṣva me
 vāmyau haami vā tvāmīti | sa evamukto rājābhayabhīto vāma-
 devasāpabhītaśca sannācakhyau rājñe | tataḥ punaḥ sa rājā
 khadgamudyamya śīghram kathayasveti tamāha haniṣye tvāmīti |
 sa tadāha rājābhayabhītaḥ sūto vāmadevasyāśvau vāmyau
 manojavāvīti | athainamevam bruvāṇamabravidrājā vāmadevāśra-

mam yāhi | sa gatvā vāmadevāśramam tamṣimabravī |
 bhagavanmrgo viddhaḥ palāyate | sambhāvayitumarhasi vāmyau
 dātumiti | tamabravīdṛṣirdadāni te vāmyau kṛtakāryeṇa bhavatā
 mamaiva vāmyau niryātyau kṣipramiti | sa ca tāvaśvau pratigṛh-
 yānujñāpyarsim prāyādvāmyaprayuktena rathena mṛgaṃ prati
 gacchaṃścābravitsūtamaśvaratnāvimāvayogyau brāhmaṇānām |
 naitau pratideyau vāmadevāyetyuktvā mṛgamavāpya svanagara-
 metyāśvāvantahpure 'sthāpayat | atharṣiścintayāmāsa | taruṇo
 rājaputraḥ kalyāṇam patraṃśāśīya ramate na me pratiniyā-
 tayatyaho kaṣṭamiti | sa manasā vicintya māsi pūrṇe śiṣyam-
 abravīt | gacchātreyā rājānaṃ hrūhi yadi paryāptam tadā niryā-
 tayopādhyāya vāmyāviti | sa gatvāivam tam rājānamabravīt | tam
 rājā pratyuvāca | rājñāmetadvāhanamanarhā brāhmaṇā ratnānā-
 mevaṃvidhānām | kiṃ brāhmaṇānūmāśvaiḥ kāryam | sādhu
 gamyatām | sa gatvāitadupādhyāyācaṣṭa | tacobrutvā vacana-
 mapriyam vāmadevaḥ krodhaparitātmā svayameva rājānamabhi-
 gamyāśvārthamacodayanna cādada rājā¹⁾ |

|| vāmadeva uvāca ||

prayaccha vāmyau mama pārthiva tvam kṛtam hi te kāryam-
 ābhyaśākyam |

mā tvā vadhidvaruṇo ghorapāśairbrahmakṣatrasyaūtare
 yartamānam ||

|| rājovāca ||

anaḍvāhaḥ suvrataḥ sādhuśāntāvetadviprāṇām vāhanam
 vāmadeva |

tābhyām yāhi tvam yatra kāmo maharṣe chandāṃsi vai
 tvādrīṣam samvahan²⁾ ||

|| vāmadeva uvāca ||

chandāṃsi vai mādrīṣam samvahan³⁾ loka 'muṣṇinipārthiva
 yāni santi |

asmimstu loka mama yānametadasmadvīdhānāmapareṣām ca
 rājau ||

|| rājovāca ||

oatvārastvām gardabhāḥ samvahan⁴⁾ śreṣṭhāśvataryo barayo
 vātarambhāḥ |

taistvam yāhi kṣatriyasaiṣa vāho mamaiva vāmyau na tavaitau
 hi viddhi ||

|| vāmadeva uvāca ||

ghoram vratam brāhmaṇasyaitadāhuretadrājanyadihājīvamā-
 nah⁵⁾ |

¹⁾ 吠陀の音律 (metre) の重なるものは羽翼を有せるものと謂はれ、又音律は總て神國に到る路と認められたり。(Weber, Indische Studien; 8, 11. 29)

²⁾ 詩の行 (line) の終りなれば單数を以て複數に代へたり。これ吠陀の音律法に依る。(Pischel 及び Geldner 共編の Vedische Studien 1, Kürzungen の下の索引; 2, 124).

³⁾ 次に一行を脱す。“人言ふ、婆羅門の戒は悔るべきものなり、王よ若し汝此世にて利を占めて其戒を(傷害せば彼世には其に報ゆる罰汝に加はらん)”

⁴⁾ adāt は adāt に同じ、叙事詩時代の用法なり。

..... ||
nyasmayā ghorarūpā mahāntaścatvāro vā yātudhānāḥ suraud-
rūḥ |

mayā prayuktāstvadvaḥamīpsamānā vahantu tvām śitaśūlā-
ścaturdhā ||

|| rājovāca ||

ye tvām vidurbrāhmaṇam vāmadeva vācā hantum manasā
karmanā vā |

te tvām saśiṣyamīha pātayantu madvākyaunnāḥ śitaśūlā-
śihastāḥ ||

|| vāmadeva uvāca ||

mamaītau vāmyau pratigṛhya rājanpunardadāmiti prapadyase
tvam |

prayaccha śighram mama vāmyau tvamaśvau yadyātmānam
jīvitum te kṣamam aśyāt ||

|| rājovāca ||

na brāhmaṇebhyo mṛgayā prasūtā na tvānuśāsmyadya
prabhṛti hyasatyam |

tavaiṣvājñām samprapīdhāya sarvām tathā brahmaṇpunyalokam
labheyam ||

|| vāmadeva uvāca ||

nānuযোগā brāhmaṇānām bhavanti vācā rājanmanasā karmanā
vā |

yastveva brahma tapasānveti vidvāmstena śreṣṭho bhavati hi
jīvamānaḥ ||

|| mārkāṇḍeya uvāca ||

evamukte vāmadevena rājansamuttasthū rākṣasā ghorarūpāḥ |
taiḥ śūlahastairvadhyamānaḥ sa rājā provācedam vākya-
nccaistadānim ||

ikṣvākavo yadi brahmandalo vā vidheyā me yadi ceme viśo
'pi |

notsrakṣye 'ham vāmadevasya vāmyau naivamvidhū dharmāśilā
bhavanti ||

evam bruvanneva sa yātudhānairhato jagāmāsu mahim kṣitīśah |
tato viditvā nrpatim nipātitanikṣvākavo vai dalamabhya-
śiñcan¹⁾ ||

rājye tadā tatra gatvā sa viprah provācedam vacanam
vāmadevaḥ |

dalam rājānam²⁾ brāhmaṇānām hi deyamevam rājansarvadharm-
meṣu drṣṭam ||

bibheṣi cettvamadharmānnarendra prayaccha me śighram-
evādya vāmyau |

etacchrutvā vāmadevasya vākyaṃ sa pārthivaḥ sūtamuvāca
roṣāt ||

¹⁾ abhyaśiñcan は次下の句の rājye に属す。

²⁾ provāca に属す。

ekam hi me sâyakam citrarûpam digdham viṣeṇâhara
samgrhitam |

yena viddho vâmadevaḥ śayita samdaśyamânaḥ śvabhirâr-
tarûpaḥ ||

|| vâmadeva uvāca ||

jânâmi putram daśavarṣam tavâham jâtam mahiṣyâm śyena-
tam narendra |

tam jahi tvam madvacanâtprapunnastûrnam priyam sâyakair-
ghorârûpaiḥ ||

|| mârkaṇḍeya uvāca ||

evamukte vâmadevena râjannantaḥpure râjaputram jaghâna |
sa sâyakastigmatejâ viṣṭaḥ śrutvâ dalastatra vâkyam babhâṣe |

|| râjovāca ||

ikṣvâkavo hanta carâmi vaḥ priyam nihammimam vipramadya
pramathya |

âniyatâmaparastigmatejâḥ paśyadhvam me vîryamadya
kṣitîśâḥ ||

|| vâmadeva uvāca ||

yattvamenam sâyakam ghorârûpam viṣeṇa digdham mama
samdadhâsi |

na tvetam tvam śaravarṣam vimoktum samdhâtum vâ śakyase
mânaveudra ||

|| râjovāca ||

ikṣvâkavaḥ paśyata mām grhitam na vai śaknomyeṣa śaram
vimoktum |

na cāsya kartum nâsamabhyutsahâmi śyusmânvai jivatu
vâmadevaḥ ||

|| vâmadeva uvāca ||

samspr̥syainâm mahiṣim sâyakena tatasmâdenaso mokṣyase
tvam |

tatustathâ kṛtavân-pârthivastu tato munip râjaputri babhâṣe ||

|| râjaputryuvāca ||

yathâ yuktam vâmadevâhamenam dine dine samdiṣanti
nṛsamsam |

brâhmaṇebhyo mṛgayansûrtâni¹⁾ tathâ brahmapuṇyalokam
labheyam ||

|| vâmadeva uvāca ||

tvayâ trîtam râjakulam śubheksaṇe varam vṛṣiṣvâpratimam
dadâmi te |

praśâdhimam svajanam râjaputri ikṣvâkurâjyam sumahaccâ-
pyanindye ||

|| râjaputryuvāca ||

varam vṛṣe bhagavannevameva vimucyatâm kilbiṣâdadya

¹⁾ mṛgayanniti abândaso bhāgavyatyayaḥ | (Caturbhujamîtra) Fischel and
Geldner, Vedische Studien 2, 115, 118, 124. ॐ ॥ ॐ ॥

bhartā ।

śivena cūdhyaḥi saputrabāndhavam varo vṛto hyesa mayā
dvijāgrya ॥

॥ mārkaṇḍeya uvāca ॥

śrutvā vacaḥ sa munī rājaputryāstathāstviti prāha kurupra-
vira ।

tataḥ sa rājā mudito babhūva vāmyau cāsmāi pradadau sarpa-
pranāmya ॥

VII. Pañcatantra 2. 5.

kasmimścidadhiṣṭhāne kaulikarathakārau prativasataḥ sma ।
tatra tau janmaprabhṛti saha cāriṇāvāstām । parasparamatīva
snehaparau sakalasthānavihūriṇau sadaiva kālam nayataḥ । atha
kadā cittatrādhīṣṭhāne kasmimsciddevāyatane yātrāmahotsavaḥ
samvṛtataḥ । tatra ca naṭanartakacāraṇasamkule nānādeśāgata-
janāvṛte tau saha carau bhrāmyantau kām cidrājakanyām
kareṇukārūḍhām sarvalakṣaṇasanāthām kañcukivarsadharapari-
vāritām devatādarśanāya samāyātām drṣṭavāntau । athāsau
kaulikaḥ drṣṭvā viśārdita iva duṣṭagrahagrṛhita iva kāmāsa-
rairhanyamānaḥ sahasā bhūtaḥ nipapāta । atha tam tadavastha-
mavalokya rathakārastadduḥkhaduḥkhita āptapurusaistaḥ samut-

kṣipyā svagrhamānāyayat । tatra ca vividhaiḥ śitopacāraiścikit-
sakopadiṣṭairmantravādibhirupacāryamānaścirātkatham citsacetano
babhūva । tato rathakāreṇa pṛṣṭaḥ । bho mitra kimevaṃ tvama-
kasmādvicetano jātaḥ । tatkathyatāmātmasvarūpam । sa āha ।
vayasya yadyevaṃ tacchṛṇu me rahasyam yena sarvāmātmave-
danām te vadāmi । yadi tvam mām suhrdaṃ manyase tataḥ
kūṣṭhapradānena prasādaḥ kriyatām । kṣamyatām yadvā kim
citpranayātirekādāyuktaṃ tava mayānuṣṭhitam । so 'pi tadākāṅhya
bāspapihitauayanāḥ sagadgadamuvāca । vayasya tadduḥkhakāra-
ṇam kim tava । tadvada yena pratikāraḥ kriyate yadi śakyato
kartum । uktaṃ ca yataḥ ।

auśadhārthasumantrāṇām buddheścaiva mahātmanām ।

asādhyam nāsti loka 'tra yadbrāhmāṇḍasya madhyagam ॥

tadesām caturṇām yadi sādhyam bhaviṣyati tadahaṃ
sādhaiṣyāmi । kaulika āha । vayasya eteṣāmanyēṣāmapī sahasraśa
upāyānāmasādhyam tanmama duḥkham । tasmānmama maraṇe
mā kālakṣepam kuru । rathakāra āha । bho mitra yadapyaśādhyam
tathāp nivedaya yenāhamapi tadasādhyam matvā tvayā saha
vahnau pravīśāmi । na kṣaṇamapi tvadvīyogam sahiṣye । eṣa me
niścayaḥ । kaulika āha । vayasya yāsau rājakanyā kareṇukārūḍhā
tatrotsave drṣṭā tasyā darśanānantaram makaradhvajena mame-
yamavasthā vilīṭā । canna śaknōmi tadvedanām soḍhum । rathakāro
'pi sasmitamidamāha । vayasya diṣṭyā yadyevaṃ tarhi siddham

naḥ prayojanam | tadāyaiva tayā saha saṅgamaḥ kriyatūmīti |
 kaulika āha | vayasya yatra kanyāntahpure vāyuraṃ muktvan̄yasya
 praveśo nāsti tatra rakṣāpuruṣādhiṣṭhite katham mama tayā saha
 saṅgamaḥ | tatkiṃ māmasatyavacanena viḍambayasi | rathakāra
 āha | mitra paśya me buddhiprabhāvam | evamabhidhāya tatksa-
 nātkilasamcāriṇam vainateyam sabāhuyugalam oirajārjunavṛkṣa-
 dāruṇā śaṅkhaçakragadāpadmānviṭam sakirīṭakanustubhamaghaṭa-
 yat | tatastasminkaulikam samāropya viṣṇucihnacihnitam kṛtvā
 kilasamcaranavijñānam ca darśayitvā provāca | vayasya anena
 viṣṇurūpeṇa gatvā kanyāntahpure niśithe rājakanyāmekākinim
 saptabhūmikaprāsādapṛāntagatām mugdhasvabhāvām tvām vāsude-
 devam manyamānām svakiyamithyāvakrauktibhi rañjayitvā
 vātsyāyanoktavidhinā bhaja | kauliko 'pi tadākarnya vāsudevarūpi
 rahastadā gatvā tatra tāmāha | rājaputri suptā kiṃ vā jāgarṣi |
 aham tava kṛte samudrātsānurāgo lakṣmim viḥayaivāgataḥ |
 tatkriyatām mayā saha saṅgama itī | sāpi garuḍārūḍham catur-
 bhujam sāyudham kaustubhopetamavalokya savismayā śayanādut-
 thāya provāca | bhagavan aham mānuṣi kīṭikāśuoirbhagavāmst-
 railokyapāvāno vandaniyaśca | tatkathametadyujyate | kaulika
 āha | subhage satyamabhihitam bhavatyā | param kiṃ tu rādhā
 nāma me bhāryā gopakulaprasūtā prathamamāsīt | sā tvamatrā-
 vatīrṇā | tenāhamāyātaḥ | ityuktā sā prāha | bhagavanyadyevam
 taume tātam pṛārthaya | so 'pyupakalpya tubhyam mām praya-

cehati | kaulika āha | subhage nāham darśanapātham mānoṣānām
 gacchāmi kiṃ punarālāpakaraṇam | tvam gāudharveṇa vivāheṇūt-
 mānam prayoccha | no ceçchāpam dattvā sāvayam te pitaram
 bhasmasātkaṛiṣyāmīti | evamabhidhāya garuḍādevatīrya savye
 pāṇau kṛtvā tām sabhayām salaḥjām vepamānām śayyāyāmana-
 yattataśca rātriṣeṣam yāvadvātsyāyanoktavidhinā niṣevya pratyūṣe
 'laksito jagāma | evam tām tasya nityam sevamānasya kālo yāti |
 atha kadā citkañcukīnastasyā adharoṣṭhapravālakhaṇḍanam drṣṭvā
 mithaḥ procuḥ | aho paśyatāsyā rājakanyāyāḥ puṃṣopabhuktāyā
 iva śarīrāvayavāḥ sambhavyante | tatkathamayam surakṣite
 'pyasmingṛha evamvidho vyavahārah | tadrājṣe nivedayāmaḥ |
 evam niścitya sarve sametya rājanam procuḥ | deva vayam na
 vidmaḥ | param surakṣite 'pi kanyāntahpure kaścitpraviśati |
 taddevaḥ pramānamīti | tacchrutvā rājātīva vyākulitacitto devim
 rahasthām provāca | devi jñāyatām kimete kañcukino vadanti |
 tasya kṛtāntaḥ kupito yenaitadevam kriyate | devyapi tadākarnya
 vyākulībhūtā satvaram gatvā tām khaṇḍitādharām nakhavikarti-
 taśarīrāvayavāmapaśyat | āha ca | āḥ pāpe kulakalanīni kimevam
 śilakhaṇḍanam kṛtam | ko 'yam kṛtāntāvalokitastvatsakāśamabhi-
 yeti | tatkathyatāmevamgate 'pi satyam | tacchrutvā sāpi trapād-
 homukhī sakalam viṣṇurūpakaulikavṛttāntam nivedayāmāsa | sāpi
 tacchrutvā prahasitavadanā pulakānkitasarvāṅgī satvaram gatvā
 rājanamūce | deva diṣṭyā vardhase | nityameva niśithe bhagavān-

nārāyaṇaḥ kanyakāpārśve 'bhyeti | tena gāndharvavivāhena sāvivāhitā | tadadya tvayā mayā ca rātrau vātāyanagatābhyāṃ niśithe draṣṭavyo yato na sa mānuṣaiḥ sahālpam karoti | tacchrutvā harsitasya rājñastaddinaṃ varṣāsataprayamiva katham cijjagāma | tatastu rātrau nibhṛto bhūtvā rājñisahito rājā vātāyanastho gaganāsaktadṛṣṭiryāvattiṣṭhati tāvadgaruḍārūḍham taṃ śaṅkhacakraḡadāpadmahastaṃ yathoktacihnākitam vyomno 'vatarantamapaśyat | tataḥ sudhāpūraplāvitamivātmānaṃ manyamānastāmuvāca | priye nāstyanyo dhanyataro mattastvattaśca yatprasūtiṃ nārāyaṇo bhajate | tatsiddhāḥ sarve 'smākaṃ manorathāḥ | adhunā jāmātṛprabhāveṇa sarvā vasumatī vaśe bhaviṣyati | evaṃ niścitya sarvaiḥ simādhipaiḥ saha maryādāvyatikramakarot | te ca taṃ maryādāvyatikrameṇa vartamānamālokya sarve sametya tena saha vighrahaṃ cakruḥ | atrāntare sa rājā devīmukhena tāṃ duhitaramuvāca | putri tvayi duhitari sthitāyāṃ kimevaṃ yujyate yatsarve pārthivā mayā saha vighrahaṃ kurvanti | tatsambodhyo 'dya bhartā tvayā yathā sa mama śatrūṅvyāpādāyati | atha tayā sa kauliko rātrau savinayamabbihitaḥ | bhagavan tvayi jāmātari sthite mama tāto yacchatrubhiḥ paribhūyate tanna yuktam | tatprasādam kṛtvā sarvāmstāṅvyāpādāya | kaulika āha | subhage kiyaṅmātrāstvete tava pituḥ śatravaḥ | tadviśvastā bhava kṣaṇenāpi sudarśanacakreṇa sarvāmstilaśaḥ khaṅḡayīṣyāmi | atha gacchatā kālena samastadeśaḥ śatrubhirvyāptaḥ | asya

kevalam sa rājā prakāraśeṣaḥ kṛtaḥ | tathāpi vāsudevarūpadharṃ kaulikamajānanrājā nityameva viśeṣataḥ karpūrāgurukastūrikādi-parimalaviśeṣānnānāprakāravastrabhakṣyapeyāṃśca preṣayanduhitṛmukhena tamūce | bhagavanprabhāte nūnam sthānabhaṅgo bhaviṣyati yato yavasendhanakṣayaḥ samjātastathā sarvo 'pi jaṇaḥ prahārirjarjaritadehaḥ samvṛtto yoddhumakṣamaḥ pracuro mṛtaśca | tadevaṃ jñātvātra kāle yaḡucitam bhavati tadvidheyamiti | tacchrutvā 'kauliko 'pyacintayadyatsthānabhaṅge jāte mamānayā saha viyogo bhaviṣyati | tasmāḡgaruḡamāruhya sāyudhamātmānamākāśe darśayāmi | kadā cinmāṃ vāsudevaṃ manyamānāste sāśaṅkā rājño yoddhṛbhirhanyante | uktaṃ ca |

nirviṣeṇāpi sarpeṇa kartavyā mahati phaṇā |

viṣaṃ bhavatu mā bhūdvā phaṭāṭopo bhayaṅkaraḥ ||

atha vā mama sthānārtha udyatasya mṛtyurbhavati | tathāpi sunderataram | uktaṃ ca |

gavāmarthe brāhmaṅārthe svāmyarthe strikṛte 'tha vā |

sthānārthe yastyajetprāṅmāstasya lokāḥ sanātanāḥ ||

evaṃ niścitya pratyūṣe ḡantadhāvanam vidhāya tamūce | subhage samastaiḥ śatrubhirhatairannaṃ pānaṃ cāsvādayīṣyāmi | kiṃ bahunā | tvayāpi saha saṅgamam tataḥ kariṣyāmi | param vācyastvayā nijapitā yattvayā prabhāte sarvasainyena saha nagarāṅniṣkramya yoddhavyamaham cākāśasthastāṅnistejasaḥ kariṣyāmi | paścātsukhena bhavatā hantavyāḥ | yadi punaraḡam

tānsvayameva sūdayāmi tattesāṃ pāpātmanāṃ vaikunṭhiyā gatih
 syāt | tasmātte tathā kartavyā yathā palāyanto hanyamānāḥ
 svargam na gacchanti | sāpi tadākarma pituḥ samīpam gatvā
 sarvaṃ vṛttāntaṃ nyavedayat | rājāpi tasyā vākyam śraddadhānaḥ
 pratyūṣe samutthāya susaṃnaddhasainyo yuddhārthaṃ nirjagāma |
 kauliko 'pi maraṇakṛtaniścayaścāpapānirgaganagatirgarudārūḍho
 yuddhāya prasthitaḥ | atrāntare bhagavatā nārāyaṇenātītānāgata-
 vartamānavedinā smṛtamātro vainateyaḥ saṃprāpto vihasya
 proktaḥ | bho garutman jānāsi tvam yanmama rūpeṇa kauliko
 dārumayagaruḍe samārūḍho rājakanyāṃ kāmāyate | so 'bravit |
 deva sarvaṃ jñāyate taocesṭitam | tatkiṃ kurmaḥ sāmpratam |
 śrībhagavānāha | adya kauliko maraṇe kṛtaniścayo vihitaniyamo
 yuddhārthe vinirgataḥ | sa nūnam pradhānakṣatriyaśarāhato
 nidhanamesyati | tasminhate sarvo jano vadiṣyati yatprabhūta-
 kṣatriyaiर्मilitvā vāsudevo garuḍaśca nipātitaḥ | tataḥ paraṃ loka
 āvayoḥ pūjāṃ na kariṣyati | tatastvam drutatarāṃ tatra dāruma-
 yagaruḍe saṃkramaṇaṃ kuru | ahamapi kaulikaśarīra āveśaṃ
 kariṣyāmi yena sa śatrūṅvyāpādayati | tataśca śatruvadhādāva-
 yormāhātmyavṛddhiḥ syāt | atha tatiheti pratipanne śrībhagavān-
 nārāyaṇastaccharire saṃkramaṇamakaroḥ | tato bhagavanmāhāt-
 myena gaganaśthiḥ sa kaulikaḥ śaṅkhacakraḡadāpacihnitaḥ
 kṣaṇādeva līlayaiva sarvānapi pradhānakṣatriyānnistejasaścakāra |
 tat stena rājñā svasainyaparivṛtena jītā nihatāśca te sarve 'pi

śatravaḥ jātaśca lokamadhye pravādo yathānena viṣṇujāmātṛpra-
 bhāveṇa sarve śatravo nihatā iti | kauliko 'pi tānhatāndrṣṭvā
 pramuditamanā gagaṇādavatirṇaḥ sanyāvadrājāmātyapauralokā-
 taṃ nagaravāstavyaṃ kaulikaṃ paśyanti tataḥ pṛṣṭaḥ kimetaditi |
 tataḥ so 'pi mūlādārabhya sarvaṃ prāgvṛttāntaṃ nyavedayat |
 tataśca kaulikasāhasānurañjitamanasā śatruvadhādavāptatejasa
 rājñā sā rājakanyā sakalajanapratyakṣaṃ vivāhavidhinā tasmai
 samarpitā deśaśca pradattaḥ | kauliko 'pi tayā sārḍhaṃ pañca-
 prakāraṃ jīvalokasāraṃ viśayasukhamanubhavankālaṃ nināya |
 atastūcyate |

suprayuktasya dambhasya brahmāpyantaṃ na gacchati |
 kauliko viṣṇurūpeṇa rājakanyāṃ niṣevate ||

I. Aṣṭasāhasrikā prajñāpāramitā.

(R. Mitra) 312-20, 大般若波羅蜜多經第五百三十八(日七 80¹⁴⁻¹⁷). 佛說佛
 母出生三法藏般若波羅蜜多經第一(月七 1¹⁴⁻¹⁷), 等.

evaṃ mayā śrutamekasminsamaye bhagavānrūjagṛthe viharati
 sma | gṛḍhrakūṭaparvate mahatā bhikṣusaṃghena sārḍhamard-
 hatrayodaśabhirbhikṣuśantaiḥ sarvairarhadbhiḥ kṣiṇāsravairniḥ-
 kleśairvaśībhūtaiḥ suvimuktacittaiḥ suvimuktaprajñairājāneyair-
 mahānāgaiḥ kṛtakṛtyaiḥ kṛtakaraṇīyairapahṛīabhārairanuprāpta-
 svakārthaiḥ parikṣiṇabhavasamyojanaiḥ samyagājñāsuvimukta-

cittaiḥ sarvacetovaśiparamapāramiprāptairekaṃ puḍgalam sthā-
payitvā yadutāyusmantamānandaṃ | tatra khalu bhagavānyuṣ-
mantam subhūtiṃ sthaviramāmantrayate sma | pratibhātu te
subhūte bodhisattvānām mahāsattvānām prajñāpāramitāmārabhya
yathā bodhisattvā mahāsattvāḥ prajñāpāramitām niryāyuriti ||

同上 (B. Mitra) 52⁹⁰⁻¹², 大般若第五百五十五 (日 八 72⁹⁰⁻¹²), 佛母般若第
二十五 (月 七 74⁹⁰⁻¹⁷).

idamavocadbhagavānāttamanāste ca maitreyapramukhā bodhi-
sattvā mahāsattvā āyusmāṃśca subhūtirāyusmāṃśca śāriputra
āyusmāṃścānandaḥ śakraśca devānāmindraḥ sadevamānuṣāsura-
garuḍagandharvaśca loko bhagavato bhāṣitamabhyānandananti ||

II. Vajracchedikā prajñāpāramitā.

(F. Max Müller) 25⁹⁰⁻²⁸, 金剛般若玄奘譯, 月九 42⁹¹⁻⁴³, 義淨譯, 月九
38⁹²⁻⁵², 等).

tatkiṃ manyase subhūte api nu srotaāpannasyaivam bhavati
mayā srotaāpattiphalaṃ prāptamiti | subhūtirāha | no hīdam
bhagavan | na srotaāpannasyaivam bhavati mayā srotaāpattipha-
lam prāptamiti | tatkasya hetoḥ | na hi sa bhagavankaściddhar-
mamāpannaḥ | tenocyate srotaāpanna itī | na rūpamāpanno na
śabdāna gandhāna rasāna spraṣṭavyāna dharmānāpannaḥ¹ |
tenocyate srotaāpanna itī | sacedbhagavansrotaāpannasyaivam

¹ vyāndharm° 版本.

bhavenmayā srotaāpattiphalaṃ prāptamiti sa eva tasyātmagrāho
bhavetsattvagrāho jīvagrāhaḥ puḍgalagrāho bhavediti ||

bhagavānāha | tatkiṃ manyase subhūte api nu sakṛdāgāmina
evam bhavati mayā sakṛdāgāmiphalaṃ prāptamiti | subhūtirāha |
no hīdam bhagavanna sakṛdāgāmina evam bhavati mayā sakṛ-
dāgāmiphalaṃ prāptamiti | tatkasya hetoḥ | na hi sa kaściddharmo
yaḥ sakṛdāgāmitvamāpannaḥ | tenocyate sakṛdāgāmīti ||

bhagavānāha | tatkiṃ manyase subhūte api nvanāgāmina
evam bhavati mayānāgāmiphalaṃ prāptamiti | subhūtirāha | no
hīdam bhagavannānāgāmina evam bhavati mayānāgāmiphalaṃ
prāptamiti | tatkasya hetoḥ | na hi sa bhagavankaściddharmo yo
'nāgāmitvamāpannaḥ | tenocyate 'nāgāmīti ||

bhagavānāha | tatkiṃ manyase subhūte api nvarhata evam
bhavati mayārhattvaṃ prāptamiti | subhūtirāha | no hīdam
bhagavannārhata evam bhavati mayārhattvaṃ prāptamiti | tatkas-
ya hetoḥ | na hi sa bhagavankaściddharmo yo 'rhannāma |
tenocyate 'rhanniti | sacedbhagavannārhata evam bhavenmayār-
hattvaṃ prāptamiti sa eva tasyātmagrāho bhavetsattvagrāho
jīvagrāhaḥ puḍgalagrāho bhavet ||

tatkasya hetoḥ | ahamasmi bhagavamstathāgatenārhatā
sanyaksambuddhenāraṇāvihāriṇāmagryo nirdiṣṭaḥ | ahamasmi
bhagavannarhanvitarāgaḥ | na ca me bhagavannevam bhavati
arhannasmyaham vitarāga itī | sacenmama bhagavannevam bha-

vonmayārhattvaṃ prāptamīti na mām tathāgato vyākariṣyada-
raṇāvihāriṇāmugryaḥ subhūtiḥ kulaputro na kvacidviharati
tenocyate 'raṇāvihāryaraṇāvihāriti || 9 ||

bhagavānāha | tatkiṃ manyase subhūte asti sa kaściddharmo
yastathāgatena dīpaṃkarasya tathāgatasyārhatāḥ samyak-
buddhasyāṃtikādudgṛhitāḥ | subhūtirāha | no hi daṃ bhagavan-
nāsti sa kaściddharmo yastathāgatena dīpaṃkarasya tathāga-
tasyārhatāḥ samyak-sambuddhasyāṃtikādudgṛhitāḥ ||

bhagavānāha ; yaḥ kaścitsubhūte bodhisattva evaṃ vadedahaṃ
kṣetravyūhānnispādayiṣyāmīti sa vitathaṃ vadet | tatkāya hetoḥ |
kṣetravyūhāḥ kṣetravyūhā itī subhūte 'vyūhāste tathāgatena
bhāṣitāḥ | tenocyante kṣetravyūhā itī ||

tasmāttarhi subhūte bodhisattvena mahāsattvenaivamaṃpratiṣ-
ṭhitam cittaṃ utpādayitavyam yauna kvacitpratiṣṭhitam cittaṃ ut-
pādayitavyam na rūpapratiṣṭhitam cittaṃ utpādayitavyam na
śabdagaṃdharasaspraṣṭavyadharmapratiṣṭhitam cittaṃ utpādayita-
vyam | tadyathāpi nāma subhūte puruṣo bhavedupetakāyo mahā-
kāyo yattasyaivamarūpa ātmabhāvaḥ syāttadyathāpi nāma sumeruḥ
parvatarājaḥ tatkiṃ manyase subhūte api nu mahānsa ātmabhāvo
bhavet | subhūtirāha | mahānsa bhagavanmahānsugata sa
ātmabhāvo bhavet | tatkāya hetoḥ | ātmabhāva ātmabhāva itī
bhagavanna bhāvaḥ sa tathāgatena bhāṣitāḥ | tenocyata ātmabhāva
itī | na hi bhagavansa bhāvo nābhāvaḥ | tenocyata ātmabhāva

itī || 10 ||

bhagavānāha | tatkiṃ manyase subhūte yāvatyo gaṃgāyāṃ
mahānadyāṃ vālukāstāvatyā eva gaṃgānadyo bhavēyuh tāsu yā
vālukā api nu tā bahvyo bhavēyuh | subhūtirāha | tā eva tāvad
bhagavanbahvyo gaṃgānadyo bhavēyuh prāgeva yāstāsu gaṃ-
gānadiṣu vālukāḥ | bhagavānāha | ārocayāmi te subhūte prative-
dayāmi te yāvatyastāsu gaṃgānadiṣu vālukā bhavēyustāvato
lokadhātūnkaścīdeva¹ strī vā puruṣo vā saptaratnaparipūrṇāṃ¹
kṛtvā tathāgatebhyo 'rhadbhyāḥ samyak-sambuddhebhyo dānaṃ
dadyāttatkiṃ manyase subhūte api nu sā strī vā puruṣo vā tato
nidānaṃ bahu puṇyaskāṃdhaṃ prasunuyāt | subhūtirāha | bahu
bhagavanbahu sugata strī vā puruṣo vā tato nidānaṃ puṇya-
skāṃdhaṃ prasunuyādaprameyamasaṃkhyeyaṃ | bhagavānāha |
yaśca khalu puṇaḥ subhūte strī vā puruṣo vā tāvato lokadhātūn-
saptaratnaparipūrṇāṃ¹ kṛtvā tathāgatebhyo 'rhadbhyāḥ samyak-
sambuddhebhyo dānaṃ dadyādyaśca kulaputro vā kuladuhitā
veto dharmaparyāyādāṃptaśāścatuṣpādikāmapī gāthāmudgṛhya
parebhyo deśayetsaṃprakāśayedāyameva tato nidānaṃ bahutarāṃ
puṇyaskāṃdhaṃ prasunuyādaprameyamasaṃkhyeyaṃ || 11 ||

III. Adhyardhaśatikā prajñāpāramitā.

(Zur nordarischen Sprache und Literatur von E. Leumann) 97²⁸—98³¹, 理趣經(不空譯, 四八 3⁵⁷⁻¹⁴), 同(金剛智譯, 四八 16¹¹⁻¹⁹), 理趣分(玄奘譯, 日九 81¹²⁻¹⁰), 如照般若(施譯護, 成三 50¹³⁻¹⁷)等.

atha bhagavāṃ vairocanaḥ sarvatathāgataguhyadharmatāprāp-
tasarvadharmāprapaṃcaḥ punarapīdam mahāsukhāvajrāmogha...¹
nāma vajrāmoghadharmatāprajñāpāramitāmukhaṃ paramamanā-
dinidhanamadhyam deśayāmasa mahāriḡottamasiddhirmahābod-
hisattvānām mahāsukhottamasiddhyai samvartate | mahāsuk-
hottamasiddhirmahābodhisattvānām sarvatathāgatamahābodhyut-
tamasiddhyai samvartate | sarvatathāgatamahābodhyuttamasidd-
hirmahābodhisattvānām sarvamahāmārapramardanottamasiddhyai
samvartate | sarvamahāmārapramardanottamasiddhirmahābodhisat-
tvānām sakalamahātraidhātukaiśvaryottamasiddhyai samvartate |
sakalamahātraidhātukaiśvaryottamasiddhirmahābodhisattvānāma-
śeśānavāśeśasarvasattvadhātuparitrāṇasarvasattvāhitasukhapara-
mātyamtamahāsukhottamasiddhyai samvartata iti svām |

tatkasya hetoḥ |

yāvadbhavādhiṣṭhāne 'tra bhavaṃti varasūrayaḥ |
tāvatsattvārthamatulaṃ śakyāḥ kartumanirvṛtāḥ ||

¹ 缺字なり。不空及び施護の譯に據れば Samayaṃ とあるべし, 玄奘
と金剛智の譯に據れば mantraṃ とあるべし。

prajñāpāramitopāyājñānādhiṣṭhānasādhitāḥ |
sarvakarmaviśuddhyā tu bhavaśuddhā bhavaṃti haṃ ||
rāgādivinayo loka ā bhavāgrātsakṛtsalā¹ |
teṣāṃ viśodhanārtham tu vinayandātavānbhavam² ||
yathā padmaṃ suraktaṃ tu rāgadoṣairna lipyate³ |
vāsadoṣairbhava nityam na lipyaṃte jagaddhitāḥ⁴ ||
mahārāgaviśuddhāstu mahāsaukhyā mahādhanāḥ |
tridhātviśvaratām prāptā artham kūrvaṃtu tam dṛḍham ||
iti hā ||

IV. Lalitavistara.

(S. Leumann) 416¹³—418²¹, 方廣大莊嚴經(宿四 56¹⁶⁻²⁰).

iti hi bhikṣavastathāgato rātryāḥ prathame yāme tūṣṇibhāve-
nādhivāsayati sma | rātryā madhyame yāme samprañjanīyāṃ
kathāṃ pravartayati sma | rātryāḥ paścime yāme pañcakāubhad-
ravargiyānāmantryaitadavocāt | dvāvīmau bhikṣavaḥ pravrajitas-
yāntāvakraṃtau | yaśca kāmeṣu kāmasukhallikāyogo hīno grānyāḥ
pārthagjaniko nālamāryo 'narthopasaṃhito nāyatyāṃ brahma-
caryāya na nirvide na virāgāya na nirodhāya nābhijñāya⁵ na

¹ bhavātmaśakṛtsalā 版本.

² vinayandyātavānsvayam 版本.

³ 'te ca 版本. ⁴ 'ddhitām 版本.

⁵ 'jñāya は 'jñāyai の 俗語.

sambodhaye na nirvāṇāya samvartate | 'yā ceyamamadhyamā pra-
 tipadātmakāyaklamathānuyogo¹ duḥkho 'narthopasamhito dr̥ṣṭad-
 harnaduhkhaścāyatyāṃ ca duḥkhavipākaḥ | etau ca bhikṣavo
 dvāvantāvanupagamya madhyamayaiva pratipadā tathāgato
 dharmam deśayati | yaduta samyagdr̥ṣṭiḥ samyaksamkalpaḥ
 samyagvāksamyakkarmāntaḥ samyagājivaḥ samyagvyāyāmaḥ
 samyaksmṛtiḥ samyaksamādhiriti || catvārimāni bhikṣava āryasat-
 yāni | katamāni catvāri | duḥkham duḥkhasamudayo duḥkhaniro-
 dho duḥkhanirodhagāminī pratipat || tatra katamadduḥkham |
 jātirapi duḥkham jarāpi duḥkham vyādhirapi duḥkham maraṇa-
 mapi apriyasamprayogo 'pi priyaviprayogo 'pi duḥkham | yadapi
 icchauparyeṣamāṇo na labhate tadapi duḥkham | samkṣepātpañ-
 copādānaskandhā duḥkhamidamucyate duḥkham || tatra katamo
 duḥkhasamudayaḥ | yeyam tṛṣṇā punarbhavikī nandirāgasahagatā
 tatra tatrābhinandinyamucyate² duḥkhasamudayaḥ || tatra ka-
 tamo duḥkhanirodhaḥ | yo 'syā eva tṛṣṇāyāḥ punarbhavikyā nan-
 dirāgasahagatāyāstatra tatrābhinandinyā janikāyā nirvartikāyā³
 aśeṣo virāgo nirodho 'yaṃ duḥkhanirodhaḥ || tatra katamā duḥ-
 khanirodhagāminī pratipat | eṣa evāryāṣṭāṅgamārgaḥ | tadyathā
 | samyagdr̥ṣṭiriyāvatsamyaksamādhiriti | idamucyate duḥkhanirod-
 hāgāminī pratipadāryasatyamiti | imāni bhikṣavaścātvarīryasat-

yāni || iti duḥkhamiti me bhikṣavaḥ pūrvamaśruteṣu dharmeṣu
 yoniṣo manasikārādbahulikārājñānamutpannam cakṣurutpannam
 vidyotpannā bhūrirutpannā medhotpannā prajñotpannā ālokaḥ
 prādurbhūtaḥ || ayaṃ duḥkhasamudaya itī me bhikṣavaḥ pūrvā-
 maśruteṣu dharmeṣu yoniṣo manasikārādbahulikārājñānamut-
 pannam cakṣurutpannam vidyotpannā bhūrirutpannā medhotpannā
 prajñotpannā ālokaḥ prādurbhūtaḥ || ayaṃ duḥkhanirodha itī me
 bhikṣavaḥ sarvaṃ pūrvavadyāvādālokaḥ prādurbhūtaḥ || iyaṃ
 duḥkhanirodhagāminī pratipaditī me bhikṣavaḥ pūrvavadeva
 peyālam yāvādālokaḥ prādurbhūtaḥ || tatkalvidam¹ duḥkham
 pariññeyamiti me bhikṣavaḥ pūrvavadeva peyālam yāvādālokaḥ
 prādurbhūtaḥ | sa khalvayaṃ duḥkhasamudayaḥ prahātavya itī
 me bhikṣavaḥ pūrvamaśruteṣu dharmeṣu sarvaṃ yāvādāloka itī |
 sa khalvayaṃ duḥkhanirodhaḥ sāksātkartavya itī me bhikṣavaḥ
 pūrvavādāloka itī | sā khalviyaṃ duḥkhanirodhagāminī pratipad-
 bhāvayitavyeti pūrvavadyāvādāloka itī || tatkalvidam duḥkham
 pariññātamiti me bhikṣavaḥ pūrvamaśruteṣviti peyālam | sa khal-
 vayaṃ duḥkhasamudayaḥ prahīna itī me bhikṣavaḥ pūrvamaśruteti
 peyālam | sa khalvayaṃ duḥkhanirodhaḥ sāksātkṛta itī me
 bhikṣavaḥ pūrvamaśruteti peyālam | sā khalviyaṃ duḥkhanirod-
 hāgāminī pratipadbhāviteti me bhikṣavaḥ pūrvamaśruteṣu dhar-
 meṣu yoniṣo manasikārādbahulikārājñānamutpannam cakṣurut-

¹ yatkh^o 版本.

¹).....¹)Mahāvastu III, 331^o に於て yasāyam ātmaklamathānuyogo に作る. Mahā-
 vāgga I, 10^{1a} も yo cāyam attaklamathānuyogo に作る.

²) "nyāyam" 版本.

³) ni^o 版本.

pannam bhūrirutpannā vidyotpannā medhotpannā prajñotpannā
ślokaḥ prādurbhūtaḥ ॥

iti hi bhikṣavo yāvadeva me eṣu caturśvāryasatyēsu yoniṣo
manasikurvata evaṃ triparivartam dvādaśākāram jñānadarśanam
notpadyate¹ na tāvadahaṃ bhikṣavo 'nuttarāṃ samyaksam-
bodhimabhisambuddho 'smīti pratyajñāsisaṃ² | na ca me jñāna-
darśanamutpadyate ॥ yataśca me bhikṣava eṣu caturśvāryasatyē-
vevaṃ triparivartam dvādaśākāram jñānadarśanamutpannam |
skopyā ca me cetovimuktiḥ prajñāvimuktiśca sāksātkr̥tā | tato
'haṃ bhikṣavo 'nuttarāṃ samyaksambodhimabhisambuddho 'smīti
pratyajñāsisaṃ² | jñānadarśanam me udapādi kṣiṇā me jātirusitara
brahmacāryam kṛtam karaṇiyam nāparasmādbhavam prajānāmi ॥

V. Divyāvadāna.

(E. B. Cowell & B. A. Neil) 384²⁷—386¹⁹, 阿育王經第二(藏 + 32^{b15}—33^{a15}). 阿
育王傳(藏 + 4^{a17}—^{b6}).

bhagavataḥ stūpavandanāyāmātmānamalamkartukāmo 'mātya-
gaṇaparivṛtaḥ kurkutārāmam gatvā tatra vṛddhānte sthitvā
kṛtāñjaliruvāca | asti

kaścidanyo 'pi nirdiṣṭo dvitīyaḥ sarvadarśinā |

yathāhaṃ tena nirdiṣṭaḥ pāṃsudānena dhimatā ॥

¹) "śānamutp" 版本. ²) pratijñāsisaṃ 版本. Mahāvagga 11² に は paccaññāsira
とあり, Mahāvastu III, 333² に は abhyajñāsisaṃ に作る.

tatra yaśo nāmnā saṃghasthavira uvāca | asti mahārāja yadā
bhagavataḥ parinirvāṇakālasamaye tadāpalālam nāgaṃ damayitvā
kumbhakāraṃ caṇḍālīm gopālīm ca nāgaṃ ca mathurāmanu-
prāptastatra bhagavānāyusmantamānandamāmantrayate | asyām-
ānanda mathurāyām varṣasataparinirvṛtasya tathāgatasya gupto
nāmnā gāndhiko bhaviṣyati tasya putro bhaviṣyatyupagupto
nāmnāvavādakānāmagro 'lakṣaṇako buddho yo mama varṣasata-
parinirvṛtasya. buddhakāryam kariṣyati | paśyasi tvamānanda
dūrata eva nilanilāambararājim | evaṃ bhadanta | eṣa ānanda
urumuṇḍo nāma parvato 'tra varṣasataparinirvṛtasya tathāgatasya
naṭabhaṭikā nāmāraṇyāyatanam bhaviṣyati | etadagraṃ me
ānanda bhaviṣyati śamathānukūlānām śayyāsanānām yaduta
naṭabhaṭikā nāmāraṇyāyatanam | āha ca |

avavādakānām pravara upagupto mahāyaśāḥ |

vyākṛto lokanāthena buddhakāryam kariṣyati ॥

rājāha | kiṃ punaḥ sa śuddhasattva utpanno 'thādyāpi not-
padyata iti | sthavira uvāca | utpannaḥ sa mahātmā urumuṇḍe
parvate jītakleśo 'rhadgaṇaiḥ parivṛtastiṣṭhati lokānukampārtham |
api ca deva |

sarvajñalīlo hi sa śuddhasattvo dharmam praṇītam vadate
gaṇāgre |

devāsurenroragamānuṣāṃśca sahasraśo mokṣapuram
praṇetā ॥

tena khalu samayenāyusmānupagupto 'stādaśabhirarhat-
 sahasraiḥ parivṛto naṭabhaṭikāraṇyāyatane prativasati | śrutvā ca
 rājāmātyagaṇānāhūya kathayati | samnāhyatām hastirathāśva-
 kāyaḥ śighraṃ prayāsyāmyurumuṇḍaśailam | drakṣyāmi sarvās-
 ravavipramuktam sāksādarhantam hyupaguptam nāma || tato
 'mātyairabhihitaḥ | deva dūtaḥ prasayitavyo viṣayanivāsi sa
 devasya svayamevāgamisyati | rājāha | nāsāvasmākamarhatyabhi-
 gantum kiṃ tu vayamevārhamastasyābhigantum | api ca |

manye vajramayam tasya deham śailopamādhikam |

śāstrītyopaguptasya yo hyājñānāksipennarah ||

yāvadrājñā sthaviropaguptasya sakāśam dūto na preṣitaḥ
 sthavi radarśanāyāgamisyāmīti | sthaviropaguptaścintayati | yadi
 rājāgamisyati mahājanakāyasya piḍā bhaviṣyati gocharasya ca |
 tataḥ sthavireṇābhihitam | svayamevābhigamisyāmīti | tato rājñā
 sthaviropaguptasyārthe na uyānenāgamisyātīti yāvacca mathurām
 yāvacca pāṭaliputramantarā¹ nausamkramo 'vasthāpitaḥ | atha
 sthaviropagupto rājño 'śokasyānugrahārthamaṣṭādaśabhirarhatsa-
 hasraiḥ parivṛto nāvamabhiruhya pāṭaliputramanuprāptaḥ | tato
 rājapurusaḥ rājño 'śokasya niveditam deva diṣṭyā vardhasva |

anugrahārtham tava sopaguptaścittesvarah² śāsannakarna-
 hārah |

¹) *rān 版本. ²) sa upaguptaś とあるべきを詩法に合せんが爲め sopaguptaś としたるなり.

puraskṛtastirṇabhavaughapāraiḥ sārddham samabhyāgata eṣa
 padbhyām ||

śrutvā ca rājñā prītamanasā śatasahasramūlyo muktāhārah
 evaśarīrādapaniya¹ priyākhyāyino dattaḥ | ghāṭṭikam cāhūya
 kathayati | ghuṣyantām pāṭaliputre ghaṭṭāḥ sthaviropaguptas-
 yāgamanaṃ nivedyatām ||

VI 1. 法 身 偈.

Lalitavistara (S. Lefmann) 444^{12, 13} &c., 根本説一切有部毘奈耶出家事第
 二(卷四 86²¹). 等.

ye² dharmā hetuprabhavā hetum teṣāṃ tathāgato hyavadat |

teṣāṃ ca yo nirodho³ evaṃ vādi⁴ mahāśramaṇaḥ ||

2. 無 常 偈.

Abhidharmakośa-vyakhyā by Yaśomitra (Calcutta-MS.) 98^b, 瑜伽論第十八(卷
 一 82²⁴) 等.

anityā bata saṃskārā utpādayayadharmiṇaḥ |

utpadya hi nirudhyante teṣāṃ vyupaśamaḥ sukham ||

3. 金 鐔 偈.

以下六頌は Ein altjavanischer mahāyānistischer Katechismus von J. S. Speyer
 (ZDMG. LXVII, 2, pp. 357, 359) の中より取る. 一行の大日經疏第九(餘七 77^{27, 28})
 等.

¹) *davanīya 版本. ²) 此の一字は頌法に適はず, 恐くは所謂「字餘
 3」として變則の調子と見るべきか. ³) 造頌の法則上長音を要する
 を以て連聲法に依らずして nirodho とす. ⁴) avādīt の俗體.

ajñānapaṭalam vatsa apanitam jinaistava |

śalākairvaidyārājendraiḥ yathā lokasya taimiram |

4. 明 鏡 偈

一行疏第九(餘七 77^{a16-20})等

pratibimbamā dharmā acchāḥ śuddhā anāvīlāḥ |

agrāhyānabhilāpyāśca hetukarmasazudbhavāḥ ||

evam jñātvā imāndharmānissvabhāvānanāvīlān |

kuru sattvārthamatulam jāto 'syurasi tāyinām ||

5. 法 輪 法 螺 偈

一行疏第九(餘七 77^{b8-14})等

adyaprabhṛti lokasya cakram vartaya tāyinām |

sarvatra pūrya¹ vimalam dharmasāṅkhamanuttaram ||

na te 'tra vimatiḥ kāryā nirviśāṅkena cetasā |

prakāśayasva loke 'smin²mantrācāryauayam param ||

evam kṛtajño buddhānāmupakāriti giyate |

te ca vajradharāḥ sarve rakṣanti tava sarvaśaḥ ||

VII. Saddharmapundarikā.

(II. Kern & B. Nanjio) 315¹—320². 法華經第五(嚴什譯. 頁—38⁷—39²⁰)

atha khalu bhagavānsarvāvantaṃ bodhisattvagaṇamāmantra-

¹) 普通 pūryitvā となるべきを詩法に合せんが爲めに pūrya となせるなり. ²) prakāśaya mahātutam 原版. 一行の疏には鉢囉=合迦引奢也裝闍=合路計悉浪=合とあり.

yate sma | avakalpayadhvam me kulaputrā abhiśraddhadhavam¹

tathāgatasya bhūtāṃ vācam vyāharataḥ | dvitīyakamapi bhaga-

vāmstānbodhisattvānāmantrayate sma | avakalpayadhvam me

kulaputrā abhiśraddhadhavam¹ tathāgatasya bhūtāṃ vācam

vyāharataḥ | tṛtīyakamapi bhagavāmstānbodhisattvānāmantrayate

sma | avakalpayadhvam me kulaputrā abhiśraddhadhavam¹

tathāgatasya bhūtāṃ vācam vyāharataḥ | atha khalu sa sarvāvān-

bodhisattvagaṇo māitreyam bodhisattvam mahāsattvamagrataḥ

sthāpayitvāñjalim praḥhya bhagavantametadvocat | bhāṣatu

bhagavānetamevārtham bhāṣatu sugato vayam tathāgatasya

bhāṣitamabhiśraddhāsyaṃmah | dvitīyakamapi sa sarvāvānbodhis-

attvagaṇo bhagavantametadvocat | bhāṣatu bhagavānetame-

vārtham bhāṣatu sugato vayam tathāgatasya bhāṣitamabhiśrad-

dhāsyaṃmah | tṛtīyakamapi sa sarvāvānbodhisattvagaṇo bhagavan-

tametadvocat | bhāṣatu bhagavānetamevārtham bhāṣatu sugato

vayam tathāgatasya bhāṣitamabhiśraddhāsyaṃma iti ||

atha khalu bhagavāmsteṣāṃ bodhisattvānāṃ yāvattṛtīyakam-

apyadhyeṣaṇāṃ viditvā tānbodhisattvānāmantrayate sma | tena hi

kulaputrāḥ śṛṇudhvamidamevamrūpaṃ mamādhiṣṭhānabalādhānaṃ

yadayaṃ kulaputrāḥ sadevamānuṣāsuro loka evaṃ samjānīte |

sāmprataṃ bhagavatā śākyamuninā tathāgatena śākyakulāda-

bhiniṣkramya gayāhvaye mahānagare bodhimandavarāgragatenā-

¹) E しくは abhiśraddhadhvam.

nuttarām samyaksambodhimabhisambuddha iti | naivam draṣṭavyam | api tu khalu punaḥ kulaputrā bahūni mama kalpakotīnayutaśatasahasrānyanuttarām samyaksambodhimabhisambuddhasya | tadyathāpi nāma kulaputrāḥ pañcāśatsu lokadhātukoṭīnayutaśatasahasreṣu ye pṛthivīdhātuparamānavah | atha khalu kaścideva puruṣa utpadyate sa ekaṃ paramāpurajam gṛhītvā pūrvasyām diśi pañcāśalokadhātvasaṃkhyeyaśatasahasrānyatikramya tadekaṃ paramāpurajam samupanikṣipet | anena paryāyeṇa kalpakotīnayutaśatasahasrāni sa puruṣaḥ sarvām^mstālokadhātūnvyapagatapṛthivīdhātūnkuryātsarvāni ca tāni pṛthivīdhātuparamāpurajāmsyaena paryāyeṇaena ca lakṣanikṣepena pūrvasyām diśyupanikṣipet | tatkiṃ manyadhve kulaputrāḥ śakyam te lokadhātavaḥ kenaciccintayitum vā gaṇayitum vā tulayitum vopalakṣayitum vā | evamukte maitreya bodhisattvo mahāsattvaḥ sa ca sarvāvāubodhisattvagano bodhisattvarāśirbhagavantame^mtadavocat | asaṃkhyeyāste bhagavā^mlokadhātavo 'gaṇanīyāścittabhūmisamatikrāntāḥ | sarvaśrāvaka^mpratyekabuddhairapi bhagavannāryeṇa jñānena na śakyam cintayitum vā gaṇayitum vā tulayitum vopalakṣayitum vā | asmākamapi tāvadbhagavannaivartyabhūmisthitānām bodhisattvānām mahāsattvānāmasminsthāne citta^mgocaro na pravartate | tāvadaprimeyā bhagavamste lokadhātavo bhaveyuriti ||

1) "nvyavag" 原 版.

evamukte bhagavamstānbodhisattvānmahāsattvānetadavocat | ārocayāmi vaḥ kulaputrāḥ prativedayāmi vo yāvantaḥ kulaputrāste lokadhātavo yeṣu tena puruṣeṇa tāni paramāpurajāmsyupanikṣiptāni yeṣu ca nopanikṣiptāni sarveṣu teṣu kulaputrā lokadhātukoṭīnayutaśatasahasreṣu na tāvanti paramāpurajāmsi samvidyante yāvanti mama kalpakotīnayutaśatasahasrānyanuttarām samyaksambodhimabhisambuddhasya | yataḥ prabhṛtyahaṃ kulaputrā asyām sahāyām lokadhātūn^m sattvānām dharmam deśāyamyanyeṣu ca lokadhātukoṭīnayutaśatasahasreṣu¹ | ye ca mayā kulaputrā strāntarā tathāgatā arhantaḥ samyaksambuddhāḥ parikirtitā dīpaṃkaratathāgataprabhṛtasteyāḥ ca tathāgatānāmarhatām samyaksambuddhānām parinirvāṇāni [mayaiva tāni kulaputrā upāyakausalyadharmadeśanābhinirhāranirmitāni | api tu khalu punaḥ kulaputrāstathāgata āgatāgatānām sattvānāmindriyaparāparajñatām vīryārabdhimātratām vyavalokya tasminnātmano nāma vyāharati tasminstasminścātmanaḥ parinirvāṇam vyāharati tathā tathā ca sattvānparitoṣayati nānāvidhairdharma^m paryāyāiḥ | tatra kulaputrāstathāgato nānādhimuktānām sattvānāmalpakuśalamūlūnām bahūpakleśānāmevaṃ vadati | daharo 'hamasmi bhikṣavo jātyābhiniṣkrānto 'cirābhisambuddho 'smi bhikṣavo 'nuttarām samyaksambodhim | yatkkhalu punaḥ kulaputrāstathāgata evaṃ cirābhisambuddha evaṃ vyāharatyacirā-

1) 原本には脱落符なし今ま私に加ふ。

bhisambuddho 'hamasmiti nānyatra sattvānāṃ paripācanārtham-
 avatāraṇārthamete dharmaparyāyā bhāsitāḥ | sarve ca te kulapu-
 trā dharmaparyāyāstathāgatena sattvānāṃ vinayārthāya bhāsi-
 tāḥ | yāṃ ca kulaputrāstathāgataḥ sattvānāṃ vinayārthavācam
 bhāṣata ātmopadarśanena vātmārambanena vā parārambanena vā
 yatkiṃcittathāgato vyāharati sarve te dharmaparyāyāḥ
 satyāstathāgatena bhāsitā nāstyatra tathāgatasya mṛṣāvadaḥ |
 tatkasya hetoḥ | dr̥ṣṭam hi tathāgatena traidhātukaṃ yathābhū-
 tam na jāyate na mriyate na cyavate nāpapadyate na saṃsarati
 na parinirvāti na bhūtam nābhūtam 'na sannam nāsannam' na
 tathā nānyathā na vitathā nāvitathā nānyathā na tathā |
 traidhātukaṃ tathāgatena dr̥ṣṭam yathā bālaprthagjanā na
 paśyanti pratyaḥsadharmā tathāgataḥ khalvasminsthāne 'saṃ-
 pramoṣadharmā | tatra tathāgato yāṃ kāṃcīdvācam vyāharati
 sarvaṃ tatsatyam na mṛṣā nānyathā | api tu khalu punaḥ
 sattvānāṃ nānācaritānāṃ nānābhiprāyānāṃ saṃjñāvikalpacari-
 tānāṃ kuśalamūlasaṃjananārtham vividhāndharmaparyāyānvivid-
 hairārambanairvyāharati | yaddhi kulaputrāstathāgatena karta-
 vyam tattathāgataḥ karoti | tāvaccirābhisambuddho 'parimitā-
 yuṣpranānam tathāgataḥ sadā sthitaḥ | aparinirvṛtastathāgataḥ
 parinirvāṇamādarśayati vaineyavaśena | na ca tāvanme kulaputrā
 adyāpi paurviki bodhisattvacaryā pariniṣpāditāyuspramāṇamapya-

paripūrṇam | api tu khalu punaḥ kulaputrā adyāpi taddviguṇena
 me kalpakotīnayutaśatasahasraṇi bhaviṣyantyāyuspramāṇasyā
 paripūrṇatvāt | idāniṃ khalu punarahaṃ kulaputrā aparinir-
 vāyamāna eva parinirvāṇamārocayāmi | tatkasya hetoḥ | sattvāna-
 haṃ kulaputrā anena paryāyena paripācayāmi mā haiva me
 'ticiraṃ tiṣṭhato 'bhikṣuadarśanenākṛtakuśalamūlāḥ sattvāḥ
 puṇyavirahitā daridrabbhūtāḥ kāmalolupā andhā dr̥ṣṭijālasaṃchan-
 nāstīṣṭhati tathāgata itī viditvā kilikṛtasamjñā bhaveyurna ca
 tathāgate durlabhasamjñāmutpādayeyurāsannā vayan tathāga-
 tasyeti vīryam nārabheyustraidhātukānnihsaraṇārtham na ca
 tathāgate durlabhasamjñāmutpādayeyuḥ | tataḥ kulaputrāstathā-
 gata upāyakaūśalyena teṣāṃ sattvānāṃ durlabhaprādurbhāvo
 bhikṣavastathāgata itī vācam vyāharati sma | tatkasya hetoḥ |
 tathā hi teṣāṃ sattvānāṃ bahubhiḥ kalpekotīnayutaśatasahas-
 rairapi tathāgatadarśanam bhavati vā na vā | tataḥ khalvahaṃ
 kulaputrāstadārambanam kṛtvaivam vadāmi | durlabhaprādurbhāvā
 hi bhikṣavastathāgatā itī | te bhūyasyā mātrayā durlabha-
 prādurbhāvāṃstathāgatānviditvāścaryasaṃjñāmutpādayiṣyanti
 śokasaṃjñāmutpādayiṣyanti apaśyantaśca tathāgatānarhataḥ
 samyaksambuddhāntṛṣitā bhaviṣyanti tathāgatadarśanāya | teṣāṃ
 tāni tathāgatārambanamanaskāraakuśalamūlāni dīrgharātramār-
 thāya hitāya sukhāya ca bhaviṣyantyetamartham viditvā
 tathāgato 'parinirvāyanneva parinirvāṇamārocayati sattvāniṃ

).....) na sattam nāsattam 版本.

vaineయావాśamupādāya | tathāgatasyaiśa kulaputrā deśanāparyāyo
yadevaṃ vyāharati nāstyatra tathāgatasya mṛśāvādaḥ ||

VIII. Bodhisattvabhūmi.

(Cambridge MS. Add 1702) 56^a—57^a. 原寫本の文字は或は磨滅し或は殘
缺して讀む可らざるもの多し。此等は前後の文句を参考し又は西瀛
譯文より推定して補填せり。瑜伽論第四十(卷二 92^{ab}—92^{bc})等。

uddānam.

svabhāvaścaiva sarvaṃ ca duṣkaram sarvatomukhaṃ |

syātsatpauruṣayuktaṃ ca sarvākāraṃ tathaiiva ca ||

vighātārthikayuktaṃ ca ihāmutrasukhaṃ tathā |

viśuddhaṃ ca navākāraṃ śīlametatsamāsataḥ ||

tatra śīlaṃ bodhisattvānāṃ katamat | tadapi navavidhaṃ
veditavyaṃ | svabhāvaśīlaṃ sarvaśīlaṃ duṣkaraśīlaṃ sarvatomuk-
haṃ śīlaṃ satpuruṣaśīlaṃ sarvākāraśīlaṃ vighātārthikaśīlamihā-
mutrasukhaṃ śīlaṃ viśuddhaśīlaṃ ca ||

tatra svabhāvaśīlaṃ katamat | caturbhirgūṇairiyuktaṃ samāsato
bodhisattvānāṃ svabhāvaśīlaṃ veditavyaṃ | katamaścaturbhiḥ |
parataḥ śīlasamādānatayā suviśuddhāśayatayā vyatikrāntasya
pratypattyaḥ vyatikramāya cādarajātasyopasthitasmṛtitayā | tatra
parataḥ śīlasamādānādbodhisattvasya paramupanidhāya śikṣāvya-
tikrame vyapatrāpyamutpadyate | suviśuddhāśayatayā śīleṣu
bodhisattvasyātmānamupanidhāya śikṣāvvyatikrame hrīrutpadyate |

śikṣāpadānāṃ vyatikramapratyāpattyaḥ cādarajātasyādita evāvvyatikra-
mādbodhisattvo dvābhyāmābhyāṃ kāraṇābhyāṃ niṣkaukṛtyo
bhavati | evamayam bodhisattvaḥ samādānamāśayaśuddhiṃ ca
niśritya hrīvyapatrāpyamutpādayati | hrīvyapatrāpyācchīlaṃ samā-
dattaṃ rakṣati | rakṣan niṣkaukṛtyo bhavati | tatra yacca parataḥ
samādānam yaśca viśuddho 'dhyāśayaḥ itītau dvau dharmau yā
ca vyatikramapratyāpattiryaścādarāḥ avyatikrame anayordvayor-
dharmayorāvāhakau | tatra yacca parataḥ samādānam yaśca
suviśuddho 'dhyāśayo yaścāvvyatikramāyādara ityebhistribhird-
harmairavipattirbodhisattvaśīlasya veditavyā | vyatikramapratyā-
pattyaḥ punaśchidritasya (śīlasya) pratyanayanavyutthānam
veditavyaṃ | tatpunaretaccaturbhirgūṇairiyuktaṃ svabhāvaśīlaṃ
bodhisattvānāṃ kalyāṇam svaparahitāya bahujanahitāya bahuja-
nasukhāya lokānukampāyai arthāya hitāya devamanuṣyaṇāṃ
samādānato 'nuśikṣaṇataśca | aprameyaṃ veditavyamaprameya-
bodhisattvaśikṣāparigṛhitatayā | sattvānugrāhakaṃ veditavyaṃ
sarvasattvahitasukhapratyupasthitatayā | mahāphalānuśāṃsam
veditavyamanuttarasamyaksaṃ bodhiphalaparigrahānupradāna-
tayā ||

IX. Madhyamakavṛtti.

(L. de la Vallée Poussin) 490^{ab}—494^b 中論第四(卷一 51^{ab}—51^{bc})の二頌を釋
する一説なり。

atha kiṃ punaḥ śūnyatāyāṃ prayojanam | uktameva tadātma-
parikṣāyāṃ |

karmakleśakṣayānmokṣaḥ karmakleśā vikalpataḥ |

te prapañcātprapañcastu śūnyatāyāṃ nirudhyate || iti¹⁾ |

ato niravaśeṣaprapañcopaśamārtham śūnyatopadiśyate | tasmāt-
sarvaprapañcopaśamaḥ śūnyatāyāṃ prayojanam | bhavāṃstu
nāstitvam śūnyatārtham parikalpayanprapañcajalameva samvard-
hayamāno na śūnyatāyāṃ prayojanam veti ||

atha kā punaḥ śūnyatā | sāpi tatraivoktā |

aparapratyayam śāntaṃ prapañcairaprapañcitam |

nirvikalpamanānārthametattattvasya lakṣaṇam || iti²⁾ |

ataḥ prapañca-ivṛttisvabhāvāyāṃ śūnyatāyāṃ kuto nāstitvamiti
śūnyatāmapi na jānāti bhavān | yaṃ cārthamupādāya śūnyatā-
śabdaḥ pravartate tamapihaiva pratipādayisyāmaḥ |

yaḥ pratītyasamutpādaḥ śūnyatām tāṃ pracakṣmahe |

sā prajñaptirupādāya pratipatsaiva madhyamā || iti³⁾ |

yaḥ pratyayairjāyati sa hyajāto

no⁴⁾ tasya utpādu⁵⁾ svabhāvato 'sti |

yaḥ pratyayādbinu⁶⁾ sa śūnya⁷⁾ ukto

1) 中論第三(卷一43a20). 2) 同上(卷一43b2, 3).

3) 中論第四(卷一52a4).

4) na 原 版. 同 版 本 239¹¹ の 文 に 據 り て 改 め た り.

5) °dah と 有 る べ き を 頌 法 の 爲 め に 斯 く 言 へ る な り.

6) °nah と 有 る べ き を 頌 法 に 合 せ ん が た め に 斯 く 言 へ る.

7) °nyu 原 版. 同 版 本 239¹² の 文 に 據 り て 改 め た り.

yaḥ śūnyatām jānāti¹⁾ so 'pramatta

iti²⁾ bhagavato gāthāvacaṇāt || evaṃ pratītyasamutpādaśabdasya
yo 'rthaḥ sa eva śūnyatāśabdasyārthaḥ | na punarabhāvaśabdasya
yo 'rthaḥ sā śūnyatā (śabdasyārthaḥ) | abhāvaśabdārtham ca
śūnyatārthamityadhyāropya bhavānasmānupālabhate | tasmācch-
ūnyatāśabdārthamapi na jānāti | ajānānaśca tvamevamupālam-
bham kurvanniyataṃ vihanyase ||

kaścāsmākaṃ yathoktamupālabhāṃ karoti yo bhagavatpra-
vacanopadiśṭāvīparitasatyadvayavibhāgam na jānāti | kevalam tu
granthamātrādhyayanapara eveti | ata ācāryaḥ karuṇayā parasya
mithyāpravacaṇārthāvabodhanirāsārtham bhagavatpravacaṇopa-
diśṭāvīparitasatyadvayavyavasthāmeva tāvadadhikṛtyāha |

dve satye samupāśrītya buddhānāṃ dharmadeśanā |

lokasamvṛtisatyam ca satyam ca paramārthataḥ ||

iha hi bhagavatām buddhānāṃ satyadvayamāśrītya dharm-
deśanā pravartate | katamatsatyadvayam | lokasamvṛtisatyam ca
paramārthasatyam ca || tatra |

skandhātmā loka ākhyātastatra loka hi niśrita

iti vacanātpañca skandhānupādāya prajñāpyamānaḥ pudgalo
loka ityucyate ||

samantādvāraṇam samvṛtiḥ | ajñānam hi samantātsarvapaḍār-
thatattvāvacchādanātsamvṛtiritiucyate | parasparasambhavanam

1) jānāti と 有 る べ き を 頌 法 に 合 せ ん が た め に 斯 く 言 へ る.

2) 弘 道 廣 顯 三 昧 經 第 二 (字 九 41^{b13}).

vā samvṛtiranyonyasamāśrayeṇetyarthaḥ | atha vā samvṛtiḥ sam-
keto lokavyavahāra ityārthaḥ | sa cābhidhānābhidheyajñānājñe-
yādilakṣaṇaḥ ||

loke samvṛtirlokasamvṛtiḥ | kim punaralokasamvṛtirapyasti
yata evaṃ viśiṣyate lokasamvṛtiriti | yathāvasthitapadārthānuvāda
eṣa | nātraisā cintāvatarati | atha vā timirakāmalādyupahatendri-
yaviparitadarśanāvasthānāste 'lokāsteṣāṃ yā samvṛtirasāvaloka-
samvṛtiḥ | ato viśiṣyate lokasamvṛtisatyamiti | etacca madhyama-
kāvatāre vistareṇoktaṃ | tato veditavyaṃ || lokasamvṛtyā satyaṃ
lokasamvṛtisatyam | sarva evāyamabhidhānābhidheyajñānājñeyā-
divyavahāro 'śeṣo lokasamvṛtisatyamityucyate | na hi paramār-
thata eva tatsambhavati | tatra hi

nivṛttamabhidhātavyaṃ nivṛtte cittagocare |

anutpannāniruddhā hi nirvāpamiva dharmatā ||

iti¹ kṛtvā kutastatra paramārthe vācāṃ pravṛttiḥ kuto vā
jñānasya | sa hi paramārtho 'parapratyayaḥ śāntaḥ pratyātmaved-
ya śryāṇāṃ sarvaprapañcātitaḥ | sa nopadiśyate | na cāpi jñāyate
uktaṃ hi pūrvam |

aparapratyayaṃ śāntaṃ prapañcāiraprapañcitaṃ |

nirvikalpamanānārthametattattvasya lakṣaṇaṃ || iti |

paramaścāsāvarthaśceti paramārthaḥ | tadeva satyaṃ paramār-
thasatyam | anayośca satyayorvibhāgo vistareṇa madhyamakāva-

¹ 中論第三(卷 - 43^{b1}).

tārādvaseyaḥ | tadetatsatyadvayamāśritya buddhānāṃ bhagava-
tāṃ dharmadeśanā pravartate || evaṃ vyavasthite deśanākrame |

ye 'nayorna vijānanti vibhāgaṃ satyayordvayoḥ |

te tattvaṃ na vijānanti gambhīraṃ buddhaśāsane ||

X. Abhidharmakośavyākhyā by Yaśomitra.

(Calcutta-MS, 93^b—95^b). 俱舍釋論(假諦譯)第四(卷 - 24^{a2}—24^{b2}), 俱舍論
(玄奘譯)第五(收九 118^{a14}—118^{b13})を参照すべし.

nāmakāyādayaḥ samjñāvākyaḥakṣarasamuktaya

iti | samjñāsamuktayo nāmakāyāḥ | vākyasamuktayaḥ padakā-
yāḥ | akṣarasamuktayo vyañjanakāyāḥ | samjñākaraṇamiti lokab-
hāṣeyaṃ | samjñākaraṇaṃ nāmadheyamiti paryāyaḥ | tathā hi
loke vaktāro bhavanti | devadatta ityasya samjñākaraṇamiti | sam-
jñāyāḥ karaṇaṃ samjñākaraṇaṃ yena samjñā caitasiko dharmāḥ
kriyate janyate | samjñāiva vā karaṇaṃ samjñākaraṇaṃ | sam-
jñāgrahaṇaṃ cānyakaraṇanivṛttyartham | karaṇagrahaṇaṃ caita-
sikaviśeṣaṇārthaṃ | yadi hi samjñā nāmetyucyeta caitasiko 'pi
sambhāvyeta | tatpunaḥ samjñākaraṇaṃ nāma rūpaṃ śabdo raso
gandho vetyevamādi | vākyaṃ padamiti | padyate gamyate
'neneti | padaṃ tu sūptinantaṃ padaṃ gṛhyate | tenāha |
yāvātārthaparisamāptistadyathā

anityā bata saṃskārā

ityevamādityādīśabdona

utpādavyayadharmiṇaḥ ।

utpadya hi nirudhyante teṣāṃ vyupāśamaḥ sukham ॥

ityevamādi । asyā gāthāyā evamarthaṃ vyācakṣate ।

anityā bata saṃskārā

iti pratijñā

utpādavyayadharmiṇa

iti hetuḥ । yasmādutpādavyayadharmavantaśmādanityā itī

paricchidyante

utpadya hi nirudhyante

iti dr̥ṣṭāntaḥ । ya utpadyante nirudhyante ca te anityāḥ । tadyathā

ghaṭādayaḥ tathā ca saṃskārā itī । apare punarvyācakṣate ।

asiddhabetusādhanārthametaditi । kathametadgamyate ।

utpādavyayadharmiṇas

ta itī । yasmādete utpadya nirudhyamānā dr̥ṣṭā itī । apare

varṇayanti ।

anityā bata saṃskārā utpādavyayadharmiṇa

itī । paryāyadvayametaducyate । kasmādityāha । yasmād

utpadya hi nirudhyanta

iti hetuvacanam ।

teṣāṃ vyupāśamaḥ sukham ।

ye hyanityāste duḥkhā atas

teṣāṃ vyupāśamaḥ sukham

itī vineyajanaṃ niyojayati । yena kriyāguṇakālasambandha-
viśeṣā gamyante । sāvyayakāravīśeṣaṇam vākyamitī vākyavido
vadanti । tadyathā pacati paṭhati gacchatīti kṛṣṇo gauro rakta itī
pacati pakṣyati apākṣidīti kriyāguṇakālānām sambandhaviśeṣā
gamyante tatpadam । tathā hi sāmānyavartamānānām padānām
yadvīśeṣe 'vasthānam sa vākyārtha ityāhuḥ । tadevam svalakṣa-
nābhidyotakam nāma kriyādisambandhaviśeṣābhidyotakam pada-
mityuktam bhavati । vyamjanamakṣaramitī varṇa ityārthaḥ । na tu
halevācāmapi vyamjanakatveneṣṭatvāt ॥

nau cākṣarānyapi lipyavayavānām nāmānīti । lipayo manusyā-
dibhiḥ patrādiṣu ye likhitāsteṣāmakṣarāṇi nāmāni । rūpanāma-
grahaṇe rūpapratītivadvyamjanagrahaṇe lipipratītirato vyamja-
namapi lipyavayavānām nāma bhavatīti lakṣaṇasāṃkaryam ।
tataśca yadabhipretam nāmno vyatiriktamanyadeva vyamjanamak-
ṣaramitī tannopapadyate । na vai lipyavayavānāmīti vistaraḥ ।
viparītametaditi vyācaṣṭe । yattu vyamjanagrahaṇe lipipratītirīti ।
tatpratyāyyapratyāyakabhāvena saṃketitattvāt । na tu tannāma-
bhāvāt ॥

samuktirīti uca samavāya ityetasya dhātoḥ ktini samuktirīti
etadrūpaṃ bhavati । yo 'rthaḥ samavāya itī । so 'rthaḥ samuktirīti
samavāya ityārthaḥ ॥

nanu ca te itī sautrāntikavacanam । naite vāksvabhāvā itī
vistareṇa vaibhāṣikavacanam । na ca ghoṣamātreṇeti । nānakṣarāt-

makena ghoṣeṅārtho 'vagamyate | kiṃ tarhī | vāñnāmnī pravartate
tannimātmarūpatāmiva vāca āpādayadarthatvaṃ dyotayati | tāṃ
vācamupādāya padārtham dyotayati | pratyāyayatītyarthah |
sautrāntika āha | na vai ghoṣamātram vāgiti vistarah | na vayam
ghoṣamātram vāgiti varṇayāmah | kaścideva tu ghoṣo varṇātma-
kah | saiva¹ vāgyo 'rtheṣu kṛtvadhīh kṛtamaryādah | etena
sanketāpekṣah śabdo 'rtham pratyāyayati | na yaḥ kaścicchabda
iti darśayati | kṛtasanketaḥ śabdo 'rtham pratyāyayatīti | taccai-
taccchabdamātrātpṛatītapadārthakātsidhyatīti | taccaitadarthadyo-
tanam nāmarahitācchabdājātyādyabhidheyapadārthakātsidhya-
tītyayamasyārtha iti | yadyutpādayatīti vistarah | vāci satyāṃ
sa cittaviprayukta utpadyata itīṣyate tenāśamkyate yadyutpāda-
yatīti | evaṃ cetsarvaṃ ghoṣamātram viśabhādigarjitamapi
nāmotpādayisyati | ghoṣasvabhāvā vāgiti kṛtvā | brūyāstvam
viśiṣṭa eva ghoṣo yo varṇātmakah sambhāvitaḥ sa eva nāmot-
pādayatīti | atrocyate | yādṛśo vā ghoṣaviśeṣa iṣyate nāmna
utpādakah | sa evārthasya dyotako bhaviṣyati | na tu sa cittavi-
prayukta ityabhiprāyah | atha prakāśayatīti vistarah | ghoṣeṅot-
padyamānena sa cittaviprayukta utpadyate | sa taṃ prakāśayat-
yarthadyotanāyeti yadiṣyate | atrocyate | sarvaṃ ghoṣamātram
nāma prakāśayisyatīti pūrvavadvācyam | na khalvapi śabdānāṃ
sāmagryamastīti | yadanekākṣaram nāma tadutpattiparikalpo

¹ sa 原本 西蔵譯に de kho-na とあり。

'nekaśabdāpekṣah | tenaivam vicāryate | ihoccaritapradhvansinah
śabdāḥ tasmādeṣāṃ yugapadavasthānam nāsti | ekasya ca drav-
yasato dharmasya bhāgaśah khaṇḍāśa utpādo na yukto yathā
ghaṭapaṭādeḥ prajñaptisataḥ kalpyata iti kathamutpādayanti
vāñnāmotpādayet | yadā tadutpādayati | tadā katham sā tadut-
pādayatīti vākyārthah | vartamānā hi vāñnāmotpādayantyutpāda-
yenna ca sarve vācchabdakṣaṇā yugapadvartamānā bhavanti |
yadā hi rūpanmīti raśabdo vartamāno bhavati | tadā ūkārapakā-
rākārā anāgatā bhavanti | yadā ūkāro vartamāno bhavati | tadā
raśabdo 'tītaḥ | pakārākārāvanāgatau | evaṃ pakārākārāvapi
kramaśo yadā vartamānanu bhavataḥ | tadetare na vartamānā iti |
evaṃ sā vāñnāms naivotpādayet | brūyāstvam vartamāno raśabd-
astasya rūpanāmnah pūrvam bhāgamutpādayati | ūśabdo 'pi
vartamāno dvitīyam bhāgamevam yāvadaḥkārāśabdastasya catur-
thabhāgamutpādayatīti | tadayuktam | ekasya dharmasya bhāgaśa
utpādāsambhavādityuktametad | katham tāvadatītāpekṣah paścimo
vijñaptikṣaṇa utpādayatyavijñaptimīti | pṛatimokṣasamvarasamā-
dāne kāyavāgvijñaptayah pravartante | tāsāṃ nāsti sāmagryam |
atha cātītakāyavāgvijñaptikṣaṇāpekṣah paścimo vijñaptikṣaṇah
pṛatimokṣasamvarasamgrhītānavijñaptimutpādayati | evamatītaśa-
bdakṣaṇāpekṣah paścimo vācchabdakṣaṇo nāmotpādayatīti | evaṃ
tarhīti vistarah | paścimaśabda eva nāmna utpādādyo 'pi tam-
evaikam śṛṇoti yo 'pi paścimamevaikam śabdam śṛṇoti rūpanmīti |

so 'pyartham pratipadyeta | so 'pi rūpanāmārtham gr̥hṇiyāt |
tannāmōtpatteḥ | na caivam pratipadyate | tasmādayuktametāt |
athāpyevam kalpyeteti vistarāḥ | kṣaṇapratibhāsā varṇavāgyam-
janamāpi tatpratibhāsamīti pakṣāntaramupanyasyate | vāgyam-
janam janayati | vyamjanam tu nāma janayatīti | atrāpi sa eva
prasamgo vyamjanānām sāmāgryābhāvāt | katham | na khalu
vyamjanānām sāmāgryamasti na caikasya dharmasya bhāgaśa
utpādō yukta itī kathamutpādayet | vyamjanam nāmōtpādayet |
katham tāvadatītāpekṣaḥ paścimo vijñaptikṣaṇa utpādayatyavi-
jñaptim | evam tarhi paścima eva vyamjane nāmna utpādādyo
'pi tamevaikam paścimam vyamjanōtpādakam śabdām śr̥ṇoti yo
vā tadevaikam paścimam vyamjanam śr̥ṇoti so 'pyartham prati-
padyate | eṣa eva tu prasamgo nāmnaḥ prakāśatvo vāca itī | na
khalvāpi śabdānām sāmāgryamasti na caikasya dharmasya
bhāgaśaḥ prakāśō yukta itī katham prakāśayanti vāgnāma
prakāśayet | katham tāvadatītāpekṣaḥ paścimo vijñaptikṣaṇaḥ
prakāśayatyavijñaptim | evam tarhi paścima eva śabde nāmnaḥ
prakāśādyo 'pi tamevaikam śabdām śr̥ṇoti so 'pyartham prati-
padyeta | athāpyevam kalpyeta | vāgyamjanam prakāśayati
vyamjanam tu nāmetī | atrāpi sa eva prasamgo vyamjanānām
sāmāgryābhāvāt | yasya tarhi śabdāmātram nāmānekākṣaram ca
nāma bhavati na ca śabdānām sāmāgryamasti tasya katham
nāmārtham pratyāyayati | sarvākṣarasmṛtyanantarātvādarthapra-

tipatteḥ | ata eva ca nāntariyakanyāyena prathamākṣarāśravapakā-
la eva śeṣākṣarānsmṛtibalena kaścidartham pratipadyata eveti |
vyamjanasyāpi vānnaivōtpādikā na prakāśikā yujyata itī |
pūrvam śabdasyōtpādyam śabdasya vyamgyam vā vyamjanama-
bhyupagamyadoṣa udgrāhitaḥ | idānim śabdavyatiriktānupala-
bdherōtpādya vyamgyatvamāpi tasya nāstīti tadeva unmūlayati |
na tu śabdānām sāmāgryābhāvādīti doṣo vaktavyaḥ | na hi
anekaśabdāpekṣā vyamjanapratipattiḥ | āpi ca ghoṣasvabhāvat-
vādvācaḥ sarvam ghoṣamātram vyamjanamutpādayisyati prakā-
śayisyati vā | yādṛśō vā ghoṣaviśeṣa isyate vyamjanasyōtpādakaḥ
prakāśako vā sa eva vyamjanārtham karisyatīti | athāpyarthasa-
hajam nāma jātyādivadiśyeteti vistarāḥ | aṥa sahaje nāmni
kalpyamāne vācōtpādyam prakāśyam vā nāmetyevamādighoṣa-
prasamgo na bhavisyatīti matvā pakṣāntaramidam vikalpyate |
yathā jātyādīni lakṣaṇānyarthasahajānyeveśyante nātītānāgatas-
yārthasya vartamānāni bhavanti | evameva yadi nāmeśyate |
atītānāgatasyārthasya vartamānam nāma na syāt | tataścātītānā-
gatārthavyavahāro na śakyeta kartum | na hyatītānāgatam nāmā-
rtham dyōtayatumarhati | yathātītānāgatā vānāma notpādayitum
vyamjayitum cārhati | nāmabahutve ca na sanajam nāma
paricchidyeta | asaṃskṛtānām cānutpattimatvātsahajanāma na
syādīti anīṣṭireveyam na kartavyaiveyamīṣṭirityabhiprāyaḥ |

nāmasamṇ śrītā gātheti |

gāthā vākyam | sã nãmāni samñisritã nãmasũtpaneṣu bhãvãt |
tasmãtsanti nãmāni vākyam ceti vacanãvakãšo 'stityãha | tatrãr-
thesu kṛtãvadhiḥ śabdo nãmeti vistaraḥ | arthakṛtãvadhiśabdas-
vabhãvãnãm nãmñãm racanãviśeṣo gãthã | vinyãsaviseṣa ityar-
thaḥ | pañktivaditi | yathã pañktiḥ pipilikãdinãm racanãviśeṣo
na tato dravyãntaramupapadyate | tadvat | ekakãlavartinãm
pañkipipilikãdinãm racanãviśeṣaḥ pañktirityucyate | kramavarti-
nãm tu śabdãnãm na racanãviśeṣaḥ | tena vaiṣamyamiti vacanã-
vakãśamabhisamiksya dvitryo dr̥ṣtãnta upanyasyate | cittãnu-
pũrvyavacceti | yathãnukramavartibhyaścittabhyo nãnyadãnupũr-
vyamasti | tadvat | apãrthikã tatprakṛtiriti | niṣprayojanã nãma-
padayorarthãntaraparikalpanetyarthaḥ | na hi sarve dharmãstar-
kagamyã iti | ke cideva tarkagamyã na sarve | ye hi tathãgata-
jñãnagocarapatitã eva na te tarkagamyã ityabhiprãyaḥ ||

XI. Jãtakamãlã XXXIII.

(H. Kern) 232¹²—235¹⁷.

sati kṣantavye kṣamã syãnnãsatityapakãriṇamapi sãdhavo
lãbhamiva bahumanyante || tadyathãnuśrũyate | bodhisattvaḥ
kilãnyatamaśminnarãnyapradeše pañkasamparkãtparuṣavapurnila-
meghaviccheda iva pãdãcãri vanamahisavṛṣo babhũva | sa tasyãm
durlabhadharmasamjñãyãm sam̥mohabahulãyãmapi tiryaggatau

vartamãnaḥ paṭuvijñãnatvãnna dharmacaryãnirudyogamatirbal-
hũva |

cirãnuvṛttyeva nibaddhabhãvã na tam kadãcitkaruṇã mumoca |
ko 'pi prabhãvaḥ sa tu karmaṇo vã tasyaiva vã yatsa tathã
babhũva || 1 ||

ataśca nũnam bhagavãnavocadacintyatãm karmavipãkayukteḥ |
kṛpãtmakaḥ sannapi yatsa bheje tiryaggatiṃ tatra ca dharmã-
samjñãm || 2 ||

vinã na karmãsti gatiprabandhaḥ śubham na cãniṣṭhavipãka-
masti |

sa dharmasamjñi 'pi' tu karmaleśãṃstãṃstãnsamãśãdya tathã
tathãsit || 3 ||

athãnyatamo duṣṭavãnarastasya kãlãntarãbhivyaktãm prakṛti-
bhadratãm dayãnuvṛttyã ca vigatakrodhasamrambhatãmavetya
nãsmãdbhayamastiti tam mahãsatvãm tena tena vihiṃsãkrameṇa
bhr̥satarãmabãdhata |

dayãṃduṣu durjanaḥ paṭutarãvalepoddhavaḥ
parãm vrajati vikriyãm nahi bhayam tataḥ paśyati |
yatastu bhayaśãnkayã sukr̥śayãpi sam̥spr̥syate
vinãta iva nicakãiścarati tatra śãntoddhavaḥ || 4 ||

sa kadãcittasya mahãsatvãsyã visrabdhãprasuptasyã nidrãva-
śãdvã pracalãyataḥ sahasãivopari nipatati sma | drumamiya

» 頌法の理は未だ有り。

kadācidenamadhiruhya bhṛṣam samcālayāmāsa ; kṣudhitasyāpi
kadācidasya mārgamāvṛtya vyatiṣṭhata | kāṣṭhenāpyenamekadā
śraṇayorghaṭṭayāmāsa | salilāvagāhanasamutsukasyāpyasya ka-
dācicchiraḥ samabhiruhya paṇibhyāṃ nayane samāvavre | apyena-
madhiruhya samudyatadaṇḍaḥ prasahyaiva vāhayanyamasya
lilāmanucakāra | bodhisattvo 'pi mahāsattvaḥ sarvaṃ tadasyāvi-
nayaceṣṭitamupakāramiva manyamāno niḥsamkṣobhasaṃrambha-
manyurmarṣayāmāsa |

svabhāva eva pāpānāṃ vinayonmārgasaṃśrayaḥ |

abhyāsāttatra ca satāmupakāra iva kṣamā || 5 ||

atha kilānyatamo yakṣastamasya paribhavamamṛṣyamāṇo
bhāvaṃ vā jijūāsamānastasya mahāsattvasya tena duṣṭakapinā
vāhyamānaṃ taṃ mahiṣavṛṣabhaṃ mārga sthitvedamuvāca | mā-
tāvadbhoḥ | kiṃ parikṛito 'syanena duṣṭakapinā | atha dyūte
parājita utāho bhayamasmatkiṃcidāsāṅkase | utāho balamātmaga-
taṃ nāvaiṣi | yadevamanena paribhūya vāhyase | nanu bhoḥ |

vegāviddhaṃ tvadviśāṇāgravajraṃ vajraṃ bhindyādvajavād-
vā nagendrān |

pādāśceme roṣasaṃrambhamuktā majjeyuste paṅkavacchaila-
pṛṣṭhe || 6 ||

idaṃ ca śailopamasamphatasthiraṃ samagraśobhaṃ balasaṃ-
pādā vapuḥ |

svabhāvasaujaskanirikṣitorjitaṃ durāsadaṃ kesariṇo 'pi to

bhavet || 7 ||

mathāna dhṛtvā tadinaṃ kṣureṇa vā viśāṅakoṭyā madamasya
voddhara |

kimasya jālmasya kaperaśaktavatprabādhanāduḥkhamidaṃ
titikṣase || 8 ||

asaḥjanaḥ kutra yathā cikitsyate guṇānuvṛṭtyā sukhaśilasau-
myayā |

kaṭūṣṇarūksāṇi hi yatra siddhaye kaphātmake roga iva pra-
sarpati || 9 ||

atha bodhisattvastam yakṣamaṃveksamāṇaḥ kṣamāpakṣapati-
tamarūksākṣaramityuvāca |

avaimyenaṃ calaṃ nūnaṃ sadā cāvinaye ratam |

ata eva mayā tvasya yuktaṃ marṣayitum nanu || 10 ||

pratikartumaśaktasya kṣamā kā hi baliyasi |

vinayācāradhīreṣu kṣantavyaṃ kiṃ ca sādhuṣu || 11 ||

śakta eva titikṣeta dūrbalaskhalitaṃ yataḥ |

varam paribhavastasmānna guṇānāṃ parābhavaḥ || 12 ||

asatkriyā hīnabalācca nāma nirdesaakālaḥ paramo guṇānām |

guṇapriyastatra kimityapekṣya svadhairyabhedāya parākra-
meta || 13 ||

nityaṃ kṣamāyāśca nanu kṣamāyāḥ kālaḥ parāyattatayā
durāpaḥ |

pareṇa tasminnupapādite ca tatraiva kopapraṇayakramaḥ

kaḥ || 14 ||

svām dharmapīḍānavicintya yo 'yaṁ matpāpaśuddhyartham-
iva pravṛttaḥ |

na cetkṣamāmapyahamatra kuryāmanyah kṛtaghuo bata
kidṛśah syāt || 15 ||

yakṣa uvāca | tena hi na tvamasyāḥ kadācitprabādhanāyā
mokṣyase |

guṇeṣvabahumānasya dūrjanasyāvinitatām |

kṣamānaibhṛtyamatyaktvā kaḥ saṁkocayitum prabhuḥ || 16 ||

bodhisattva uvāca |

parasya pīḍāpraṇayena yatsukhaṁ nivāraṇaṁ syādasukhoda-
yasya vā |

sukhārthinastanna niṣevitum kṣamaṁ na tadvipāko hi
sukhaprasiddhaye || 17 ||

kṣamāśrayāḍevamasau mayārthataḥ prabodhyamāno yadi
nāvagacchati |

nivārayiṣyanti ta enamutpathādamaṁsiṇo yānayamabhyupaṣi-
yati || 18 ||

asaṅkriyāṁ prāpya ca tadvidhājanāna mādrśe 'pyevamasau
kariṣyati |

na labdhudoṣo hi punastathācaredataśca muktirmama sā
bhaviṣyati || 19 ||

atha yakṣastam mahāsattvam prasādvismayabahumānāvar-

jitamatih sādhu sādhviti saśiraḥprakampāṅgulivikṣepamaḥhisam-
rādhyā tattatpriyamuvāca |

kutastiraścāmiyamidrśi sthitirguṇeṣvasau cādaravistaraḥ
kutaḥ |

kayāpi buddhyā tvidamāsthito vapustapovane ko 'pi
bhavāṁstapasyati || 20 ||

ityenamabhipraśasya tam cāsya duṣṭavānaram pṛsthādavad-
hūya samādiśya cāsya raksāvidhānaṁ tatraivāntardadhe ||

tadevaṁ sati kṣantavye kṣamā syānnāsatityapakāriṇamapi
sādhuvo lābhamiva bahumanyante | iti kṣāntikathāyāṁ vācyam ||

evaṁ tiryaggatānāṁ bodhisattvānāṁ pratisaṁkhyānasausthavaṁ
dṛṣṭam | ko nāma manṣyabhūtaḥ pravrajītapratijño vā tadvikalah
śobheta | ityevamapi vācyam || tathāgatavarṇe satkṛtya dharmā-
śravape ceti ||

|| iti mahiṣajātakam trayastriṁṣattamam ||

大正五年四月十五日 印刷
大正五年四月十八日 發行
昭和五十二年五月二十日 三十版發行

不許複製 定價金1,800円

著者 荻原雲来

東京都千代田区神田錦町一丁目十六番地
發行者 株式会社 明治書院
代表者 三樹彰

東京都千代田区三崎町三丁目三番三号
印刷者 石井印刷所
代表者 石井茂生

~~~~~  
東京都千代田区神田錦町一丁目十六番地  
發行所 株式会社 明治書院  
振替東京3-4991番・電話(294)5336(代)

# 字 書.

字書や字の排列順は大概巻首に出せる梵語字母の順に依るものなりと雖も隨韻 (m) と止聲 (h) とは特別の配置法に依るものなるを以て此處に是を辨ず. 半韻又は吹氣音にて直に従はれたる隨韻は上の前にあり. 例へば *amśāya* は *akāla* より前にあり. 然るに喉等五類の發聲の前に來りて其類の鼻音に代用し得べき隨韻は其鼻音の位置に在り. 例せば *amkṣā = amkṣā* は *sagadṣadam* の後にあり. 此に類して止聲の變化すべからざるもの即ち硬き喉唇音に先だてるものは總ての發聲より先に來る. 例せば *antahpura* は *anta* の後. *antaka* の前にあり. 然るに硬吹氣音に直に先だてる(各種の吹氣音と同化するも可なる) 止聲は宛も其吹氣音なるが如く (*nihśāka* は *niśāka* の如く) 認められ其に相當する處に置かる. 例せば *nihśāka* は *niśāya* の後 *nistajus* の前にあり. 佛教特別の用語は其の原語と譯語とを問はず. 凡て風點\*を附す.

字書中所用の略語は第一巻の首に其解を掲げたるも尙ほ此處に加ふべきものは: 形.=形容詞. 形合.=形容詞的合成語. 過.=過去受動分詞. 副.=副詞. 代.=代名詞. 數.=數詞.

## A.

- a (韻の前には) an (制奪を示す辭) 無. 非. 不 (等の義).
- a (代名詞の語幹. idam を見よ).
- amśā (男.) 部. 分.
- akasmāt (副.) 豫期せざるに. 突然に.
- akāla (男.) 非時; °lena (及び) °le 非時に. 時ならぬに.
- akopya\* (形.) 動かざる. 不動.

- akrama (男.) 不自然の物. 障\*.
- akṣa (男.) 骰子; 車.
- akṣama (形.) 資格なき; 堪能ならざる.
- akṣara (中.) 語. 字\*.
- agāra (中.) 家. 舍.
- aguru (男. 中.) 沈香.
- agni (男.) 火; 火神. 阿耨尼.
- agra (中.) 頂; °tas (副.) 先き. 勢きに. 先きの方に.

agrya (形) 勝れたる, 最も勝れたる.  
第一なる.  
aṅkita (過) 標されたる, 示されたる.  
aṅga (中) 肢, 體; 支. (形合. 女.) i.  
aṅgaṇa (中) 中庭.  
aṅguli (女) 指.  
ao (印度文典家の用ゐる約束字にして  
所有る母音を指す).  
acaksus (形) 眼なき; 盲ひたる.  
acintyatā (女) 不可思議なること.  
acira (形) (時の)短き, 暫時の.  
accha (形) 覆める  
acyuta (形) 傾動すべからざる, 泰然  
たる.  
aja (男) 山羊; (女) ā.  
ajara (形) 老いざる, 常に壯き.  
ajñāta (形) 知られざる; °m (副)  
知らずに.  
ajñāna (中) 無智, 無了.  
añj 7. abhivi + (過) 顯はれたる.  
vi + 顯す.  
añjali (男) 合掌 (兩手掌を合せ中  
心に空處を存す. 敬禮の表示).  
aṅ 1. 追遙す.  
aṅḍa (中) 卵.  
atas (副) それより, 故に, それ故.  
ati (副) 非常に, 甚だ.  
atīoiram (副) 極めて永き間, 極めて  
永く.  
atitṛṣ (女) 過量の欲望, 過大の食.

atithi (男) 客.  
atimuktaka (男) (樹名 gaertnera  
racemosi); °kāgāra (中) a° にて  
造られたる一小屋.  
atireka (男) 過量.  
atīta (過) 越へたる. (中) 過去.  
atīva (副) 非常に, 過量に, 甚だ.  
atṛṇa (中) 草のなき處.  
atyanta (形) 窮りなき, 究竟, 畢竟  
atra (副) 此處, 其處; 此方へ, 此處に,  
其方へ, 其に就て, 其に由つて, atra  
kāle 此の時, 今.  
atha (副) 此に於て, その時; 而して,  
又; 此に反して, 然るに, 若し; atha  
vā 或は; 或は寧ろ.  
ad 2. 食ふ.  
adas (代) (110) 共.  
adūra (形) 遠からざる; °re (...と  
り[屬]) 遠からざる, 懸隔せざる.  
adbhuta (中) 未曾有, 稀有.  
adya (副) 今日; 今.  
adhara (男) 下唇; (單. 總稱的) 唇.  
adharottara (形) 上と下の顛倒し  
たる.  
adharostha (中) (10 條の備考) 下  
唇; (總稱的) 唇.  
adharma (男) 不法, 不正, 罪惡.  
adhastāt (副) (.....の[屬]) 下に  
adhārya (形) 防ぐ可らざる, 耐ふ可  
らざる.

adhika (形) 量を超へたる, 一層大な  
る, 一層強き; 更に多き, 増されたる.  
°m (副) 甚だ, 大に, 非常に.  
adhikara (男) 官.  
adhipa (男) 君, 王.  
adhimukta (中) 信解.\*  
adhiṣṭhāna (中) 處, 市; 守護, 加  
被,\* 加持.\*  
adhīna (形) 依る. (pratyayādhi-  
nu は pratyayādhiṇah の俗語な  
り).  
adhunā (副) 今.  
adhomukha (形) (女) i. 額を下  
方に向けたる.  
adhyayana (中) 讀.  
adhyardhaśatikā prajñāpāramitā  
百五十(頌)の般若波羅蜜多 (理趣經)  
(書名).  
adhyāya (男) (書物の)章.  
adhyāśaya (男) 意樂.  
adhyeṣaṇā (女) 勸請.  
adhvan (男) 路.  
adhvara (男) 供養.  
anaḍuh (男) (95) 去勢したる牛, 特  
牛, 牡牛.  
anantaram (副) 直接に, 直に; (合  
成語) .....の次後に.  
anaparādhin (形) 何人をも惱まざ  
る, 或る何人をも惱したることなき;  
罪のなき.

anartha (男) 不幸, 災禍, 損害.  
anarha (形) 値なき, 相應せざる. 不  
適當なる, (.....の[屬]) 値なき.  
anala (男) 火.  
analamkrta (形) 嚴られざる.  
anavadya (形) 缺點なき.  
anasūyaka (形) (女) °yikā 不平  
のなき; 喜べる.  
anāgata (中) 未來.  
anāgatavat (形) (女) i 未來の爲  
にせる, 未來に關せる.  
anāgāmitva (中) 來らざる性質, 不  
遷性.\*  
anāgāmin (男) 來らざる者, 阿那  
含,\* 不遷.\*  
anārata (男) 息まざる, 常住なる.  
°m (副)  
anitya (形) 無常なる; 消滅すべき.  
anindita (形) 過失なき.  
anindya (形) 過失なき.  
Anu (男) (Yayāti と Śarmiṣṭhā  
との子の名.)  
anukampā (女) 哀愍.  
anukūla (形) 隨順する, 適應する;  
恩を施さず, 慈愛ある; 赤誠ある.  
anugraha (男) 攝受, 恩, 慈愛, 慈愍.  
anugrahaka (形) 利する, 利益する.  
anuttama (形) 上なき, 最高の, 最  
勝の.  
anutpattimattva (中) 生ずること

なきこと, 生ずることなき性.  
 anudaka (形) 水なき.  
 anudinam (副) 日々, 毎日.  
 anupradāna\* (中) 興ふること, 隨興.  
 anubandha (男) 執取, 主張, 固執.  
 \*ndham kṛ 固執す.  
 anubhāva (男) 威勢, 力.  
 anuyoga (男) 心を委ねること; 使令, 命令.  
 anurāga (男) 食欲, 愛.  
 anuvamśa (形) 系統の, 系統に関する.  
 anuvāda (男) 再説.  
 anvṛtti (女) 反復すること, 敷衍.  
 anuśamsa\* (男) 諒解, 功德, 長所.  
 annśikṣaṇa (中) 隨學.  
 anusmṛti\* (女) 隨念, 念.  
 anūsman (形) 熱くなき, 冷かなる.  
 anṛtikatva (中) 不眞實なること, 虚妄なること.  
 anta (男) 邊, 末; antam gam ... を悟る.  
 antaśas\* (副) 乃至, 下至.  
 antaḥpura (中) 王城; 後宮.  
 antaka (男) 死; 死神.  
 antakāla (男) 死時, 臨終.  
 antara (中) 内; 中間, 時間; 際;  
 atrinūtare 此の時に, 此の際に; 差別.  
 °re vṛt 離間す, 差異, deśānt 他の

方; 不在, °reṇa (.....[業])なしに(合  
 成語の尾) 他の.....  
 antarā (副) 間に.  
 antika (中) 近傍; °kāt 所より, 近  
 傍より, 近傍に.  
 andha (形) 盲ひたる.  
 anna (中) 食.  
 anya (形) (11) 他の; °sminna-  
 hani 一日(ある日).  
 anyatama (形) 多の中の随一.  
 anyatra (副) 他に, 異なつて, 外に.  
 anyathā (副) 異りて, 然らずんば,  
 否らずして; nānyathā 然らずんば爾  
 せず.  
 anyonya (合成語の首) (副) 相互に.  
 anvaya (男) 種姓, 親屬.  
 ap (女) (89) 水.  
 apakārin (形) 損害する  
 apakṛta (中) 過失, 違犯, 罪.  
 apaṇḍita (形) 無學の, 無教育の,  
 愚なる.  
 apatya (中) 兒, 子孫.  
 apamāna (男) 無禮, 輕蔑.  
 apara (形) 後方の, 後時の, °re 其  
 の後に; 他の者.  
 aparapratyaya (形) 他の縁なき,  
 不從他縁.\*  
 aparādha (男) 違犯, 罪.  
 Apalāla (男) 阿波羅羅, 無相得(龍  
 名).

apārthaka (形) (女) °rthikā 無  
 用なる.  
 api (副) 亦た, 及び, さへも, すら,  
 だけにも; 假令.....と雖も. api nu  
 非るか. api nāma (可能性 [possi-  
 bility] を除はず) あらん, ならん, 恐  
 らく, かし(等の義なり). (疑問代名詞  
 の重疊をして不定ならしむ [114]; 數詞  
 若しくは此に類せる意義ある代名詞の  
 後に在るときは) 一切, 咸な.  
 apūrva (形) 未だ會て有らざる, 全  
 く新たなる, 前代未聞の.  
 apekṣā (女) 觀待すること, 認め合  
 はすこと, 關係あること.  
 apratima (形) 比類なき.  
 apriya (形) 愛らしからざる, 親しか  
 らざる, 怨憎.  
 abandhu (形) 親戚なき.  
 abdhi (男) 海, 大洋.  
 abrahmaṇya (形) 婆羅門を尊重せ  
 ざる, 無信心なる.  
 abhāgya (中) 不暱.  
 abhikāma (形) (.....を[依]) 欲求  
 する, 慮む.  
 abhijñā (女) 通,\* 神通.\*  
 abhidyotaka (形) 指し示す, 顯示  
 する.  
 Abhidharmakośavyākhyā (女)  
 對法\*藏廣解(書名, 對法藏は所謂る阿  
 毘達磨俱舍にして廣解は Yaśomitra

(稱次)の注釋なり).  
 abhidhātavya (形) 言はるべき.  
 abhidhāna (中) 名.  
 abhidheya (中) 表はさるべきもの,  
 意義.  
 abhinandin (形) (女) °ni 希求す  
 る.  
 abhinirhāra (男) 引發.\*  
 abhiprāya (男) 意趣, 欲.  
 abhimukham (副) 向ふて, 方へ.  
 abhiramya (形) 喜ばしき, 快き.  
 abhilāpya (形) 説かるべき, 可説.  
 abhiṣeka (男) 灌頂.\*  
 abhikṣṇa (合成語の初) 教しば, 常に.  
 abhyantara (男) 親縁の人.  
 abhyāsa (男) 近傍; °cara (或は)  
 °stha (形) 近傍に在る, 近傍に住ま  
 る.  
 abhyāsa (男) 修習.  
 amarṣin (形) 怒まざる.  
 amātya (男) 大臣, 輔相.  
 amitra (男) 敵.  
 amu (adas を見よ).  
 amutra (副) 他世.  
 amṛta (形) 不死の; (中) 不死飲  
 甘露.  
 ambara (中) 衣服, 衣袋.  
 ambhas (中) 水.  
 ayam (idam を見よ).  
 ayaṅ (中) 鐵.



ayaskāntamaṇi (男) 磁石.  
 ayasmaya (形) 鐵の、鐵の.  
 Ayāti (男) (那曷沙 [Nahusa] の子の名).  
 ayukta (形) 不適當なる、不相應なる.  
 ayuta (中) 萬.  
 aye (感歎詞) 嗚呼、はゝー.  
 ayogya (形) 不適當なる、不相應なる。(……に[屬])相應せざる.  
 Ayodhyā (女) (憍薩羅 [Kosala] 國の首府の名). Oudh (Audh).  
 araksitr (作者名詞) 不護者.  
 arañā (女) 無諍\*.  
 aranya (中) 林.  
 aranyāyatana (中) 曠野處、林處、寺.  
 arka (男) 日.  
 arjita (過) 利得されたる、得られたる、收得されたる.  
 arjuna (男) (樹の名 terminalia arjuna).  
 arth 1. 10. 欲す。pra+ (成人に或事を)請ふ。  
 artha (男) 事務; 義理; 事件、事物; 錢; 意義、義。artham, arthāya, arthe 爲めに、由て。arthatas 利の爲に; 實に。  
 arthatva (中) 義たること、義性。  
 arthavat (形) 富める。  
 arthin (形) (具と俱に若しくは合成

語の後分るとき)を希求す、を欲望す(或ひとに[具]或事を)望む。  
 ardita (過) 惱まされたる、苦しめられたる。  
 ardha (形) 半の; (中) 半分。  
 ardhatrayaśan (數) 十二半。  
 arh 1. 相當す; 可とす; 容す; 能くす; 須ゆ。  
 arha (形) 至當なる、値ある、相當なる、資格ある。  
 arhat (男) 値ある者、阿羅漢\*、應\*應供\*。  
 arhattva (中) 値ある性質、阿羅漢性\*。  
 alakṣanaka (形) 相なき、無相。  
 alakṣita (形) 認められざる。  
 alam (副) (具、又は總待法と俱に)に飽たり、を止めよ。(kr と俱に用ゐられたる例は kr の下を見よ)。  
 alpa (形) 小さき、微なる、弱き、少なき。  
 avakāśa (男) 空處; 機會。  
 avagāhana (中) 沐浴。  
 avacchādana\* (中) 隱蔽。  
 avajñā (女) 侮蔑、輕蔑。  
 avatāraṇa (中) 入ること、入。  
 avadhi (男) 限界; 分量。  
 avanipati (男) 君、王。  
 avabodha (男) 覺悟。

avyaya (男) 跋; 分。  
 avalepa (男) 微逸。  
 avavādaka (形) 教授する、教化する。  
 avāśeṣa (男) 殘。  
 avaseya (男) 推知せらるべき; 了解せらるべき。  
 avasthā (女) 位置。  
 avasthāna (中) 顯はるゝこと; 位置; 止住。  
 avijānat (形) 知らざる、了解せざる。  
 avijñapti (形) 表示することなき\*、無表\*。  
 avidvat (已過去爲他の分詞に a を加へたるもの) 知らざる、學ばざる。  
 avinaya (男) 不應爲の行、不行儀。  
 avinitatā (女) 不行儀なること。  
 avipatti (女) 犯さざること、毀たざること、不毀。  
 avirodha (男) 無害。  
 avavartya (形) 退轉すべからざる、不退轉。  
 avyayibhāva (男) 不變語; 儉約、無費; 匱乏、貧窮。  
 aś 9. 食ふ。  
 aśakta (形) 無堪能なる。  
 aśakya (形) 不可能なる、成就すべからざる。  
 aśuci (形) 不淨なる。  
 aśeṣa (形) 餘りなき; °kaniyas 最も幼なき。

Aśoka (男) 阿育、無憂(王の名).  
 aśru (中) 涙。  
 aśva (男) 馬。  
 aśvatara (男) 騾; (女) i 牝騾。  
 aśvin (男) (兩、雙神の名).  
 aṣṭan (數) 八。  
 Aṣṭasāhasrikā prajñāpāramitā (女) 八千(頌)般若波羅蜜多(書名).  
 aṣṭādaśan (數) 十八。  
 as 2. (128) 有り; (に[爲、又は屬])屬す。(往々現在の形を過去の意に用ゐる)  
 as 4. upanī+ 提出す; 述ぶ。  
 asaṃskṛta\* (形) 集められざる、無爲。  
 asatya (形) 不眞なる; (男) 詐僞者。  
 asatyavacana (中) 妄語。  
 asaṃtosa (男) 不満足。  
 asaṃmartha (形) (……に[依])堪へざる。  
 asaṃpramoṣa\* (形) 妄失せざる、無妄失。(asaṃpramoṣa の俗化).  
 asaṃbhāvya (形) 想像すべからざる、遂ぐべからざる。  
 asādhyā (形) 果すべからざる。  
 asi (男) 劍。  
 asukha (中) 不樂; 痛、愁。  
 asura (男) 阿修羅、鬼、妖精。  
 asau (adas を見よ).  
 asthāyin (形) (女) i 住まらざる、常ならざる。

asmad (代.) (106) (第一人稱、複数の語幹)  
 asmadvidha (形.) 我等の類の。  
 ah (183) 言ふ、曰ふ。 pra + 言ふ、曰ふ。  
 ahan (中.) (85) 日。  
 aham (mad を見よ)。  
 ahi (男.) 蛇。  
 aho (感歎詞) 嗚呼。

Ā.

ā (前置詞) (……より[從:]始めて; (...に[從:] 至るまで。  
 ākāra (男.) 相、行相、\* 形、狀。  
 ākāśa (男.) 虚空。  
 ākimcanya (中.) 無所有、赤貧。  
 āgama (男.) 到着、起ること。  
 āgamana (中.) 來ること、到着。  
 ācāra (男.) 舉動。  
 ācārya (男.) 師、軌範師、\* 阿闍梨、\*  
 ājāneya (形.) 貴き種姓の; (男) 伶俐なる馬、調養馬。  
 ājñā (女.) 命令、使命; 教旨、聖教; 知、\*  
 āṭopa (男.) 膨脹、隆起。  
 ādambara (男.) 喧嘩、轟々。  
 ādhyā (形.) (或るものに) 富む。  
 āttamana\* (形.) 大に歡喜したる (āptamanas の轉訛なり)。  
 ātman (男.) 魂、心; 己、自身、我、第

二の我。(數ば反應代名詞として用ゐらる。其の意義は) 自。  
 ātmabhāva (男.) 自體。  
 ātmiya (形.) 自の、己に屬せる。  
 Ātreya (男.) (婆莫提婆 [Vāmadeva] の弟子の名)。  
 ādara (男.) 致意、愛重、深敬。  
 ādi (男.) 始; (形合、の尾に在ときは) 其及び其他、等。  
 ādhāna (中.) 持すること、持; 所作。  
 ānana (中.) 口、嘴; 頰、面。  
 ānanda (男.) 樂、慶喜; 阿難陀\*(人名)。  
 ānāha (男.) 便秘。  
 ānupūrvya (中.) 次第。  
 āp 5. 達す、得。(過) 適せる、頼るべき、親しき。(求欲法 ips [205]) 望む、求む、希ふ。  
 ava + 達す、得。  
 pari + 卒ふ; (過) 果されたる、了へたる; yadi paryāptam 了へたるならば; (……に[屬]) 裕なる、充分なる、足れる。  
 pra + 達す、得、奪ふ、從ふ、服從せさす。(過) 達せられたる、發見せられたる、得られたる; 達したる、來れる。  
 anupra + 及ぶ、達す。(過) 隨得したる、遠得したる。  
 sampra + (過) 來至したる。  
 vi + (過) 執られたる、占められたる。  
 āpad (女.) 不幸。

ābharāṇa (中.) 莊飾。  
 ābhā (女.) 光、靨; (形合、の終に在ときは) 如く見ゆる、如き。  
 āyatana (中.) 處、場、座。  
 āyati (女.) 未來。  
 āyattatā (女.) 依屬せること。  
 Āyu (男.) (蛙王の名)。  
 āyudha (中.) 武器。  
 āyusmat (形.) 壽を具せる、健康の、長壽の、老いたる、具壽\*。  
 āyus (中.) 壽。  
 āraṇyaka (形.) 林に關せる、林の事を論ずる。 °kaṃ parva (摩訶婆羅多 [Mahābhārata] 第三卷の名)。  
 ārabdhi (女.) 始むること、發すること、發勤\*。  
 ārambana (中.) 所緣。  
 ārama (男.) 園。  
 ārta (過) 痛められたる、惱まされたる。  
 ārtarūpa (形.) 惱まされたる、痛められたる、窘められたる。  
 ārya (男.) 聖者、\* (形) 聖なる。  
 ālāpa (男.) 談、對話; °paṃ kr saha ……と對談す。  
 āloka (男.) 光明。  
 āvāhaka (形.) 引く。  
 āvila (形.) 曇る、濁る。  
 āveśa (男.) 入ること。  
 āśāṅkā (女.) 憂懼、恐怖。

āśaya (男.) 意樂。  
 āśā (女.) 豫期、希望。  
 āśu (形.) 速やかなる。(副) 速く。  
 āścarya (形.) 稀奇なる。  
 āśrama (男.) (例外は中) 行者の住處。  
 āśraya (男.) 依ること、依止。  
 āś (感歎詞) 嗚呼、嗟。  
 āś (爲自.) (211) 坐はる、止まる、居る、住ふ。 upa + (……を[業]) 敬ふ、(……に[業]) 事ふ。  
 āsana (中.) 座。  
 āsanna (中.) 近傍。  
 āśya (中.) 口。  
 āśrava (男.) 漏\*。  
 āhvaya (男.) 名。

I.

i 1. 2. (129) 往く; 來る。  
 ati + (atita を見よ)。  
 anu + 追ふ、搜索す、求む; 識る。(過) 具へたる。  
 samanu + (過) 具へたる。  
 abhi + (……に[業] 又は [依]) 往く、來る。  
 ava + 識る、看取す。  
 ā + 近づく、來る、達す。  
 samā + 會ふ、集まる、(……に[業]) 到る。  
 upa + 近づく、到る; (過) 具へたる。  
 abhyupa + 對抗す、侵す。

pari+ 旋り行く; (過) 充されたる、  
捕へられたる。  
palā+ 1. (palāya) 逃ぐ。  
abhipra+ (過) 意味せられたる、  
志ぎされたる。  
prati+ (過) 認められたる。(役) 丁  
知せしむ、認めしむ。  
vi+ (過) 離れたる。  
Ikṣvāku (男) (Ayodhyā の最初の  
王の名、複数) I° の末孫、I° の後裔。  
itara (形) 他の。  
itas (代名詞の語幹 i の従、副) 此より。  
iti (副) 斯く、と、といふこと、以上。  
(思想、直観、或は章の始又は終にあり  
て其の全部の意義を該攝す)。  
idam (代) (109) 此。  
idānim (副) 今。  
indn (男) 月; 蘇摩 (soma)。  
indra (男) 君、王、上首; (天王の名)、  
因陀羅 (Indra) 即ち帝釋天; (合成語  
の尾) 第一、最上。  
indriya (中) 感官、感能、根\* (六根  
といふ如き場合の)。  
indhana (中) 薪。  
iva (副) 如く、等しく。(往々先だて  
る語を強むるに用ゐらる) apūrva-  
miya 決して未だ曾て有らざるもの。  
iṣ 4. pra+ (役) 遣はす、送る  
iṣ 6. 1. 4. (124, 11) 欲す; (過) 欲せ  
られたる、好ましき

anu+ 探す、希ふ。  
abhi+ (過) 欲せられたる、適意の、  
好ましき。  
pari+ 尋ね廻る、希求す。  
iṣṭatva (中) 望まれたること; 許され  
たること。  
iṣṭi (女) 欲; 許。  
iha (副) 此處に; 此の世にて、此世、  
此の下界にて。

## I.

iks 1, (爲自) 見る。  
anvaya+ 見る。  
apa+ 豫期す; 待つ; 罰ふ。  
ava+ 騰る。  
upa+ 注意せず、等閑にす。  
nis+ (過) 識られたる。  
abhipra+ 見る、認む。  
abhivi+ 看る。  
sam+ 觀る、認む、見る。  
abhisam+ 觀る、認む。  
ikṣana (中) 眼。  
idrśa (形) (女) i 是の如き。  
ipsa (求) (āp を見よ)。  
irṣyā (女) 嫉。  
īśvara (形) 堪能なる、自在なる; (男)  
支配者、主; 君。

## U.

ukta (vac [214, I, 1] の過) 言は

れたる。  
ukti (女) 談、語。  
ugra (中) 嚴重。  
uca 嘔遮 (samavāya を見よ)。  
ucita (過) 適當なる、相應なる。  
uccais (副) 高く、上に; 高聲に。  
ucchṛṅkhala (形) 解縛されたる;  
推測すべからざる、隨意なる。  
uta (不變辭) 亦、及び、さへも; 則ち。  
(yad の下を見よ)。  
utāho (uta+āho) (不變辭にして  
疑問詞として用ゐらる) 又は……か。  
utkaṅṭhā (女) 眷戀、欲望。  
uttama (形) 最高の、最上の、最勝の。  
uttara (形) 一層勝れたる、一層上の。  
utpatti (女) 生、生起、發生。  
utpattimat (形) 生ずべき、可生。  
utpatha (男) 間道、非道。  
utpāda (男) 生、發生。  
utpādaka (形) 生ずる。(女) °dikā。  
utpādana (中) 生ずること。  
utpādayitavya (形) 生ぜらるべき。  
utpādin (形) 起まるゝ、生まるゝ。  
utpādya (形) 生ぜらるべき。  
utsaṅga (男) 膝。  
utsava (男) 祭。  
utsāha (男) 力、精力。  
udaka (中) 水。  
udao (形) (77) (女) udici 北の。  
udaya (男) 起ること。  
udāra (及び) udāraka (形) 尙き;  
勝れたる、華麗なる、°ram (副) 殊勝  
に。  
uddeśa (男) 方、場。  
uddāna (中) 嘔陀南、攝頌 (内容を  
略攝せる頌文)。  
uddhava (男) 眞高。  
udreka (男) 饒多; dhanod° (男)  
大富。  
udvaha (男) 結婚; 後裔、子。  
udvāha (男) 結婚、嫁娶。  
unmārga (形) 道を外るゝ。  
upakāra (男) 利益。  
upakārin (形) 役立つ、事ふる。  
upakleśa (男) 隨煩惱\*。  
Upagupta (男) 優波笈多、鄒波耆多、  
近親、小なる耆多、(Gupta の子の名)。  
upacāra (男) 療治。  
upadarśana (中) 示現すること。  
upadeśa (男) 諭、教示、訓諭。  
upabhoga (男) 受用、欲樂。  
upamā (女) 比類; (形合の尾) 似た  
る、如き。  
upari (前置詞) 上に。  
upalabdhi (女) 得。  
upaśama (男) 止むこと。  
upādāna (中) 取ること、取。  
upādhyāya (男) 教師、和尙\*。  
upāya (男) 方便。  
upāyana (中) 香物、供物。

upāmbha (男) 嘲弄, 難詰.  
 upekṣitavya (形) 注意すべからざる, 等閑にせらるべき.  
 ubha (形) (兩數) 兩の.  
 uraga (男) 蛇, 龍.  
 uras (中) 心 (むね).  
 Ūrumuṇḍa (男) 優樓漫陀, 大醜類\*  
 (實は字の如んば大禿の義なれども譯者は muṇḍa を maṇḍa の轉と見たるなり) (山名).  
 urvarita (形) 餘りたる.  
 Uśanas (男) (鬼神の教師の名, 金星を人に擬したるもの).  
 uṣṇa (形) 煖たかなる; 熱き.

## Ū.

ūrjaya- (過) 強き, 力ある.  
 ūsara (男, 中) 鹹鹵不穰の田, 不毛の地.

## R.

r 1. (124, 11) sam + (役) (201) 交附す.  
 rte (前置詞) (.....の[業]) 外, (.....を[業]) 除て.  
 rsi (男) 仙, 理師.

## E.

eka (數) 一; 單; 他なき; 唯一の; 同一の; 或一の; 多數中の唯一の, 同類中の一の.  
 ekadā (副) 一時, 會て; 時々.  
 ekadr̥ṣṭi (女) 凝視.  
 ekadeśa (男) 同處.  
 ekarūpatā (女) 等形性, 不變性.  
 ekavastra (形) 唯だ一衣を被たる.  
 ekākin (形) (女) i 單の, 孤獨の.  
 ekaikaśya (中) 順次なること;  
 °śyena (副) 順次に.  
 etad (代) (108) 此; 其.  
 enad (代) (111) 彼.  
 enas (中) 罪.  
 eva (副) 即ち, 正に, 唯だ, 已に. (次前の語を強むる用をなす).  
 evamrūpa (形) 斯くの如き.  
 evamvādin (形) 是の如く語る.  
 evamvidha (形) 是の類の, 是の如き.  
 evaṃgata (形) 是の如き状態の; °to 'pi 是の如き状態にありと雖も.  
 evam (副) 然様に, 是の如く.

## AI. O. AU.

aiśvarya (中) 自在位, 王位.

ogha (男) 暴流.  
 audārya (中) 卓越性.  
 auśadha (中) 藥劑, 藥物.

## Ka.

ka (kim を見よ).  
 Kakuddruma (男) (固有名詞).  
 kañcukin (男) 宮内官.  
 kaṭu (形) 辛き.  
 kaṇṭaka (男) 棘.  
 kaṇṭha (男) 頸.  
 katama (疑問代名詞) 多の中の誰, 多の中の何.  
 katham (副) 何故に, 夫は如何なる所以なりや. katham cid 所有手段を盡して, 盡力して, やつと.  
 kathaya- (名稱詞の動詞) 話す, 報らす, 告ぐ, 名さす, 曰ふ.  
 kathā (女) 對談, 對話, 説述. ka-thāḥ ky 對話す.  
 kadā (副) 何時. kadā cid 會て, 一日, 時々; 恐らくは.  
 kaniyas (形) (97) 更に幼なき.  
 kanyakā (女) 處女, 少婦; 嬢.  
 kanyā (女) 處女, 少婦; 嬢.  
 kapi (男) 翻猴.  
 kapota (男) 鳩.  
 kapha (男) 痰. (印度の醫學にては病の根原を三種に分つ, 謂く kapha

[痰], vāta [風], pitta [熱] 是なり).  
 kam (役, 爲自) 愛す, (.....と[業]) 欲樂に耽る.  
 kamala (中) 蓮華; (女) °lā (落吃澁弭 [Lakṣmī] 即ち幸福と美の女神, 所謂吉祥天女の號).  
 karaṇa (形) 作る. (中) 爲, 作, 成.  
 karaṇiya (形) 作さるべき, 造らるべき. (中) 所辦.  
 karuṇā (女) 悲.  
 karenukā (女) 化象.  
 karkata (男) 蟹.  
 karnadhāra (男) 船手.  
 karṇaya- (名稱詞の動詞) 聽く.  
 kartavya (形) 作さるべき, 造らるべき.  
 karpūra (男, 中) 樟腦.  
 karmakara (形) 給事する; (男) 勞働者, 僕役, 手工.  
 karman (中) 業, 工, 事業, 作, 働業, 活動, 職業.  
 kala (形) 不明瞭の, 不可解の.  
 kalañkin (形) (女) i 汚れたる; 汚す, 辱かしむる.  
 kalaśa (男) 瓶, 甌.  
 kalita (過) 壞られたる.  
 kalpa (男) 長き時期, 劫波, \* 劫.\*  
 kalya (中) 曙, 晨朝.  
 kalyāṇa (形) (女) i 善き, 巧なる; 妙なる; (中) 樂, 娛樂.

kavi (男) 詩人.  
 kavitā (女) 詩才, 詩人の技能.  
 kaṣṭa (形) 拙き, 悪き; (中) 苦痛, 艱難, 害悪. aho kaṣṭam 嗟痛ましきかな, 嗟災なるかな.  
 kastūrikā (女) 麝香.  
 kānana (中) 林.  
 kānta (過) 愛せられたる; (男) 夫.  
 kāma (男) 欲望, 歡樂, 要求; 欲, 慾, 愛; 愛の神.  
 kāmarūpa (中) 隨意の形.  
 kāmalā (男) 黃疸の一種, 迦摩羅病.\*  
 kāya (男) 身, 體; 衆.  
 kāra (形) (合成語の尾) 作る, 字. (a-kāra は a を作るもの即ち a 字の義なるが如し).  
 kāraka (中) 名詞と動詞との關係.  
 kāraṇa (中) 根本, 因.  
 kārya (中) 用事, 作業. °m (彼は [屬].....を[具]) 作すべきであり, (.....について[具]) 作すべくあり, (.....を[具]) 處理すべくあり.  
 kāryavat (形) 作業ある.  
 kāla (男) 時; °lam nī 時を過ぎす; 時節, 機會.  
 kālāgni (男) 末期の火 (世界の終に一切を燒盡する火).  
 kālāntara (中) 時間, 若干時の間.  
 Kāvya (男) (Uśanas 或は Śukra の從父名 [patronymic]).

kāś 1. (爲自. 史詩にては爲他. の時あり).  
 pra+ 現はる, 顯はる, 見ゆ. (役) 顯はす, 開示す.  
 sampra+ (役) 開示す.  
 kāṣṭha (中) 木, 木片.  
 kim (代) (111) 1. 何か, 誰か. kaś yāsi 汝は誰の(男或は女)なりや. kim (具. と俱に) .....を以て何かせん, .....は何の爲なりや, .....は何の要あらん; kim tarhi 爾らば如何. kaśmāt 何の爲に, 何故に. 2. 或一人 (必ず次に api, cana, oid (114) の來るものとす); (否定詞と俱に) 一人もなし. kaśya oit kālasya 若干時を経て. 3. (副)か; 何故に, 何の爲に. kim tu 併ら. 然れども; (否定詞 又は否定文の後(に) 尙ほ又. kim punar 況んや.....あらんや. kim vā 或は爾らざして.....か, 或は.....か. kim vā.....kim 然るか或は然らずして.....か.)  
 kiyanmātra (形) 殆ど無意味の, 心配するに及ばざる, 影響を及ぼさざる  
 kirīṭa (中) 是.  
 kila (副) 實に, 確に, 斯く; 傳へ説く  
 kilikṛta (過) 厭怠したる.  
 kilbiṣa (中) 債, 罪.  
 kiṭikā (女) 蟲.  
 kidrś (形) 云何なる質の, 云何なる類の.

kidrśa (形) (kidrś に同じ).  
 kirtaya- (名稱詞の動詞). pari+ (過) °kirtita 宣説せられたる; 稱揚せられたる.  
 kirti (女) 譽.  
 kila (男) 神, 標.  
 kuṣi (男) 蝨, 胎.  
 kuc 1. sam+ (役) 縮む; 懲す.  
 kuṇḍala (中) 耳環.  
 kutra (副) 何處.  
 kup 4. (過) kupita 怒りされたる, (.....を[屬]) 怒りたる.  
 pra+ (役) 怒らす.  
 kumāra (男) 童, 子.  
 kumbhakāra (男) 陶師.  
 Kuru (男) (或民族及其君の名).  
 Kurkuṭa (男) 雄鷄.  
 kula (中) 姓, 族.  
 kulaputra (男) 善家男子,\* 善男子.\*  
 kuśala (形) 適したる, 善き. (中) 善.  
 kṛ 8. (149) 作す, 造る; sat kṛ 敬す; 行ふ. (役) 造らしむ.  
 adhi+ (過) 任命されたる; (男) 吏. (絶待法) 就て, 關して.  
 anu+ 擬す, 模す.  
 apa+ (.....を[屬]) 犯す. (過) °kṛta (中) 違犯, 過失.  
 alam+ 充分になす, 完成す, 飾る.  
 vyā+ 記説す, (過) 記説せられたる.  
 prati+ 報ゆ.

vi+ (.....を[依]) 犯す, 嘗しる, 辱にす.  
 kṛcchra (中) 苦痛, 艱難.  
 kṛt 6. (124, 18) 切る.  
 vi+ (役. 過) °kartita 肉を傷られたる, 抵むしられたる.  
 kṛtakārya (形) 目的を達したる.  
 kṛtaghna (形) 恩を忘るゝ.  
 kṛtajña (形) 恩を知る.  
 kṛtānta (男) 運命; 死神, (閻魔 [Yama] の號).  
 Kṛti (男) (那曷沙 [Nahusa] の子の名). (女) 術, 咒術.  
 kṛte (kṛta (中) の依) (.....の[屬]) 爲めに.  
 kṛtya (中) 所作.  
 kṛtyā (女) 妖術.  
 kṛtsna (形) 全き, 完き.  
 kṛpaṇa (形) 貧しき, 艱難なる, 苦痛ある; 吝嗇なる. (男) 吝嗇者. (中) 艱難, 苦痛, 不幸.  
 kṛpā (女) 慙, 慙.  
 kṛśa (形) 枯槁したる, 瘦せたる; 微なる.  
 kṛṣṇa (形) 黒き.  
 kṛṣṇavartman (男) 火.  
 kṛ 6. (124, 18) samā+ (過) °kṛta (214, II, 1) 充されたる, 覆はれたる.  
 kṛp 1. (爲自) 整ふ (自動). (役) 執

を作す; 用ゐる, 適用す.

ava + (役) 調ふ, (他動), 準備す; 然

ることあるべしと惟ふ, 信ず.

upa + (役) 調ふ, (自動), 調度す;

取り寄す.

pari + (役) 假定す, 調ふ.

vi + (役) 假設す, 推測す.

kevala (形) 單の, °m (副) 唯だ.

keśa (男) 頭髮.

kesarin (男) 師子, 獅.

koṭi, koṭī (女) 尖端, 俱胝, 千萬.

kopa (男) 怒.

kautūhala (中) 好奇心.

kaulika (男) 織師.

kausalīya (中) 善巧.

kaustubha (男) (毗瑟紐 [Viṣṇu]

の胸に懸れる寶玉).

ktin (文典上の語) kṛt 後接字の ti.

kram 1. (124. 12) 歩む, (増上法)

camkramya- (207) 經行す, 往返す.

ati + 越ゆ, 過ぐ.

vyati + (過) 犯已.

samati + (過) 全く越えたる.

ā + (過) °krānta 攻撃されたる.

nis + 出で往く, 登り出づ.

abhinis + 出で行く.

parā + 超ゆ, 勇氣を出す.

pari + 旋り行く.

sam + (役) 移す.

krama (男) 順序, 次第, (合成語の尾)

種種の...; 行爲; 方法; 起因.

kriyā (女) 完成すること, 業, 作, 作

業, 業用, 調整; 事.

kri 9. pari + (過) 購はれたる.

kriḍ 1. 遊ぶ, 戯る, 滑稽を爲す.

krudh 4. 忿を發す, 忿る, (過)

kruddha 忿れる.

sam + (過) °kruddha 忿れる.

krōdha (男) 忿.

klamatha (男) 疲れたること, 疲勞.

kleśa (男) 苦, 痛, 煩, 煩惱.\*

kva (副) 何處, (api, cana, cid

と俱に) 或る處, 或る時, na kva cit

到處に無し, 決して無し.

kṣana (男) 瞬時, 刹那.\* kṣaṇe-

nāpi 一瞬時にても; kṣaṇāt (及び)

tatkṣaṇāt 一瞬時の後, 直に.

kṣatra (中) 君主の位, 士位, (第二姓).

kṣatriya (男) 士, 第二姓に屬する

人, 刹帝利 (kṣatriya).

kṣantavya (形) 忍ばるべき.

kṣam 1. 忍ぶ; 甘受す, 容す.

kṣama (形) 忍耐なる; 相應せる, 適

當せる, 正しき, 愛らしき, (女) kṣa-

mā 忍辱, 忍耐, 堪忍.

kṣaya (男) 盡ること, 終.

kṣānti (女) 忍辱.

kṣāma (形) 渴したる, 枯れたる, 瘦

せ衰へたる.

kṣi 5. 減す, 毀つ, (過) kṣīna 盡き

たる, 消失したる; 薄き, 少なき.

pari + (過) 盡きたる.

pra + (受) 亡ぶ, 消ゆ, (過) °kṣīna

毀たれたる, 滅ぼされたる, 消へたる.

kṣitīśa (男) 支配者, 王, 君.

kṣip 6. 投ぐ.

ā + 身に着す, 持つ.

samud + 擧ぐ.

ni + 投げ棄つ.

upani + 下す, 置く.

samupani + 下す, 置く.

vini + 散らす, 離散せしむ.

pra + 投げ棄つ, (或人に或ことを)

提出す.

kṣipra (形) 速やかなる, °m (副)

速に.

kṣīrābdi (男) 乳海.

kṣudra (形) 庸劣なる, 凡庸の.

kṣudh 4. (過) 餓へたる.

kṣudh (女) 餓.

kṣudhā (女) 餓.

kṣura (男) 蹄.

kṣetra (中) 國土, 土.

kṣepa (男) 投擲; 猶豫, 延期.

kṣaudra (中) 蜜.

kṣaura (中) 剃鬚, °ram kṛ 鬚を

剃る.

kṣaurakarana (中) 剃鬚.

## Kha.

khatvā (女) 臥床.

khaḍga (男) 劍.

khaṇḍa (中) 片, 段, 分, 品, 業.

khaṇḍana (中) 負傷, 傷害.

khaṇḍaya- (名稱詞の動詞) 寸断す,

亡ぼす; 傷害す, 傷つく.

khaṇḍaśas (副) 片片に, 片毎に;

°śaḥ kṛ 寸断す.

khadṛyota (男) 蝨.

khara (男) 驢.

khalu (副) 確に, 全く, 實に, されば,

然るに; 故に, na khalu 全く然らず.

khura (男) 蹄.

khyā 2. 名づく.

ā + 告ぐ, 名ざす, 報らす, 曰ふ.

pratyā + 斥ぞく, 拒む.

vi + (役) 知らず, 廣告す.

sam + 數ふ.

## Ga.

gagaṇa 或は gagana (中) 虚空.

Gaṅgā (女) 旃伽 (gaṅgā), Gan-

ges.

gana (男) 衆, 群.

gananiya (形) 計算せらるべき.

ganaya (名稱詞の動詞) 計算す.

gata (gam の過) 往きたる, 過ぎ去

りたる; 存せる.

gatādhvan (形) 路を往きたる; 老

たる.

gatāyus (形) 死したる。  
 gati (女) 途, 趣, 達すること, 着すること; 存在; 容有性 (possibility).  
 gadā (女) 杵.  
 gandha (男) 香.  
 gandharva (男) 香を尋ねる者, 香を食物とする者, 健闘婆,\* 琴香,\* 食香.\*  
 gam 1. (124, 11) 往く, 過ぐ, 經過す, 覺知す, 認む, 辨了す. (過) は別に出す.  
 adhi+ 研究す, 證(ま)とる.  
 anu+ 従ふ(自動).  
 vyapa+ (過) 盡きたる.  
 abhi+ 來る; 往く.  
 ava+ 達す, 經驗す, 議る, 認む.  
 ā+ 北方へ來る, 至る.  
 samabhyā+ (過) 來れる.  
 upa+ 近づく, 往く; (pañcatvam と俱に) 死ぬ.  
 abhyupa+ 許す.  
 nis+ 出で去る.  
 vinis+ 出で去る.  
 prati+ 退ぞく, 戻る.  
 vi+ 離れ去る; 消ゆ, 飛び去る.  
 sam+ 會合す; 連絡す; (婦人と) 同様す.  
 upasam+ 往く.  
 gambhira (形) 甚深なる.  
 gamya (形) 了知せらるべき.  
 gayā (女) 伽耶(地名).  
 garala (中) 毒.

garuḍa (男) 揭路荼鳥(毘瑟紐 [Viṣṇu] の乗る動物).  
 garuṣmat (男) 鳥; (揭路荼 [Garuḍa]).  
 garjita (中) 吼.  
 gardabha (男) 驢.  
 garbha (男) 母胎, 兒, 稚兒.  
 gala (男) 咽喉, 頸.  
 gahana (形) 稠げき, 通過すべからざる. (中) 稠林.  
 gā 3. 往く, 來る; (成事を[業]) 共にす.  
 gātra (中) 肢; 身.  
 gāthā (女) 諷頌,\* 伽他,\* 偈.\*  
 gāndharva (形) 健闘婆 (Gandharva) に固有なる; gā° vivāha 自由結婚.  
 gāndhika (男) 香を賣る者, 賣香者.  
 gāmin (形, 合成語の尾に在り) 往く, 到る, 達する.  
 gāh 1. (爲自) 入浴す, 入りこむ.  
 vi+ 入浴す, 沐浴す, 入りこむ.  
 gir (女) 語, 聲.  
 giri (男) 山.  
 gīta (中) 歌.  
 guṇa (男) 本性; 利, 勝, 德, 益.  
 guṇavat (形) 具德の, 殊勝なる, 超出したる.  
 guṇin (形) 勝利を得たる, 德を有せる.

gupta (過) 覆はれたる, 埋もれたる.  
 °m (副) (男) 笈多, 種多, 護られたる, 護(人名).  
 guru (形) 重き. (男) 師.  
 guhya (形) 秘密の.  
 gūḍha (guh [124, 12] の過) 覆はれたる, 埋もれたる, 見難き.  
 gr (jāgr を見よ).  
 Gr̥dhraḥkūta (中) 鷲峯, 鷲頂(山名).  
 gr̥ha (男, 中) 家; °karman 家業.  
 gr̥hastha (男, 中) 己の家政をとる已婚の婆羅門, 家主.  
 gai 1. (122) 諷ふ.  
 go (男) 牡牛; (女) 牝牛.  
 gocara (男) 境, 域.  
 gopa (男) 牧牛者.  
 gopāla (男) (女) 牧牛者.  
 gaura (形) やゝ白き, やゝ貴なる, やゝ赤き.  
 grantha (男) 文.  
 gras 1. 呑む, 呑み食ふ.  
 grah 9. (152, 153, 163, 186, 187, 195, 205, 214, I, 216, 217, 218) 攫む, 包む, 把る; 捉る, 捕ふ, 従ふ(他動), 克つ, 得, 受く; 買ふ; 擲ふ. (受) 意味せらる, 義なり.  
 anu+ 惠む, 利益す.  
 ud+ (過) 取られたる. (役, 過) 辯論せられたる, 討論せられたる.

pari+ (過) 攝受せられたる.  
 pra+ 擴ぐ, 遂出す.  
 prati+ 受く, 受取る, 所有す; 得て對とす.  
 sam+ 攫む. (過) 攝せられたる.  
 graha (男) 攫, 包, 執; 一惑(神に液體を飲ずるとき); 把持者(遊星, 鬼神を云ふ).  
 grahana (中) 受, 領取; 名ざすこと, 擧ること.  
 grāmya (形) 野鄙なる.  
 grāha (男) 執.  
 grāhya (形) 執らるべき; 認めらるべき, 參照せらるべき.

## Gha.

ghaṭ 1. (爲自, 役, 爲他) 完成す.  
 ghaṭa (男) 瓶.  
 ghaṭṭ 1. (役) 揩摩す.  
 ghaṇṭā (女) 鈴; 鼓.  
 ghaṇṭika (男) 鈴を鳴らす人, 鼓を撃つ人.  
 ghuṭ 1. 6. ava+ (役) 輾らかくす, 綿を入れて膨らす.  
 ghuṣ 1. 響かす, 鳴らす; 高聲に呼ぶ, 廣告す.  
 ghora (形) 恐ろしき, 畏るべき, 暴威の.  
 ghoṣa (男) 音聲.

## Ca.

ca (接續詞) 及び、と、又; 併ながら。  
 cakra (中) 輪; 投環。  
 cakṣ 2. (爲自) (46) 視る。  
 ā + 告ぐ、言ふ、名ざす、話す。  
 vyā + 説明す。  
 pra + 説く。  
 cakṣus (中) 眼; 視。  
 Candarava (男) (野干の名)。  
 caṇḍāla (男) (女) i 旃陀羅、執惡\*。  
 catur (數) (101) 四。  
 catura (形) 愛らしき、殊妙なる。  
 caturtha (數) 第四。  
 caturdhā (副) 四分に、四重に、ca°  
 vah 裂て四分となす。  
 caturbhuja (形) 四臂ある。  
 caturviṃśati (女) 二十四。  
 catuḥśāla (形) 四堂を具へたる、四  
 房を具へたる。  
 catuṣpādaka (形) (女) °dikā 四  
 句の。  
 cana (不變辭) (疑問詞の意義をして  
 不定ならしむ) (114)。  
 candra (男) 月。  
 Candrārdhacūdāmaṇi (男) 半月  
 の髻珠を有せる人、(Śiva の稱)。  
 capala (形) 動き易き、固定せざる。  
 遷り易き。(男) 水銀。

car 1. 行く、彷徨す; ふるまふ; 運  
 ぶ、果す、實行す、造る、作す、示す。  
 anu + 追ふ; 實行す。  
 ā + 行ふ、奉勸す。  
 ud + (過) 音を發せる。  
 upa + (役) (.....にて[具]) 治療  
 す。  
 pari + 追逐す; 侍す、事ふ、看護す。  
 vi + (役) 伺察す、考慮す。  
 sam + (役) (.....に[屬]) 交付す。  
 cara (形) 行く、彷徨する、持續する。  
 carita (中) 行ひ。  
 carya (中) 行ひ。  
 caryā (女) 行ひ。  
 cal 1. 震ふ、搖く; 運動す、行く。  
 pra + (役) 搖かす。  
 sam + (役) 搖かす。  
 cala (形) 運動する、動き易き; 固定  
 せざる、滅し易き、遷り變る。  
 calana (中) 動搖、前後上下動。  
 cāpa (男、中) 弓。  
 cāraṇa (男) 遊行する俳優。  
 ci 5. 重ね; 集む。  
 ava + 集む、摘む。  
 nis + 確定す、決斷す。  
 vi + 穿鑿す、探索す。  
 cikitsaka (男) 醫士。  
 cit 1. (求欲法) cikitsa 治療す。  
 citta (中) 志、心、情; 思想; 智慧。  
 悟解。

citra (形) 雜色の、斑らなる; 飾られ  
 たる。°rūpa 斑らなる。(羽等にて) 飾  
 られたる。  
 cid (不變辭) (疑問詞の意義をして不  
 定ならしむ) (114)。  
 cint 1. 10. 思ふ、惟ふ。  
 vi + 考慮す、沈思す。  
 cintā (女) 思想、思惟; 配慮、疑惧、  
 虞。  
 cira (形) (時の) 長き、永續せる。  
 cirāt 長き時を経て、終に。°m (副)  
 cirakālam (副) 長時に、長く。  
 ciraja (形) 老たる。  
 cihna (中) 記、相。  
 cihnita (過) 記されたる、標された  
 る、顯はされたる。  
 cud 1. (役) 推す; 要求す、逼る。  
 Cūḍāmaṇi (男) (武士の名)。  
 cetas (中) 感、心。  
 ced (接續詞) ならば; no ced 然ら  
 ずんば、然らざるときには(即ち反對の  
 ときには)。  
 ceṣṭita (中) 舉動、動作、行狀。  
 caitasika (形) 心に屬する、心所\*。  
 Cyavana (男) (仙人の名)。  
 cya 1. 勸搖す、遷る。

## Cha.

chattra, chaira (中) 蓋(君主の

標幟)。

chad 1. sam + (過) 覆はれたる。  
 chandas (中) 音律。  
 chāndasa (形) 吠陀の。  
 chāyā (女) 蔭。  
 chid 7. pari + 限定す、局限す、詳  
 定す。  
 chidraya- (過) 缺陷ある、犯せる、  
 犯已。  
 chedaka (形) 斷つ、切る。

## Ja.

jagat (中) 世界。  
 jan 4. (爲自) (124, 14) 生まる、發生  
 す。(過) jāta (214, 1, 7) (.....より  
 [依]) 生れたる; (.....に由つて[具、又  
 は從]) 生れたる; 轉じたる、發生した  
 る、臨みたる、存在する、起りたる。  
 upa + 發生す; 在り; (.....を[爲])  
 養く。  
 vi + 生む。  
 sam + 生まる; 發生す、現はる; 轉  
 ず、爲る。(過) °jāta。  
 jana (男) 所造物、人間、人; 民族、  
 人民、臣民(合成語の尾にありて數しば  
 多數の總名に用ゐらるゝことあり)。  
 janaka (形) (女) °ikā 生み出す、  
 生ずる。  
 janani (女) 母。



janman (中) 生。  
 jaya (男) 勝; 克勝, 征服。  
 jarā (女) 老ゆること; 老年。  
 jarjarita (過) 衰へたる, 枯槁したる, 弱き, 脆き。  
 jala (中) 水。  
 jalaukas (女) 燈。  
 java (男) 急劇, 速度。  
 jahi (han の二, 單, 命, 爲他) (157).  
 jāgr (207 備考) 覺む。  
 jāta (jan の過)  
 jātaka (中) 本生\* (釋尊の前生及び其に關係せる談話)。  
 Jātakamālā (女) 本生業 (書名)。  
 jāti (女) 生; 種族; 種類。  
 jātu (副) 到底; (na と俱に) 到底然らず, 全く然らず, 斯かることなし, 斯かる機會なし。  
 jātya (形) 貴族に屬する。  
 jānu (中) 膝。  
 jāmatr (男) 婿。  
 jāla (中) 網。  
 jāлма (形) 賤しき。  
 ji 1. 從ふ (他動), 勝を得, (過) 勝たれたる。  
 parā + (過) 勝たれたる, 負けたる。  
 vi + 勝を得, 征服す。  
 jighāmsa- (han の求欲法 [205]).  
 jīñāsa- (jñā の求欲法)。  
 jina (男) 勝者, (佛陀の號, 多は釋

尊を指す)。  
 jihva (女) 舌。  
 jiv 1. 活く。  
 ā + (.....にて[業]) 活く, .....より利を得。  
 jiva (男) 命, 生; 命者\* (生活せしむるもの)。  
 jivaloka (男) 生物世界; 人類。  
 jivita (中) 命, 生。  
 jī 4. (38) 老ゆ。  
 jñā 9. (152) 知る, 承知す; 識る, 經驗す, jñātam (副) 知られて。  
 anu + (役) (.....より[業]) 退ぞく。  
 samanu + 可とす, 賛成す, 許す。  
 abhi + 認む; (.....なりと [vat]) 謂ふ。  
 ā + 經驗す, 聞く, (役) (200) 命令す。  
 pari + 知る, 確知す, 通知す。  
 pra + (役) 假説す\*。  
 prati + 覺る, 悟る。  
 vi + 覺る, 注意す, 知る, 承知す。  
 sam + 想像す。  
 jñāna (中) 知, 智, 承知。  
 jñeya (中) 知らるべきもの, 所知, 爾焰\*。  
 jyestha (形) 最勝の, 最善の; 最年長の。  
 jval 1. abhi + 光る。

## Da.

damb 1..10. vi + 嘲る; 詐る, 欺く。

## Ta.

ta (tad を見よ)。  
 takra (中) 水を混和したる精乳。  
 tad (役) 打つ, 撲ち倒す。  
 tatas (副) 其處より, 此の方に; 其處に; 其の方に; 此に於て, 然るときに; 夫ゆへに。  
 tattva (中) 眞實。  
 tatra (副) 此の中; 其處に; 其處の方に; 然るときに。  
 tathā (副) 是くの如く, 正に然かく; 實に然り, 可なり, tathāpi 關せず; tathā.....yathā 此も亦.....の如く; yathā.....tathā.....の如く此も亦實に; .....の如く此も亦。  
 tathāgata (形) 是の如き状態にある。(男) 是の如くに來れる者, 如來\*。  
 tathāvidha (形) 此類の, 此の方法の。  
 tad (代) (103) 其, 彼, (數しば第二人称代名詞と俱に [sā tvam 此處なる汝] 又は冠詞として用ゐらる)。 (副) 其處; 今, 然るとき; 其の時に; 其の理にて, 夫故に, tena 其に由て, 斯くして, 其の結果として, 夫故に, tasmāt

夫故に, 其の理にて, tadapi 其にも拘はらず。  
 tadavastha (形) 此の状態にある。  
 tadā (副) 爾の時, 其處に於て, 然るとき, 是に於て。  
 tadānim (副) 爾の時, 然る時。  
 tadvidha (形) 彼の如き, 其の如き。  
 tanaya (男) 男 (son); (女) ā 女 (daughter)。  
 tanu (女) 軀, 身。  
 tanmanaska (形) 意を其處に用ゐて, 其を思惟して。  
 tap 1. 4. 苦行す。  
 tapas (中) 苦行; tapastap 苦行を修す。  
 tapasvin (男) 苦行者。  
 taponitya (形) 常に苦行を修する。  
 tamāla (男) (最も穢黑なる皮を有する樹の名; Xanthochymus pictorius)。  
 tara (比較級の後接字, 96)。  
 taruṇa (形) 幼き; (女) ī 少婦。  
 tarka (男) 尋思。  
 tarhi (副) 其際に, 然るときに; evaṃ tarhi 若し爾らば。  
 tala (男, 中) 平面, 平坦處。  
 tāta (男) 父。  
 tāpasa (男) 苦行者。  
 tāmbūla (中) 核樹樹葉。  
 tāmbūlādhikāra (男) 核樹樹葉を

持して屈從する役。

tāyin (男) (trāyin [救度者]の俗語。

佛陀の號。多は釋尊を指す)。

tāra (形) 透徹する。高聲の、鋭どく響く。

tāvaccira (形) 是の如く久しき。

tāvāt (形) 然様に大なる、然様に多き。(副) 然様に甚はだしく、然様に多く、然様に長く、爾の間、暫時；初に、且らく、兎に角(多は命令法の後に用ゐらる)。mā tāvāt (感歎的) 斷じて此ある可らず、止止。yāvāt.....tāvāt.....ときに。

tigma (形) 鋭どき、尖りたる； °te-

jas (形) 鋭どき尖を有せる。

tīn (活用法の語尾、人稱の語尾)。

tij 1. (求欲法) 忍耐す。

timira (中) 瞽、眼に翳を生ずるもの。

tiryac (男、中) 傍行する者、獸；禽獸。

tila (男) 胡麻子；小片。°śas (副) 小片に。

tiṣṭha- (sthā を見よ)。

tikṣṇa (形) 鋭どき、尖りたる。

tīra (中) 岸。

tīrtha (男) 浴場；巡禮場。

tīvra (形) 鋭どき；劇しき、強き。

tu (副) 併ら、然れども。(詩句にては單に字を填むるに用ゐることあり)。

tud 6. vi+ 刺す、鞭うつ、打つ。

Turvasu (男) (Yayāti と Deva-

yāni との子の名)。

tul 10. 較量す。

tulā (女) 比類。

tulya (形) (或ひとに[具]) 等しき；

同類の、同じ貌の。

tuṣ 4. 満足してあり。(役) 満足せしむ。

pari+ (役) 満足せしむ。

tuṣṭi (女) 満足； tuṣṭim vidhā

満足してあり。

tūrṇa (過) 速やかなる。°m (副)

tūṣṇībhāva (男) 默然\* (雅語には

tūṣṇībhāva)。

tūṣṇīm- (副) 靜かに、默して。

trṇa (中) 草。

trṭiyakam (副) 三度。

trp 4. (過) trpta 飽されたる、(...に[依]) 飽たる。

sam+ (役) 飽かす、満足さす、悦ばす。

trṣ (女) 渴；貪愛。

trṣ 4. 渴す。(過) trṣita 渴したる、渴仰せる。

trṣṇā (女) 渴；貪愛。

tr 1. 越す、彼岸に到る。

ava+ 降り來る、降り往く；身を化作す。(過) °tirṇa。

ud+ 出で來る；逃る；度る。

tejas (中) 鋭、利、尖端；鋭どきこと

力、精；威、勢。

tāmira (形) 暗き；眼を翳ませる。

tyaj 1. 捨つ；放つ、棄つ、賈す、廢す。(受)(.....を[具]) 離る、(.....より[具]) 免かる。

sam+ 放つ、棄つ。

tyāga (男) 捨施。

tyāgavat (形) 能く捨施する。

trapā (女) 羞。

traya (中) 三、三數。

trayastrimśattama (數) 第三十三。

trayoviṃśati (女) 二十三。

tras 1. 懼る。

sam+ (過) 懼れしめられたる。

trā (trai を見よ)。

tri (數) (101) 三。

tridaśa (男) 神。

trai 1. 守護す、保護す、教ふ。

traidhātuka (中) 三界。

trailokya (中) 三世界(天、地上、地下)。

tvattas (tvad [52 の備考]の從)。

tvad (106) (第二人稱代名詞の語幹) 汝。

tvādrśa (形) 汝に似たる、汝に等しき、汝の類なる。

## Da.

damś 1. (124, 17) 咬む、刺す。

sam+ 齒にて執ふ、咬む。

damṣṭrā (女) 犬齒、牙。

dakṣiṇapūrva (形) 東南の。

dakṣiṇāpatha (男) 南方の地、De-

khan。

danda (男) 杖。

danta (男) 齒。

dam 4. (役) 降す。

dambha (男) 詐僞。

dayā (女) 悲憐。

daridra (形) 貧しき。

dardura (男) 蛙。

darpa (男) 僞逸、貢高心。

darśana (中) 見、瞻視；訪問；外貌；°nam dā 容貌を示す、現はる。

darśaniya (形) 見らるべき；人の目を惹く、注目すべき、威容ある、美しき。

Dala (男) (Parikṣit の子の名)。

daśan (數) 十。

daśana (男) 齒。

daśama (數) 第十。

daśayojana (形) 長さ十踰繕那ある。

daśavarṣa (形) 十歳の。

dahara (形) 小きき；壯き。

dā 3. (142, 156, 166, 178, 200, 214, 1, 9, 218) 施こす、與ふ；嫁せしむ；作す、整理す、惹き起す。(過) datta。

ā+ 取る、容る、受く；除く、去る。省く。ādāya (.....と[業]) 俱に。

upā+ upādāya 由て、以て。

vyā + (過) vyāta (214, I, 9.) 開かれたる。  
 samā + (過) samāta 又は samā-datta) 受けられたる, 所受。  
 pra + 施こす, 交付す, 支拂ふ, 貸す, 與ふ。  
 prati + 返済す。  
 dā 2. 絶つ, 盡す, (過) dāta, dāta-vat (215, を見よ)。  
 dā 4. 淨む, (過) dāta, dātavat (215 を見よ)。  
 dāna (中) 施, 惠施; 施物。  
 dānta (過) 馴されたる, 馴れたる; 柔和なる。  
 dāra (男) (複) 已婚の婦人, 婦人。  
 dāridrya (中) 貧窮。  
 dāru (中) 木。  
 dārumaya (形) 木より成れる, 木の。  
 dāsa (男) 僕使, (女) i。  
 dina (中) 日; dine dine 日々, 毎日; dināddinam (副) 日より日に互りて, 日々。  
 div (女) (90) 天。  
 divasa (男) 日。  
 divya (形) 天の, 神の; 天上にて見る如く美はしき, 莊麗なる。  
 Divyāvadhāna (中) 尊き饗宴, 尊き事蹟 (書名)。  
 diś 6. 示す, (役) 宣説す  
 ā + 指す, 命ず。

samā + 命ず; 知らず, 教ふ。  
 upa + 教ふ, (過) °diṣṭa 指令せられたる。  
 nis + 記す, 説く, 審かにす, (過) 記されたる, 説かれたる。  
 prati + 指す, 委任す, 就かしむ, (pratyathādiśat は史詩特別の使用法にして atha pratyadiśat に同じ)。  
 sam + 訓示す, 説示す, 教誡す。  
 diś (女) 天空の方處, 方。  
 diṣṭa (中) 運命。  
 diṣṭyā (diṣṭi の具) 天なるかな, 幸なるかな。  
 diḥ 2. 塗る, 糊塗す, (過) digdha。  
 dina (形) 悲しき, 哀れなる。  
 Dipamkara (男) 燃燈,\* (如來名)。  
 dirgha (形) 長き, °sya kālasya 長き時を経て。  
 dirgharātram (副) 長夜に, 永く。  
 du 5. 燃す, 惱ます, 苦ます。  
 duḥkha (中) 苦, 痛。  
 duḥkhita (過) 苦しまされたる, 哀しき。  
 duratikrama (形) 從へ難き。  
 durātman (形) 悪しき, (男) 惡人。  
 durāpa (形) 得難き, 遇ひ難き。  
 durāsada (形) 近づき難き。  
 durgrāhya (形) 捉へ難き, 持ち難き。  
 durjana (男) 悪しき人, 兇漢。

durduha (形) 容易に乳を搾らしめざる。  
 durdharsa (形) 敵し難き, 近づき難き, 危険なる。  
 durbala (形) 弱き。  
 durbhikṣa (中) 饑饉。  
 durmati (形) 愚かなる, 癡なる, 無知の。  
 durlabha (形) 得難き, 有り難き, 稀の。  
 durvicāraṇa (形) 考究し難き, 伺察し難き。  
 duṣkara (形) 作し難き, 完うし難き, 難行。  
 duṣṭa (過) 敵の, 惡意の, 不良の, 悪しき。  
 dustyaja (形) 捨て難き, 廢め難き。  
 duḥsparśa (形) 觸れ難き, 捉へ難き。  
 duhitṛ (女) 養。  
 dūta (男) 使。  
 dūra (形) 遠き, 遙かなる, °m (副)。  
 dūratas (副) 遠方より, 遠方に。  
 dr 6. (爲自) ā + (124, 18.) 顧慮す。  
 dr̥dha (過) 堅固なる。  
 drś (120 備考) 見る, (過) dr̥ṣṭa 見られたる, 認められたる; 居る, 存する, 在る; 定まりたる, 固き, 至當なる, (役) 見せしむ, 顯はす; ātmānam dr̥ṣ (役) 己を顯はす, 現はる; 教ふ。  
 ā + (役) 見せしむ, 示す, 示現す。

dr̥ṣṭa (dr̥ś の過)。  
 dr̥ṣṭadharmā (男) 現世,\* 現法\*。  
 dr̥ṣṭānta (男) 喩。  
 dr̥ṣṭi (女) 見, 眼; 瞻視; 了解; 見解。  
 deya (形) (216) 施こさるべき。  
 deva (男) 神, 天;\* 王, (女) devī 神妃, 女王; 王女。  
 devagarbha (男) 神の兒。  
 devatā (女) 神; 神像。  
 Devadatta (男) 天の授けたる, 天授。  
 Devayāni (女) (Uśanas の女にして Yayāti の配偶の名)。  
 devarāj (男) 神の王。  
 devārāja (男) 神の王。  
 devasuta (男) 神の兒, 神の子。  
 devāyatana (中) 神殿。  
 devendra (男) 神の主。  
 deśa (男) 方, 處, 土地。  
 deśanā (女) 説。  
 deha (男) 身, 體。  
 dehin (男) 生物, 人。  
 daiva (中) 天命, 運。  
 daivata (中) 神。  
 doṣa (男) 過, 失, 罪, 實。  
 dauḥśīlya (中) 悪しき性質, 悪しきあること。  
 dyut 1. (役) 顯はす。  
 dyuti (女) 輝, 美麗; 値。  
 dyūta (中) 賭博。

dyotaka (形) 顯す。  
 dyotana (中) 輝くこと; 照すこと;  
 顯すこと。  
 dravina (中) 財産, 富。  
 dravinavat (形) 財産を有せる, 富  
 める。  
 dravya (中) 實物, 實體, 本體, 實\*  
 dravyasat (形) 實有の\* (pra-  
 jñaptisat に對す)。  
 draṣṭavya (形) 見らるべき; 思はる  
 べき。  
 dru 1. 走る, 迅く動く。  
 samabhi+ 走り来る, 急ぎ来る。  
 upa+ (.....に[業]) 急ぎ往く, (.....  
 を[業]) 襲ふ, (.....に[業]) 逼る。  
 druta (過) 速やかなる, °m (副)  
 drumā (男) 樹。  
 Druhyu (男) (Yayāti と Śar-  
 miṣṭhā との子の名)。  
 dva (dvi を見よ)。  
 dvaya (中) 偶, 二。  
 dvādaśan (數) 十二。  
 dvār (女) (及び) dvāra (中) 戸, 門。  
 dvārapālakatva (中) 門衛の役。  
 dvāvīmśati (女) 二十二。  
 dvi (數) (101) 二。  
 dvigu (形) 二つの牛を所有せる。  
 dviguṇa (男) 二重, 二倍。  
 dvija (形) 再び生るゝ; (男) 婆  
 羅門。

dvitiya (形) 第二の。  
 dvitīyakam (副) 再び。  
 dvīpin (男) 豹。

## Dha.

dhana (中) 錢, 富, 財。  
 dhanin (形) 富める。  
 dhanya (形) 幸福なる。  
 °dhara (形) 持てる, 有せる。  
 dharitri (女) 地, 土地。  
 dharma (男) 務, 德; 敬虔; 秩序;  
 制, 正理, 法; 宗教。  
 dharmatā (女) 事物の性質たるこ  
 と, 特性たること, 法性\*  
 dharman (中) (合成語の終に来る) 支,  
 持; 法。  
 dhārmin (形) (合成語の尾) .....の  
 法に依る, .....を特色とする, .....の性  
 質ある。  
 dhā 3. (142. 156. 166. 205. 214. I. 5.  
 218.) 置く, 安置す, antar dhā 消  
 ゆ。  
 abhi+ 言ふ, 語る; (或人に) 語る。  
 (過) °hita。  
 ā+ 彼方に置く; (.....に[依]) 向く  
 (他動)。  
 ni+ 彼方に置く。  
 upani+ 近く置く; 觀る。  
 samprani+ 下に置く; 看過す, 注意

せぬ, 忽にす。  
 pi+ (過) pihita (其語を見よ)。  
 vi+ 造る, 完成す, 起す, 爲す, 調ふ  
 (他動), 處理す。  
 śrad+ 信ず。  
 abhiśrad+ 信認す。  
 sam+ 集む; (或ものに[爲, 或は屬])  
 對して弓に箭を) 番ふ。  
 upasam+ (過) 伴はれたる。  
 dhātu (男) 要素; 地の成分; 動詞の  
 語根, 字界\*  
 dhārin (形) 持する, 著たる。  
 dhāv 1. 走る。  
 anu+ 追ひ走る, 追ひ馳す, 追ひ  
 行く。  
 pari+ (役) 圍む, 包む。  
 dhāvana (中) 摩擦, 研磨, 雕琢。  
 dhimat (形) 聰とき, 伶俐なる, 賢こ  
 き (釋尊の號)。  
 dhīra (形) 固き。  
 dhū 5. ava+ 逐ひ拂ふ。  
 dhṛ 10. (及び役) 持つ; 堅く捉ふ;  
 配す, 與ふ, 向く (他動)。  
 ava+ 識る, 研究す。  
 sam+ 斥ぞく, 停む, 抑制す。  
 dhṛtātman (形) (.....に[依]) 志せ  
 る, (.....を[依]) 考ふる。  
 dhairya (中) 確固たること, 堅固な  
 ること。  
 dhyaū (中) 熟考, 熟慮。

dhyaī 1. 考ふ, 熟考す。

ā+ 注意す。

dhruva (形) 牢き; 動かすべからざ  
 る; 確かなる, 眞實の。

## NA.

na (副) 不; (例外には命令法るとき  
 mā の代に用ゐることあり), na hi  
 否然らず, 全く然らず。  
 nakha (中) 爪。  
 naga (男) 樹。  
 nagara (中) 城市。  
 naṭa (男) 俳優。  
 Natabhaṭikā (女) 那咄婆咄\* (寺  
 名)。  
 nad 1. (役) 響かす, 啼吼す。  
 nadi (女) 河。  
 nanu (副) 爾らざるか; 豈に.....な  
 らずや, 豈不。  
 nand 1. abhi+ 信受奉行す。  
 nandi\* (女) 喜。  
 nabhas (中) 天空。  
 nam 1. 身を屈す。  
 pra+ (.....の[業]) 前に屈む。  
 sampra+ 恭しく敬禮す。  
 namas (中) 歸敬, 敬禮。  
 naya (男) 理題, 道。  
 nayana (中) 眼。  
 nayuta (中) 那由他, 千億 (算法一

定せず。  
 nara (男) 人; 男。  
 narendra (男) 主, 君, 王。  
 nareśvara (男) 主, 君, 王。  
 nartaka (男) 舞踏者。  
 nava (形) 新しき, 新なる。  
 naś 4. 盡く, 滅す, 消ゆ。  
 nah 4. (48 備考 2) sam + 武装す。莊嚴す。(過) °naddha 武装したる。  
 nahi (副) 決して爾らず, 確に爾らず。  
 Nahusa (男) (君主の名)。  
 nāga (男) 龍; 象。°danta 象の齒; 木釘(壁より出せるものにして物を懸くるに用ゐる)。  
 nātha (男) 依怙, 主。  
 nānā (副) 種々の方法にて, 種々異なりて; 種々。  
 nānādeśa (男) 異なりたる土地, 異なりたる地方。  
 nānāprakāra (形) 異なれる類の。  
 nānāvidha (形) 種々の。  
 nāntariyaka (形) 外に有らざる, 離す可らざる, 恒に關聯せる。  
 nāpita (男) 理髮師。  
 nāmadheya (中) 稱呼, 名。  
 nāman (中) 名; nāma kr (或人に[屬]) 名を興ふ。(副) nāma 名を以て, 名づけられたる; 確かに, 疑ひなく, 即ち, 正に。nāma-kāya (男) 名の總合, 名身。\*

Nārāyaṇa (男) 那羅延。(毗瑟紐 [Viṣṇu])。  
 nārī (女) 婦人, 妻。  
 nāśa (男) 没, 滅。  
 Nāsatya (男) (雨)(アシュギン [Aśvin] の號)。  
 nāstīva (中) 非有なること。  
 nihkleśa (形) 煩惱を離れたる, 煩惱無き。  
 nija (形) 生來の, 固有の, (數しば相當せる所有格の代名詞を以て譯せらる)。  
 nitya (形) 固有なる, 常の, 不變の; 續て(或ことに[合成語]) 専らなる。°m (副) 常に, 續て, 常時。  
 nidāna (中) 因縁。tato nidānam 由此因縁\*。  
 nidrā (女) 眠。  
 nidhana (中) 終; 死; °m i 死ぬ。  
 nidhāna (中) 實。  
 nidhi (男) 實。  
 nibhrta (過) 辭かなる; 認められざる, 隠れたる。°m (副)。  
 nimba (男) (苦き果實を有せる樹の名 [Azadirachta indica])。  
 niyata (過) 確定さたれる, 定まりたる, 確かなる。°m (副)。  
 niyama (男) 制限; 規律, 法則; 服事; 修行; 禁戒, 誓。  
 nirarthaka (形) 益なき, 益とならざる, 目的に適はざる。

nirvaśeṣa (形) 餘りなき。  
 nirārambha (形) 企圖することなき, 疎懶の。  
 nirāsa (男) 除遣。  
 nirudyoga (形) 勤めざる。  
 nirodha (男) 滅ぼすこと, 滅。  
 nirguṇa (形) 徳なき, 悪しき, 下劣なる。  
 nirdaya (形) 同情なき, 憐れまざる, 悲心なき。°m (副)。  
 nirdeśa (男) 顯示。  
 nirdvandva (形) (喜と憂等の如き) 相違の事に対して平等なる, 感動なき。  
 nirmama (形) 一切に対して平等なる, 煩惱なき, 我所見を離れたる。  
 nirvāna (中) 涅槃\* 滅すること; 滅してあること, 滅\*。  
 nirvicāra (形) 伺察せざる, 顧慮せざる。  
 nirvid (女) 厭離。  
 nirviśaṅka (形) 猶豫なき, 疑懼せざる。  
 nirviśa (形) 毒なき, 毒とならざる。  
 nivartaka (形) (女) °ikā 生れかはる, かへる。  
 nivāraṇa (中) 防止。  
 nivāsin (形) 止住する。  
 nivṛtti (女) 滅; 簡ぶこと, 區別すること。  
 nīś (女) 夜。

niśītha (男) 中夜, 夜。  
 niścaya (男) 決定, 決斷; °yam kr 決心す, 誓ふ。  
 niḥśaṅka (形) 恐れなき, 顧慮せざる, 猶豫なき。  
 niḥkauṛtya (形) 後悔を離れたる, 離惡作\*。  
 niḥprayojana (形) 目的なき, 用なき。  
 nis (副) (合成語の前分として用ゐらる) 非; 無。  
 nistejas (形) 力なき, 弱き。  
 niḥsarāṇa (中) 出離。  
 niḥsāra (形) 力なき, 虚しき, 眞價なき。  
 niḥsvabhāva (形) 自性なき, 無自性。  
 nī 1. 導く; 過ごす(又時に就ても用ゐる)。  
 apa + 解く, 外す。(過) 取去られたる, 決除せられたる。  
 ā + 持ち來る, 取り寄す, 呼び寄す。(役) 持ち來らしむ。  
 upa + 導き來る, 將ひ來る。  
 pra + (過) 妙なる。  
 vi + 調伏す。(過) 訓練せられたる, 調へられたる。  
 nica (形) 下等の, 賤しき, 鄙しき。  
 nicakais (副) 謙遜して。  
 niruja (形) 健康なる。

nīla (形) 紺色の, 青き; 紺の. (女.)  
 nīli 藍.  
 nīlāmbara (中) (樹名, 松の一種).  
 nīlivarṇa (形) 藍色の.  
 nu (不変辭) 今; 尙, 加ふるに; 多分,  
 實に(殊に疑問のときに用ゐらる). (api  
 の下を見よ).  
 nud 6. 推す, 追ふ, 衝く. (過.)  
 nunna.  
 pra + 押し進む, 押し入る; 衝く, 起  
 す. (過.) °punna.  
 nūnam (副) 現時; 直に; 確に, 必  
 らず.  
 nṛ (男) 男; 人.  
 nṛpa (男) 君, 王.  
 nṛpati (男) 君, 王.  
 nṛsaṃsa (形) 賤しき, 下劣なる.  
 (男) 兇漢.  
 netra (中) 眼.  
 no (副) 不; no ced 爾らざる時に,  
 爾らざる際に, 爾らざれば.  
 naibhṛtya (中) 沈黙せること.  
 nau (女) 船.  
 nauyāna (中) 航行.  
 nausaṃkrama (男) 船路, 航路.  
 nyāya (男) 道理, 理趣.

## Pa.

pakṣa (男) 品, 黨; 機會 意見.

pakṣin (形) 翼ある. (男) 鳥.  
 pañka (中) 泥.  
 pañkin (形) 穢れたる, 塗られたる.  
 pamkti (女) 列, 行.\*  
 pac 1. 煮る.  
 pari + (役) 成熟せしむ.  
 pañcaka (形) 五の.  
 Pañcatantra (中) 五教書(書名).  
 pañcatva (中) 死. °mupagam  
 死す.  
 pañcan (數) (102) 五.  
 pañcaprakāra (形) 五種の, 五倍の.  
 pañcāśat (數, 女) 五十.  
 paṭa (男) 織物, 衣.  
 paṭala (中) 膜.\*  
 paṭu (形) 聰とき.  
 paṭutara (形) 一層猛き.  
 paṭh 1. 讀む.  
 pat 1. 降る, 墮つ, 落つ, 落ち入る,  
 落ち來る. (役) 落す, 夷らぐ, 殺す.  
 ni + 墜落す, 落ち來る, 倒る. (役)  
 夷らぐ, 殺す.  
 praṇi + (.....の前に[業. 爲. 依]) 投  
 降す, 恭しく(.....の前に[業. 爲. 依])  
 屈服す.  
 pati (男) (62) 主; 夫, 已婚の男子.  
 patita (pat の過) 落ちたる.  
 patitva (中) 夫たること; 夫. °tve  
 vr 夫として選ぶ.  
 patra (中) 葉.

patra (中) 羽, 翼; 運搬具, 乘.  
 path (男) (88) 路, 途.  
 patha (男) 路, 途. darśana° 視  
 界.  
 pathya (形) 利ある, 癒す.  
 pad 4. (爲自) 彼方へ往く; 落つ.  
 apa + 去る.  
 ā + (過) 預れる. (役) 持ち來す, 移  
 す.  
 vyā + (役) 亡ぼす, 離す, 殺す.  
 ud + 發生す, 發展す, 生長す. (過.)  
 生じたる. (役) 生ず(他動).  
 upa + 相當す. (過.) °panna 量に  
 應じたる, 相當なる. (役) 出で來ら  
 しむ, 起す. °m (副).  
 nis + (役) 成し遂ぐ, 成辦す.  
 parinis + (役, 過) °pādita 成滿  
 せられたる, 成就せられたる.  
 pra + 到る; 同意す, 許す, 約す.  
 prati + 達す, 得, 了す; 加はる;  
 同意す. (過.) °panna. (役) 説明  
 す.  
 sam + 共にす, 發る, 起る, 發生す.  
 (過.) °panna 共にしたる; 具へた  
 る, 與へられたる, 所有したる.  
 pad (男) 足.  
 pada (中) 足; 句.  
 padavi (女) 跡; 路; 位置, 官.  
 padastha (形) 顯要の地位に立てる.  
 高位に居る.

padārtha (男) 物, 對象, 語に對す  
 る事物, 句義;\* 語の意義.  
 padārthaka (男) (形合. の尾) 語の  
 義.  
 padma (中) 紅蓮, 蓮 (nelum-  
 bium speciosum); 蓮華.  
 para (形) 遠方にある, 遙かなる; 後  
 の; 勝れたる; 最も好き, 最勝の, 最大  
 の, 最高の; (或事に) 専らなる. 全く心  
 を委ぬる(合成語); 他の, 異なれる.  
 (男) 異人, 敵. °m (副) 又更に, 併ら.  
 tataḥ param 其次に; 然れども, 併  
 ら. param kim tu 然れども, 併ら.  
 爾るに.  
 parajana (男) 異人, 敵.  
 parama (形) 非常の, 甚だしき; 最  
 高の, 最良の, 最勝の. °m (副).  
 paramāṇu (男) 極微.\*  
 paramārtha (男) 勝義,\* 第一義.\*  
 paraspara (形) 更互の. °m (副).  
 相互に, 相互にて, 更互に.  
 parākrama (男) 威, 力, 強制.  
 parāparajña (形) 最勝を知ると最  
 勝を知らざるとの. indriyaparāpa-  
 rajñatā 最勝を知る根と最勝を知らざ  
 る根との状態.  
 parābhava (男) 亡失.  
 Parāsara (男) (古代著名の作家の  
 名, 彼は Viṣṇupurāṇa 等の書を作  
 れりと傳ふ).

parikalpa (男) 分別.  
 parikalpanā (女) 分別, 通計.  
 parigraha (男) 攝受; 家屬; 婢僕;  
 (總稱的) 妾, 妃.  
 pariñheya (形) 通知せらるべき.  
 parituṣṭa (過) 満足せる.  
 paritrāṇa (中) 守護, 保護, 救護.  
 parinirvāna (中) 般涅槃\* 圓寂\*  
 paripācana (中) 成熟.  
 paripūrṇa (pari + pūr の過).  
 paripūrṇatva (中) 圓滿すること,  
 満つること.  
 paribhava (男) 侮辱.  
 parimala (男) 好香; 好香料.  
 parivarta (男) 轉.  
 parisamāpti (女) 究竟.  
 parikṣā (女) 調査すること, 觀\*  
 Parikṣit (男) (阿瑜陀 [Ayodhya]  
 の古の王の名).  
 parita (pari + i の過).  
 paruṣa (形) 穢れたる.  
 parokṣa (形) 見へざる, 秘密なる.  
 paryāya (男) 類語; 組織方, 排列  
 方, 異門. dharma-paryāya 法の  
 組織方,\* 法門;\* 方法.  
 parvata (中) 山, 連山.  
 parvan (中) (書物の)章, 部.  
 palāya (palā + i を見よ).  
 palāyanakriyā (女) 遁, 逃走.  
 paś 4. (124 備考) 見る.

paśu (男) 獸.  
 paścāt (副) 爾來, 此より, 然る後.  
 paścima (形) 最後の; 西の.  
 pāṃsu (男) 沙.  
 Pāṭaliputra (男) 波吒利弗, 波吒  
 釐子(城). (地名).  
 pāni (男) 手; pāṇau kṛ 手にて  
 捉る.  
 Pāṇḍava (男) Pāṇḍu の末孫(即  
 ち Yudhiṣṭhira).  
 pāṇḍura (形) 白き.  
 pāṇḍuratā (女) 白きこと; °tām  
 gam 白くなる.  
 pāda (男) 足.  
 pādacārin (形) 歩りく.  
 pāna (中) 飲むこと, 飲酒; 飲物.  
 pāpa (形) 悪しき. (中) 害, 苦患;  
 罪, 犯罪, 過失.  
 pāpaka (形) 悪しき.  
 pāpātman (男) 悪を爲す人, 惡漢.  
 pāra (男) 岸; 彼岸.  
 pārami (pārami が合成語の中にあ  
 る時).  
 pāramitā (女) (pārami に同じ).  
 [北方佛教家は此を pārami(t)tā (彼  
 岸に到ること) と解す. 謂く pāram  
 は pāra (岸) の業格, it は i (到る)  
 と云ふ動詞を合成語の尾に使用して普  
 通の規則に違つてもを加へたり. 然る  
 に今は此の t を省略して状態を顯はす

語尾 tā を加へたるものなりと].  
 pāramiprāpta (過) 究竟を得たる.  
 pārami (女) 究竟の状態.  
 pārthagjanika\* (形) 異なりて生  
 るゝ者の, 異生の.  
 pārthiva (男) 主宰, 君, 王.  
 pārśva (男) 脇; °pārśve ……の  
 許に.  
 pālakatva (中) 養戒官.  
 pālana (中) 保護, 守護, 統治, 支配.  
 pālaya- (名稱詞の動詞) 護る, 庇ふ.  
 pari + 護る; 治む, 支配す.  
 pāvana (形) 清むる, 癒す, 償ふ.  
 pāśa (男) 綱索, 繩.  
 piṇḍa (男) 團, 土塊.  
 pitṛ (男) 父; (複) 祖先.  
 pipilika (男)(女) °likā 蟻.  
 piśācaka (男)(女) °cikā (228) 惡  
 魔, 鬼, 畢舍遮 (piśāca).  
 piṣ 7. 碎く, 擣く, 粉砕す.  
 pihita (api + dhā [214, I, 5] の過)  
 覆はれたる, 埋まりたる, 味ふされたる.  
 pīḍ (役) 惱ます, 痛ます.  
 pīḍā (女) 損害, 損傷.  
 pīḍākara (形) 害をなす, 痛みを興  
 ふる, 痛を起す.  
 pīthin (形) 飲む.  
 pums (男) (94) 男, 人.  
 punya (形) 恵む, 幸する; 善き, 信  
 心ある; 神聖なる; °loka (男) 信心あ

る者の世界, 樂土. (中) 善業, 善作,  
 宗教上の福業.  
 putra (男) 子; (女) i 娘, 童女.  
 pudgala (男) 人, 數取趣,\* 補持伽  
 羅.  
 punar (副) 返りて, pu° dā 返す.  
 pu° i 還る, 復た來る; 復た, 再び. 更  
 に, punaḥ punaḥ 再三; 更に又, 後  
 に; 併ら, na pu° 併ら然らず. kim  
 pu° 何に況んや; yadi pu° 併ら設  
 し……ならば.  
 punarbhavika (形)(女) i 後生の,  
 後有の.  
 pur (女) 都.  
 pura (中) 堡, 要塞を圍らせる都, 城.  
 puratas (副) (……の[屬. 或は合成  
 語] 前に).  
 Puramdara (男) 破堡者, (因陀羅  
 [Indra] の號).  
 puraskṛta (過) 先にせられたる, 尊  
 敬せられたる.  
 puraḥsara (形) 先だつ; (合成語の  
 尾にありては) 初として, 續きて, 俱に.  
 purā (副) 曾て; 古來.  
 purāśruti (女) 古傳説, 古説.  
 puruṣa (男) 男, 人; 最高の靈, 神.  
 pulaka (中) 身毛豎立(淫佚或は喜悅  
 の相).  
 pulakita (過) 身毛豎立せる.  
 pus 4. 9. 養ふ; 榮へしむ, 長ぜしむ.

(過) puṣṭa 養はれたる; 榮養の好き、肥へたる、太りたる; 健康なる。  
 puṣkarinī (女) 池  
 puṣṭā (puṣ の過).  
 puṣpa (中) 華.  
 puṣpita (過) 花を開ける。  
 puṣṭaka (中) 書物、本  
 pūj (役) 拜す、敬ふ。  
 abhi + 敬ふ、敬讃す、尊重す。  
 prati + 慶ぶ、甘讃す。  
 pūjā (女) 敬禮、尊崇; 恭敬。  
 pūra (男) 流、洪水。  
 Pūru (男) (Yayāti と Śarmiṣṭhā との子の名)。  
 pūrṇa (pūr [119, II, 1] の過).  
 pūrva (形) 前の; 先だてる; 昔の、已前の。°m (副)。  
 pūr 6. vyā + (124, 18) 誓む、苦心す、働く。  
 pṛthagjana (男) 異なりて生るゝ者、異生\*。  
 pṛthivi (女) 地。  
 pṛthivipati (男) 君、王。  
 pṛthivipāla (男) 君、王。  
 pṛthivipati (男) 君、王。  
 pṛstha (中) 背; 上面、高處。  
 pṛsthadeśa (男) 後側; °śe (……の[屬]) 後に。  
 pūr 9. 充たす、満たす。(過) pūrṇa (214, II, 1) 満ちたる; 経過したる

(時の) (役) pūrṇa- (201) 満たしむ、足す。  
 abhi + (受) pūrṇate (191) 満つ; 満たさる。  
 pari + (過) °pūrṇa 満たされたる、満ちたる。(役) 満たす。  
 peya (形) 飲料に適したる、飲まらべき。(中) 飲料。  
 peyālam (副) 廣く説かるべく、乃至廣説\*。  
 poṣana (中) 養ひ、扶け、護り。  
 poṣita (puṣ の役・過) 育てられたる、扶けられたる、護られたる。  
 paunarbhavika (形) (女) i 後生の、後有の。  
 paura (男) 都人。  
 pauraṣa (中) 丈夫の力、丈夫の氣、勇氣、勢、力。  
 pauraṣya (中) 豪氣、勇氣。  
 paurvika (形) (女) i 往昔の。  
 prakampa (男) 搖。  
 prakāra (男) 種類、方。  
 prakāśa (男) 顯示。  
 prakāśaka (形) (女) °śikā 顯はす。  
 prakāśatva (中) 顯。  
 prakāśana (中) 明照; 顯示すること。  
 prakāśya (形) 顯はさるべき。  
 prakṛitā (過) 公言されたる; 解決されたる; 名づけられたる; 稱する、通

ずる。  
 prakṛti (女) 本性、自性。prakṛtyā (副) 性來、初めより、自ら。  
 prakṛpti\* (女) 執(固定せる是解)。  
 prakopa (男) 怒。  
 prakhyā (女) 容貌(合成語の尾)……に同じ貌の、似たる。  
 pracalana (中) 前後上下に動くこと。  
 pracalāya- (名稱詞の動詞) 點頭す。  
 pracura (形) 多き、多数の、煩繁なる。  
 prach 6. (124, 15) 問ふ; (或人に[業]或事を[業]) 問ふ、責す。(過) pṛṣṭa (214, I, 2).  
 pari + 尋ぬ。  
 prajā (女) 後裔、末孫; 人民、庶民; 臣民。  
 prajñapti (女) 假名\*、假設\*、施設\*。  
 prajñaptisat (形) 假有の\* (dra- vyasat に對す)。  
 prajñā (女) 般若\*、慧。  
 pranaya (男) 及ぼすこと; 親好、信任、愛。  
 pranayin (形) 愛されたる、愛らしき。(男) 親友、所愛者。  
 pranetr (男) 導師。  
 prati (副) 前置詞) 對して、……の方に、……の彼方に、嚮して(大體作業格に先だたる)。

pratijñā (女) 誓; 主要する題目、宗\*。  
 pratidinam (副) 毎日。  
 pratidīśam (副) 總ての方に。  
 pratideśam (副) 一切の土地に。  
 pratipatti (女) 得; 解。  
 pratipad (女) 道。  
 pratibimba (中) 影像。  
 pratibhāsa (男) 現ずること。  
 pratisamkhyāna (中) 辨別、思擇。  
 pratikāra (男) 治療劑、豫防劑、解毒劑、治癒。  
 pratiti (女) 確知、知了。  
 pratītyasamutpāda (男) 緣より起ること、緣起\*。  
 pratyakṣa (形) 目前の、現前の、現量の。°m (副) 眼前にて、現たり。  
 pratyac (77) (女) pratiści 西の。  
 pratyaya (男) 緣\*。  
 pratyākhyāna (中) 謝絕; 拒絕、排斥。  
 pratyātmaavedya (形) 自身にて知らるべき。  
 pratyānayana (中) 回復、還。  
 pratyāpatti (女) 還淨。  
 pratyāyaka (形) 了知せしむる。  
 pratyāyya (形) 了知せしめらるべき。  
 pratyūsa (中) 曙光、日出。  
 pratyekabuddha (男) 單獨にて覺れる者、獨覺\*。



prath 1. 積がる。  
 prathama (形) 第一の, 最勝の。°m  
 (副) 初めに; 昔し, 曾て。  
 pradātavya (形) 嫁せらるべき。  
 pradāna (中) 施與, 棄捨; kāsṭha°  
 木を積んで火葬の薪すること。  
 pradośa (男) 方, 場。  
 pradhāna (形) 最勝の, 最上の, 主  
 要の; (中) 主要事, 最上, 重要。  
 pradhvamsin (形) 滅する。  
 prapañca (男) 詳細にすること; 一  
 種の現象; 戲論\*。  
 prapañcaya- (名稱詞の動詞) 詳細  
 にす; 異なりて現はれしむ; 戲論\*。  
 prabandha (男) 相續。  
 prabādhanā (女) 惱亂。  
 prabhava (男) 起源。  
 prabhā (女) 光, 輝, 容貌。  
 prabhāta (中) 日出。  
 prabhāva (男) 威, 力。  
 prabhu (形) (……に於て[屬]) 自在  
 を得たる; (男) 主, 統治者。  
 prabhutva (中) 主たること, 主位。  
 prabhūta (過) 多き。  
 prabhṛti (形) 始めとする, 等; (副)  
 よりのち; adya pra° 今日よりのち;  
 今よりのち; tataḥ pra° 其よりのち,  
 爾の時以來。  
 pramardana (中) 摧破。  
 pramāṇa (中) 量; 尺度; 標準;

依憑, devaḥ pramāṇam 王が決  
 定せざる可らず, 王が裁斷するを要  
 す。  
 pramukha (形) 上首の。  
 prameya (形) 量る可き, 可量の。  
 prayojana (中) 起因, 主旨, 目的,  
 趣意. kimatra prayojanam var-  
 tate 其處に何事ありや。  
 pravacana (中) 説。  
 pravāṇa (形) 傾むく, 進んで爲さん  
 とする。  
 pravara (形) 最第一なる。  
 pravāda (男) 卷説, 風説。  
 pravāla (男・中) 條, 梁, 幼枝; 珊瑚。  
 pravīra (男) 大勇者。  
 pravṛtti (女) 用ゐること, 適用する  
 こと。  
 praveśa (男) 入場; 到達。  
 praśasta (過) 賞讃されたる; 適した  
 る, 便なる。°ste 'hani 吉日に。  
 prasamga (男) 過難,\* 過失,\* 失\*。  
 prasava (男) 分娩, 産, 生。  
 prasāda (男) 恩, 惠; °dam kṛ  
 惠を垂る, 恩を施す; 宥恕。  
 prasiddhi (女) 完成。  
 prasūti (女) 子孫, 兒。  
 prahātavya (形) 斷たるべき。  
 prahāra (男) 打撃, 射. pādapra-  
 hāraṃ dā 躡る。  
 prāk (副) 前に, 第一に。

prāgeva 何に泥んや。  
 prākāra (男) 牆, 壁。  
 prāgvṛttānta (男) 古事, 經過。  
 prājña (形) 聰慧なる, 伶俐なる。  
 prāñjali (形) 合掌(兩手掌を合せ中  
 心に空處を存す, 敬禮の表示)を差し出  
 したる,\* 兩手を前方に伸したる(尊敬  
 及び卑下の相)。  
 prāṇa (男) 息, 呼吸; 生命(複)。  
 prāṇin (男) 生物, 動物, 人。  
 prātar (副) 早く, 晨に; 翌朝に, 翌  
 日に。  
 prātimokṣa\* (男) 別解脱。  
 prādurbhāva (男) 出現。  
 prādurbhūta (過) 顯示せられたる。  
 prānta (男・中) 側, 邊, 尖端。  
 prāpta (pra + āp の過)。  
 prāptavara (形) (女) ā 持參金を  
 得たる。  
 prāpti (女) 得, 到達。  
 prāya (男) 多數; (合成語の尾に在  
 とき)大部分を占むる, 成れる, 似たる。  
 prāyeṇa (副) 大抵, 普通。  
 prāsāda (男) 官殿。  
 priya (形) 愛らしき, 快よき; 望ま  
 しき。(女) ā 愛らしき者, 妻; (中)  
 愛すべき物, 望ましき物, 嗜好物。  
 priyākhyāyin (男) 喜ばしき事を  
 報らす人, 能説喜事。  
 pri 9. 喜ばす; 喜こぶ。(過) 喜こ

べる。

prīti (女) 喜。

plu 2. (役) 濯ぎかける, 浴びせる。

## Pha.

phaṭā (女) 蛇頭。

phaṇā (女) 蛇頭。

phaṇādhara (男) 蛇。

phala (中) 果。

## Ba.

bata (感歎詞) 嗟, 禍哉。

bandh 9. (152) 縛る, 拘束す。

ni + 緊く縛る。(過) °baddha  
(214, I, 3) 拘束されたる。

bandhu (男) 親類, 朋輩, 朋友。

bala (中) 力, 強さ, 威勢。(男)  
(Parikṣit の子の名)。

balavat (形) 強き, 力ある; 勢ある。

balātkṛta (形) 克たれたる。

baliyas (形) (97) 一層強き, 一層勢  
ある。bahiskṛta (形) 除外されたる; 省か  
れたる, 闕ける。bahu (形) 多き; kim bahunā 何  
ぞ多言を要せん。(副) 多く。

bahutva (中) 多數。

bahumāna (男) 尊敬。

bahula (形) 多き。  
 bahulikāra (男) 多く作すこと。  
 bahuvrīhi (形) 多くの米を有せる、米に富める。  
 bādham (副) 善哉、同意なり、爾るべし、可なり。  
 bādhi 1. 擾す。  
 bāndhava (男) 門徒、親戚。  
 bāla (形) 幼なき。(男) 児、童男；凡夫\* (女) ā 童女、所愛、少婦。  
 bālaka (男) 童男、少年、子。  
 bāspa (男) 涙。  
 bāhu (男) 臂。  
 bāhya (形) 外に在る；家族等に非ざる、異なれる。  
 bisa (中) 蓮根の塵芥。  
 bija (中) 種子。  
 Buddha (男) 覺者\*、佛陀\* (多は釋尊を指す)。  
 buddhi (女) 洞見、悟り、理性、思慮、精神。  
 buddhimat (形) 思慮ある、聰とき、顯敏なる。  
 budbuda (男) 水泡、泡。  
 budh 1. 覺る；知る、認む；想像す、推測す。  
 ni + (.....を[開]) 離く、開く。  
 pra + (役) 離とす。  
 sam + (役) 注意せしむ、敬請す、知らしむ。

abhisam + (過) 現たり覺れる、現等覺\*。  
 brhat (形) 大なる、強き、高き。  
 bodhi (男・女) 菩提\*、覺。  
 bodhimāṇḍa (男・中) 妙菩提；菩提場(!)。  
 Bodhisattva (男) 覺りの有情、覺りを求むる有情、覺有情\*、菩薩\*；(釋尊の前生)；覺ることを本性とする者。  
 Bodhisattvabhūmi (女) 菩薩地(書名)。  
 bahmacarya (中) 淨行、梵行。  
 brahman (中) 最高にして人格を越えたる神、梵(Brahman)；婆羅門位、僧侶、第一姓。(男) 印度教の最上の神、梵天；僧、婆羅門。  
 brāhmaṇa (男) (女) i 第一姓に屬する人、婆羅門。  
 brāhmāṇḍa (中) 梵の卵、宇宙、世界。  
 brū 2. (131) 語る、(或人に[樂]) 語る、言ふ。

## Bha.

bhakti (女) 歸命、信仰、愛。  
 bhaks 1. 10. 咬む；食ふ。  
 bhaksya (中) 食物。  
 bhagavat (形) 尊き、高尚なる、神聖なる。(男) 世尊\*、薄伽梵\* (佛陀の

號、又た釋尊を指す)。  
 bhaṅga (男) 破壞；滅没、敗滅、亡。  
 bhaṅgura (形) 破壞すべき、滅すべき。  
 bhaj 1. (177) 分つ；享く；受く；所有す；愛す、(.....と[樂]) 通ず。  
 vi + 分つ。  
 pravi + 分つ。  
 bhāñj 7. 壊る、毀つ、折る。(過)。  
 bhagna (214, II, 2) 破壊されたる；  
 bhagnāśa (形) 豫期と違へる、希望と違へる。  
 bhadanta (男) 大徳(佛又は佛弟子の尊稱)。  
 bhadra (形) 善き、美はしき、尊と、賢き。(男・呼) bhadra, (女・呼) bhadre 吾が親愛なる者よ。  
 bhadratā (女) 賢善なること。  
 bhadravargīya (男) 賢群に屬する者、賢部\*。  
 bhaya (中) (.....の[從]) 怖畏。  
 bhayamkara (形) 怖畏を引起す。  
 Bharga (男) (梵天の號)。  
 bharty (男) 夫、已婚の男子。  
 bhava (男) 有。  
 bhavat (男) (女) i (81) (第二人称代名詞の敬語)。  
 bhavitavya (形) 有らざるべからざる、有るべき；(中・非人称にして具・と俱に) tvayā sukhinā bhavitav-  
 yam 汝は幸福なるべし。  
 bhasman (中) 灰。  
 bhasmasūt (副) 灰に；°kr 變じて灰と爲す。  
 bhā 2. 照る。  
 prati + 顯はる、(心に) 浮ぶ。  
 bhāga (男) 部分。  
 bhāṇḍa (中) 器、樽、瓶。  
 bhāra (男) 重擔。  
 Bhārata (男) 婆羅多 (Bhbrata) の後裔。(女) i (辯才天女の一名)。  
 Bhārgava (男) 勃栗婁 (Bhrgu) の後裔。  
 bhāryā (女) 妻、婦。  
 bhāva (男) 轉、有、體、性；感情、性情。°vam pāpakam kr (.....に對して[依]) 惡意を懷く。  
 bhāvayitavya (形) 養せらるべき。  
 bhāvin (形) 有るべき。  
 bhāvinī (女) 端麗なる美人。  
 bhās 1. 説く、言ふ。(過) 説かれたる。  
 ā + 談しかける。  
 bhāsā (女) 定義。  
 bhāsita (中) 所説。  
 bhikṣā (女) 乞。  
 bhikṣu (男) 乞句；乞句僧、比丘\*、苾芻\*。  
 bhikṣuka (男) 乞句；乞句僧。  
 bhid 7. 破る、壞す。(過) bhinna

(214, II, 3) 殺られたる。  
 nis+ 貫通す, 傷つく, 穿つ。  
 bhīṣaj (男) 醫師。  
 bhī 3. (140) (.....を[從.]怖る。(過.)  
 bhīta 怖る, 臆病なる, 驚ろかされた  
 る。  
 bhīru (形) (女) bhīru (又は) bhīrū  
 臆病なる, 怯る。  
 bhukta (bhuj の過) 食はれたる。  
 (中.) 食事, 食物, 食料。  
 bhuj 7. 食ふ; 受用す, 利用す, 使用  
 す。  
 upa+ 受用す, 使用す, (.....より  
 [業.] 利益を得。  
 bhūja (男) 臂。  
 bhujāṅgama (男) 蛇。  
 bhū 1. (122) 轉ず, 發生す; (或事を  
 [屬.] 共にす, 起る, (或ひとに) 會ふ;  
 有り; 住ふ, 在り。(過.) bhūta (別に  
 出す)。(役.) 修す。  
 anu+ 受用す。  
 abhi+ 勝つ, 克つ, 痛む (他動)  
 惱ます。  
 pari+ 克つ, 捷つ; 侮る。  
 sam+ 發生す, (.....より[從.]出づ,  
 (.....と[屬. 男.].....の間に[依. 女.]  
 生まる。(役.) (或人を[業.] 敬禮す;  
 (何事か)あるべき事を認む; 假定す;  
 (過.) 考へられたる。(受.) .....の如  
 くに見ゆ, 爾るべしと認めらる。

bhū (女) 地。  
 bhūta (bhū の過) 轉じたる; 眞實  
 なる, 誠諦。(中.) 物, 生物。  
 bhūtala (中.) 地面, 地。  
 bhūbhṛt (男) 君, 王。  
 bhūmi (女) 地。cittabhūmi 心  
 地, 心の處, 思慮の範圍。  
 bhūmikā (女) 層樓; saptabhū-  
 mika (形) 七層樓の。  
 bhūyas (形) (97) 一層大なる, 一層  
 劇しき, 一層多き。(副.) 尙多く, 甚だ。  
 大ひに, 復, 新に。  
 bhūri (女) 覺了; 遍\*(?)。  
 bhūṣ 1. 飾る。  
 bhūṣaṇa (中.) 莊飾。  
 bhṛ 1. 3. 運ぶ。  
 Bhṛgu (男) (古仙人の名)。  
 bhṛṣataram (副) 非常に, 劇しく。  
 bhṛṣam (副) 劇しく。  
 bheda (男) 破壞。  
 bheṣaja (中.) 治療劑, 解毒劑。  
 bhoga (男) 受用。  
 bhos (感歎詞) (32 備考) おゝ。  
 bhram 1. 4. (124, 13) 彷徨す, 逍遙  
 す。  
 bhrāj 1. (爲自.) 光る, 輝く。  
 bhrātr (男) 兄弟。

**Ma.**

makaradhvaja (男) 愛の神。

maghavan (形) (84) 仁惠なる。  
 (男.) 因陀羅の號)。  
 maṅgalāyatana (中.) 吉祥處, 吉祥  
 座。  
 majj 1. 沈む。  
 ud+ 浮ぶ。  
 ni+ 沈む。  
 maṅḍalin (形) 地方を支配する, 土  
 地を....., 國を.....; m° nṛpa 地方  
 長官, 縣知事。  
 maṅḍūka (男) 蛙。  
 mati (女) 意思, 思想, 信仰; 分別,  
 覺悟, 了解。  
 matkūpa (男) 床蟲。  
 mattas (mad [52 備考] の從)。  
 matsya (男) 魚。  
 Mathurā (女) 摩倫羅(國名)。  
 mad (106) (第一人稱代名詞の語幹);  
 我。  
 pramatta (過) 放逸なる。  
 mada (男) 醉, 酩酊; 姪佚; 僞逸,  
 高貢, (阿修羅 [asura] の名)。  
 madana (男) 體欲, 性欲, 肉欲。  
 madyapa (男) 酩酊者, 好酒家。  
 madhura (形) 甘き, 愛らしき, 妙  
 なる。  
 madhya (中.) 中央; madhye 中  
 央に, 中に, 間に, 中央へ, 中の方へ。  
 madhyaga (形) 内に在る, 居る。  
 madhyama (形) 中央の。

Madhyamakavṛtti (女) 中論疏  
 (書名)。  
 Madhyamakāvātāra (男) 中央に  
 入ること, 内部に入ること, 入中論(書  
 名)。  
 man 4. (爲自.) 惟ふ, 信ず, 認む, 謂  
 ふ。bahu° 尊重す。  
 manas (中.) 意, 精神, 心。  
 manasikāra (男) 心を發すこと, 作  
 意\*。  
 manaskāra (男) (manasikāra に  
 同じ)。  
 manusya (男) 人, 男子。  
 manojava (形) 意の如く速やか  
 なる。  
 manoratha (男) 願。  
 manorama (形) 心を喜ばしむる。  
 殊妙なる, 美はしき, 愛らしき。  
 mantra (男) 文, 眞言, °tas 眞言  
 を誦する間に; 咒文。  
 mantraya- (名稱詞の動詞)。  
 ā+ 告ぐ, 話しかく; 問ふ。  
 mantravādin (男) 咒文を誦する人,  
 巫覡。  
 mantrin (男) 輔相。  
 manth 9. (152) 攪動す; 壓し潰す。  
 pra+ 傷つく, 夷らぐ, 斃す, 殺す。  
 manda (形) 徐なる; 遲緩なる,  
 幼稚なる, 鈍き。  
 manyu (男) 怒。

manyumat (形) 怒れる。  
 maya (後接字・形) ……より成れる。  
 maraṇa (中) 死。  
 martya (男) 死すべき物、人。  
 maryādā (女) 限界標; 境界, 眼界。  
 mala (男) 垢。  
 mahat (形) (80) 大なる; 高位の, 顯  
 要の; 長き(時の)。  
 maharṣi (男) 大仙。  
 mahā° (形) (236) 大なる。  
 mahātman (形) 貴き, 君子の; 高  
 位の, 威力ある, 強き。  
 Mahābhārata (男) 摩訶婆羅多,  
 大婆羅多(書名)。  
 mahārāja (男) 大王, 大君主。  
 Mahāśramaṇa (男) 大沙門, 大行  
 者(通常は釋尊を指す)。  
 mahāsattva (形) 偉大なる本性を  
 有する, 貴き, 摩訶薩\*。  
 mahiṣa (男) 水牛; (女) i 牝水牛;  
 第一の王妃。  
 mahī (女) 地; mahim gam 地上  
 に倒る。  
 mahipāla (男) 君, 王。  
 mahīyas (形) (97) 一層大なる, 一  
 層勢力ある, 甚だ顯要なる。  
 mā (副) (120) 莫, 勿。  
 mā 3. (爲自) (143) 量る, 測定す,  
 區域を劃す。(過) mīta (214, 4, 5).  
 化作せられたる。

pari+ (過) 量られたる。 aperi-  
 mitāyuspramānam (副) 壽量  
 無限にして。  
 māciram (副) 猶豫なく, 直ちに, 至  
 急に。  
 mātāmaha (男) 母方の祖父。  
 mātr (女) 母。  
 mātra (中) 量; (合成語の尾) 唯, 唯  
 是のみ, 單に。  
 mātratā (女) 量, 度。  
 mātrā (女) 量。  
 mādrśa (形) 我が類の, 我に等しき。  
 māna (男) 貢高, 慢; 懊惱, 怨恨。  
 mānava (男) 人。 °vendra 君, 王。  
 mānasa (中) 精神, 心, 意。  
 mānuṣa (形) 男の。(女) i 女の。  
 (男) 人。  
 māra (男) 魔, 殺者。  
 Mārkaṇḍeya (男) (古仙人の名)。  
 mārga (男) 道。  
 mās (男) 月。  
 mahātmya (中) 大なること, 威勢,  
 價值, 權貴。  
 mitabhāṣin (形) 言葉少なき。  
 mitra (中) 朋友。  
 mitratva (中) 朋友たること。  
 mithas (副) 俱に, 互に, 各自に。  
 mithyā (副) 顛倒して, 虛偽にて,  
 不實に; 徒らに, 空しく。(kr と俱に)  
 不實ならしむ。

mithyāsamarāmbha (形) 功空し  
 き, 企業徒勞に屬せる。  
 mī 6. 會ふ, 集まる, 漲る; 衝突す。  
 miṣ 6. 目を開く。(唯だ現分。にの  
 み用ひらる) = 見つゝある, 見て居る。  
 mīha (男) 魚。  
 muktājālamaya (形) 眞珠の列よ  
 り成れる。  
 muktāhāra (男) 喫塔。  
 mukti (女) 解脱。  
 mukha (中) 口; 面; 孔; 門; mu-  
 khena 由て, 媒介にて。(合成語の尾  
 の女) i。  
 mugdha (muh の過。[48 備考 1]) 憐  
 むべき, 天真なる, 單純の, 癡呆の。  
 mugdhasvabhāva (形) (女) ā 無  
 經驗なる, 罪なき, 天真なる。  
 muc 6. (124, 16) 放つ, 赦す, 解く。  
 muktva (……を[業]) 除ひて。  
 vi+ 放つ, 廢す; 解く; 投ぐ, 擲つ,  
 發射す。(過) 解脱したる。  
 mud 1. (爲自) 歡ぶ。(過) 歡ばさ  
 れたる; 悦ばしき。  
 pra+ (過) 歡ばされたる, 悦べる;  
 悦ばしき。  
 vipra+ (過) 解脱したる。  
 mud (女) 歡喜, 欣。  
 muni (男) 賢人, 行者, 婆羅門, 牟尼。  
 muh 4. 迷ふ, 思慮を失ふ, 明らかた  
 る知覺を失ふ。(過) mugdha (及び)

mūḍha (48 備考 1)  
 muhur (副) 毎時, 重ねて; 怒ち。  
 muhūrta (男) 時時; °rtāt 一瞬時  
 の後, 直ちに。  
 mūḍha (muh の過。[48 備考 1]) 癡  
 呆の, 愚かなる。(男) 癡人, 愚者。  
 mūtra (中) 尿。  
 mūrkhā (男) 癡人, 愚者。  
 mūrṭi (女) 形状, 體; 像。  
 mūl 1. ud+ (役) 根根にす, 根根  
 す, 根本より破す。  
 mūla (中) 根; 基本, 樹。  
 mūlya (中) 價直。  
 mṛ 6. (爲自) (124, 18) 死ぬ。(過) mṛta  
 死したる。  
 mṛga (男) 野獸; 鹿。  
 mṛgaya- (名稱詞の動詞) 逐ふ, 狩る;  
 探索す, 索む。  
 mṛgayā (女) 獵; °yām gam 出  
 獵す。  
 mṛgāṅka (男) 月。  
 mṛj 2. 6. 拭ふ。(過) mṛṣa (41)  
 清き, 潔き。  
 mṛpāla (中) 羅根。  
 mṛta (mṛ の過) 死したる。  
 mṛtyu (男) 死。  
 mṛd (女) 粘土, 泥。  
 mṛdu (形) 柔和なる  
 mṛṣ 4. (役) 堪忍す, (……の[業]) 耐  
 ることを) 堪忍す。

mrṣā (副) 無益に; 誤りて; 妄に.  
 mrṣāvāda (男) 妄語, 虚語.  
 mrṣta (mrj の過. [41]).  
 megha (男) 雲.  
 medhā (女) 聰明.  
 Maitreya (男) 彌勒, 慈氏 (人名).  
 mokṣa (男) 解脱.  
 mogha (形) 空しき.  
 moha (男) 迷, 混亂; 欺き, 惑はし,  
 癡.  
 mauktika (中) 眞珠.  
 mauna (中) 沈黙.  
 mred 1. ā + (役) 重複す.

## Ya.

ya (yad を見よ).  
 yakṣa (男) 夜叉, 藥叉 (鬼神の一種にして毘沙門 [Vaiśravaṇa] の部屬なり).  
 Yakṣeśvara (男) 藥叉 (Yakṣa) の主. (財寶の神なる俱鞞羅 [Kuvera] の號).  
 yaj 1. 祀る. (役) (或人に[業]) 代りて祭祀僧として働く. (或人に代りて) 祀る.  
 yajña (男) 供物.  
 yajñāyatana (中) 獻供場, 獻供處.  
 yajñīya (形) 供養するに適合せる.  
 yat 1. (爲自) 勤む.

nis + (役) 交付す, 還す.  
 pratinis + (役) 還す.  
 yatas (副) 何處よりなりとも; 何處にても; 何處へなりとも; 故に, 以て. (直話或は詩句の初には其等を紹介する詞として用ゐらる). yataḥ prabhṛti 兩來.  
 Yati (男) (那曷沙 [Nahusa] の子の名).  
 yatna (男) 勤勞; yatnam kr (.....の爲に[依]) 勤勞す.  
 yatra (副) 何處にても.....處の, 何處なりとも.....處の, 何なりとも.....處の (52 備考); 何方へなりとも.....處の, 何れへなりとも.....處の, 何處へなりとも.....處の; .....ときに.  
 yathā (關係副詞・接續詞) 如く; .....様に, 爲に; yathā.....tathā .....の如く是くの如く; .....と等しく; あるべき様に, 相當して. (直話の初には其の紹介詞として用ゐらる). tad-yathā .....の如し, 即ち, 譬へば, 例せば. tadyathāpi nāma 譬へば.....の如し, 譬へば.....有るが如し.  
 yathākāmam (副) 隨意に.  
 yathākālopapaunam (副) 時の状態に應じて.  
 yathāgatam (副) 從て來りし如く.  
 yathābhīṣṭadīśam (副) 所欲に隨つて何方へなりとも.

yathābhūtam (副) 如實に, 眞實に.  
 yathāvṛttam (副) 起りし如く.  
 yathotsāham (副) 力に應じて.  
 yad (關係代名詞) (111) 所有る, .....處の. yadvā kim cid 何なりとも, yo yad 或人が.....處の, 隨一が; yadyasmāi 或人に.....處の, 隨一に; (接續詞) 若し.....ならば, 然る時に, 然りと雖も, 或時, ときに; ことの爲めに; 以て, 故に. (直話の初めには其の紹介詞として用ゐらる); yaduta 即ち. yena 其に由て, 夫故に; 其に由るが故に, 然るが爲めに. yasmāt 故に, 以て. yadapi 復た.....と雖も.  
 yadā (接續詞) .....ときに.  
 yadi (接續詞) 若し.....ならば; yadyapi 縱令然るも; yadyevam 設し然りとせば, 斯の如くして; vā... ..yadi vā..... か或は.  
 Yadu (男) (Yayāti と Devayāni との子の名).  
 yam 1. (124, 11) 制す.  
 ā + (過) °yata 擴がる; 長き.  
 ud + 擧ぐ, 上ぐ, 擲ふ. (過) ud-yata 準備せる, 用意したる, 決定したる; 勞する, 勤むる.  
 samud + (過) 擧げられたる.  
 upa + (爲自) 結婚す.  
 ni + (過) °yata 確定したる, 決定したる, 確實なる.

pra + 與ふ, 交付す; 與へて妻とす; 出す, 還す.  
 Yama (男) (死神の名); 閻魔.  
 Yayāti (男) (那曷沙 [Nahusa] の子の名).  
 yava (男) 穀; 麥.  
 yavasa (中) 草, 餅.  
 Yaśas (男) 耶舍, 名稱, 名聞(人名).  
 Yaśomitra (男) 稱友(人名).  
 yā 2. 行く, 往く, 過ぐ.  
 abhi + (.....へ[業]) 到る.  
 ā + 此方へ來る, 近づく.  
 samā + 此方へ來る.  
 upa + (.....へ[業]) 到る.  
 nis + 出て行く, 去る(出離す); 究竟す.\*  
 pra + 途に上る, 出發す, 行く.  
 yāc 1. 乞ふ, 哀願す.  
 yātudhāna (男) 鬼, 惡魔.  
 yātrā (女) 行列.  
 yādṛśa (形) 狀の何たるに關せざる.  
 yāna (中) 運送具, 運搬器, 乘.  
 yāma (男) 夜間の區分, 更(初更, 二更, 三更等の如き).  
 yāvajjīvam (副) 命の有らん限り, 終生.  
 yāvat (形) .....の如く大なる, .....の如き數の. (副) .....の如く廣く, ...の如く多く, .....の如く屢しば, .....の如く甚しく; 間に; 暫時, 中間に; と

きに; yāvat.....tāvat .....の間は、  
.....せしときは。(前置詞) (乗と俱  
に) あいだ; まで。 yāvaccā.....yā-  
vaccā....., .....より.....に至るま  
で。

yukti (女) 道理  
yugapad (副) 同時に。  
yugala (中) 偶  
yuj 7. 繋ぐ。(.....を[具]) 具ふ。(受)

(或事を[具]) 共にす。 yujyate 相應  
す。(過) yukta (.....に[依]) 繋がれ  
たる。(.....にて[依]) 繋せられたる;  
(.....を[具]) 具へたる。(.....にて[具])  
充されたる。關する。相應する。適度な  
る。適當なる。 °m (副)

samā + (過) 具へたる。付與された  
る。

ni + (役) (或ものに[業]) 或ものを  
[具] 供給す。付與す; 指示す。誨ふ。

pra + (過) 繋せられたる; 果された  
る。完結せられたる; 指示せられたる。  
引起せられたる。命令せられたる。

yuddha (中) 戦闘。戦争。  
yudh 4. 闘ふ。

yuvan (形) (78) 幼き。少かき。  
yuvām (tvad を見よ)。

yūtha (男中) 隊。群; 衆  
yoga (男) 軛。

yogin (男) 修行者。瑜祇。  
yogya (形) 符合する。適應したる。

堪能なる。能くする。  
yojana (中) (里程の量。俱舍論所説  
に依れば我が約二里。或は二英里半とも  
云ふ。 chalders は十二英里とす)。險  
勝那。

yodhā (男) 戦闘者; 兵士。  
yonisā (副) 理の如く。  
yauvana (中) 壯年。

Ra.

ramhas (中) 迅速。  
rakta (形) 赤き。

rakṣ 1. 守る。保つ。護る。衛る; 保  
存す。蓄ふ。

rakṣā (女) 守護。  
rakṣāpuruṣa (男) 守護者。

raṅga (男) 色。  
racanā (女) 安布。

raja (男) 塵。  
rajaka (男) 洗濯者; 染絲者。

rajas (中) 塵。  
rañj 4. (124, 17) (過) 染まりたる。

(役) 喜ばず。福す。非常に歡喜せしむ。  
anu + (役) (過) 喜ばされたる。樂  
しめる。

rata (ram の過 [214, 1, 4]) (.....を  
[依]) 喜べる。樂しめる。好む。愛する。

ratna (中) 眞珠; 寶。  
ratha (男) 車。

rathakāra (男) 造車匠。木工。

rabh 1. (爲自) 暴 + 着手す。始  
む; 翻む。發動す; 依止す。(過) āra-  
bdha 着手したる。始めたる。(從。の  
後の絶待法) ārabhya .....より以來。

ram 1. (爲自) 感動す; 悦ぶ; 樂し  
む; 歡ぶ。(過) rata (別に出

ramāṇiya (形) 殊妙なる。適意の。  
麗はしき。

ramya (形) 殊妙なる。恍惚たらし  
むる。

ravi (男) 日。  
rasa (男) 汁。液; 味。

rah 1. (過) 離れたる。なき; 別なる;  
缺ける。

vi + (役。過) °rahita 棄てられた  
る。離されたる。

rahas (中) 寂寞。屏處。 rahasi 屏  
處に於て; 秘密に; 隠れて; (副) ra-  
has 秘密に。

rahasya (中) 秘密。  
rahaṣṭha (形) 獨り在る。

rāksasa (男) 夜中の妖怪。惡魔。  
羅刹。

rāga (男) 欲。食。愛。  
rāj 1. vi + 秀づ。卓出す。光を放つ。

rāj (男) 王。  
rāja (236) (合成語の初。中。又は後に

在るときは rājan に同じ)。  
rājakanyā (女) 王女。

Rājagṛha (男中) 王舍城。  
rājan (男) 王; (女) rājñī 女王。  
rājaputra (男) 王子。(女) °tri 王  
女。

rājapuruṣa (男) 王の侍從。王の  
役人。

rāji (女) 線。一帯(林。土地等)。  
rājya (中) 主權; 王國。王土。

rājyakriyā (女) 施政。 °yayā vṛt  
政を施す。

rātri (女) 夜。  
rādḥ 4. 5. 成就す。

ā + (役) 満足せしむ。利益を求む。  
(或人に[業]) 事ふ。

samā + (役) 満足せしむ。親愛せし  
む。(或人に[業]) 事ふ。

abhisam + (役) 満足せしむ。世  
ばす。

Rādhā (女) (訖里瑟拏 [Kṛṣṇa] 即  
ち毘瑟紐 [Viṣṇu] の愛する牧牛女の  
名)。

rāsi (男) 衆。  
rie 7. vyati + (過) 外の。異なれ  
る。

ru 2. vi + 吠ゆ。高く叫ぶ。  
ruc 1. (爲自) 樂はしくあり。 ā +

(役) 告ぐ\*  
rudh 7. 拒む。止む。(過) ruddha  
止められたる。

upa + 停む。斥ぞく。妨ぐ。止む。

ni+ 制止す, 減らす. (受.) 減ぶ.  
 ruh 1. 生長す.  
 adhi+ 上る, 登る.  
 abhi+ 乗る.  
 samabhi+ 登る.  
 ā+ 乗る; (過.) °rūdhā (214, I, 6) 坐はる, 乗る. \*  
 adhyā+ (役.) 利益す.  
 samā+ (過.) °rūdhā (.....に[依.] 昇りたる, (.....に[依.] 乗れる. (役.) (201) 乗す, 上に置く.  
 rūkṣa (形.) 蕨き.  
 rūpa (中.) 形, 色\* (對義あるもの); 容貌; 美しき形, 美麗, 飾; 語形.  
 rūpaka (男.) ルーピー (rupee) (貨幣の名).  
 rūpadhara (形.) 形を有する.  
 rūpin (形.) 形を有する.  
 roga (男.) 病.  
 rosa (男.) 怒.  
 roṣaṇa (形.) 怒れる.  
 raudra (形.) 長ろしき, 暴悪なる.

La.

lakṣana (中.) 相, 標, 屬性.  
 lakṣanikṣepa (男.) 標を覆くこと, 計算法.  
 lakṣaya- (名稱詞の動詞.) upa+ 限定す.

lakṣmī (女.) 美麗; 落吃遊舞 (美麗と幸福との女神にして毗婆紐 [Viṣṇu] の妃なり).  
 lag 1. (.....に[依.] 附着す, 懸かる.  
 lagūda (男.) 杖.  
 lajjā (女.) 羞恥.  
 latā (女.) 蔓草.  
 labh 1. (爲自.) (史詩には爲他.) 用ゐることあり 達す, 得. (過.) labdha.  
 upā+ 嘲弄す, 詰る.  
 upa+ 得, 知る, 覺る, 證す; 認む, 問く.  
 vipra+ 僞はる, 誑かす, 欺く, 誑ゆ.  
 lamb 1. (爲自.) ava+ (役.) (.....より[依.] 垂下す.  
 Lalitavistara (男.) 方廣莊嚴\*(書名).  
 lābha (男.) 利.  
 likh 6. 刻む; 書く.  
 līṅga (中.) (男女の姓の) 表數.  
 lip 6. (124, 16) 塗る; 染む.  
 upa+ 塗布す.  
 lipi (女.) 書, 書かれたる字.  
 lih 2. 織る. (指上法) 強く織る.  
 līlā (女.) 遊戲, 滑稽. līlayā 戯れて, 軽ろく; 容貌, 類似.  
 lubdha (過.) 貪欲なる.  
 leśa (男.) 極少分.  
 lok 1. (爲自.) 視る.  
 ava+ (役.) 踏る, 觀る.  
 vyava+ 觀る.

ā+ 見る.  
 vi+ (役.) 觀る, 知る.  
 loka (男.) 世界; °traya (中.) 三世界 (天, 地土, 地下); (單數にて總じて 言ふとき又は複數のとき) 人, 人民; (合成語の尾にありては複數を詮はず).  
 jīvaloka 諸人; pauralokāḥ 諸の都人; 世間,\* 世.\*  
 lokadhātu (男.) 世界.  
 Lokanātha (男.) 世の主, 世の守護者 (多は釋尊を指す).  
 loc (役.) ā+ 思惟す, 熟考す.  
 locana (中.) 眼.  
 lobha (男.) 貪欲; 貪著, 貪.  
 Lomaśa (男.) (仙人の名).  
 lola (形.) 動搖する, 停止せざる.  
 lolupa (形.) 貪る, あこがる.  
 laulya (中.) 貪欲, 貪求.

Va.

vaktr (男.) 語る人, 談す人, 談話者.  
 vaktra (中.) 口; 面.  
 vakra (形.) 曲りたる; 變味の, 詐偽の, 狡猾の.  
 vac 2. (159, 175, 214, I, 1) 言ふ, 語る; (或人に[業.] 語る, 談しかける. (過.) ukta 示されたる, 告られたる. uktam ca 而して曰く; vācya (別に出す).

pra+ 言ふ, 語る.  
 prati+ 答ふ.  
 vacana (中.) 語, 談.  
 vacas (中.) 語.  
 vajra (男. 中.) 雷霆, 金剛杵; 金剛.  
 Vajracchedikā prajñāpāramitā 龍斷金剛般若波羅蜜多 (書名).  
 vajralepa (男.) 聖; セメント.  
 vadavā (女.) 牝馬.  
 °vat (後接字) (副.) 如く. (形.) 有する, 具する.  
 vatsa (男.) 子, 佛子.\*  
 vad 1. (163) 談す, 言ふ.  
 vadana (中.) 口; 面.  
 vadh 1. (現. の爲他. 及び爲自. とには 用ゐられず) 撃つ, 殺す.  
 vadha (男.) 殺戮.  
 vadhū (女.) 婦, 已婚婦人.  
 vana (中.) 林.  
 vanaspati (男.) 樹.  
 vandanā (女.) 禮拜すること.  
 vandaniya (形.) 尊重せらるべき, 敬せらるべき.  
 vap 1. 地上に散らす; 播く.  
 vapus (中.) 身, 體; 容貌, 形狀.  
 vayas (中.) 齡; 壯年; 老年.  
 vayasya (男.) 朋友.  
 vayahstha (形.) 壯年の, 壯き.  
 vara (形.) 最上の, 最勝の, 微妙の; (.....より[從.] 好き. (男.) 願; va-

ram vṛ 願を建つ、慈恵を請ふ；持参金。(副.) varam 奪る。varam... na .....よりは奪る。  
 varapa\* (中.) 覆ふこと。  
 varavarṇin (形) 殊勝なる顔色を有せる、顔色殊に勝れたる。  
 Varuṇa (男.) (海神の名即ち我國の水天宮)。  
 varga (男.) 群、衆。  
 varjita (過.) 離れたる、皆無なる。  
 varṇa (男.) 色；縵り、半；稱讚。  
 varṇaya- (名稱詞の動詞) 説く、陳ぶ。  
 varṇin (形) 色を有する、血色を有する。  
 vartamāna (中.) 現在。  
 vartin (形) 留まる、居る、在る、起る。(多くは合成語の尾に用ゐらる)。  
 vardhana (形) 増す、強むる、進むる。  
 varṣa (男.) 雨；śara° 箭の雨；歳。  
 varṣadhara (男.) 閼人。  
 Valabhid (男.) Vala を殺せし者。(因陀羅 [Indra] の號)。  
 valmika (男.) 猿猴。  
 vaśa (男.) 意欲；統治、權力；vaśam gam 服従す；勝たしむ；vaśo bhū 服従す。vaśāt 結果として。vaśena (副.) 又は合成語の尾) .....の結果として、.....のために、.....に准じて。

vaśin (形) 自在を得たる。  
 vaśibhūta (過.) 自在を得たる、得眞自在\*。  
 vas 1. 住ふ。(過.) usita 住せられたる。  
 adhi+ (役.) (.....を[副.]) 通ごす  
 ni+ 居る、住ふ。  
 prati+ 住ふ。  
 vas (二人稱代名詞. 106).  
 vasumatī (女.) 地；方、土地。  
 vastra (中.) 衣。  
 vah 1. (175. 214, I, 6) 乗せ行く、運ぶ、出す；牽き出す；裂く。(役.) 行かした、追ふ；欺く、欺罔す。  
 vi+ (役.) (爲自.) 精進す。  
 sam+ 俱に運ぶ；乗せ行く。  
 vahni (男.) 火。  
 vā (接續詞) 或は；vā.....vā .....か或は、.....なりとも或は.....なりとも(疑問、及び關係代名詞の後) 悉らく、多分。kim vā.....kim vā ... 悉らく.....か或は多分.....か。  
 vā 2. 4. 吹く。  
 parinis+ 消ゆ、滅す  
 vākya (中.) 談、語；言\*  
 vāc (女.) 聲、談、語。  
 vācya (形) 發音するべき；説き得べき、言はるべき；嗤けらるべき、嗤笑に値する。  
 vāñch 1. 願ふ。

vāta (男.) 風。  
 vātaraphas (形.) 風の如く疾き。  
 vātāyana (中.) 窓。  
 Vātsyāyana (男.) (Kāmasūtra [欲論] の作者の名)。  
 vādin (形) 談す、語る。  
 vānara (男.) 猿猴。  
 vāpī (女.) 長き港。  
 vām (tvad を見よ)。  
 Vāmadeva (男.) (古仙の名)。  
 vāmorū (女.) 美はしき腰を有する女。  
 Vāmya (男.) (婆薹提婆 [Vāmadeva] の馬の名)。  
 vāyu (男.) 風。  
 vāri (中.) 水。  
 vāridhi (男.) 海、津。  
 Vārṣaparvāna (男.) (女.) 1 Vṛṣaparvan の末孫。  
 vālukā (女.) 沙。  
 vāsa (男.) 滞留、居住。  
 Vāsudeva (男.) 婆薹提婆 (Vāsudeva) の子、(訶里羅摩 [Kṛṣṇa] 即ち毗瑟紐 [Viṣṇu])。  
 vāstavya (形.) 居住する。(男.) 居住者。  
 vāha (男.) 運送具、乘、運搬器、牽引獸。  
 vāhana (中.) 運送具、乘、牽引獸。  
 vikala (形.) 缺きたる。  
 vikalpa (男.) 妄想、分別。

vikrama (男.) 力、氣力、勇氣。  
 vikraya (男.) 賣ること。  
 vikriyā (女.) 變ること、氣の變ること、怒。  
 vikṣepa (男.) 散すこと、振ること。  
 vigraha (男.) 靜、喧嘩、戰爭。  
 vighātārthika\* (形.) 賤乏せる物を求むる、途求。  
 vicetana (形.) 失神したる、悶絶したる。  
 vicespita (中.) 行狀、行儀、動作。  
 viccheda (男.) 斷片。  
 vijana (形.) 人なき、寂寥なる。  
 vijñapti (女.) 表示すること、\* 表\*。  
 vijñāna (中.) 識；慧、技能。  
 vitattha (形.) 虚偽の、不實の。  
 vitathā (副.) 虚偽にて。  
 vitta (中.) 貨財、財産。  
 vittavat (形.) 富める。  
 vid 2. (182) 知る、説る。  
 ni+ (役.) 告ぐ、報らす、語す。(過.) 白したる。  
 prati+ (役.) 開覺す。  
 vid (合成語の尾. 形) 知る。  
 vid 6. sam+ (受.) 有り、在り。  
 viddha (vyadh の過.)  
 vidyā (女.) 知、明、學問。  
 vidyut (女.) 電。  
 vidvat (已過去爲他の分詞) 學びたる、智ある、賢き、聰明なる。



vidhā (女) 部分 (形合. の尾) 分, 種 (navavidhā 九種の如し).  
 vidhāna (中) 方法.  
 vidhi (男) 指示, 規定; 所作, 準備, 事業; 運命.  
 vidhivat (副) 規定に准じて.  
 vidheya (形) 他人の意欲に従ふ, 従順なる.  
 vinaya (男) 調伏; 沮良.  
 vinā (前置詞) (.....[業. 又は具.]) なしに.  
 vineya (形) 調へらるべき, 所化の.  
 vinyāsa (男) 合集, 輯.  
 vipatti (女) 不幸.  
 vipad (女) 不幸.  
 viparīta (過) 顛倒せる.  
 vipāścit (形) 伶俐なる, 聰明なる.  
 vipāka (男) 熟すること; 熟したる物 (業の結果). 異熟\*  
 vipra (男) 僧, 婆羅門.  
 viprayukta (viprayuj の過) 不相应\*  
 viprayoga (男) 別離すること.  
 viprarsi (男) 僧の仙人.  
 vibudha (形) 聰明なる. (男) 神.  
 vibhāga (男) 區分, 差別.  
 vibhūṣaṇa (中) 裝飾.  
 vimati (女) 異意; 猶豫,\* 疑.\*  
 vimala (形) 無垢の, 淨き.  
 vimukti (女) 解脱.

Viyati (男) (那曠沙 [Nahusa] の子の名).  
 viyoga (男) (.....より[合成語]) 離別, (.....と[具. 及び saha]) 離別.  
 virāga (男) 食欲を離るゝ事, 離欲.  
 vivāha (男) 婚禮, 婚姻, 結婚.  
 vividha (形) 種々の, 多種の.  
 viś 6. (.....の[業.]) 中に入る, 廻く, 至る.  
 ā+ 入る; 乗入る; (.....に[業.]) 通曉す. (過) °viśta 充されたる; 執られたる; 壓倒せられたる.  
 upa+ 坐る. (過) °viśta 坐る.  
 upopa+ (過) °viśta (或人の) 側に坐りたる; 坐る.  
 ni+ 居を定める; 降りる.  
 pra+ 入る; (.....に[業. 又は依.]) 趣むく. vahnau- 火葬の薪の上に昇る.  
 sam+ 坐る; 臥す.  
 viś (男) 族; 民. (複) 臣民; 民.  
 viśuddhi (女) 清淨なること, 清淨.  
 viśeṣa (男) 差別, 類; 種.  
 viśeṣaṇa (形) 差別する, 別つ.  
 viśeṣatas (副) 第一に; 特別に; 格段に.  
 viśodhana (中) 清むること.  
 Viśvācī (女) (天女の名).  
 viśvāsa (男) 信任.  
 viśa (中) 毒.  
 viśaya (男) 境, 範圍; 領域; °yam

car 政治を施す, 治む. (複) 感愛の対象, 感愛的受用物, 欲境.  
 viśaṇa (中) 角.  
 viśāda (男) 疑惧, 落膽, 小膽.  
 Viṣṇu (男) (神の名), 毗瑟奴.  
 Viṣṇupurāṇa (中) (書名).  
 vistara (形) 廣き. (男) 廣, 博. iti vistaraḥ 等.  
 vismaya (男) 驚愕, 驚嘆; 自負, 尊大.  
 visrabdha (viśrabdha に同じ).  
 vihārin (形) 散歩する, 逍遙する; 住する.  
 vihiṃsā (女) 害すること.  
 vihita (vi+dhā の過).  
 vitarāga (形) 煩惱なき, 世の一切の食欲を離れたる.  
 virasthāna (中) (苦行者の身體の態度の一種).  
 virya (中) 力, 勢; 勇氣, 精進; 武勇.  
 vīryavat (形) 強き, 勢ある.  
 1. vṛ 5. 9. (大抵爲自.) (.....として) 己に選ぶ, (或人に[業.]) 又は [artham]) 選ぶ, (或事に[依.]) 選ぶ; 願ふ, 請ふ. (役. 爲自.) (.....に [artham]) 選ぶ.  
 2. vṛ 5. 蔽ふ, 覆ふ. (過) vṛta 満たる; 固まれたる. (役) 防ぐ, 障ふ. ā+ 塞ぐ. (過) °vṛta 満たる.

samā+ 隠くす; 禁止す, 防ぐ, 停止す. (過) °vṛta 縛られたる.  
 ni+ (役) 止む.  
 nis+ 安靜にせられてあり, 安靜なり. (過) 寂靜になれる, 涅槃せる.\*  
 parinis+ (過) 圓寂せる.  
 pari+ (及び役) 繞る, 固む. (過) °vṛta (及び) °vārita 繞られたる, 固まれたる.  
 vi+ (過) 暴露したる, 衣を脱したる, 裸かなる.  
 sam+ (過) 縛られたる, 覆られたる.  
 vṛka (男) 狼.  
 vṛkṣa (男) 樹.  
 vṛj 7. ā+ (役. 過) 曲げられたる, 勝たれたる, 勝なはれたる.  
 vṛt 1. (爲自.) 始まる, 起る, 行ふ, (...と俱に[具.]) 働く; 留まる, 居る, 在り, 有り. śvāpadairvartitavyam 野獸は居るべし. —住るべし, —有るべし.  
 ni+ (過) 滅したる.  
 pra+ 起る, 有り. (役) 轉ず(他動), 爲す. (過) 舉動せる.  
 sam+ (.....の爲に[爲.]) 役立つ,\* 用立つ.\* (過) °vṛtta 起りたる, 圓滿されたる, 轉ぜられたる.  
 vṛttānta (男) 事蹟, 事件, 歴史, 冒險.

vṛtti (女) 動作, 所作.  
 vṛthā (副) 徒らに, 空しく. vṛthā  
 kṛ 虚構にす.  
 vṛddha (過) 老たる, (……のために  
 [合成語]) 白髮となりたる. (男) 老人,  
 白髮の老人, 長老,\* 上座.\*  
 vṛddhi (女) 増長, 増加, 増上, 増  
 多.  
 vṛdh 1. (爲自.) 増長す, 増加す, 自  
 ら幸なりと惟ひ能ふ, 喜び能ふ.  
 abhi+ 更に大になる, 更に強くな  
 る, 生長す.  
 sam+ (役) 増す, 大にす.  
 vṛnda (中) 群, 衆.  
 vṛndāraka (男) 神.  
 vṛṣa (男) 牡 (合成語の尾).  
 vṛṣabha (男) 牡 (合成語の尾).  
 veḡa (男) 急劇, 迅速.  
 vedanā (女) 苦, 痛; 受.  
 veditavya (形) 知らるべき.  
 vedin (形) 知る, 識る.  
 vep 1. (爲自.) 顛ふ(自體).  
 veśyā (女) 妓.  
 veśa (男) 衣, 服, 被服.  
 vai (不變辭) (前の語を強むるために  
 用ゐらる).  
 Vaikunṭhiya (形) (毗瑟紐 [Viṣ-  
 ṇu] の天なる) Vaikunṭha に關  
 せる, °yā gatiḥ syāt (彼等は)  
 Vaikunṭha 天に到るべし.

vaidya (男) 醫.  
 Vainateya (男) Vinatā の子 (即  
 ち伽樓羅 [garuḍa] 鳥).  
 vaineya (男) 教化せらるべき者, 化  
 導せらるべき者, 所化.  
 Vaibhāsika (男) 毗婆沙師.\*  
 Vairocana (男) 毗盧遮那,\* 日,  
 遍照.\*  
 vaiṣamya (中) 不等, 不齊.  
 vyagrata (女) 繁忙.  
 vyamgya (形) 顯はさるべき.  
 vyamjana (中) 殺り, 文.\*  
 vyamjanakatva (中) 顯示するこ  
 と, 顯示する性質; 殺りにてあること,  
 文たること.  
 vyatikrama (男) 逃犯, 拒容.  
 °mena vṛt 侵入す.  
 vyatyaya (男) 交換.  
 vyath 1. (爲自.) 動搖す, 正氣を失  
 ふ. (過) 落膽したる, 混亂したる, 憂  
 慮したる.  
 vyadh 4. (124, 15) 貫く, 傷つく.  
 (過) viddha (214, I, 2).  
 ā+ (過) āviddha 押へる.  
 vyapatrāpya (中) 抛射.  
 vyaya (男) 滅.  
 vyavasthā (女) 確立すること, (合  
 成語の尾) ……に關する定則.  
 vyavahāra (男) 所作, 行動, 興起.  
 實説.

vyākula (形) 静止せざる, 興奮した  
 る, 混亂したる, 正氣なき.  
 vyākulita (過) 混亂したる, 興奮し  
 たる; 充たされたる, 満ちたる.  
 vyāghra (男) 虎.  
 vyāta (vyā+da の過).  
 vyādhi (男) 病.  
 vyādhitā (過) 病める.  
 vyāpāra (男) 營務, 勤務.  
 vyutthāna (中) 出ること.\*  
 vyupaśama (男) 寂滅.  
 vyūha (男) 排列, 整列; 莊嚴.\*  
 vyoman (中) 天.  
 vraj 1. 行く, 逝く, 逃走す; 趨す,  
 ……の状態となる.  
 ā+ (……に[乘]) 往く.  
 pra+ (過) 出で往ける, 出家したる.  
 (男) 出家.  
 vrata (中) 作, 作業; 職, 役, 分;  
 誓, 禁戒, 規定.  
 vrihi (男) 米.

## Śa.

śams 1. abhipra+ 習む.  
 śak 4, 5. 能くす, 堪ふ. (受) śa-  
 kyate (不定法と俱に用ゐられたると  
 きはその不定法は多くは受動の意義と  
 なる) yadi śakyate kartum 若  
 し此が作され能ふならば.

śakti (中) 説, 排泄物.  
 śaktimat (形) 力ある, 堪能なき  
 能する.  
 śakya (形) 容有の; 能く(有り[不定  
 法]) 得る, 能く(せられ[不定法]) 得る.  
 Śakra (男) (因陀羅 [Indra] の號).  
 śaṅk 1. (爲自.) 苦慮す.  
 ā+ 慮る; 訝る.  
 pari+ (史詩は爲他. に用ゐる) (某  
 人を) 怪しむ, (某人に[染]) 頼らぬ,  
 (某人を) 邪推す.  
 śaṅkā (女) 惧, 虞.  
 śaṅkha (男) 螺貝.  
 Śacīpati (男) 舍脂 (Śacī) の夫,  
 (因陀羅 [Indra] の號).  
 śata (中) 百, śataṃ śatam 各百.  
 śataka (形) 百の.  
 Śatakratu (男) (因陀羅 [Indra]  
 の號).  
 śatru (男) 讎敵.  
 śap 1. 咒ふ, 咒詛す.  
 śabda (男) 音聲, 喧騒, 呼號; 語.  
 śabdāya- (名稱詞の動詞) (爲自.) 自ら  
 音を發す, 呻ゆ, 吠ゆ.  
 śam 4. (124, 13) 靜まる, 息む, 消  
 ゆ. (過) śānta (214, I, 8) (別に由  
 す).  
 upa+ 消ゆ.  
 śamatha (男) 奢摩他, 寂靜なるこ  
 と, 止.\*

śayana (中.) 牀座, 臥床.  
 śayyā (女.) 牀座, 臥床.  
 śayyāpālakatva (中.) 牀座を護衛するの役.  
 śara (男.) 箭.  
 śarad (女.) 秋.  
 śarīra (中.) 身, 體.  
 Śarmiṣṭhā (女.) (Yayāti の妃の名).  
 Śaryāti (男.) (王の名).  
 Śala (男.) (Parikṣit の子の名).  
 śalāka (男.) 蠟.  
 śāśiu (男.) 月.  
 śas (副詞接字) 分ちて. (khaṇḍa-śas [分分に] の如し).  
 Śākya (形.) Śaka (或は Śāka より出でたる, (男.) 釋迦(種族の名).  
 Śākyamuni (男.) 釋迦牟尼, 釋迦祖に屬する聖人.  
 śākhā (女.) 枝.  
 śānta (śam の過. [214, I, 8]) 寂まりたる, 一切煩惱を離れたる, 寂靜を得したる.  
 śānti (女.) 寂靜, 安泰, 満足; 安樂, 幸福, 福樂.  
 śāpa (男.) 呪詛; śāpaṃ dā 咒詛す.  
 Śariputra\* (男.) 舍利弗, 舍利子, 鶖鷲子(人名).  
 śālā (女.) 屋, 家, 室; 舍.

śās 2. (47 備考 3. 136) 命令す.  
 anu+ 教授す, 教ふ.  
 pra+ 指示す, 教ふ, 統治す, 支配す.  
 śāsana (中.) 教誡, 教.  
 śāstr (男.) 師. (往々にして釋尊又は餘佛を指すことあり).  
 śikṣā (女.) 規則, 教, 所學, 所學戒.  
 śikṣāpada (中.) 學處\* (所學の處即ち戒).  
 śikṣita (過.) 教へられたる, 教授されたる.  
 śikhara (男. 中.) 尖, 端, 頂.  
 śikhin (男.) 火.  
 śita (śo の過. [124, 15, 214, I, 5]) 鋭どき, 尖りたる.  
 śibikā (女.) 轎.  
 śiras (中.) 頭.  
 śilāpaṭṭaka (男.) 石板.  
 śiva (形.) 善き, 親しき, 恵みある, 幸ひなる, 福樂ある. (中.) 善, 恵. śivana 恵を以て.  
 śis 7. vi+ 差別す.  
 śiṣya (男.) 弟子.  
 śī 2. (爲自.) (133) 臥す, 臥し居る, 横はる; 眠る.  
 śighra (形.) 速なる, °m (副.) 速に.  
 śīta (形.) 寒き.  
 śīla (中.) 性質, 性情, 習慣, 戒.  
 dharmasīla (形.) 正しき性質の, 正

しき, 徳義的; 善き風俗, 徳行.  
 śukti (女.) 貝, 眞珠貝.  
 Śukra (男.) (固有名詞にして金星の人格化なる Uśanas Kāvya に同じ).  
 śuci (形.) 清き, 澄める.  
 śucismita (形.) 愉快に笑ふ.  
 śuddha (過.) 清き, 無垢の; 過失なき; 圓滿なる.  
 śuddhi (女.) 淨くなること; 淨ふること, 淨除; 淨きこと.  
 śudh 1. 2. 4. 清む; 清くなる. (過.) 清淨なる.  
 vi+ (過.) 清淨なる.  
 śubh 1. (爲自.) 麗はしくあり, 端しくす, 人の目を惹く. (役.) 飾る, 光彩を添ふ.  
 śubha (形.) 潔き, 美しき, 良き. (中.) 淨業, 善業.  
 śuśrūṣa (形.) 柔順なる, 順ふ.  
 śūnya (形.) 空しき, 空.\*  
 śūnyatā (女.) 空なること, 空性.  
 śūra (男.) 武士, 勇者.  
 śūla (男. 中.) 鎗, 投鎗.  
 śrgāla (男.) 野干.  
 śeṣa (男. 中.) 餘, 殘. (形合. の尾に在るとき) 其中にて餘れる. 餘るものは唯だ是のみなる, prakāra° 壁のみを餘せる.  
 śeṣatva (中.) 殘餘, 餘.

śaila (男.) 岩; 山.  
 śoka (男.) 憂, 苦.  
 śobhana (形.) 美なる, 麗はしき; 麗れたる, 相應せる, 至當なる.  
 śobhā (女.) 美, 儼.  
 śaurya (中.) 豪氣, 勇氣.  
 śyena (男.) 鷹.  
 Śyenajit (男.) (Dala の子の名).  
 śrad (dhā を見よ).  
 śram 4. (124, 13) 疲る. (過.) śrānta (214, I, 8) 疲勞したる.  
 śrama (男.) 奮勵, 劬勞; 疲勞.  
 śrambh vi+ (過.) 安心したる.  
 śravaṇa (中.) 聞. (男. 中.) 耳.  
 śrāvaka (男.) 弟子, 聲聞.\*  
 śri 1. ā+ 依る; (某人に)會ふ, (某人と[業.]合同す, 到る, 達す.  
 samupā+ 依る.  
 ni+ 依止す.  
 samni+ (過.) 依れる.  
 śrī (女.) 吉祥, 幸福, (美と吉祥との女神) 室利. (固有名詞, 書題, 地名等の始に付加へられたるときは其等の物の尊きこと又は卓越せることを證はす).  
 Śrīdevi (女.) 女神室利 (Śrī), 吉祥天女. (毘瑟紐 [Viṣṇu] の妃にして美と吉祥との女神).  
 śru 5. (146) 聞く, (某人に[屬.]聽く. (求欲法) śuśrūṣa (204) (某人に[業.]順ふ.

anu+ 聞く。  
 śruti (女) 聞, 聴取; 説, 傳説; 聖典 (單. 總稱的) 諸聖典。  
 śreyas (形) (97) 一層善き, 一層勝れたる, 選取さるべき。  
 śreṣṭha (形) 最き善き, 最も勝れたる。  
 śloka (男) 頌, 史詩の頌, 輪流題。  
 śvan (男) (84) 狗, (女) śunī (229) 牝狗。  
 śvabhra (男・中) 孔。  
 śvas 1. 2. (130) 息す, 喘ぐ。  
 ā+ 息を回す, 回復す, 休息す。  
 paryā+ 回復す。  
 vi+ (某人を[屬]) 信用す, (某人に[屬]) 己を委す, (通) °śvasta 願慮せざる, 泰然たる。  
 śvas (副) 明日。  
 śvāpada (男・中) 猛獸, 野獸。

## Sa.

saṃmāsika (形) 六ヶ月の, 半年の。  
 saṃ (數) (102) 六。

## Sa.

sa (93 備考 1. 108) (tad を見よ)。  
 sa° (合成語の始にありて共通, 擬在, 等同 等を詮はず)。

Saṃyāti (男) (那曠沙 [Nahusa] の子の名)。  
 saṃyojana (中) 結ぶもの, 結\*。  
 saṃrañjaniya (形) 散ばしき, 愛すべき。  
 saṃrambha (男) 怒れる舉動。  
 saṃvara (男) 防護するもの, 律儀\*。  
 saṃvṛti (女) 世俗\*。  
 saṃśaya (男) 疑; na saṃśayaḥ (此の中) 疑あることなし, 疑ひなく。  
 saṃśraya (男) 住處, (形合. の尾) ... を原とせる。  
 saṃskāra (男) 造作するもの\* 行\*。  
 sakala (形) 全き, 充分の, 一切の。  
 sakāśa (男) 現在, 近隣; °m (業) (.....の) 彼方に, °śūt (從) (.....より) 此方に, より。  
 sakṛt (副) 一時に, 同時に, 直に。  
 sakṛdāgāmitva (中) 一回來る性質, 一來性\*。  
 sakṛdāgāmin (男) 一回來る者, 斯陀含\* 一來\*。  
 saktu (男) 穀類の粉末にしたるもの。  
 sakhi (男) (61) 朋友; (女) sakhi (231) 女友。  
 sugadgadam (副) 訥りて。  
 saṃkāśa (男) 容貌, (形合. の尾にありては) (.....の) 狀をなせる, 等しき。  
 saṃkula (形) 充されたる, 満たる。  
 saṃketa (男) 約束せる表示, 施設\*。

saṃkramaṇa (中) (.....の中に[依]) 入ること。  
 saṃkṣepa (男) 集れるもの, 總體。  
 saṃkṣepāt (副) 略して。  
 saṃkṣobha (男) 奮激。  
 saṃketaya- (名詞詞の動詞) (通) 約定せられたる。  
 saṃkhyeya (形) 數へらるべき。  
 saṃgama (男) 集會, 合會 (又男女の交接を指す), 同交。  
 saṃgha (男) 僧伽, 衆。  
 saṃcetana (形) 思慮深き, sa° bhū 思慮を發す, 知覺を發す。  
 saṃced (接續詞) (ced に同じ)。  
 sajjana (男) 善き人, 賢き人。  
 saṃcaraṇa (中) .....に因て動くこと (合成語)。  
 saṃcārin (形) 動搖する。  
 sañj 1. (124, 17) 歸り居る。  
 ā+ (通) °sakta 戀れる, 向けられたる。  
 saṃjanana (中) 生ずること, 生。  
 saṃjñā (女) 想\* 知覺; 憶想; °名。  
 saṃjñin (形) (合成語の尾にありて) .....の思想を有する。  
 sat (現分) (209) 有る; 善き, 貞き, 正しき。  
 satatam (副) 相續して, 不隔に, 恒に, 常に。  
 satkula (中) 善き種姓, 賢き種姓,

尊き後胤。

satkṛta (形) 敬はれたる, 恭しく迎へられたる, 親しく迎へられたる, 好遇せられたる。  
 sattva (中) 萬物; (男・中) 生物, 有情\* 衆生\*。  
 satpuruṣa (男) 善士。  
 satya (形) 眞實の, 實有の。 °m (副) 眞に, 實に, 確に, 正しく。 (中) 諦\* 眞實, 實有。  
 satvaram (副) 急に。  
 sad 1. (124, 15) 坐る; 住す; 降る, 減る, 消ゆ, 亡ぶ。 (過) 陥りたる; 亡びたる, 盡きたる。  
 ā+ (通) °sanna 近き; (中) 隣近。 (役) (或物に) 倚る, 中る, (或物を) 見出す, 得, 獲; 入る。 (.....に[業]) 造す, 及ぶ。  
 pari+ 圍む, (形) 周圍の。  
 pratyā+ (過) °sanna 近き。  
 samā+ 造す, 及ぶ, samāsādya 應じて, 由て。  
 pra+ 慈しむ, 慈しみを生ず, 懇す。 (過) 懺謝されたる, 仁慈なる。  
 sadā (副) 常に, 恒に, 恒時に。  
 Saddharṇapundarikā (女) 妙法蓮華 (書名)。  
 sadvaṃdva (形) (喜と愛等の) 相違事に對して感激する, 極めて感激し易き。  
 sanātana (形) (女) ī 不滅の, 永

久の。  
 sanātha (形) 具へたる。  
 samtusṭa (過) 満足したる。  
 samtosa (男) 満足, 充分。  
 samnibha (形) 等しき, 似たる。  
 saputrabāndhava (形) 子及び親戚と俱なる。  
 saptan (數) (102) 七。  
 saptabhūmika (形) 七層樓の。  
 sabahumānam (副) 大に尊敬して。  
 sabhārya (形) 妻と俱なる。  
 sama (形) 平らかなる, 滑らかなる; 等しき, 似たる, (……に[依]) 譲らざる, 同類の, 同様の; 同じき, 不變の。  
 samagra (形) 完き, 充分なる。  
 samadṛṣṭi (形) 一切を見ること平等なる; 等しき情想の。  
 samantāt (副) 一切の方へ, 一切の方に向つて; 普く。  
 samaya (男) 時; 時節, 際; 條件。  
 °ye 正しき時に, 時の來りしとき。  
 samavāya (男) 合集 uca sama-vāye uc は合集の義なり。(Dhātupāṭha [語根集] 4, 114).  
 samasta (過) 全き, 一切の。  
 samāja (男) 集會。  
 samādāna (中) 受, 正受。  
 samāna (形) 等しき, (……に[具]) 異ならざる。  
 samārambha (男) 企圖, 從事。

samāśraya (男) 依。  
 samāsatas (samāsa の從, 副) 總じて, 略して。  
 samipa (中) 隣近。  
 samukti (女) 總説。  
 samutsuka (形) 欲する。  
 samudaya (男) 起り, 初り; 根源, 原因; 集り, 集\*。  
 samudbhava (男) 生起, 起源。  
 samudra (男) 海, 洋。  
 samṛddhimat (形) 滿ぜしむる, 増當せる。  
 sampatti (女) 幸福。  
 sampad (女) (單. 及び複.) 安寧, 富裕; 幸福; 圓滿, 充分。  
 samparka (男) 觸るゝこと。  
 samprayoga (男) 會ふこと。  
 sambandha (男) 聯絡, 相應。  
 sambodhi (男, 女) 正覺\* 等覺\*。  
 sambhava (男) 可能なること, 容存。  
 sambhavana (中) 包含すること, 起ること。  
 sambhāra (男) 資糧, 須要物, 須要の材料。  
 sammoḥa (男) 昏迷。  
 samyak (副) 正しく, 至當に。  
 samyakkarmānta (男) 正業\*。  
 samyaksamkalpa (男) 正思惟\*。  
 samyaksamādhi (女) 正定\*。  
 samyaksambodhi (女) 正等覺\*。

samyaksmṛti (女) 正念\*。  
 samyagājīva (男) 正命\*。  
 samyagdṛṣṭi (女) 正見\*。  
 samyagvāc (女) 正語\*。  
 samyagvyāyāma (男) 正精進\*。  
 saras (中) 池。  
 sarpa (男) 蛇。  
 sarva (形) 各の, 一切の。  
 sarvajña (形) 一切を知れる。(男) 一切知者(多は釋尊を指す)。  
 sarvatas (副) 一切の方より; 遍ねく。  
 sarvatomukha (形) 一切の方に向へる, 一切門。  
 sarvatra (副) 遍ねく, 到る處に; 隨ての際に; 何時にても。  
 sarvathā (副) 總ての際に; 畢竟。  
 Sarvadarśin (男) 一切を見る者, 一切見者\*(佛の號, 多は釋尊を指す)。  
 sarvavid (形) 一切を知れる; 遍ねく學びたる。  
 sarvaśas (副) 全く, 徹頭徹尾; 所有る方法にて, 恒に; 遍ねく。  
 sarvākāra (形) 一切種。  
 sarvāvat (形) 一切の, 普き。  
 salila (中) 水。  
 sava (男) 蘇摩 (soma) の獻供; 供物。  
 savinayam (副) 柔順に。  
 savya (形) 左の。  
 savrīda (形) 深く傾ちたる, 赤面し

たる。  
 saśisya (形) 弟子と俱なる。  
 sasainya (形) 軍と俱なる。  
 sasmitam (副) 笑ふて。  
 sah 1. (大抵爲自.) (48 備考 2) 堪ふ。恐ぶ; 能す, 堪能なり。  
 abhyud + 堪能なり, 能くす。  
 pra + (絕待法) 強ひて。  
 saha (副) 俱に, (……と[具]) 俱に。  
 sahaḡata (過) 伴はれたる, 俱行\*。  
 sahaḡara (男) 同行, 伴侶。  
 sahaḡārin (男) 同行, 伴侶。  
 sahaḡaja (形) 俱生する。  
 sahasā (副) 俄に, 直に。  
 sahasra (中) 千。  
 sahasraśas (副) 千種に; 千づつ, 毎千(非常に多數なるを表示す)。  
 sahā (女) 大地; 索阿,\* 娑婆\*(世界の名)。  
 sahita (形) 結合せられたる, 合同したる; 俱なる; (複) 一切の; sahitāḡ sarve 皆俱なる。  
 sā (tad を見よ)。  
 sāksāt (副) 目の前に; 明らかに。  
 sāksātkr 作證す\*。  
 sāgara (男) 海, 洋。  
 sām̄karya (中) 混濁。  
 sād̄h 1. (役) 成就す, 遂ぐ, 竣功す。  
 sād̄hana (中) 成就, 完成。  
 sād̄hu (形) 善き, 賢き。(男) 善人。

登人。(副) 善く、正しく、快よく、美はしく。(命令法と俱に用ひらるゝとき) いざ。  
 sādhuvṛtti (形) 善き性質の、長き風俗の。  
 sādhyā (形) 成就し得べき、成就せらるべき、愈ゆべき。  
 sānurāga (形) 懇着せる、深く愛著せる。  
 sāntva (中) 宥めの語、和らぐる語。  
 sāntvaya- (名稱詞の動詞) pari + 鎮む、穩にす; 親しく話しかく。  
 sānvaya (形) 族類と俱なる、一族と俱なる。  
 sāmāgrī (女) 衆集。  
 sāmāgrya (中) 衆集。  
 sāmān (中) 溫和、善良; sāmānā 懇切に。  
 sāmānya (形) 等しき。(中) 等しくあること。  
 sāmpratam (副) 今。  
 sāyaka (男) 箭。  
 sāyudha (形) 武器を著たる、武装したる。  
 sāra (男中) 堅牢、力、強壯; 身代、財産、畜; 中心、要件、精粹; 善、最上、最極。  
 sārameya (男) 狗。  
 sārđham (副) (具と俱に) と、俱に。  
 sāvayava (形) 部分より成る。

sāsañka (形) 恐を懐ける、疑惧せる。  
 sāśva (形) 馬と俱なる、馬を有する。  
 sāhasa (中) 傲慢、冒險、大膽なる動作。  
 sāhasraka (形) 千の。  
 sārpha (男) 師子。  
 sic 6. (124, 16) 灌ぐ。  
 abhi + 灌ぐ; (.....の[依]) 位に登す; (.....の[依]) 職に就かしむ。  
 siddha (形) 成就せられたる、達せられたる、堪能なる、成満したる; 目的を達したる; 不思議の力を得たる、更に世間法に左右せられざる。  
 siddhi (女) 成就すること、悉地、\*成就; 平氣\*。  
 sidh 4. 成就す、辦ず。  
 sīman (女) 界區。  
 sīmādhīpa (男) 隣國の君。  
 su (副) 好く、善く、大に。(數ば合成語の初に用ゐらる)。  
 su 5. 生ず。  
 pra + 生ず。  
 Sukanyā (女) (Śaryāti の女の名)。  
 sukha (形) 楽しき、快よき。(中) 安康、快樂、喜悅、悅樂、幸福。(副) 安樂、快樂、喜悅、悅樂、幸福。(副) 愉快に、靜かに、容易に、便利に、勉勞なく。  
 sukhallikā\* (女) 耽著。  
 sukhin (形) 幸なる、楽しき。

Sugata (男) 善逝\* (佛陀の説、多は釋尊を指す)。  
 sujana (男) 善人。  
 suta (男) 兒、子; (女) 女。  
 sudarāna (男) 善見 (毗羅經 [Vi-snu] の國名)。  
 suduhkhita (形) 劇しく憫める。  
 suduha (形) 容易に乳を搾らしむる。  
 sudhā (女) 石灰; °krta 白垩を塗りたる; 甘露。  
 sudhī (形) 敏き、聰明なる。  
 sunibhrtam (副) 全く秘密に。  
 sundara (形) 美はしき、善き、正しき、好ましき。  
 sup (格例法の語尾) sup-tiñ-anta (形) sup (格例法の語尾) と tiñ (活用法の語尾) とにて終る。  
 subhaga (形) 幸なる; 麗はしき; 愛されたる。(女) 所愛、愛らしき婦。  
 Subhūti (男) 須菩提、\*善現\* (善き現存を有せる、善く現はれたる) (人名)。  
 subhrū (形) 麗はしき眉毛ある。(女) 麗はしき眉毛ある少女。  
 sumanorama (形) 甚だ麗麗なる、甚だ美しき。  
 sumantra (男) 好き眞言、教諭ある; 眞言。  
 sumahat (形) (80) 甚だ大なる。  
 sumahātejas (形) 甚だ大なる威徳を有する、大威力ある。

Sumera (男) 蘇迷盧、\*須彌\*、妙高山\* (山名)。  
 sura (男) 天神。  
 surata (中) 受欲、同欲。  
 suraudra (形) 甚だ怖るべき、甚だ暴き。  
 sulabha (形) 得易き; 低價の。  
 suvarpa (中) 黄金。  
 svrata (形) 柔順なる、柔和なる (動物に就て言ふ)。  
 suśobhana (形) 甚だ麗はしき。  
 Suśobhanā (女) (註の王 Āyu の女の名)。  
 suhrđ (男) 朋友。  
 sū 2. (爲自) (194) 生む。  
 pra + 生ず。(過) °sūta 生れたる、造られたる; 出たる。  
 sūkṣma (形) 微細なる; 薄き; 分子様の; 細ふべからざる。  
 sūta (男) 御者。  
 sūd (役) 殺す、亡ぼす。  
 sūnṛta (中) 喜悅、好意、安樂。  
 sūri (男) 賢者、聖者、勝德者。  
 sṛ 1. (122) 走る。  
 anu + 追ふ、逐ふ。  
 nis + (役) 放逐す、放つ。  
 sam + 輪廻す。  
 srkkīn (中) 口角。  
 sṛj 6. 排出す; 造る。(過) sṛjta-  
 nd + (他處に[依]) 出で去らしむ。

(他處に[依]) 去らしむ; 去らしむ; 抛つ, 出す.  
 vi+ 送る, 抛つ, 射る.  
 srp l. pra+ 匂ひ出す; 増長す.  
 setu (男) 堤, 橋.  
 senā (女) 軍.  
 sev l. (爲自) 養ふ, 奉ふ, 侍る, 敬ふ. (少婦に) 事ふ=通ず.  
 ni+ 用ゐる; (少婦に) 交際す=通ず.  
 sainika (男) 兵士.  
 sainya (中) 軍隊.  
 soma (男) 蘇摩.  
 Somaśarman (男) (一小兒の名).  
 saukanya (中) sukanyā の脱語.  
 saukhya (中) 安樂.  
 saujaska (形) 威勢ある.  
 Sauntrāntika (男) 經部師.\*  
 saudāminī (女) (sudāman [婆]より來るもの, 即ち) 電光.  
 saumya (形) 温順なる.  
 sauṣṭhava (中) 極めて善きこと.  
 skandha (男) 衆, 蘊.\*  
 skhalita (中) 誤失, 過失.  
 stambh (役) 硬く爲す, 不動に爲す, 無能力に爲す.  
 sam+ (役) 硬く爲す, 不動に爲す, 無能力に爲す.  
 stūpa (男) 聖觀波, 塔, 塔婆, 舍利塔.  
 strī (女) (66) 女.

°stha (合成語の終に在ときの形容詞) 住まれる, 在る.  
 sthala (中) 乾ける土地, 陸.  
 sthavira (形) 老いたる, 尊き, 長老.\* 上坐\*  
 sthā l. (124, 19) 住まる, 居る, 在り. (過) sthita (214, I, 5) 住まる, 立つ, 居る, 在る. (役) sthāpaya- (200) 置く.  
 adhi+ (過) °sthita 占られたる, 守られたる, 警護せられたる.  
 anu+ 成就す. (過) 成就せられたる, 圓滿せられたる.  
 ava+ 下方に行く, 降る; (過) 定まれる. (役, 過) 造られたる.  
 vyava+ (過) 確定したる.  
 ā+ (過) 住まれる.  
 ud+ (47, 備考 2) 起き上る, 上る  
 samud+ 起き上る; 現はる, 出で來る, 顯現す.  
 upa+ 往く; 到る; 近づく; 侍る. (過) 起りたる, 來至したる, 達したる; (或人に[業]) 合同したる; (或人に) 關したる.  
 pratyupa+ (過) 來れる, 現前せる.  
 pra+ 出づ, 起く. (過) (.....の爲に[爲]) 出發したる.  
 prati+ (過) 住せる.  
 vi+ 立ち居る.

sthānu (男) 串, 樑, 柱. °bhūta (形) 樑の如く動かざる; 動かざる.  
 sthāna (中) 位置, 處; 住處; 地位, 階級.  
 sthiti (女) 止住; 法則, 規程; 習慣.  
 sthira (形) 堅き.  
 snigdha (過) 愛されたる.  
 sneha (男) 愛, 顧慮.  
 sprś 6. 觸る.  
 sam+ 觸る; 遭ふ.  
 sprastavya (中) 所觸, 觸.  
 sphuṭ l. 6. 裂ける, 開く.  
 sma (助辭) 數しば現在時の動詞に過去の意義を與ふ.  
 smi l. 笑ふ.  
 smita (中) 笑.  
 smṛ l. 憶念す. (過) smṛta 憶念する, 念を係くる.  
 smṛti (女) 憶念, 念; 相傳, 傳説.  
 sru l. 流る.  
 nis+ (役) 流れ, 去らしむ, 排出す, 漏らす.  
 srotaāpatti (女) 流に預れる事, 預流.\*  
 srotaāpanna (男) 流に預れる者, 須陀恒.\* 預流.\*  
 sva (形) 己の, 彼の. (男) 己に屬する人, 從屬者, 朋友. °m (副) 自ら.  
 svaka (形) 自の, 彼の.  
 svakiya (形) 自の, 彼の. (男) 從

屬者, 自に屬する人, 彼に屬する人, 朋友.  
 svajana (男) 己に屬する人, 從屬者, 親類, 朋友. (總稱的に用ゐらるゝ時は單數の形なるも多數を證はす).  
 svad l. 5+ (役) 美味を感ず, 食ふ, 受用す.  
 svap 2. (130) 眠る; 眠るために臥す. (過) supta (214, I, 1) 眠れる; 眠るために臥したる.  
 pra+ (過) 熟睡せる.  
 svapna (男) 眠; 夢.  
 svabhāva (男) 自性, 質, 性.  
 Svabhāvakṛpāṇa (男) (婆羅門の名).  
 svayam (副) 自ら, 己より, 自心より.  
 svara (男) 響; 聲.  
 svarūpa (中) 發生事, 顯現事, 發現する(或は)發現したる事件.  
 svarga (男) 天.  
 svākhina (形) 自在を得たる.  
 svām (眞言).  
 svāmin (男) 主, 支配者.  
 svecchā (女) 自の欲, 自在の欲.  
 svecchayā (副) 隨意に, 意の所欲に隨ふて.  

## Ha.

 ha (助辭) (僅に前句の語氣を吸む).

hata (han [214, I, 4] の過).  
 han 2. (86. 137. 175. 189. 193. 195. 205. 209. 213) 打つ; 亡ぼす, 殺す.  
 (過) hata 打られたる, 亡されたる, 殺されたる, 断られたる, 殺されたる.  
 (求欲法) (205) 殺さんと欲す, 亡さんと欲す.  
 ā + (過) 撃たれたる.  
 upa + (過) 船れられたる; 傷なはれたる.  
 ni + 打ち倒す, 殺す. (過) 殺されたる.  
 vi + 無くす; (受) 無用なり.  
 sam + (過) 固まれる, 鞏固なる.  
 hanu (女) 帆.  
 Hanumat (男) (著名なる翻經の名).  
 hanta (感歎詞) 善哉, いざ, さー  
 ham (眞言).  
 Hara (男) 破壊者, (Śiva の稱).  
 hari (男) 馬; (異名証 [Viṣṇu] の一名).  
 harṣa (男) 喜.  
 harṣita (過) 喜ばされたる.  
 hal (印度文典家の用ゐる約取字にして所有る子音を指す).  
 havis (中) 供物 (乳, 酪, 穀類等の火中に投ぜらるゝもの).  
 has 1. 笑ふ.  
 pra + 哄笑す; (過) °hasita 笑へる.

vi + 哄笑す.  
 hasta (男) (247) 手.  
 hastin (男) 象.  
 hā (眞言).  
 hā 3. 捨つ. (過) hīna (214, II, 1) 捨られたる, 離れたる, 不足なる, 下劣なる.  
 pra + (過) 棄てられたる, 断られたる.  
 vi + 捨つ, 等閑にす.  
 hā (苦痛, 驚愕, 快適, 希望の感歎詞) 嗚呼, 嗟, 希くは.  
 hāni (女) 放捨; 損失, 損害.  
 hi (副) 如何となれば……故に, 勿論, 即ち; 結局, 確に, 實に. (字を填むるために用ひらるゝこと數ばあり [pleonastic], na hi 如何となれば爾らざるがゆへに, 定んで爾らず, 勿論爾らず).  
 hips 7. 害ふ, 苦痛を加ふ, 傷ふ.  
 himsra (男) 他に苦痛を加ふる人; 惡漢; 肉食獸.  
 hita (形) 利する. (中) 利, 利益.  
 Hitopadeśa (男) 爲になる教訓 (書名).  
 Himālaya (男) ヒマラヤ山, 雪嶺 (山).  
 hiraṇya (中) 黄金.  
 hīna (hā の過).  
 hu 3. 供養す.  
 hr̥ 1. 取去る, 奪ふ.

apa + 奪き出づ, 奪き去る, 携へ往く. (過) 奪られたる, 捨られたる.  
 vyava + 出遊す, 遊歩す.  
 ā + 將ち來る.  
 vyā + 説く.  
 ud + 除却す, 殲滅す.  
 pra + 投ぐ, 放つ.  
 vi + 遊歩す, 樂しむ, 興ず; 住す.  
 hr̥daya (中) 心, 心意, 秘密心.  
 hr̥distha (形) 心中に存る.

hr̥ 4. 喜ぶ. (過) hr̥ṣṭa 喜ばされたる, 喜べる.  
 sam + 喜ぶ. (過) 喜ばされたる, 喜べる.  
 he (感歎詞) 嗚呼, おー.  
 hetu (男) 因, 由.  
 hr̥ī (女) 惡毒.  
 hvā, hū 1. 2. 3. 4 (?). 6 (?). 呼ぶ.  
 ā + 招く.